朝酌川河川改修工事に伴う

西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ

（海崎地区３）

元年３月

土木部河川課

教育委員会

朝酌川河川改修工事に伴う

西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ

（海崎地区３）

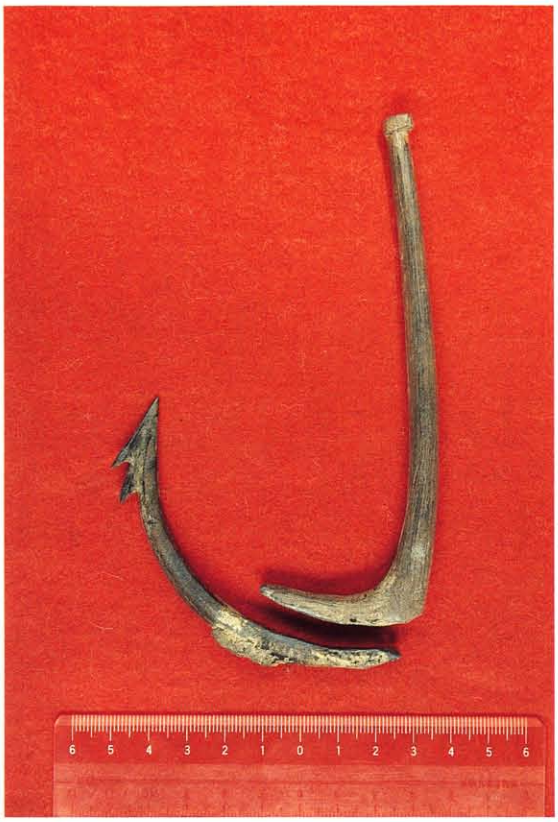
平成元年３月

島根県土木部河川課

島根県教育委員会

貝層Ｉ　木製農耕具出土状態

貝層Ｇ　釣針出土状態



骨 製 漁 撈 具

165—13

165—14

167—19

168—20

166—15

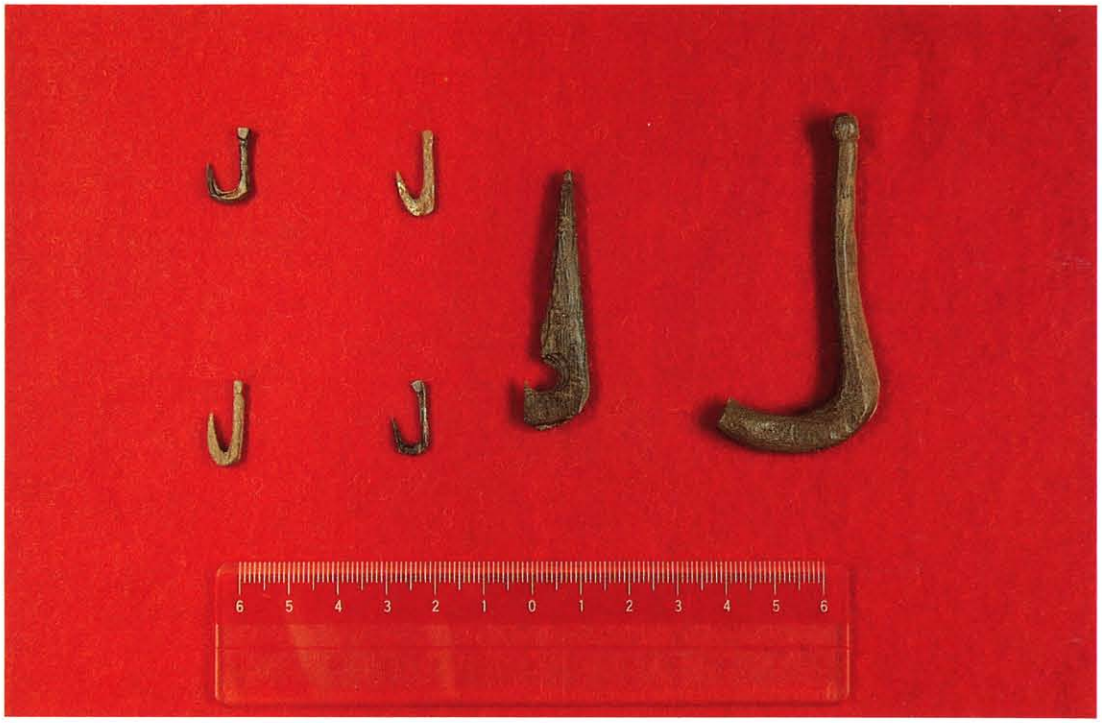
167—18

166—16

166—17

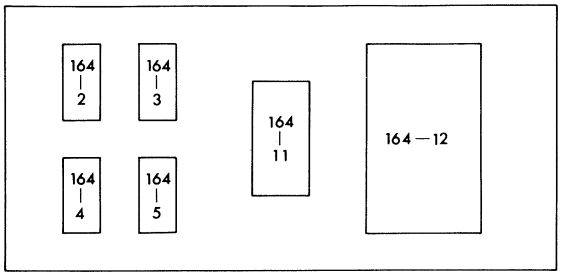
169—21

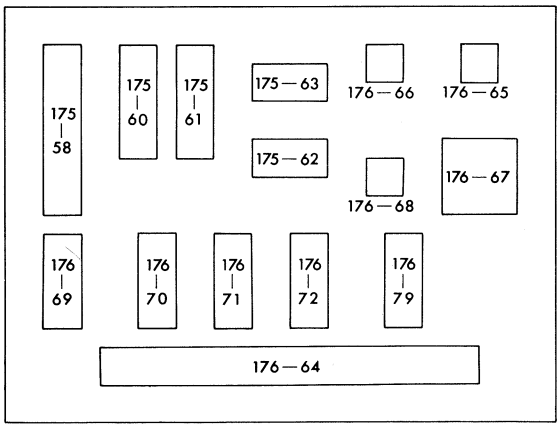
170—22



骨製釣針

骨製装身具類

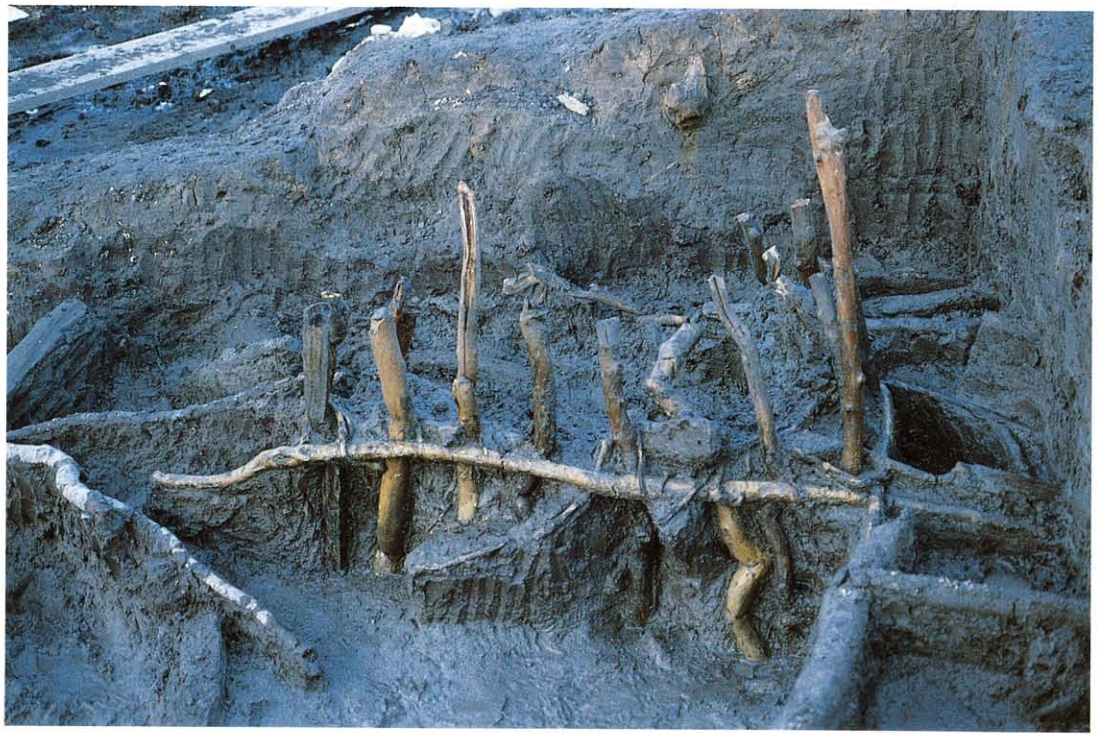

164 — 2
164 — 3
164 — 11
164 — 12
164 — 4
164 — 5


175 — 58
175 — 60
175 — 61
175 — 63
176 — 66
176 — 65
175 — 62
176 — 68
176 — 67
176 — 69
176 — 70
176 — 71
176 — 72
176 — 79
176 — 64

文様入りヒョウタン（69-1）

同上（拡大）

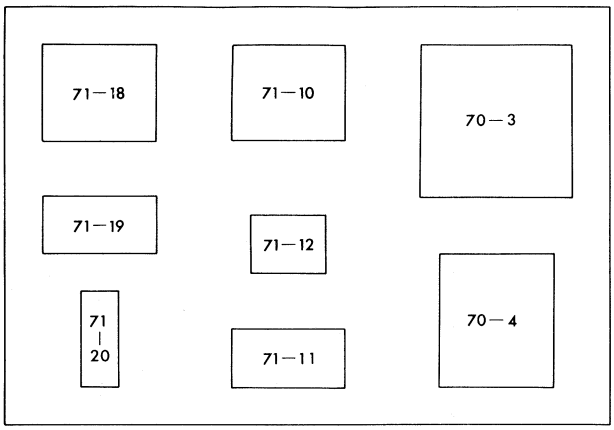
文様入りヒョウタン出土状態（69-2）

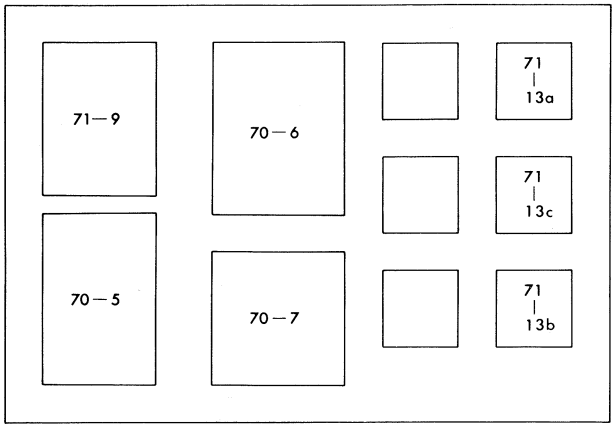


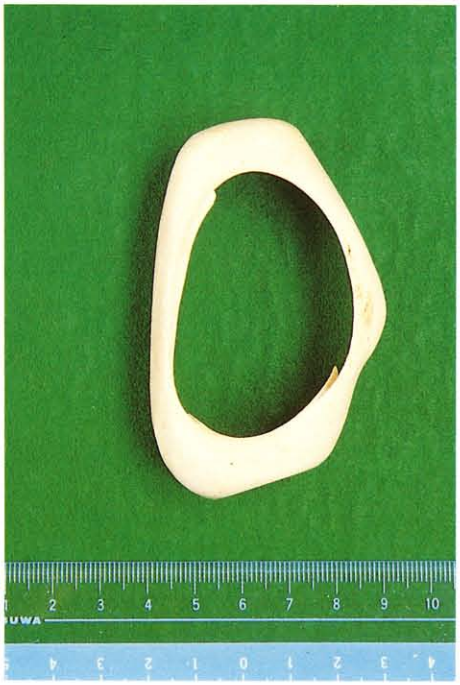
SZ・024

木製装身具類

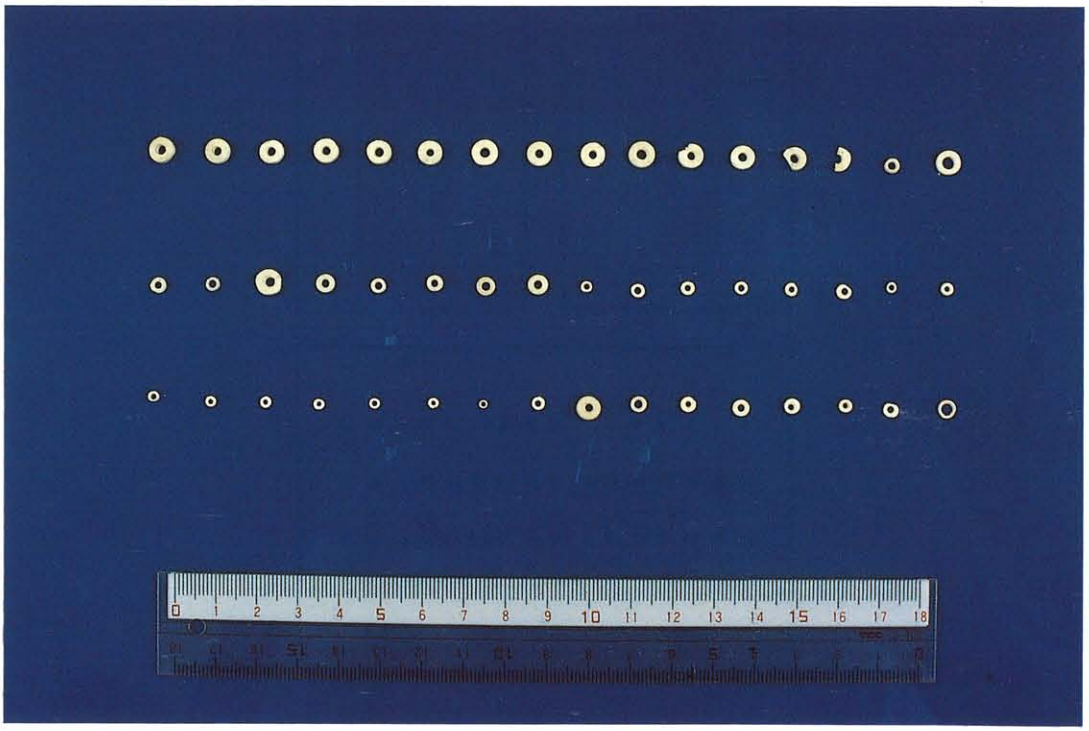
木製装身具類


71—18
71—10
70—3
71—19
71—12
71
|
20
71—11
70—4


71—9
70—6
71
|
13a
71
|
13c
70—5
70—7
71
|
13b



ゴホウラ製腕輪



貝製小玉

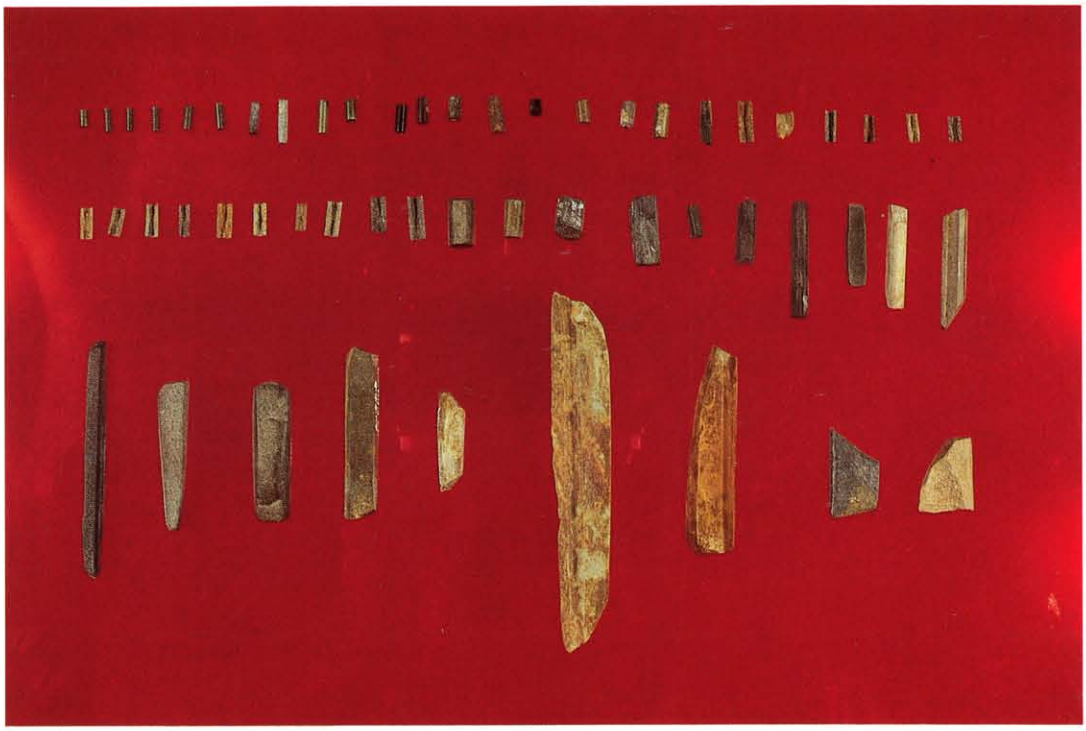
181—1

181—1

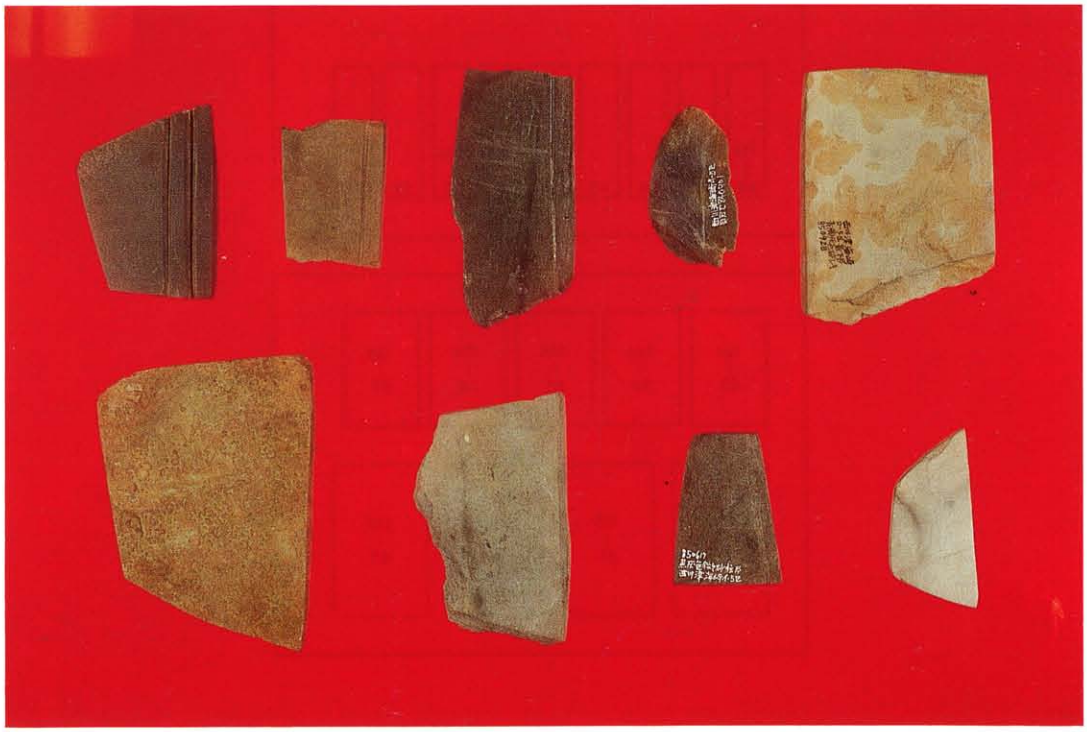
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16

17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

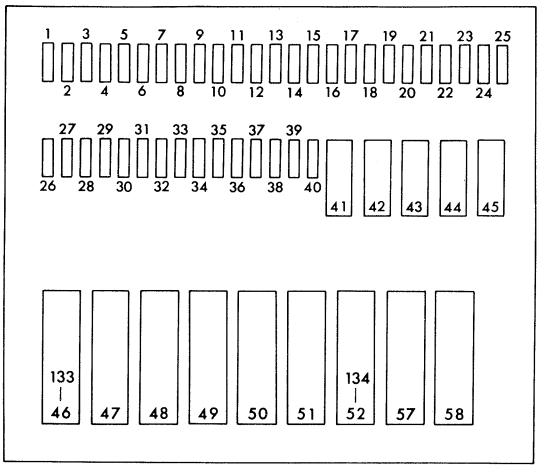
33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48

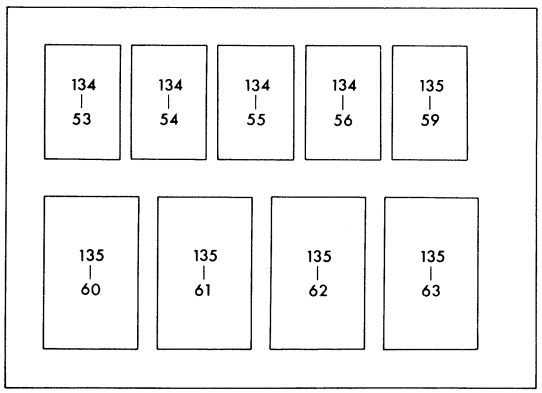


管　玉



管　玉


1 3 5 7 9 11 13 15 17 19 21 23 25
2 4 6 8 10 12 14 16 18 20 22 24
27 29 31 33 35 37 39
26 28 30 32 34 36 38 40
41 42 43 44 45
133 | 46
47 48 49 50 51
134 | 52
57 58


134 | 53
134 | 54
134 | 55
134 | 56
135 | 59
135 | 60
135 | 61
135 | 62
135 | 63

序

島根県教育委員会は、島根県土木部の委託を受け、昭和58年度から朝酌川河川改修工事に伴い、松江市西川津町に所在する西川津遺跡海崎地区の発掘調査を3か年にわたり実施してまいりました。

発掘調査の結果、縄文時代から近世初頭にいたるおびただしい遺構・遺物が発見され、各方面より多くの関心がよせられるようになりました。とりわけ、縄文時代早期～前期の縄文土器、弥生時代の木製農耕具や骨製の漁撈具等は、島根県下ばかりでなく山陰地方の歴史的資料を飛躍的に増大させるとともに各時代の生活がより具体的に復元できるようになってまいりました。

この報告書は、先に刊行しました海崎地区1、2巻に続く昭和60年度の発掘の記録と、3か年間の調査から得られた成果を取りまとめて載せたものであります。本書が広く一般の埋蔵文化財に対する御理解に多少なりとも役に立てば幸いに存じます。刊行にあたり、御協力いただきました関係各位に衷心よりお礼申し上げます。

平成元年3月

島根県教育委員会

教育長　松　井　邦　友

例　　言

1．本書は、昭和60年度、島根県教育委員会が県土木部の委託を受けて実施した朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡の発掘調査の概要である。

2．調査組織（昭和60年度）

調査主体　栗栖理知（島根県教育委員会教育長）

事務局　美多定秀（文化課課長）、長瀬忠治（文化課課長補佐）、蓮岡法暲（同）、矢内高太郎（同文化係係長）

調査員　石井　悠（主幹、埋蔵文化財第２係長）、川原和人（文化財保護主事）、内田律雄（同主事）、小城清政（兼・主事）

調査補助員　鍛治正彦（島根県教育文化財団嘱託）、桑原真治（同）

3．調査指導　山本　清（島根県文化財審議会、島根大学名誉教授）、田中義昭（島根大学法文学）、町田　章（奈良国立文化財研究所）、大西郁夫（島根大学理学部）、徳岡隆夫（同）、高安克己（同）、下條信行（愛嬢大学法文学部）、渡辺　誠（名古屋大学文学部）、河瀬正利（広島大学文学部）、清水芳裕（京都大学埋蔵文化財センター）、深澤芳樹（奈良国立文化財研究所）

4．調査協力　古浦秀明、田中和雄、足立　力、片岡詩子、佐原　真、小原貴樹、渡辺貞幸、近藤喬一、斎野裕彦、工楽善通、渡辺正巳、三浦　清、入江文敏、網谷克彦、寺本　洵、赤沢秀則、永田公夫、米子市教育委員会、鳥取県立博物館

5．人骨・獣魚骨の項については、内藤芳篤（長崎大学医学部）、沖　充（島根医科大学）、井上貴央（鳥取大学医学部）の諸先生の協力を得た。

6．掲載図面の作成及び遺物整理には次の者が携った。

竹内信枝、佐藤順子、野津順子、林　健亮、長羅　忠、古瀬岩男、藤原和子、鈴政泰子、増原泰子、宮本守人、金津まり子、野田清美、佐藤綾子、吉岡玄一、岡田昌子、若佐裕子、川上登志江、真野啓子、為西あや子、基常明美、栂瀬さきえ、野津英治、片山礼子、有富千恵、川本桂子、岡本登見雄、高木知恵子、岩成千里、永田桂子、永田かおり、青木紀子、呉　立山、江川幸子、瀬田明子、石倉篤永、石倉由子、因幡久美子、森安淳子、長谷川弘子、松本京子、渡部孝子、片岡詩子

7．本報告書の執筆は、執筆者名を記したものを除いて江川幸子と内田律雄が行った。

8．本報告書の編集は、上記文化課職員の協力を得ながら内田律雄が行った。

目　　次

Ⅰ　調査の概要…… 4
Ⅱ　遺構…… 5
Ⅲ遺物……13
1　縄文土器……14
2　弥生土器…… 33
3　土製品…… 90
4　土笛…… 94
5　西川津遺跡出土弥生土器の胎土…… 97
6　木製品…… 99
7　木葉文と流水紋とからみた西川津遺跡…… 135
8　西川津遺跡（海崎地区）弥生時代の植物遺体…… 143
9　西川津遺跡（海崎地区）の花粉分析…… 153
10　石器…… 171
11　玉作関係遺物…… 209
12　骨角器…… 245
13　人骨・獣魚骨…… 267
14　貝製品…… 269
15　西川津遺跡弥生層出土の貝類について…… 273
16　炭化米について…… 293

Ⅳ　まとめにかえて…… 299
1　西川津遺跡出土漁具の文化史的背景…… 303
2　島根県西川津遺跡からみた弥生時代の山陰地方と北部九州…… 325

Ⅴ　写真図版…… 341

Ⅰ 調査の概要

西川津遺跡海崎地区の発掘調査は、昭和58年、59年、60年の３ヶ年間にわたり行い、これまでに、『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ（海崎地区１）』（昭和62年３月）、『同Ⅳ（海崎地区２）』（昭和63年３月）として、その報告書を刊行してきた。前者は、主として、縄文時代早期～前期の時代と中世～近世初頭の遺構・遺物、を後者は弥生時代中期～古墳時代前期にかけてのそれが報告されている。

本報告書は、先の２巻の報告書に続く昭和60年度調査区の調査結果をその主な対象としているが、具体的には、縄文時代後・晩期～弥生時代前期層に検出された遺構・遺物、及びその中に混入している縄文時代中期以前の遺物、そして３ヶ年間の発掘調査とその後の遺物整理を通して得られた成果の一部を載せている。しかしながら、本報告書は３ヶ年の調査結果のすべてを網羅しているのではない。縄文時代から近世にいたるおびただしい量の遺物は今後さらに数年の整理期間が必要と予想される。とりわけ、弥生時代前期～後期の貝層と、その中より検出された様々な遺物については後日改めて報告しなければならないと考えられる。

弥生時代前期の遺構は、朝酌川の旧河道と考えられる溝状遺構、及びそれに沿うように形成されたいくつかの貝層、木製品の製作に関わる施設のウッドサークル群等を検出した（第１図）。

遺物は、弥生時代前期層や貝層から出土した骨角器・貝製品を除き、中期・後期層から出土した遺物であっても、縄文時代や弥生時代前期の特徴を示すものについては、出土層の時期を明らかにしながら、便宜上、該当する時期のものとして、一括して図示することにした。

発掘業風景

Ⅱ 遺　　構

弥生時代前期の遺構を解説するにあたり、まず昭和59年度、60年度の発掘調査で得られた西川津遺跡海崎地区の土層について述べておくことにする（第２図）。

確認した土層は、大別すると、１―耕作土、２―古墳時代以降の層、３―古墳時代前期層、４―弥生時代後期層、５―弥生時代中期層、６―弥生時代前期層、７―縄文時代後・晩期層、８―縄文時代中期以前の層（最下層）である。このうち遺構が検出されたのは弥生時代中期と前期である。弥生時代前期～中期にかけて存在した発掘調査区のほぼ中央を南北に走る溝状遺構の東側は最下層によって、西側は縄文時代後・晩期に堆積した７層（砂層）によって土手状となっている。この７層は、その西側において削りとられ、その上を弥生時代後期の４層が覆っている。溝状遺構の西岸となっている縄文時代後・晩期の７層は北側に行くにしたがい広く厚い堆積がみられる。弥生時代前期の貝層群は、８層や７層の上に分布し、ウッドサークルの杭も打ちこまれている。弥生時代中期の土坑や掘立柱建物は、弥生時代前期の６層に掘りこまれ、貝層もこの層の上に分布している。

また、最下層の中に厚さ約1.0㎝の火山灰層を確認しているが、調査区の東から西にむかいしだいに低くなっている。分析の結果はアカホヤの可能性を示している。

遺構は、弥生時代前期のものとして溝状遺構１、貝層４、ウッドサークル３を検出した（第１図）。

溝状遺構（第１図、第２図）

発掘調査区の中央よりやや西側にほぼ南北方向で、弥生時代中期の溝状遺構に重複して検出された。この溝状遺構の西側（西岸）は弥生時代中期と共有する。東側において、弥生時代中期層の下に溝状遺構の続きを検出した。したがって、上場幅5.0～7.0ｍあった弥生時代中期の溝状遺構は、前期には東側へ拡がっていたことが判明した。このことは、後述するウッドサークルＳＺ024～026がこの弥生時代前期の溝状遺構の中に検出されたことと矛盾しない。ただし、溝状遺構の東側の岸は、極めて緩い傾斜となっていて（第２図、図版２）、明確な上場を求めることは困難であるが、約20.0ｍ幅と推定される。この溝状遺構の底に近いあたりからは、弥生時代前期の土器とともに縄文時代晩期の土器も相当量出土しているので、晩期の上限をそのころに位置づけることができる可能性もある。

貝層（第１図）

弥生時代前期の貝層は、溝状遺構の両側に合計４か所発見された。貝層Ｆ、Ｇ、Ｈ、Ｉ

（第１図）である。ほとんどの骨角器や炭化米、貝製品、魚骨等はこれらの貝層を水洗いして検出したものである。

貝層Ｆは溝状遺構の東側、発掘調査区の北壁に接して、最下層（第２図８層）の上に南北12.0ｍ、東西8.0ｍの範囲に認められた。北側は厚さ10.0cmの貝層が２層となっている弥生時代前期の貝層の中では最も広い範囲に拡がっているが、さらに発掘調査区の北側の未調査区の中にも続いている。第178図84に示したような鯨骨製の刺突具や第79図41の木製鍬の未成品等は貝層Ｆからの出土である（図版14右下）。

貝層Ｇは貝層Ｆの南側に約4.0ｍ離れて、6.0×8.0ｍの範囲に最下層の上に認められた貝層である。第165図13、14の釣針Ｄ類や第90図103の木製鉢等（図版14上）はこの貝層中から出土している。この貝層Ｇの西側には貝層を囲むように４か所のクルミの廃棄場がみられた（第１図、図版13）。

貝層Ｈは溝状遺構の西側に検出された4.0×3.0ｍの不整形、厚さは約10.0cmの小規模なものである。

貝層Ｉは溝状遺構西側、貝層Ｈの南約8.0ｍにあり、南北10.0ｍ、東西3.6ｍの範囲に４層確認した。貝層の西側は大きく削られており、その上に弥生時代後期の層が堆積している。また、溝状遺構の西側の土手状のたかまりは縄文時代後・晩期層によってできているが、貝層Ｉはこれにできた深さ約50cmの土坑状の落ちこみに４層に堆積したものである（図版12、13）。竪穴住居跡であった可能性も捨てきれない（図版１下）。第73図22、第75図26に示したような木製農耕具（図版13左中）やゴホウラ製の腕輪（カラー図版７）等はこの貝層からの出土である。

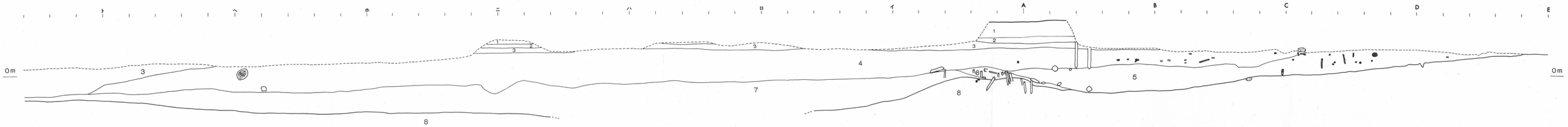
ウッドサークル（ＳＺ024、025、026）

弥生時代前期の溝状遺構の中、最下層（第２図８層）に打ち込まれ、弥生時代前期層（第２図６層）の中に３つのウッドサークル（wood-circle）を検出した。溝状遺構の中では東岸に近く、岸に沿うようにほぼ南北方向に位置している。ＳＺ025と026は互いに接し、ＳＺ024はこれらより約5.0ｍ北方にある。このウッドサークルは、弥生時代中期のそれと同じ性格のもので、木製農耕具製作に関係する施設と考えられるが、後述するＳＺ024が示すようにウッドサークルという用語は適切ではないかもしれない。しかし、本報告書では便宜上この用語を使用することとする。

ＳＺ024（第３図、カラー図版５、図版７）は、北側と南側の２辺が残存していた。最下層には0.5～0.8ｍほど打ち込まれている。注目されるのは残存している２辺が弧を描かず直線となっており，それに横木が一本ずつ蔓で緊縛してあったことである（図版７）。

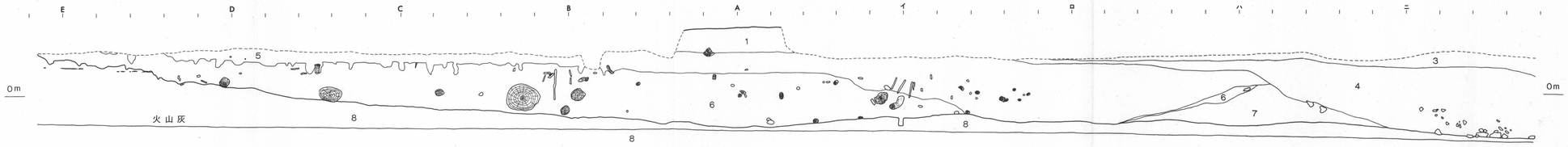
貝層
クルミ
朝
酌
川
リ
チ
ト
ヘ
ホ
ニ
ハ
ロ
イ
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
0
1
2
3
4
5
6
7
8
貝層H
貝層F
貝層A
貝層I
貝層E
貝層D
貝層C
貝層B
貝層G
列石
溝状遺構
SZ01
SZ02
SZ03
SZ04
SZ05
SZ06
SZ07
SZ08
SZ09
SZ010
SZ011
SZ012
SZ013
SZ014
SZ015
SZ016
SZ017
SZ018
SZ019
SZ020
SZ021
SZ022
SZ023
SZ024
SZ025
SK01
SK02
SK03
SK04
SD01
SB01
SB02
SB03
SB04
0
30m

第1図 遺 構 配 置 図



北壁土層図

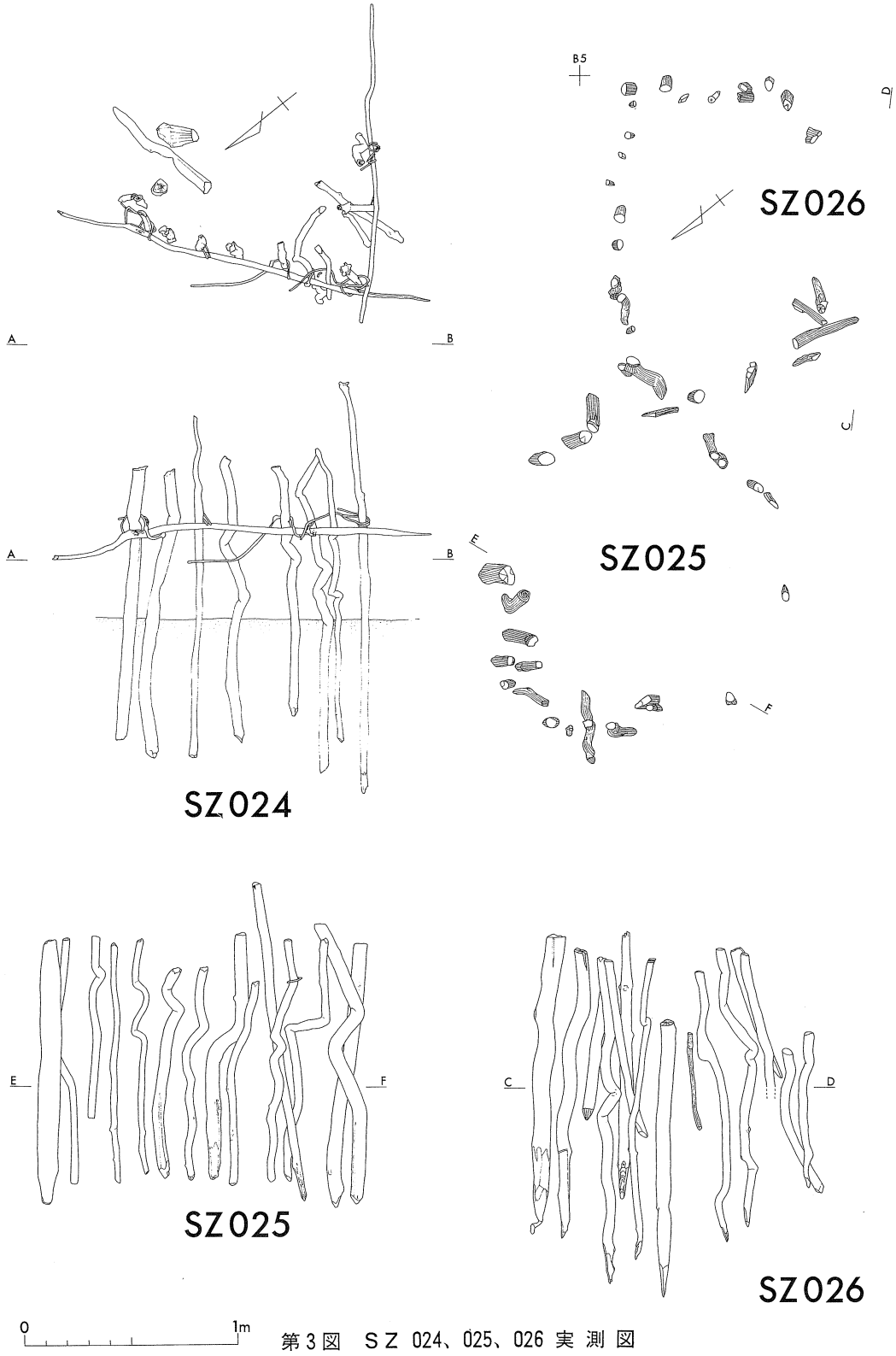
1 耕作土
2 古墳時代以降の層
3 古墳時代前期層
4 弥生時代後期層
5 弥生時代中期層
6 弥生時代前期層
7 縄文時代後・晩期層
8 縄文時代中期以前の層



南壁土層図

0 10m

第2図 西川津遺跡発掘調査区土層図



第3図　SZ 024、025、026 実測図

したがって平面プランは方形となる。これは中期にはみられなかったことである。北辺の横木の長さは1.8m、南は1.5mである。北辺で使用されている杭は8本である。杭の長さは最長が1.9mを測る。使用されている材は径5.0cm前後で、中期のそれにみられたような割木は含まれない。土圧のためか変形している杭も少なくない。杭の先端は削って尖らせてある。

SZ025（第3図、図版8）。南側の杭の一部を欠くが、平面プランは1.3×1.5mの円形に近いものである。北側は直線的である。SZ024のような横木はみられない。南側の一部をSZ026と接している。使用されている杭はSZ024にほとんど同じであるが、割木も一本みられる。多くは土圧で変形している。残存していた杭は23本ある。長さ1.5mを最長とする杭を使用しているが、他は1.1m前後のものがそろっている。

SZ026（第3図、図版8）は、SZ025の南側に接して設けられている。0.9×1.4mの長方形プランである。北西側と南西側の杭の一部を欠くが、北東と南西の二辺は直線的に打ち込まれている。使用されている杭はSZ024、025にほぼ同じである。残存していたのは24本で、割木はみられない。

SZ025、026によって、SZ024の規模もほぼ同様であったことが知られる。弥生時代中期には方形プランのものはみられないので、両者の違いは時期差である可能性もあろう。

ウッドサークルに関連して図版9、10、11に示したような木材の貯蔵がみられた。最下層（第2図8層）に接し、弥生時代前期層（第2図6層）中に検出された。図版9、および10は径1.0m、長さ約3.3mの二叉になった部分である。両端には蛤刃磨製石斧によって切断したと思われる痕跡がみられ、さらに焼成されていることが観察される。図版11は長さ2.2mと、図版9、10と比較するとやや小形である。興味深いのは、いずれも周囲に杭を打ち込み最下層に接して固定させていることと、樹種鑑定の結果は、普通、容器類に使用する環孔材が使用されていることである。弥生時代中期のSZ01～023、および本報告書で報告するSZ024～026が、海崎地区2の報文で考察したように、カシ類を材とした木製農耕具の製作と関係するのならば、木製農耕具と容器類では水中において保管する方法も異なっていたことが知られるのである。

Ⅲ　遺　　物

本書で報告する遺物は、第４図～第188図及び図版16～図版134に示した、縄文土器、弥生土器、木製品、石製品、骨角器、貝製品、動植物遺存体である。これらの遺物は、一応時期別に分類してあるが、貝層からの出土資料を除いた土器、石器、木製品等は、必ずしもその遺物の示す時期の層から出土したものではないものが含まれることをあらかじめことわっておきたい。例えば、縄文時代前期として図示した資料の中には、弥生時代の層に含まれていたものも多数ある。遺物の出土層については表にして示した。

縄文土器（第４図～第21図）は早期から晩期の各時期のものが出土しているが、二、三の資料を除き、いずれも弥生時代以降の層から出土したものである。特に縄文時代中期以前の資料が相当量混入していた。多くは昭和58年度調査区において発見された縄文時代早期～前期にかけての遺物包含層からの流れこみと考えられる。

弥生土器（第22図～第68図）の大部分は弥生時代前期層（第２図６層）や貝層からの出土である。甕、壺、鉢の三種の基本的器形で占められている。土笛は合計16点が出土し、山陰地方ではまれな投弾も１点ある。中国の陶塤に起源をもつ土笛は16点に及んだ。

木製品（第69図～第92図）には、木製農耕具、建築材、石斧の柄、容器が主要なものである。また、赤漆を塗った木製櫛や簪の中には透し彫りを施した精好なものもみられた。さらに、文様入りのヒョウタン製容器や鳥をデフォルメさせた鉢は完形品であれば美術工芸品としても優れたものであったと云えよう。

石製品（第104図～第163図）は蛤刃磨製石斧、石包丁、玉関係を中心としてとりあげた。いずれも当遺跡において原石から製作、使用、廃棄されたものである。蛤刃磨製石斧はほぼ石材が限定されているようであり、玉作は管玉を製作しているがほとんどは緑色凝灰岩を材としている。石包丁は小孔を穿ち手のひらに握れるサイズのものは少なく、片手にはおさまりにくい大形のものが多く、石材も一様でない。これらの石材の産地比定は残された課題である。

骨角器（第164図～第179図）はすべて弥生時代前期のものをとりあげた。鹿角や猪牙を利用した釣針や刺突具といった漁撈具が多い。アワビオコシも鯨骨製のものと鹿角製のものがある。木製の漆塗櫛とならんで、骨製の装身具も豊富である。

貝製品（第181図～第183図）の中で注目されるのはゴホウラ製の腕輪が出土したことである（カラー図版７）。日本における最北部の出土例となった。

1 縄文土器

第4図～第21図には縄文土器を図示した。1～8は表裏縄文で胎土に繊維を多量に含んでいる。昭和58年度調査区の早期末～前期初頭の包含量からは19片の資料が出土しているが、弥生～古墳時代の層に含まれていたものは、それをかなり上まわる量の出土があった。図示したのは器形や特徴のある程度判るものである。平口縁と波状口縁があり，8の底部は丸底となる。外面に太い突帯を貼り付けたものが多く、その上に刺突を施している。これらの特徴は昭和58年度調査区出土資料ではあきらかにできなかったことであり、いわゆる菱根式の実態もこのようなものである可能性がある。11は同時期の小形の椀でやはり繊維を多く含むが無文である。12はこの時期のミニチュア土器であろう。9は外面に連続貝殻腹縁文を多条に施した宮尾式である。1片のみ出土した。これらの前期の一群に続くものとして13～15がある。八束郡美保関町含霊塔下で採集されている近畿地方の北白川下層資料と同類と思われる。

中期の資料は量的に少なくはっきりしない。10、17～20、23～25を一応この時期のものと考えた。24のように山陽の船元式に共通したものもみられる。

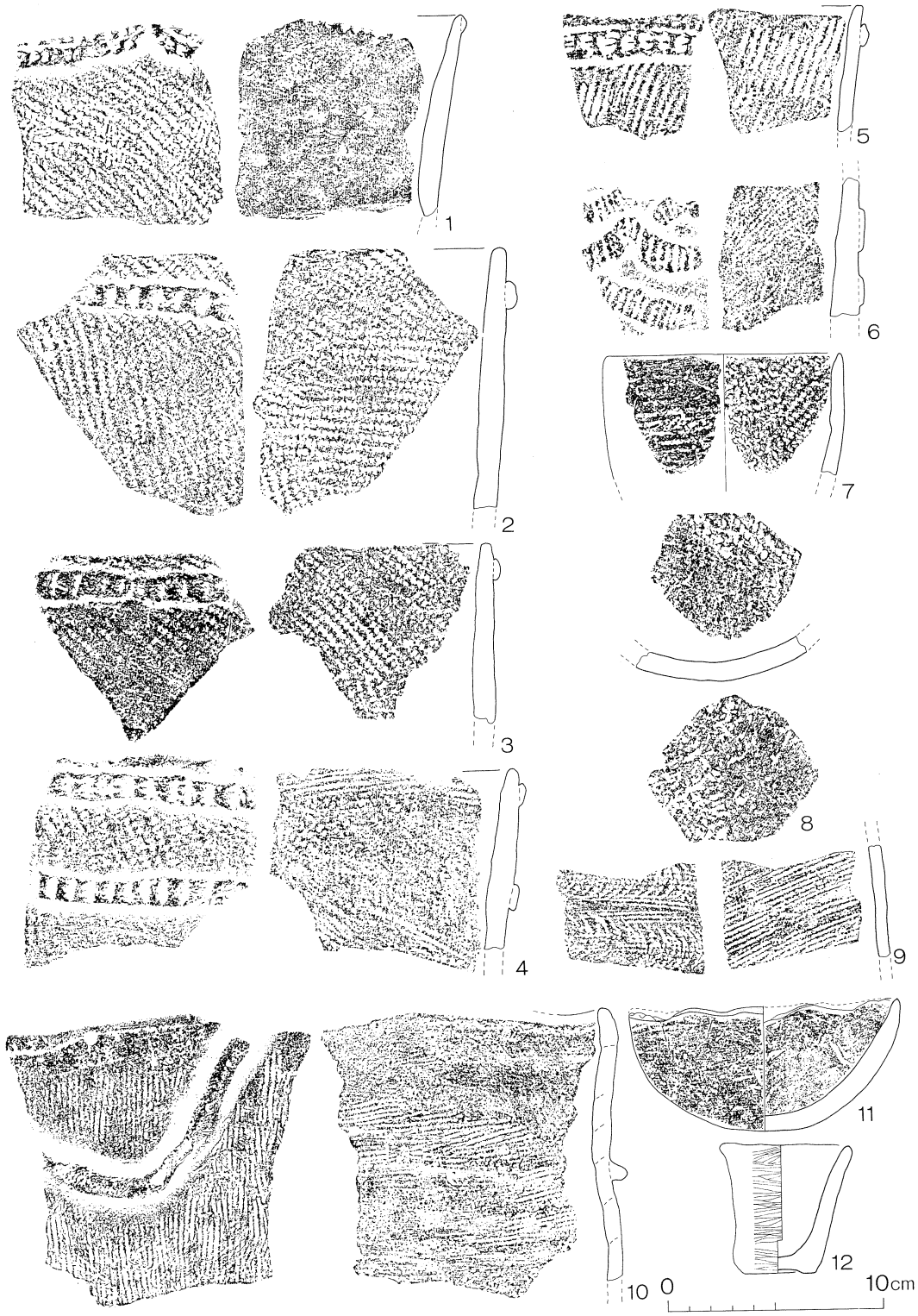
後、晩期の資料は量的に最も多い（第5図～第21図）。21、22は全面に縄文を施すが頸部にはみられない。山陽の彦崎ＫＩ式に比定されている美保関町サルガ鼻洞窟遺跡にみられるような鉢形土器と同様なものであろう。27～45は磨消縄文土器である。これらの多くは山陽の福田式の特徴を示している。口縁は逆「ハ」の字状に大きく開くものや垂直に立ち上るもの、さらに内傾するものなどがあるが、いずれも平底の鉢となる。このうち45は口径12.0㎝、最大径15.8㎝、器高11.5㎝の完形品である。

46～65、73～82は精製土器で横方向に全面に丁寧なヘラ磨きが施されるものである。体部の断面が「く」の字状となる鉢形土器が多いが、51の壺状となるものや、52の皿状になるものもある。口縁部は平口縁と波状口縁がある。68～72、83～116は粗製土器であるが、内外面を粗い条痕で仕上げるものと、さらにヘラ磨きを混用するものがある。口唇の内面や体部外面に結束縄文や刺突文を施すものもみられる。

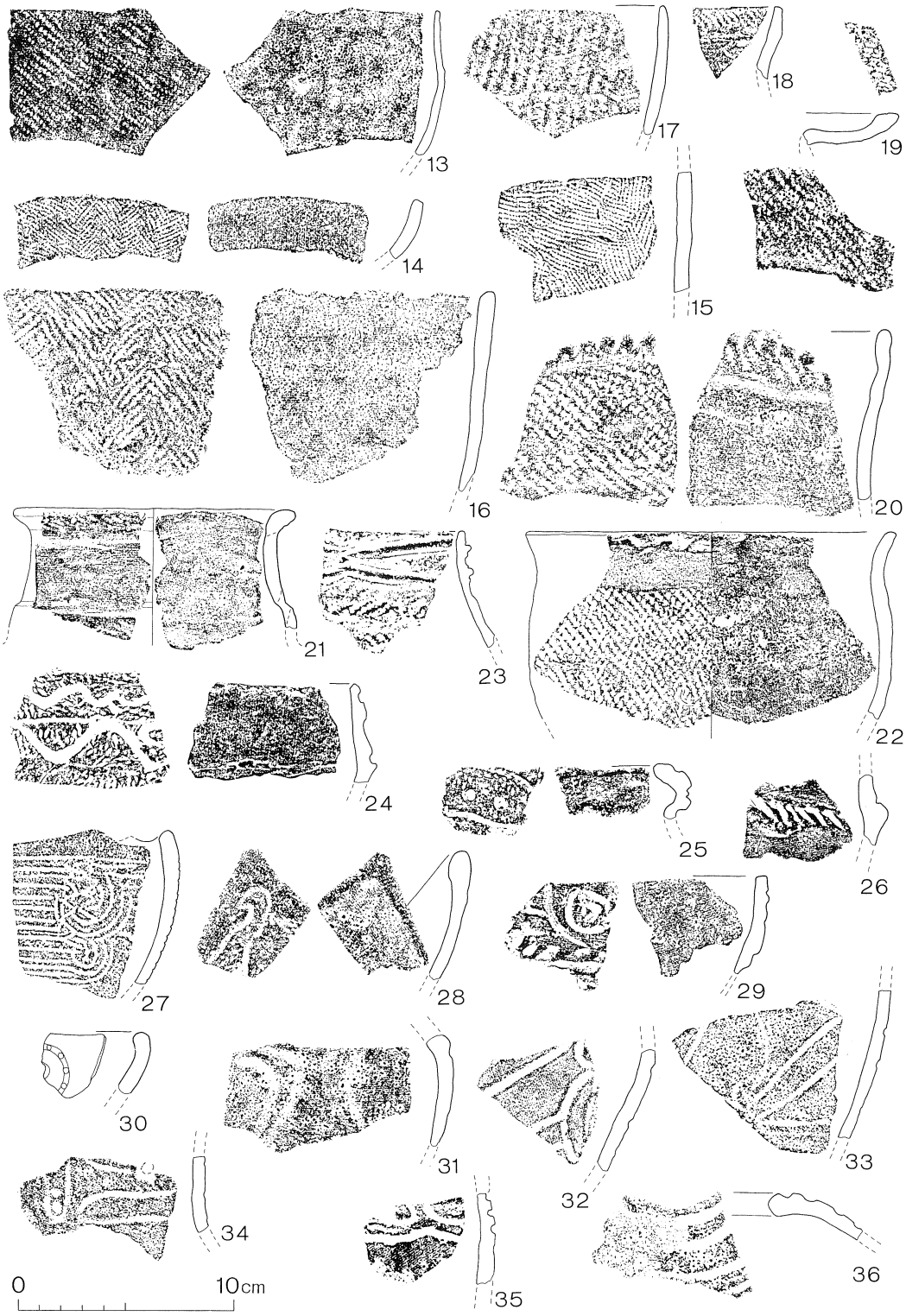
117～123、127～140、142～170は突帯文土器である。突帯の上に刺突を施すものと、そうでないものがある。138のように把手を突帯で表現したと思われるものもある。

171～181は底部、もしくはそれに近い部分である。いずれも若干凹む。171～173は、内面を条痕調整されているが、67のような口縁部になると思われる。

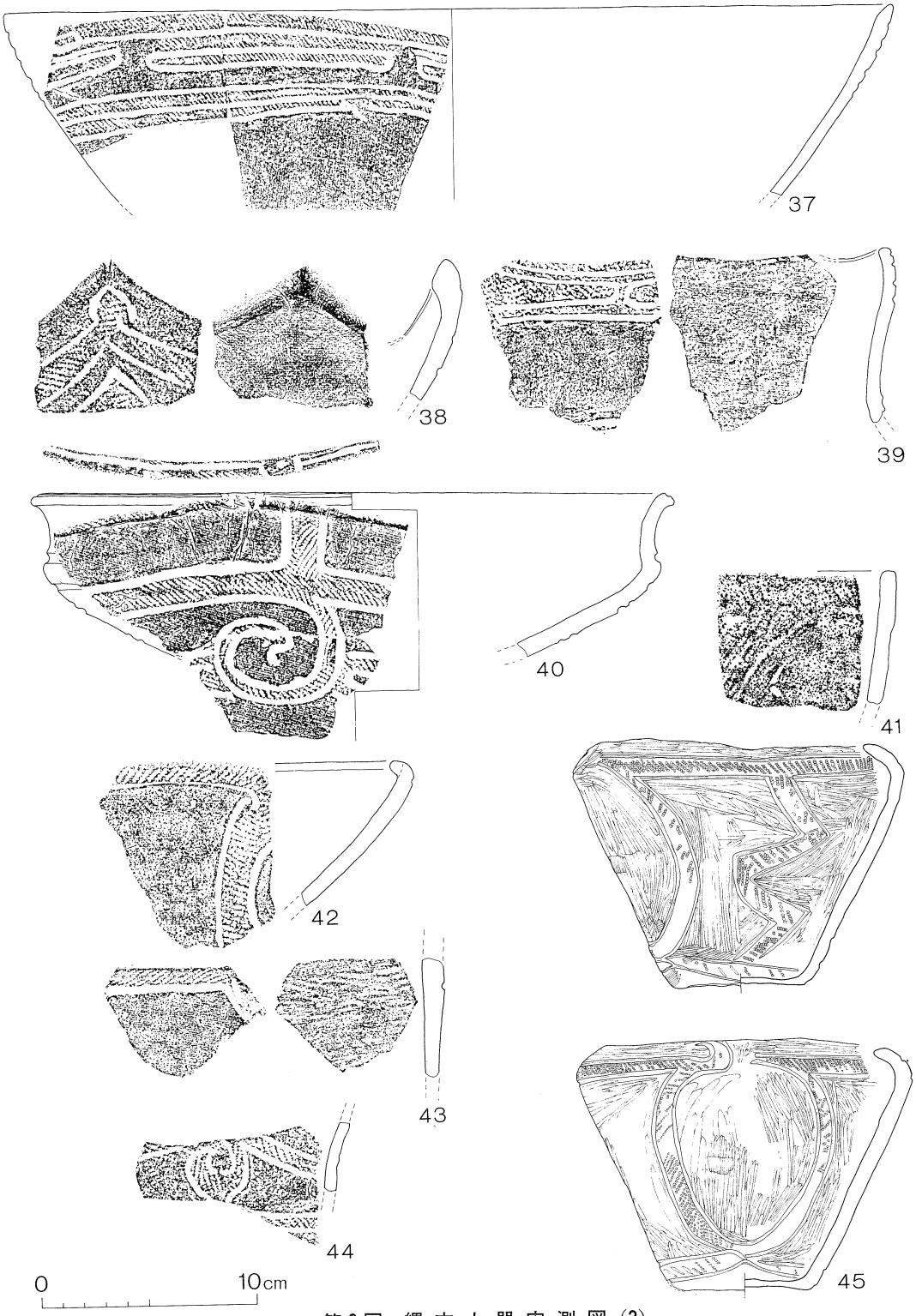
182、183は高坏で、183は松江市西川津町タテチョウ遺跡に出土例がある。



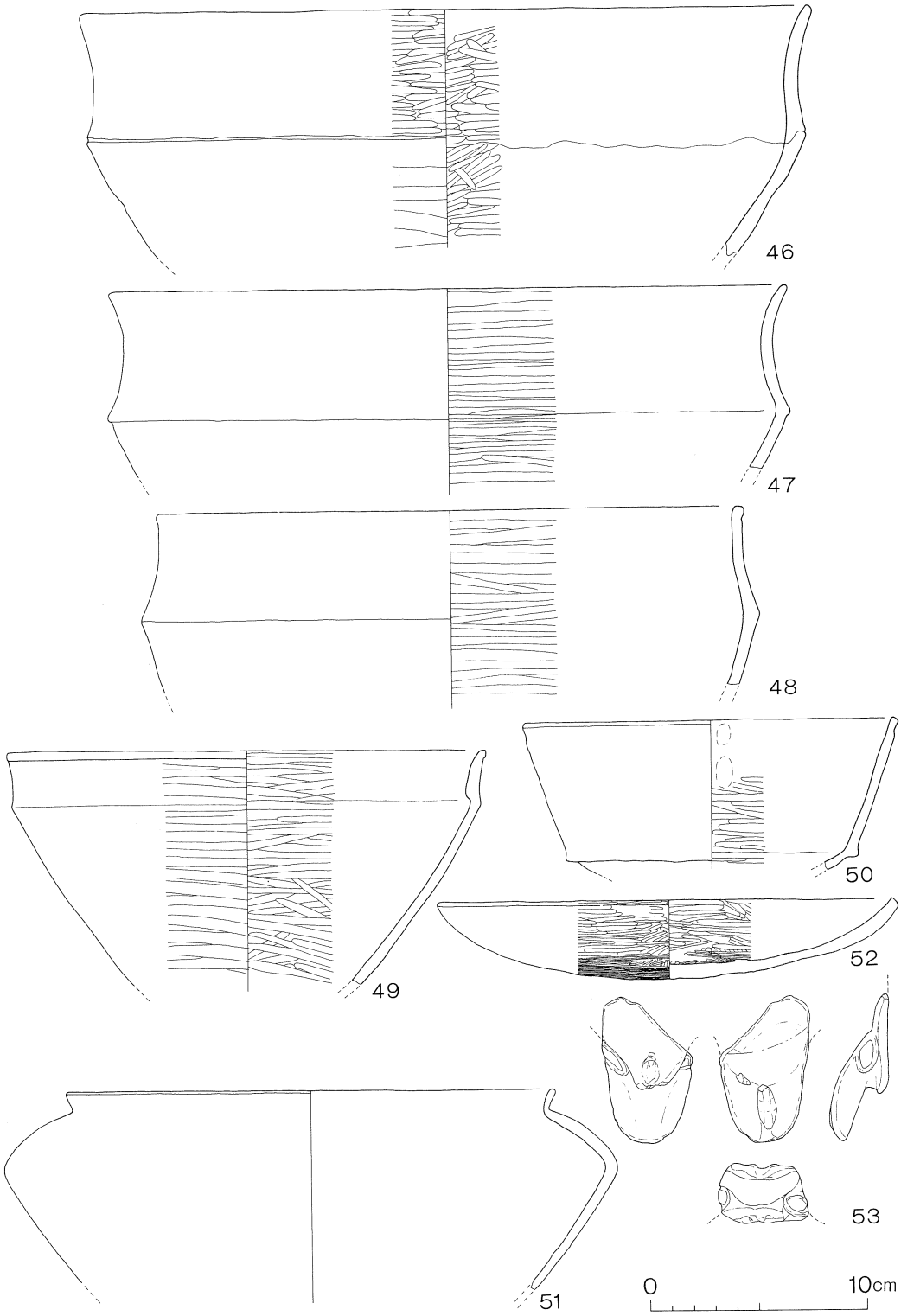
第4図　縄文土器実測図(1)



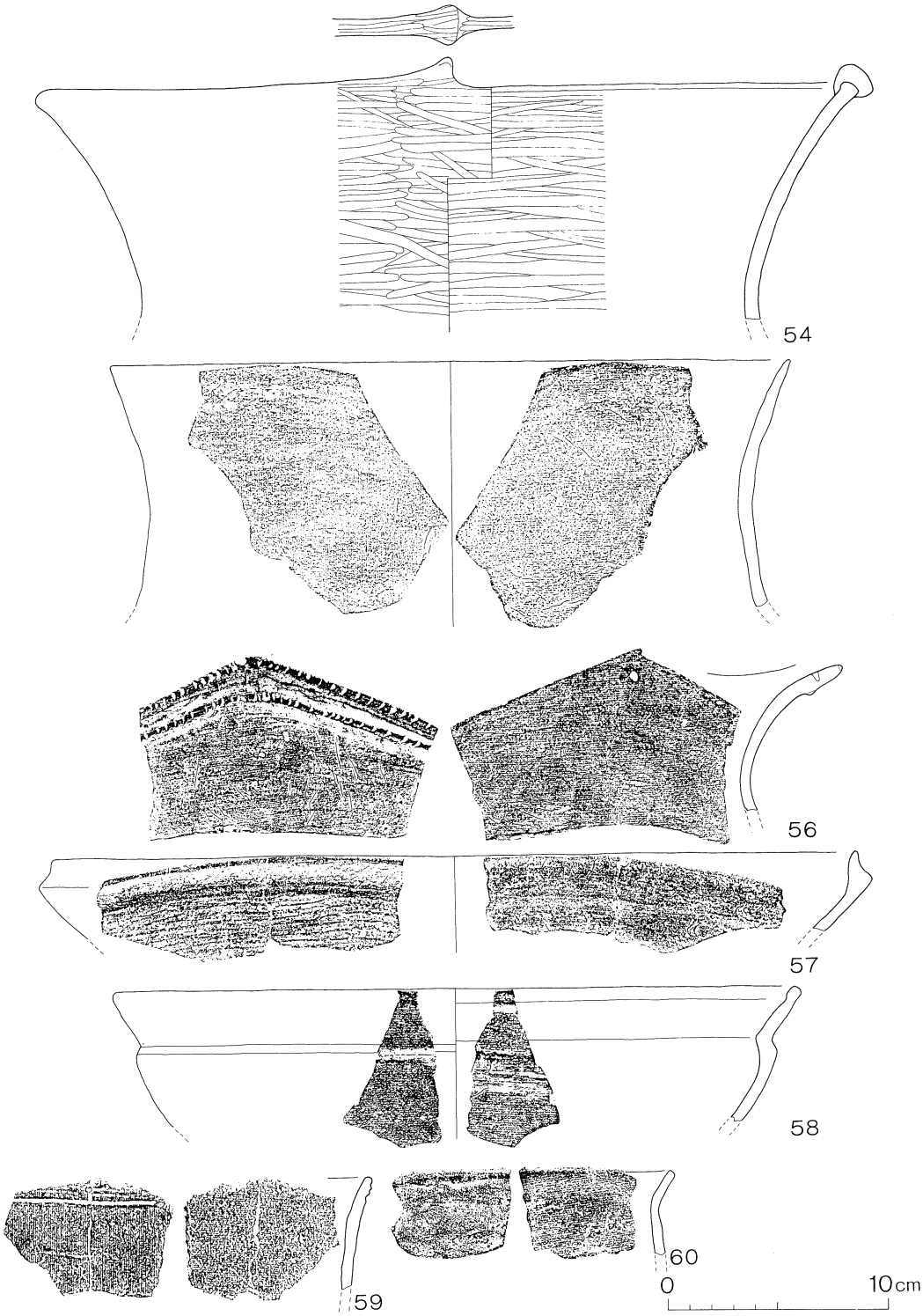
第5図　縄文土器実測図(2)



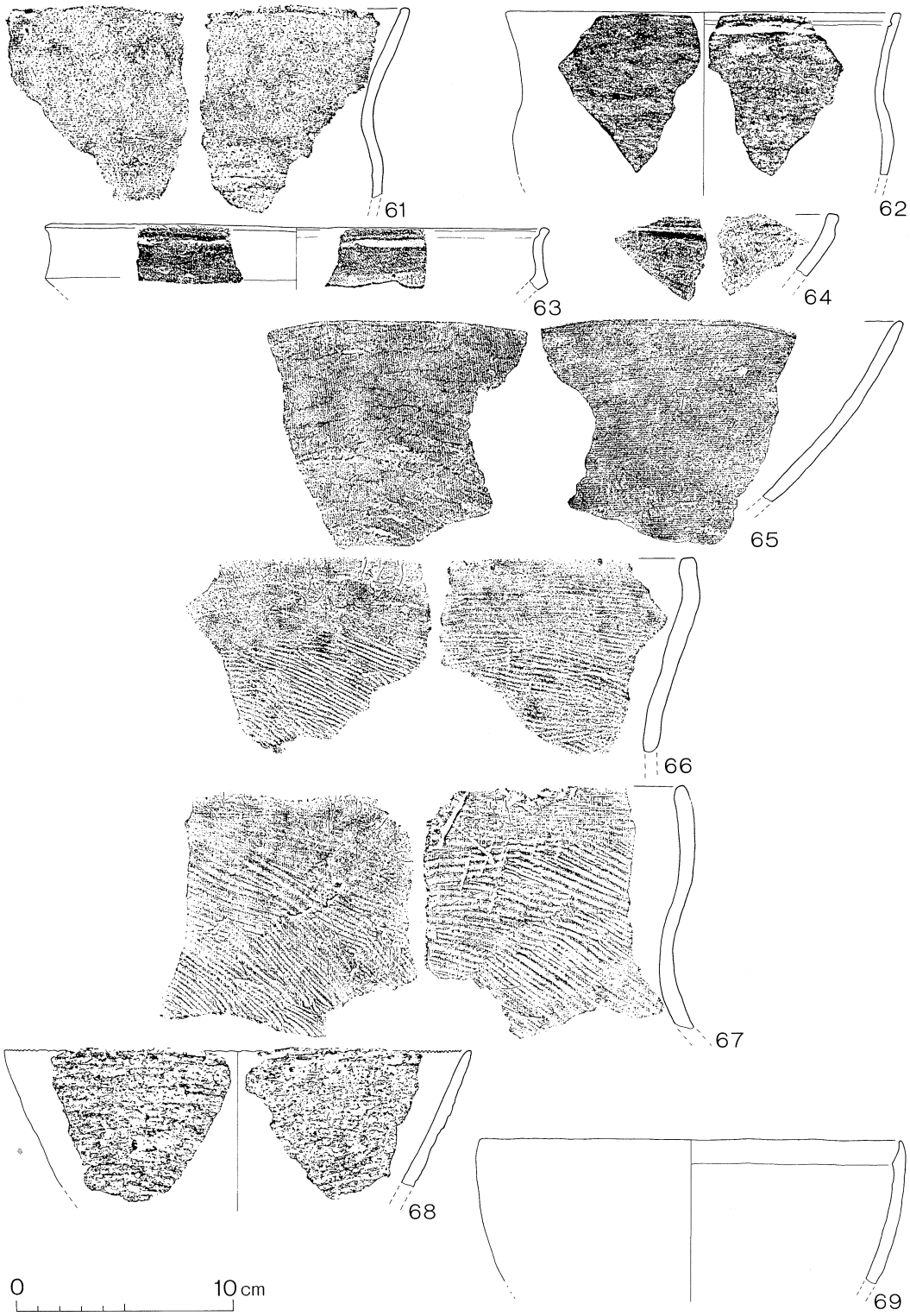
第6図　縄文土器実測図(3)



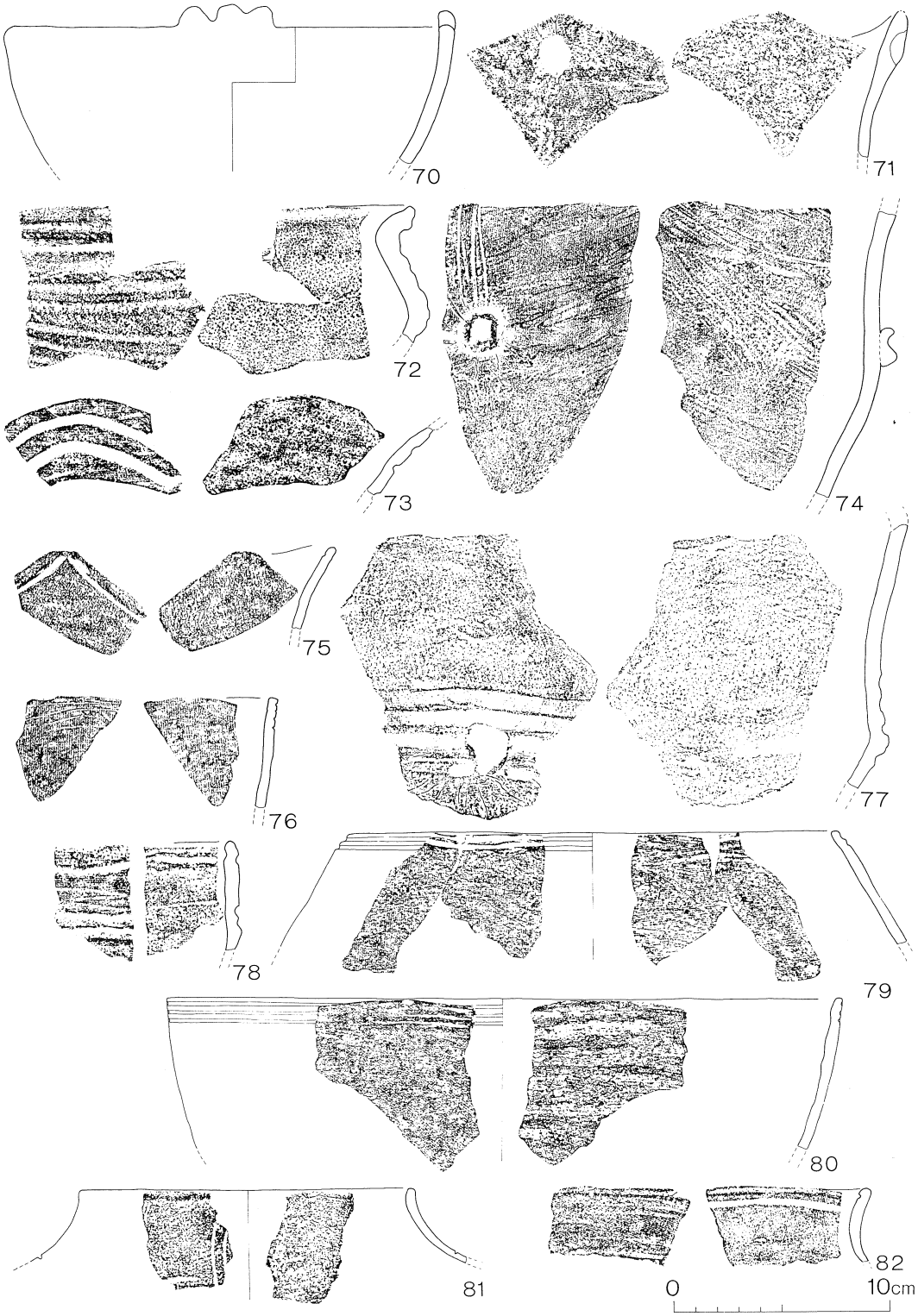
第7図　縄文土器実測図(4)



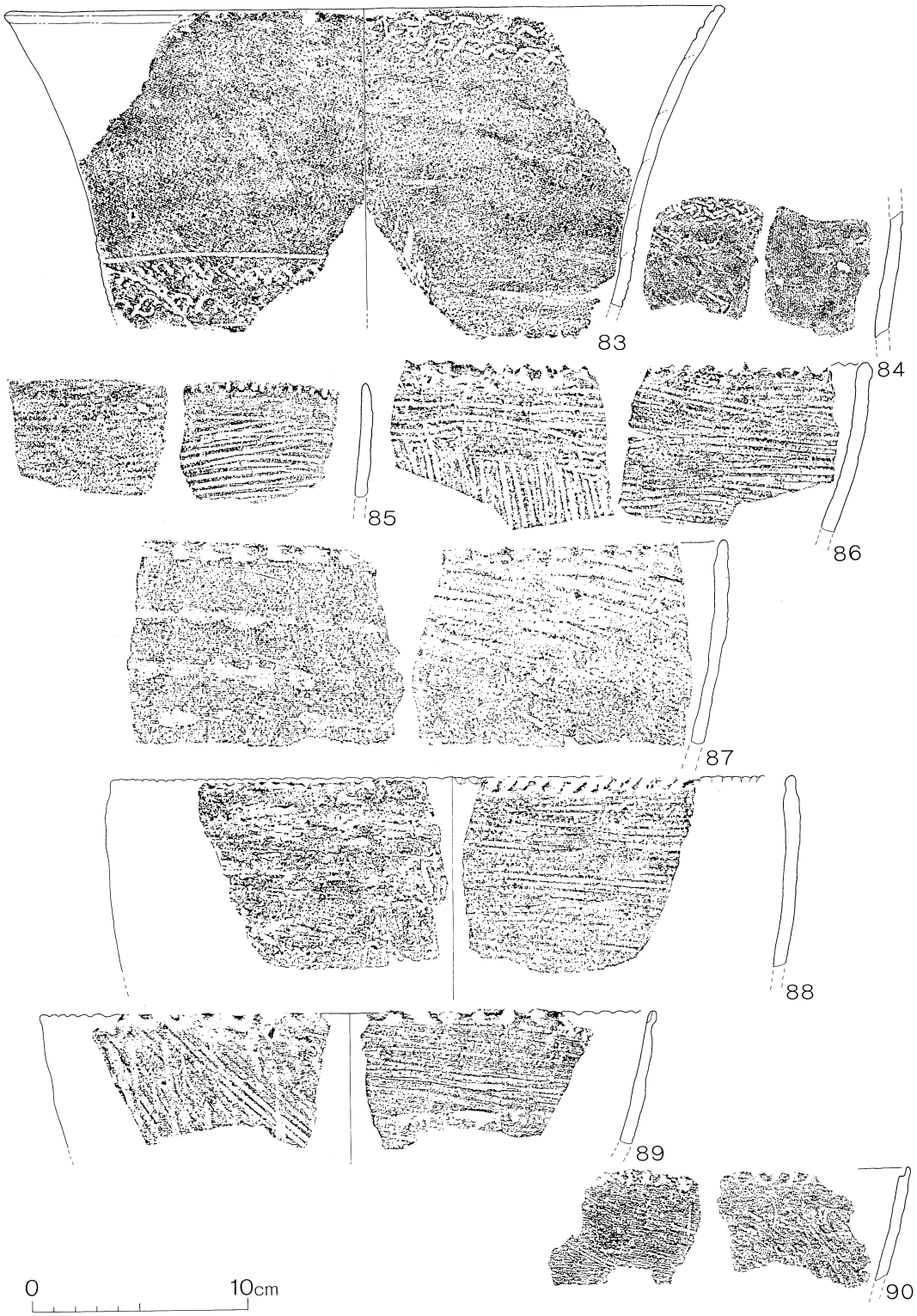
第8図　縄文土器実測図(5)



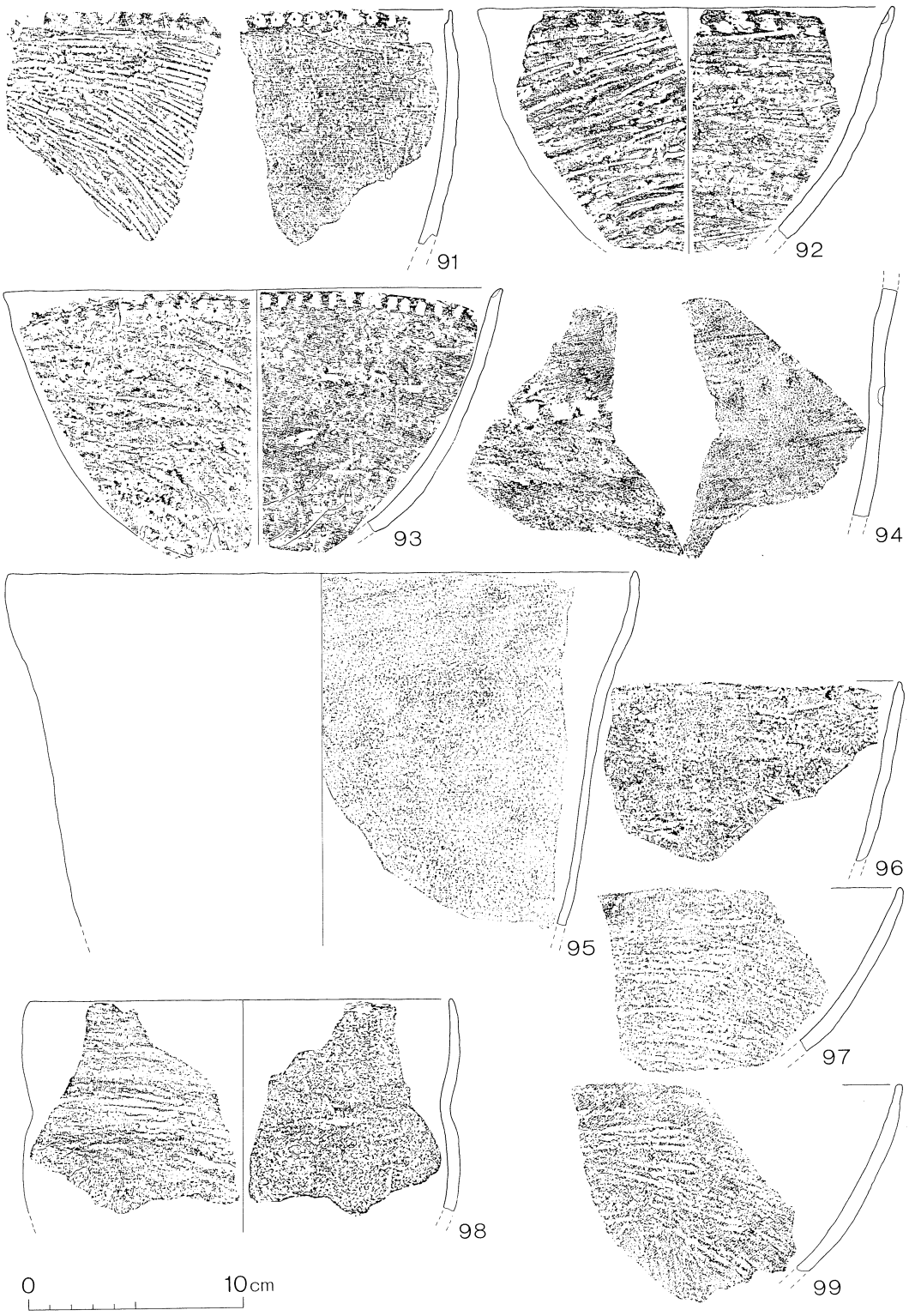
第9図　縄文土器実測図(6)



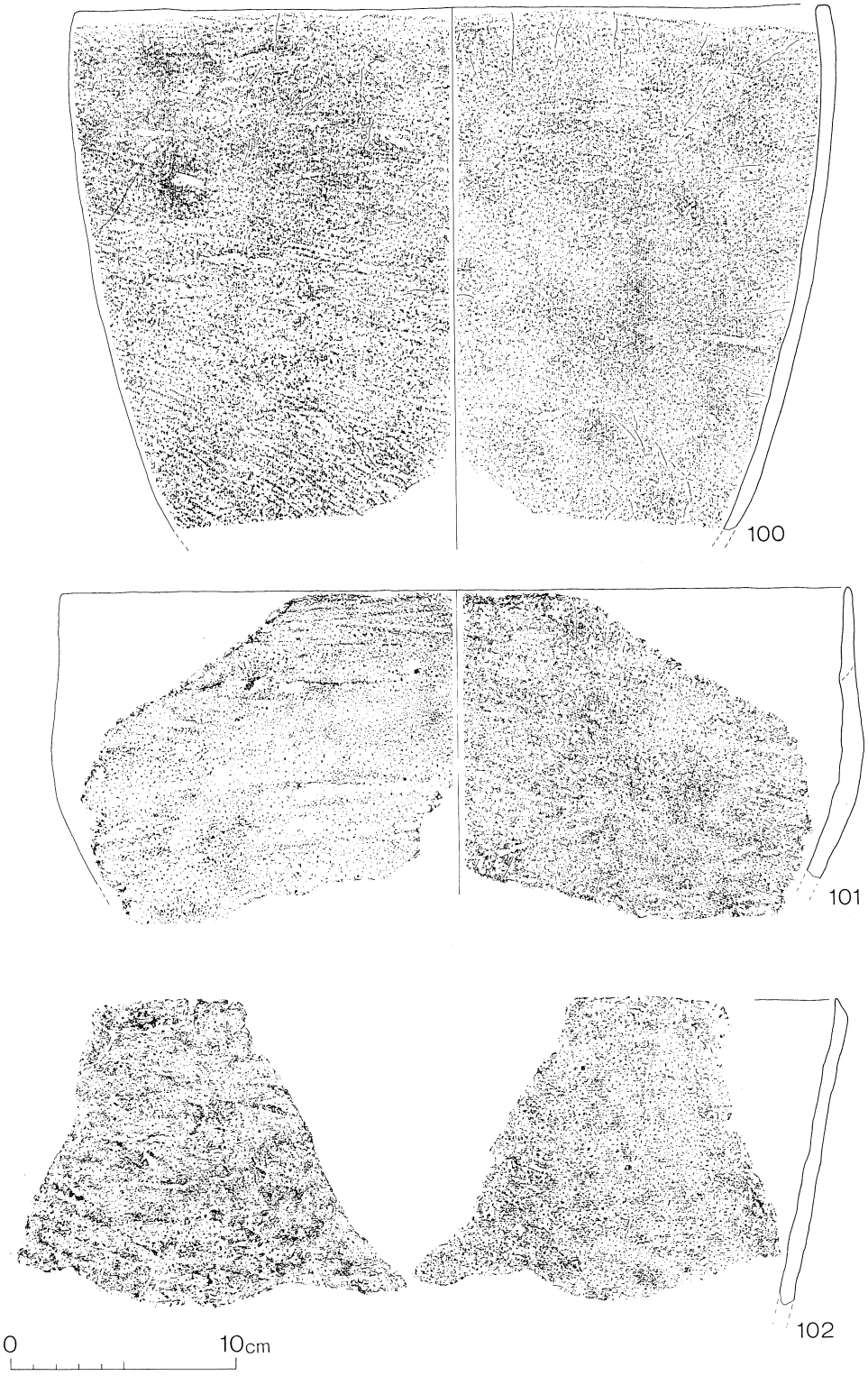
第10図　縄文土器実測図(7)



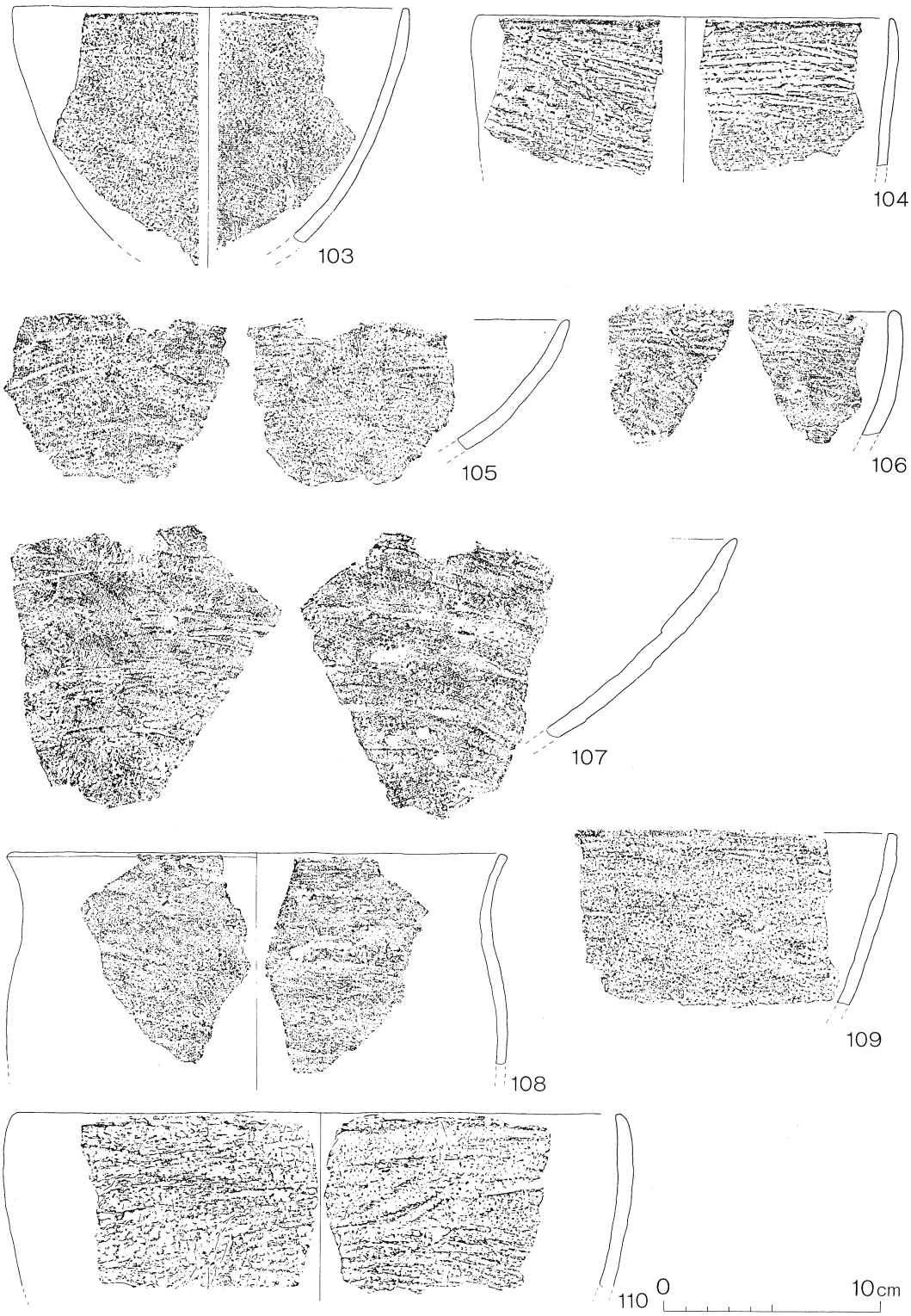
第11図　縄文土器実測図(8)



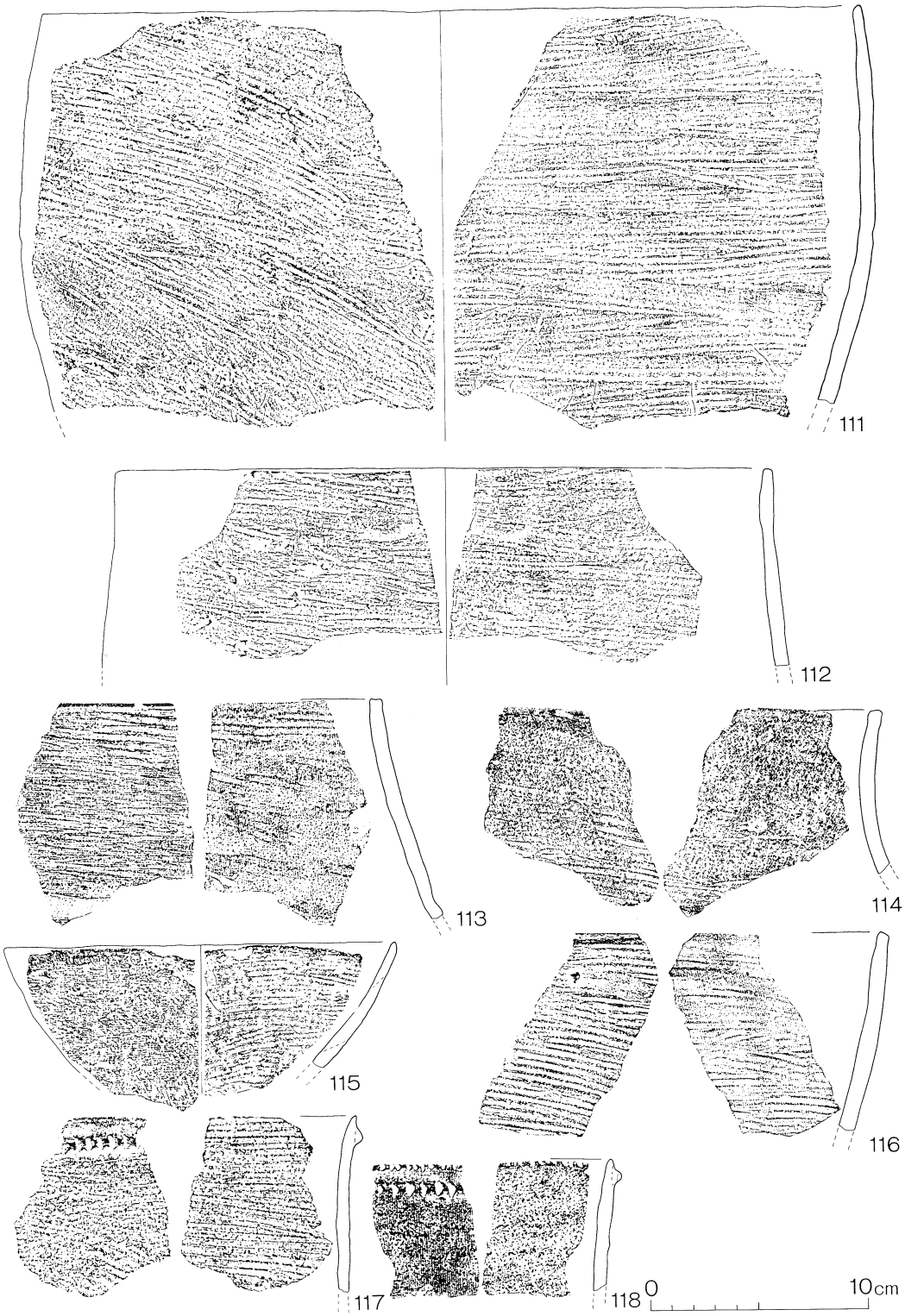
第12図　縄文土器実測図(9)



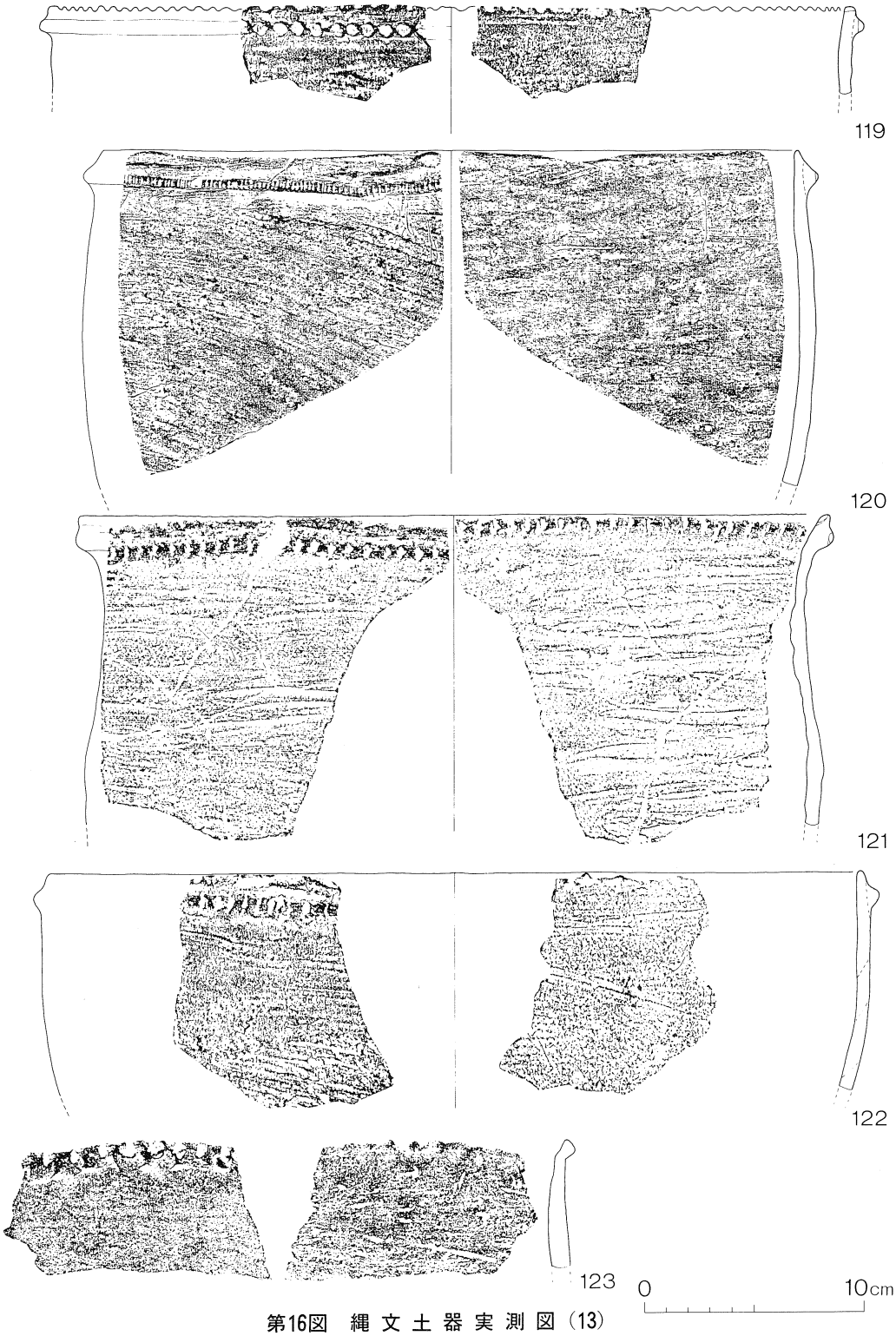
第13図　縄文土器実測図（10）



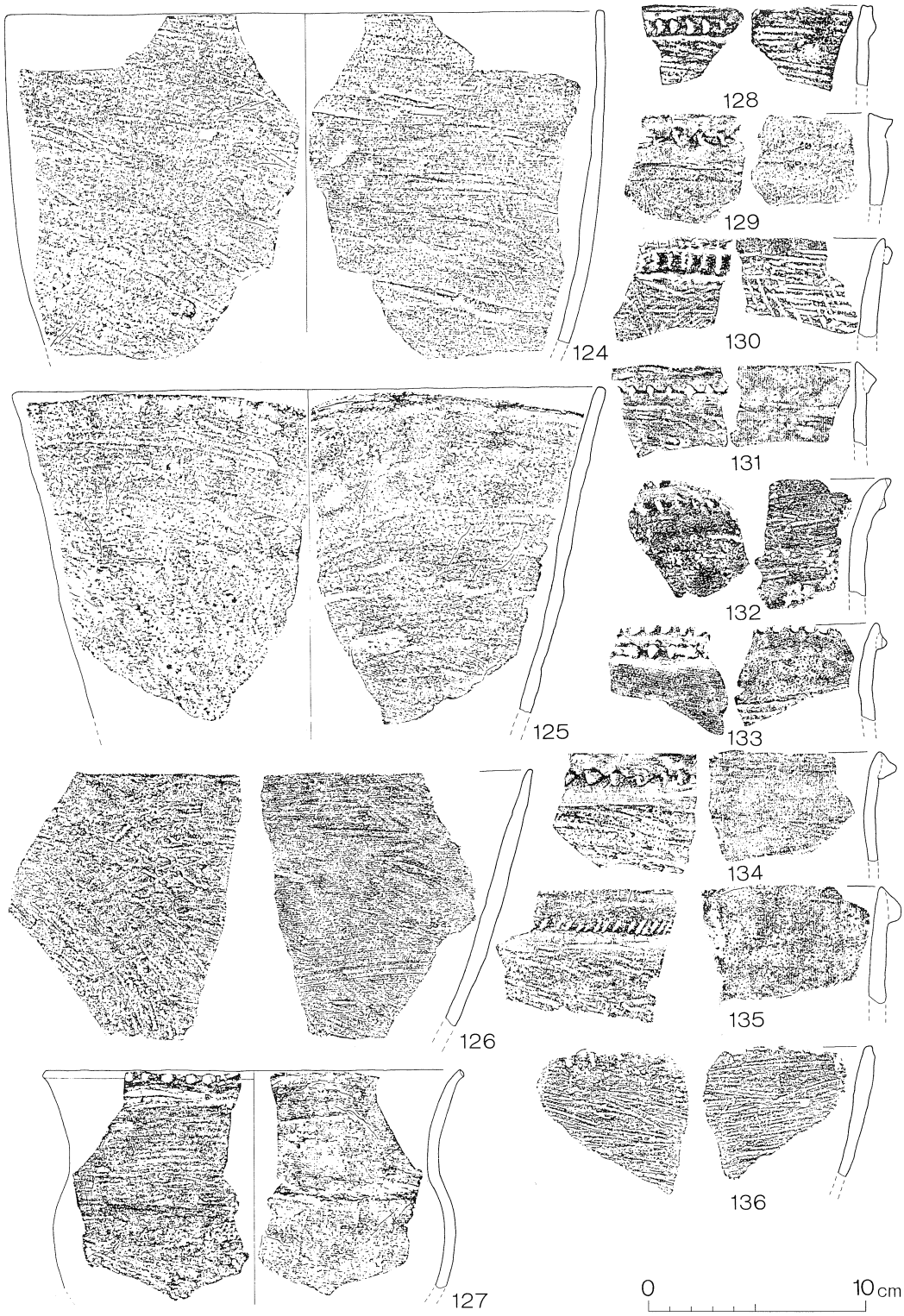
第14図　縄文土器実測図(11)



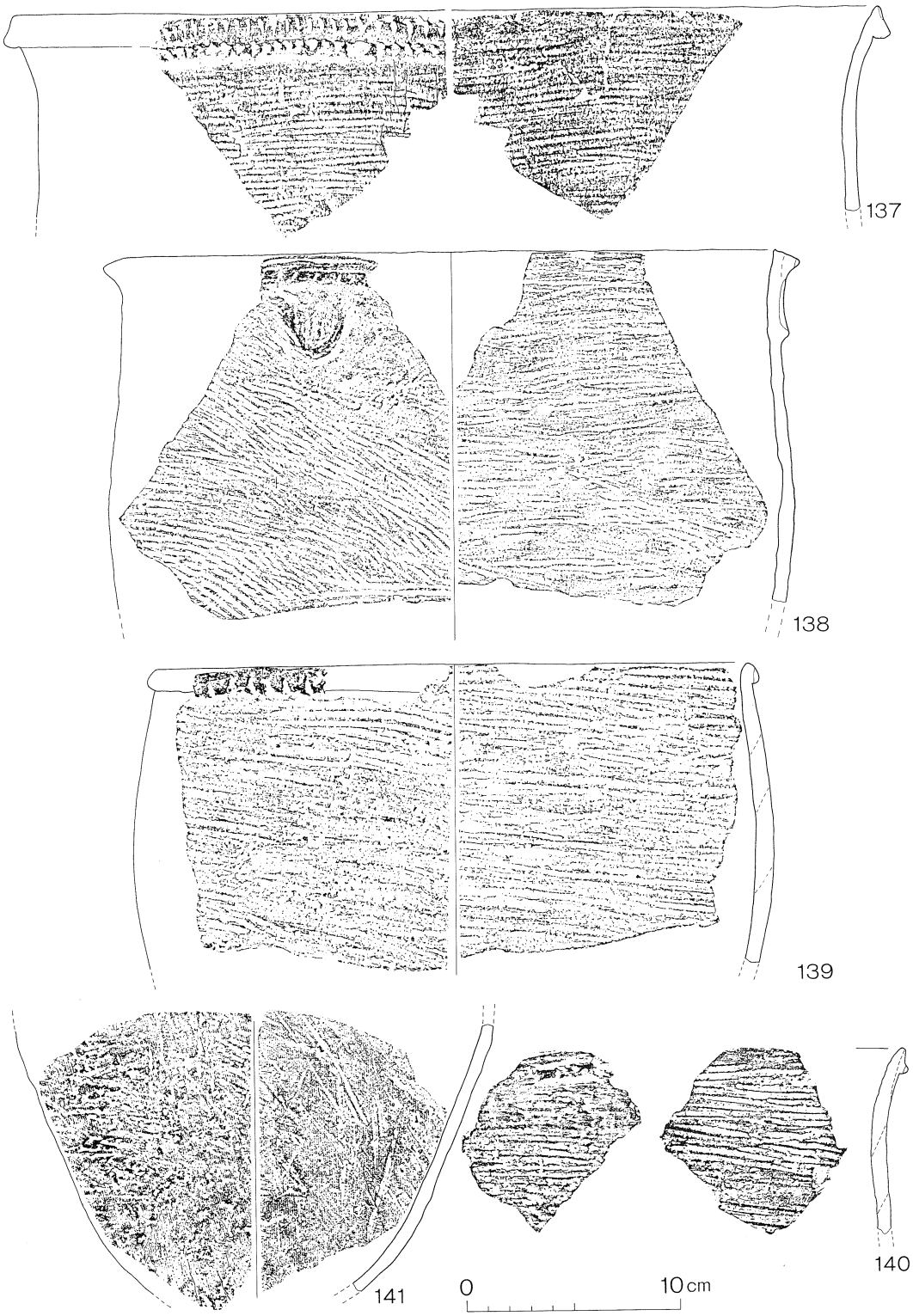
第15図　縄文土器実測図（12）



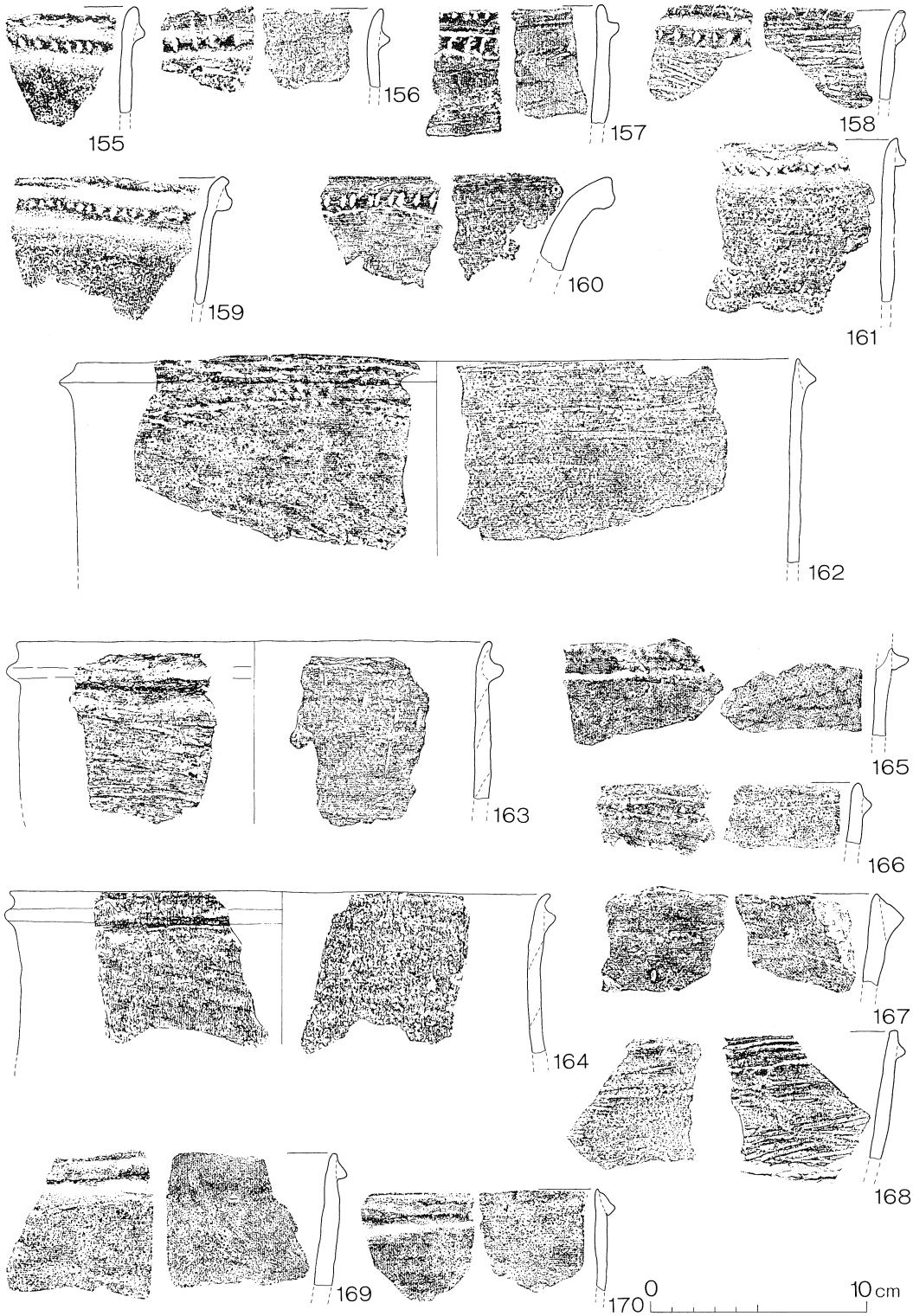
第16図　縄文土器実測図(13)



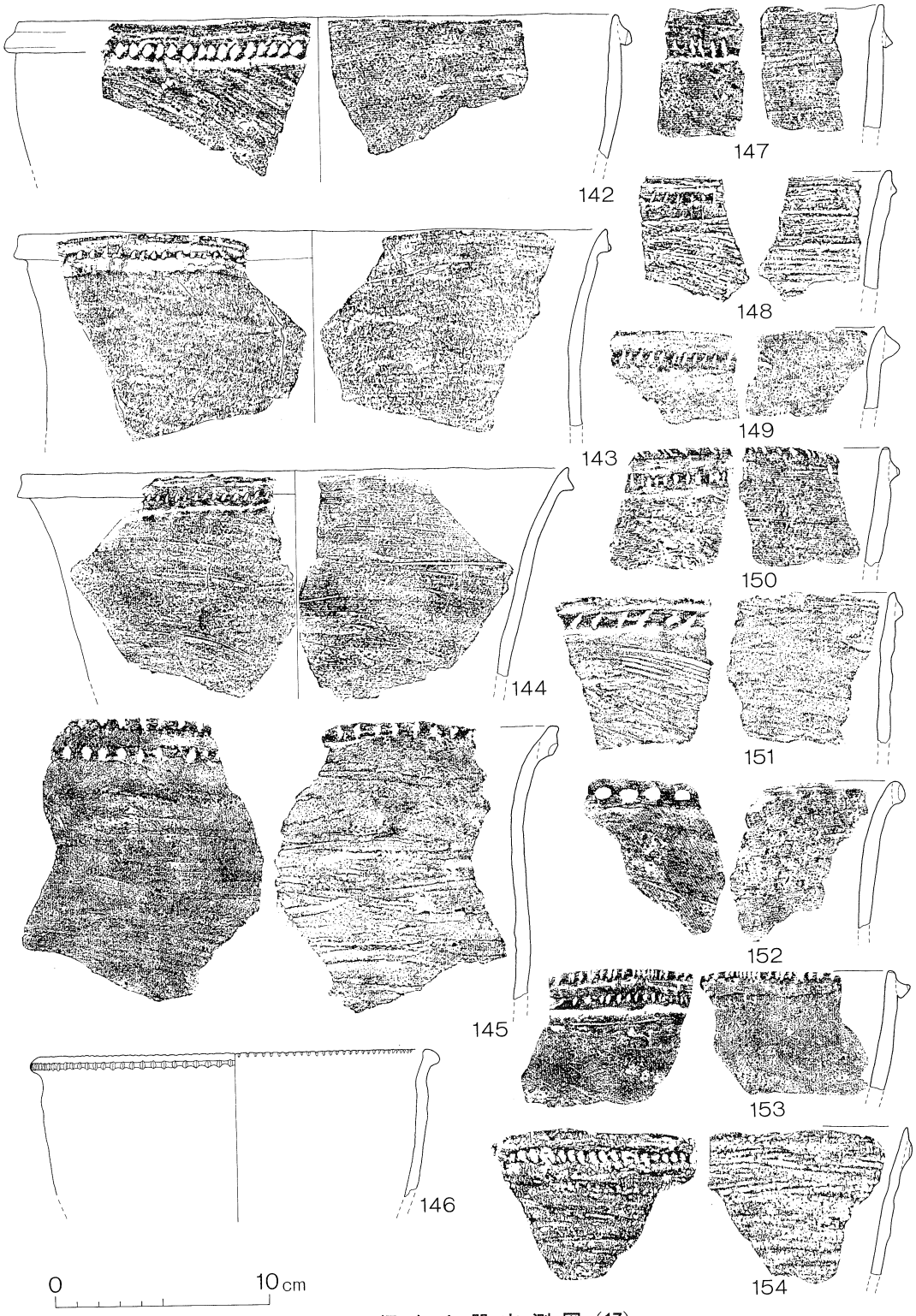
第17図　縄文土器実測図（14）



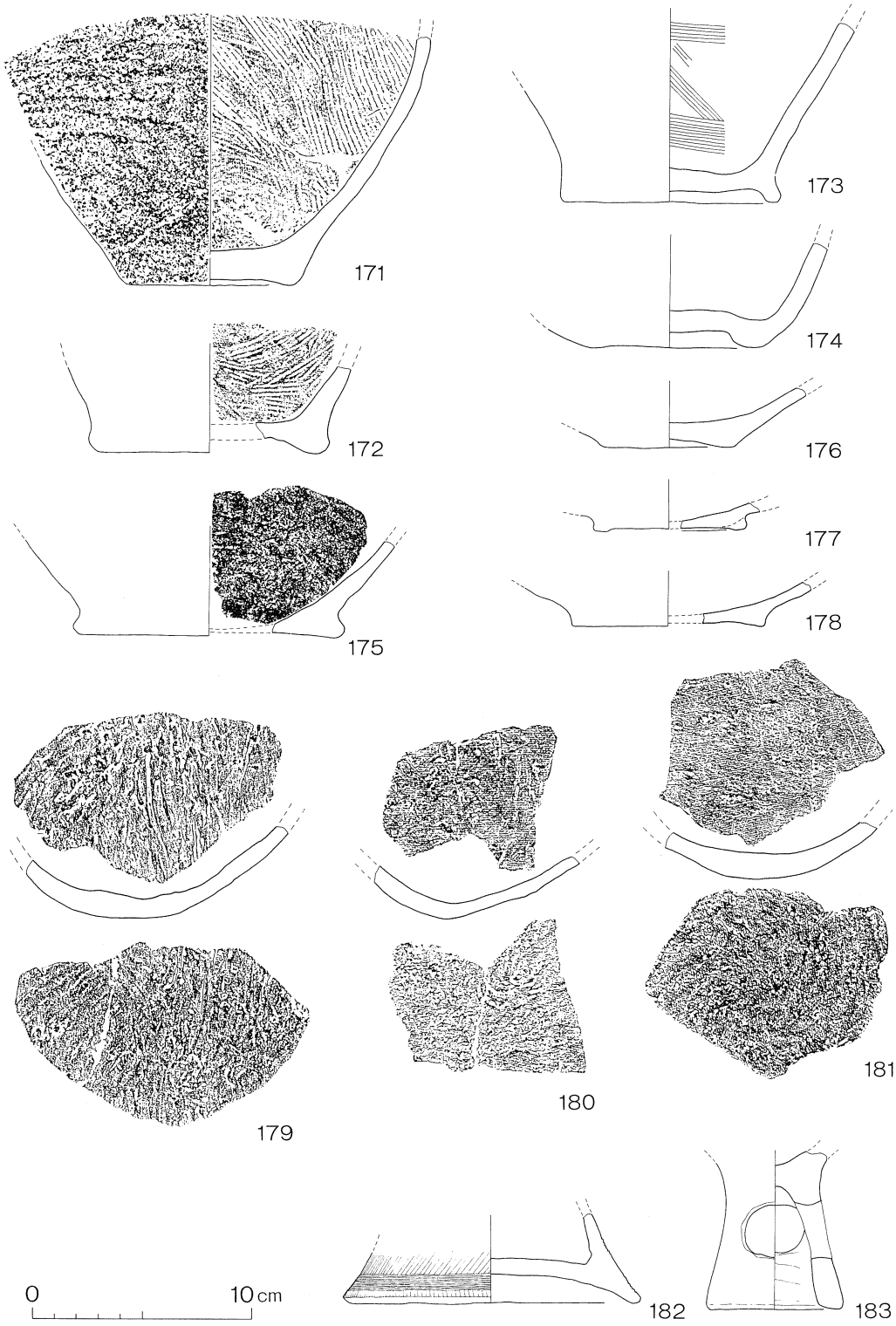
第18図　縄文土器実測図(15)



第19図　縄文土器実測図（16）



第20図　縄文土器実測図（17）



第21図　縄文土器実測図(18)

2 弥生土器

弥生時代前期の土器は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器が基本的な器形としてある（第22図～第66図）。また、これらに対応する蓋形土器、小形土器、そして、ミニチュア土器がある。

甕形土器（第22図～第50図）

1～5は朝鮮系無文土器として分類した。1は復元口径26.0cmの玉縁式口縁である。貼り付けたことが明瞭に観察される資料である。5は、1のような玉縁が剝離したものと考えられる。4は1と比較すると丸味を欠くがやはり貼り付けている。3は原山遺跡等に出土例があって、1より後出的なものと考えられている。2はこの種に入れるべきではないかもしれないが、口縁を貼り付けているので一応朝鮮系無文土器として扱った。これらは口縁部の形態を除くと表面的な観察では、他の弥生土器と何ら変るところはない。

朝鮮系無文土器を除く甕形土器は、無文、沈線を入れたもの、刺突文を施したもの等があるが装飾されたものは少ない。外面には黒色の付着物がみられるものが多い。6～17は小形の甕形土器である。手捏のものはなくハケやヘラ磨きによる調整がみられるので、煮沸用とは別の実用品であろう。

18～20は外耳土器とでも云うべき、口縁近くに耳形把手が一対つけられた甕形土器である。18はその外耳にさらに2個の小孔があけられているが、19、20にはみられない。18の外耳にあけられた小孔は、後述する第66図684のような甕用蓋形土器とセット関係にあるものと考えられる。

21～155は甕として一般的にみられる無文のものである。但し、70、77、84、91～94、96、123、144等についてはヘラ磨きが顕著であり鉢形土器になる可能性もすてきれない。156は甕形土器のミニチュア土器であろう。

157～270は口縁部の下に沈線を入れたものである。沈線が1本のもの（157～226、229、230、268～270）、2本のもの（227、228、231～247、251～255）、他は3本以上～多条化したものがある。内外面ともハケ調整を行っているが、ヘラ磨きのものも少なくない。234はミニチュア土器であろう。

271、272は列点文のみ、274～283は沈線の間に刺突列点文を施す一群の甕形土器である。調整は内外面ともハケである。

284～418は口唇部に刺突列点文（キザミ目）を施すものである。列点文のみのもの（284～305）、綾杉状文のもの（306、307）、口縁部下方に低い段があるもの（308～316、324）、

段の位置に沈線を施すもの（317～323、325～362）、その沈線が多条化するもの（365、368～393）、その下に列点文や波状文をつけたもの（394、396～401）がある。また、402～418は沈線の間に列点文を入れる一群である。多条化した沈線と刺突列点文を組みあわす手法のものは、ヘラ描き沈線がクシ描き沈線に変る中期初頭の弥生土器に共通し、後出的なものと考えられる。

419～462は甕形土器の底部と考えられるもので、このうち461、462は焼成後底部に小孔を穿っている。甑として使用したものであろう。450の底部外面には、編物の痕跡がみられる。

壺形土器（第50図～第64図）

壺形土器は内外面とも全面に横方向にヘラ磨きを施すのを原則としている。ヘラ磨き以前にハケ目による調整を施しているようで、ハケ目調整のみの部分や、一部にのみヘラ磨きがみられる例がある。

485、505～520、526～529、539、541は口縁から体部上半にかけて沈線や文様が何らみられない一群である。器形がやや歪んだものが多い。このうち505は内外面とも全面黒色を呈す。口径13.5㎝、器高24.0㎝の完成品。485は口径20.0㎝、器高33.6㎝の完形である。

466、470、471、475、482、483、488、489、491、503、533、541は口縁部下、及び胴部と頸部との境が段状を呈する一群である。466は幅4.0㎝の粘土帯を貼り付けて口縁部とし、上面を平坦とし細く浅い沈線を入れている。口縁部と頸部との境は、粘土帯を貼り付けたままその上に列点文を施したのみで調整がみられない。他の資料はこの部分をハケ目状痕のつく工具で、縦方向に強く押圧しながら、直線的に段がつくよう調整したものと考えられる。489は甕形土器の可能性もあるが、調整の手法から壺形土器として扱った539、541は口唇部に浅い沈線を入れ、綾杉文状の刺突を入れている。541は口径約40.0㎝の大形の壺である。口唇部に浅い沈線を入れ、刺突文を入れるのは壺形土器に多くみられる特徴である。

463～465、467～469、472～474、476～479、480、481、484、486、487、490、492～502は頸部の沈線が1本～数本あるので、あまり装飾しない壺形土器である。これらの器形に口唇部に刺突文を施したものが、534～546である。板の木口による刺突や、それを格子状としたり、綾杉文状としたもの等がある。頸部の沈線が多条化し、鋸歯状の刺突列点文と組みあわせた施文もある。573や574は頸部の沈線が最も多条化した例であるが、ヘラ状工具による施文である。631、636は底部と体部の境に3条の沈線があり、634は底に2条み

られるが、これらもこの種に入るであろう。壺形土器の中では出土例は少ない。

521～525、594、602～605、610～621、630は沈線の位置に突帯を巡らした一群である。突帯は貼り付けたものが多いが504のように削り出し突帯と考えられるものも含まれる。630は最大径52.0cm、器高推定52.0cmの大形の壺である。644は底部であるが、さらに大形の壺形土器と推定される。602は胴部下半の外面に厚く黒色物が付着しており、煮沸に使用されたと思われる資料である。突帯の上に刺突を施したものと、そうでないものがある。

壺形土器にみられる文様は、綾杉文、弧状文、鋸歯状文、木葉文等がみられるが、その施文具は、貝殻（タマキ貝やベンケイ貝等）、ハケ目調整痕と同様な木の木口と考えられる工具等がある。このうち西川津遺跡出土の木葉文については、別に報告されている（P135参照）。文様の構成は、山口県綾羅木郷遺跡出土資料に近い。

小形の壺形土器の製作手法もほぼ同様であり、手捏で547の非実用的なミニチュア土器を除く、548～551、554は実用品であろう。このうち、550は無頸の壺である。器高は6.8～10.0cmほどである。

649は後元径19.6cmの壺形土器の底部であるが、底に編物の痕跡を残している（図版67）

鉢型土器（第64図、第65図）

656～673は鉢形土器として分類した。いずれも浅鉢形である。このうち、小形で手捏の656以外はすべて実用品と考えられる。659や662のようなハケ目調整のものもあるが多くは内外面ともヘラ磨きが施され、壺形土器と同様に横方向を原則としている。

659～662は小形のコップ状を呈す鉢形土器である。660は口径11.2cm、器高10.0cmで口唇部に2孔一対の小孔が穿たれ、これとセットをなす蓋の存在が予想される。657はこの種の鉢形土器をさらに小形にしたものであろう。口径7.5cm、器高7.5cm。

663、666、673は体部が逆「ハ」の字状に大きく開く一群である。体部はわずかに内湾する。673は口径28.8cm、器高16.0cmを測る。658はこの種の小形品であろう。

664、665、667～672は、体部が内湾しながら大きく上方に開き、口縁部が「く」の字状に外反する一群である。665は比較的小形で口径16.8cm、器高8.4cm。669～672は口径21.6cm～27.5cm、器高15.6cm～17.0cmであるが、667と668は口径がそれぞれ45.0cm、35.5cmと大きく、外耳を一対有しているのが特徴である。これらとセットになる蓋が想定されるが、甕形土器に分類した18、19、20も有蓋付の鉢形土器である可能性もすてきれない。ただし、667や668はこれに対応すると思われる蓋形土器はみられない。また、有文の鉢形土器もみられなかった。

蓋形土器（第65図、第66図）

674～693は蓋形土器として分類した。674～681の小形品と682～693のような甕用蓋形土器とに大別される。ヘラ磨き調整を施したものが多い。

小形の蓋形土器は、撮みを明確に作り出した674～677、681とそうでない678～680に細分される。口縁付近に2孔一対の小孔を穿つ。これらは550のような壺形土器に分類した小形の無頸壺や、鉢形土器に分類した660と対応するものと考えられる。678～680はそれぞれ口径は7.5cm、6.8cm、12.0cmを測る。

682～693は甕用蓋形土器である。688、693は体部が若干外湾するが、他は皆内湾する。撮みの頂部は凹むものが多い。このうち口唇に沈線と刺突文を有する689は甕形土器の口縁の可能性もある。

注意されるのは684の資料である。撮み部の径6.5cm、器高8.4cm、口径20.0cmを測る。撮み部に2孔一対の小孔が頂部から体部外面に斜め方向に穿たれている。頂部の小孔は、それぞれ対峙する小孔との間を溝で結ばれている。小形の甕形土器のように口縁付近に小孔はみられない。このことは、この蓋形土器とセット関係にある甕形土器を紐で緊縛しようとしたことを示しているのであろう。甕形土器に分類した一対の外耳に2孔穿孔のみられる第22図18のような資料に対応すると思われる。また、外耳に小孔が穿たれていなくとも紐で縛ることは可能である。甕形土器や鉢形土器にみられる外耳土器は蓋形土器とセット関係にあり、貯蔵用の甕や鉢があったことを示唆しているように思われる。

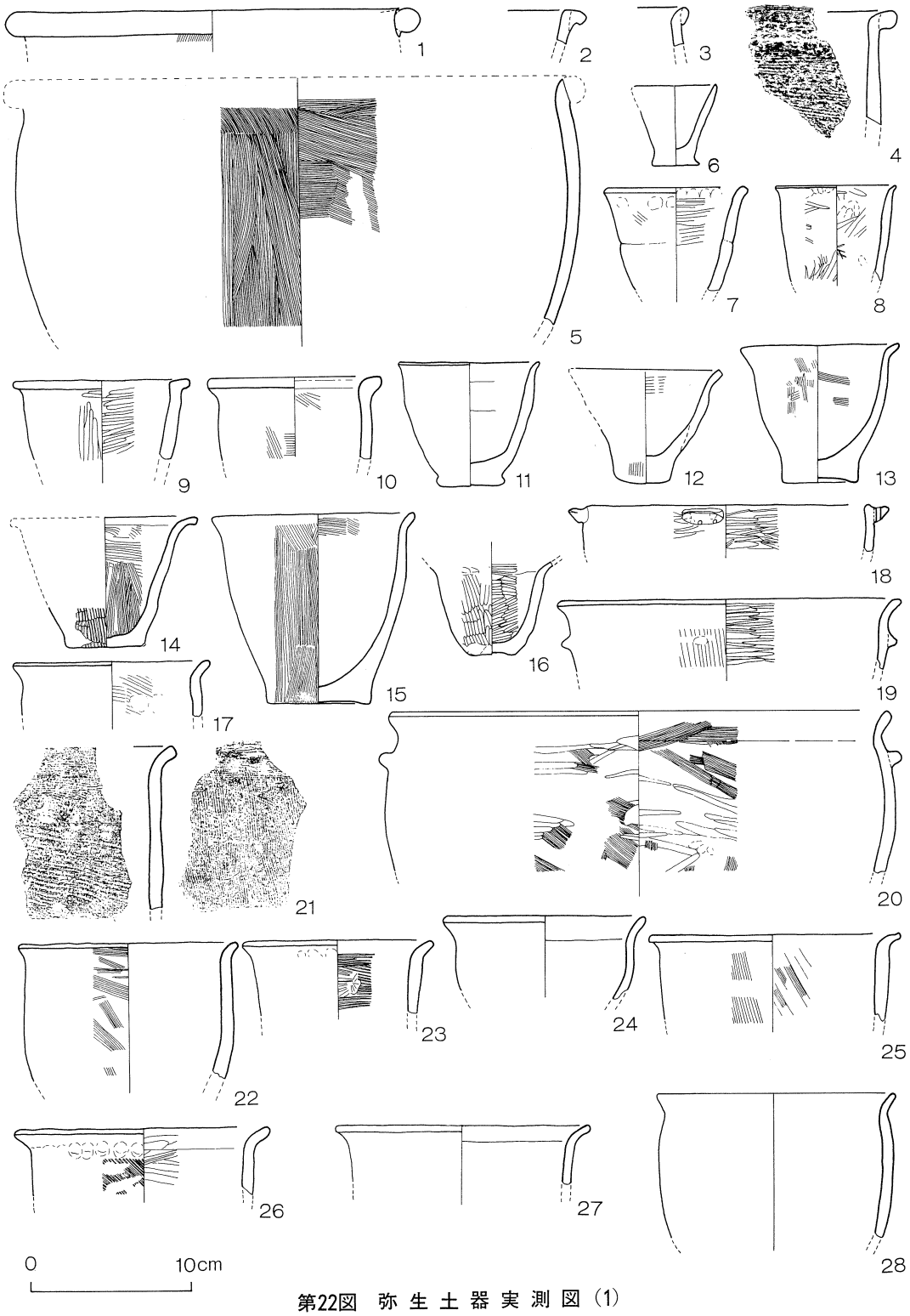
693は他の蓋形土器とは調整や器形がやや異なり丁寧である。669～673のような鉢形土器用の蓋と考えられる。

以上の弥生土器の他に、炭酸石灰様の物質が付着し、二次焼成を受け、土器製塩を行ったと思われる小破片が数片あった。しかし、小数であることと、器形が定形化していないので製塩土器としては扱わなかった。

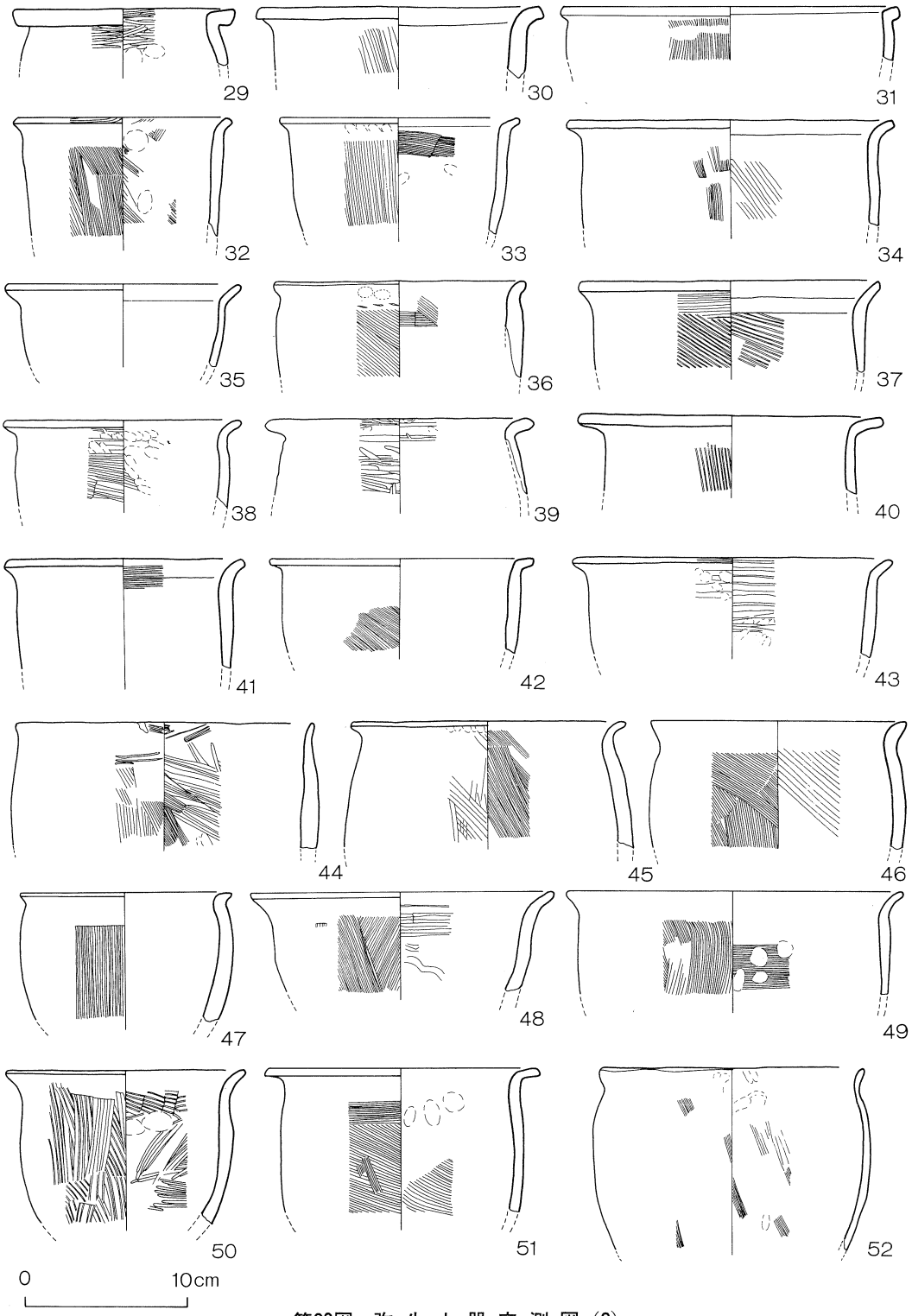
また、朝鮮系無文土器（1）を含めた前期の弥生土器10片の胎土分析を行ったが、その結果は，97ページ以下に報告されているとおりである。

（註1）

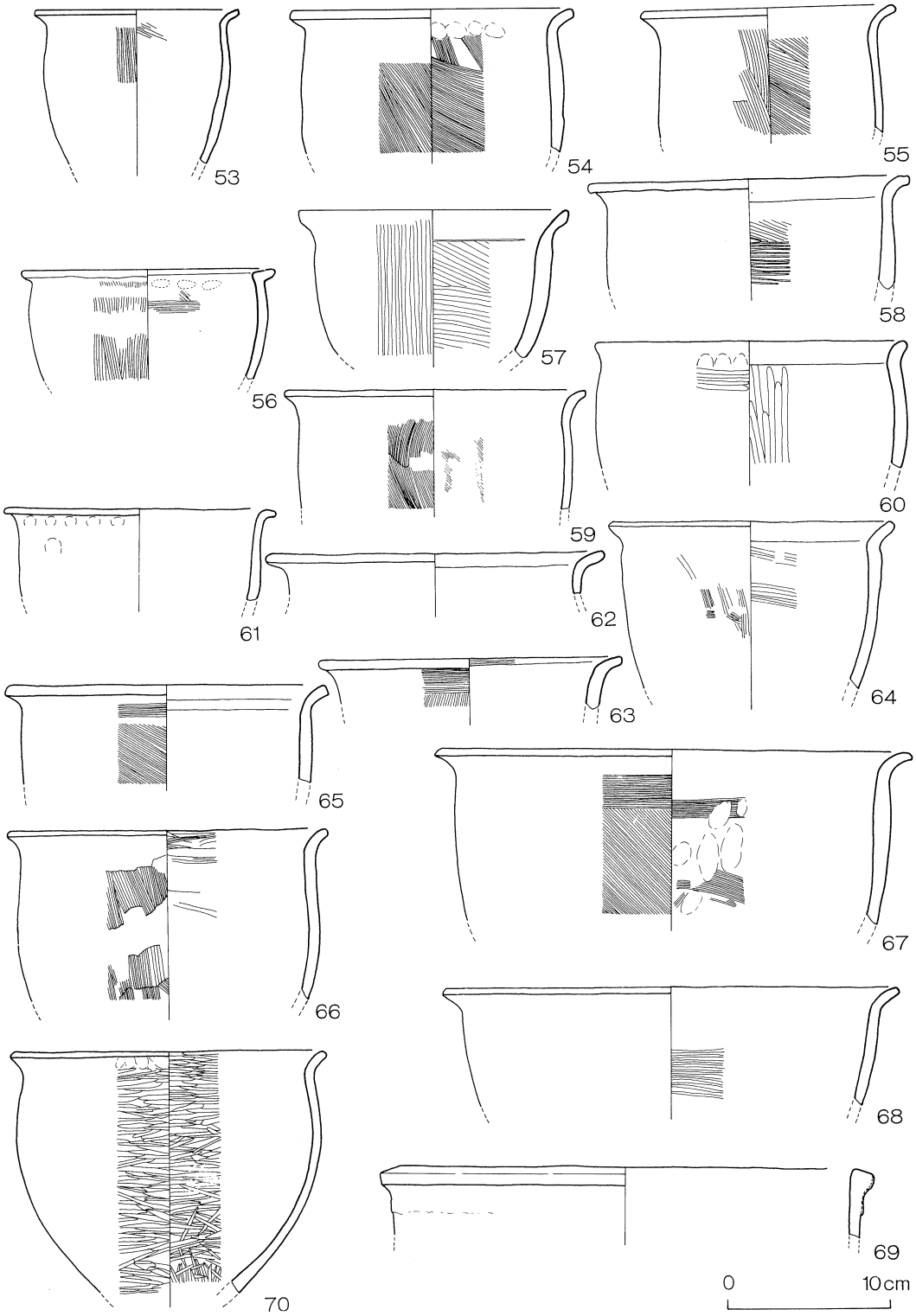
註1　伊藤照雄・金関恕他『綾羅木郷遺跡発掘調査報告第Ⅰ集』下関市教育委員会昭和56年3月



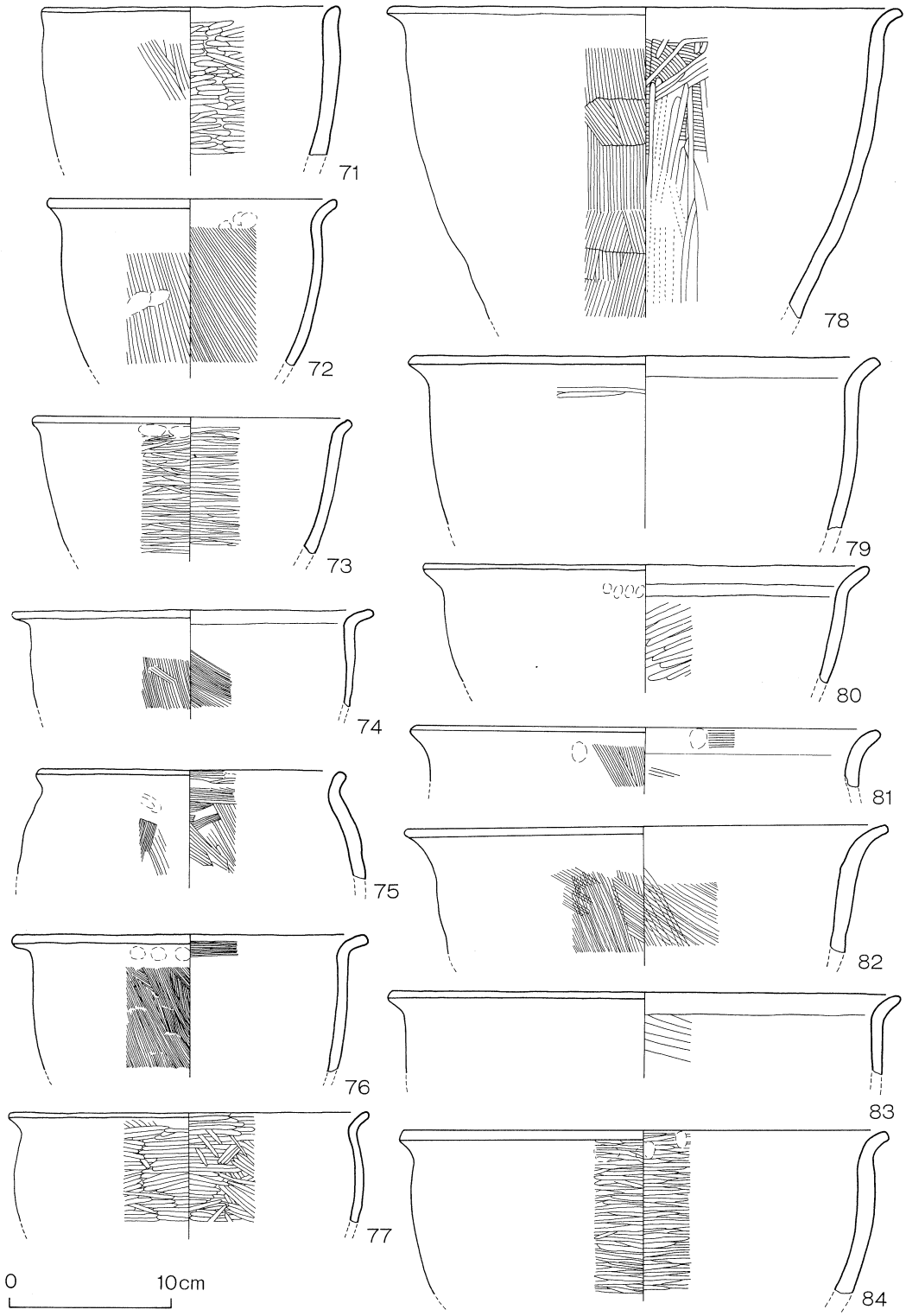
第22図　弥生土器実測図(1)



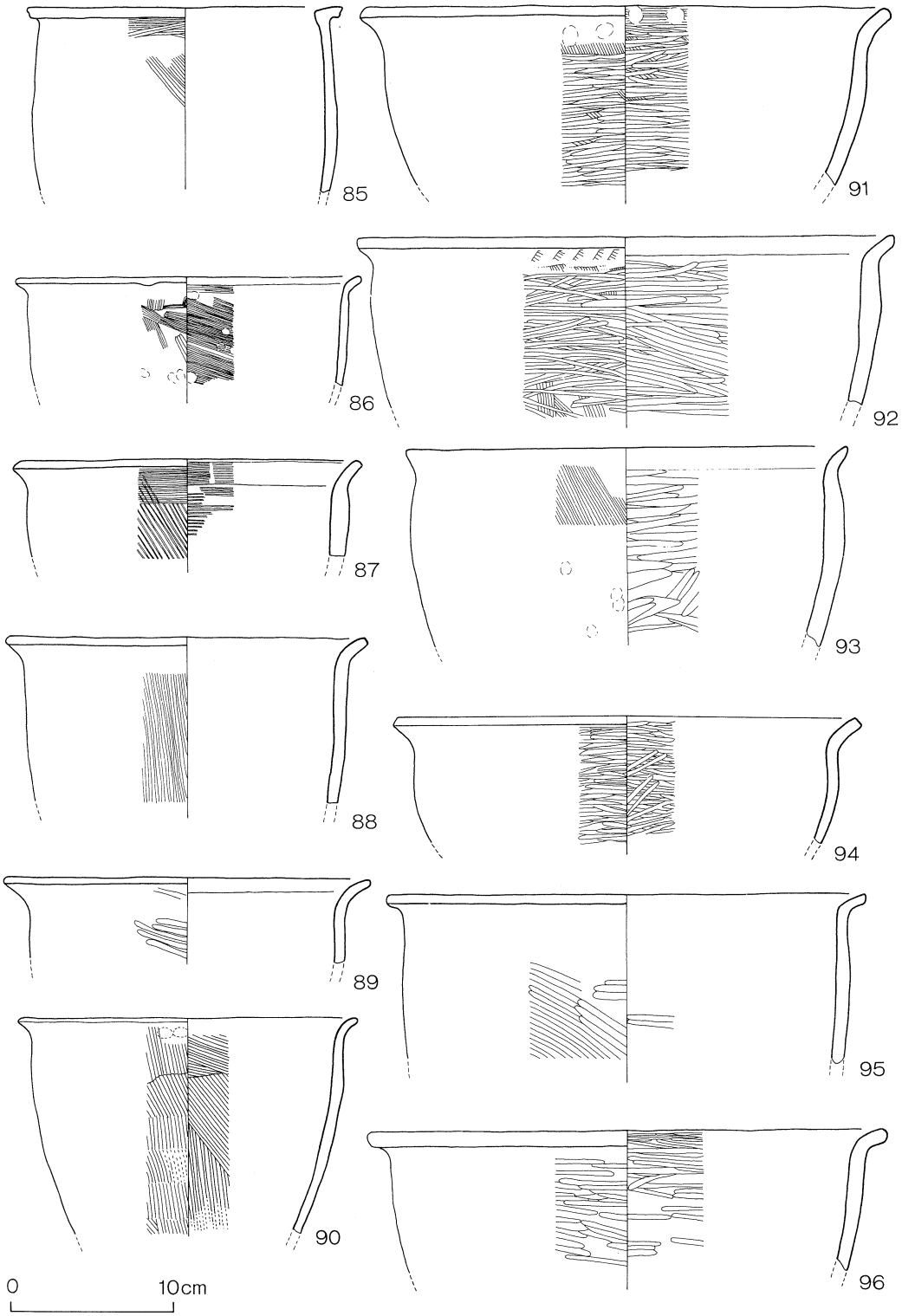
第23図　弥 生 土 器 実 測 図 (2)



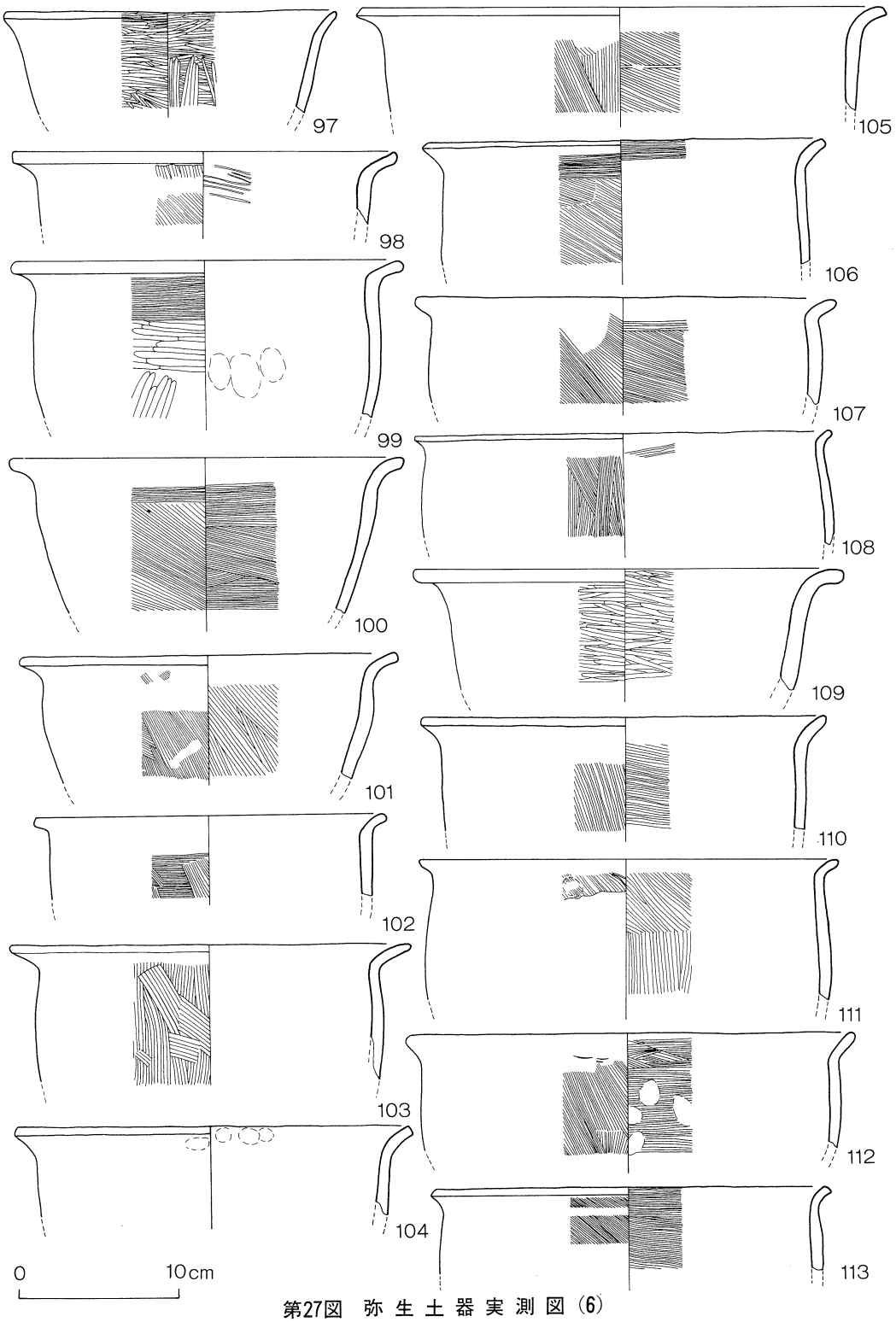
第24図　弥生土器実測図(3)



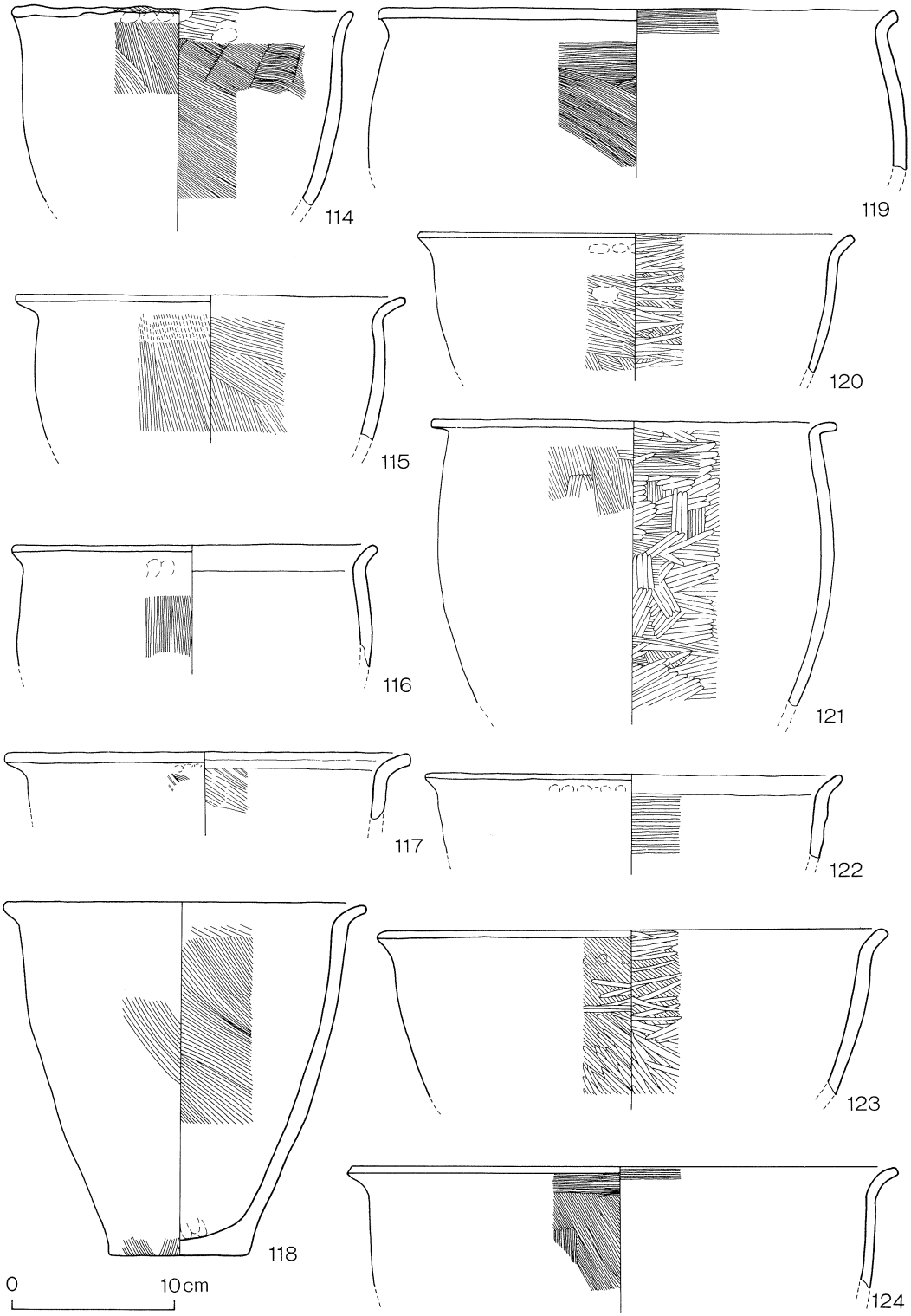
第25図　弥生土器実測図(4)



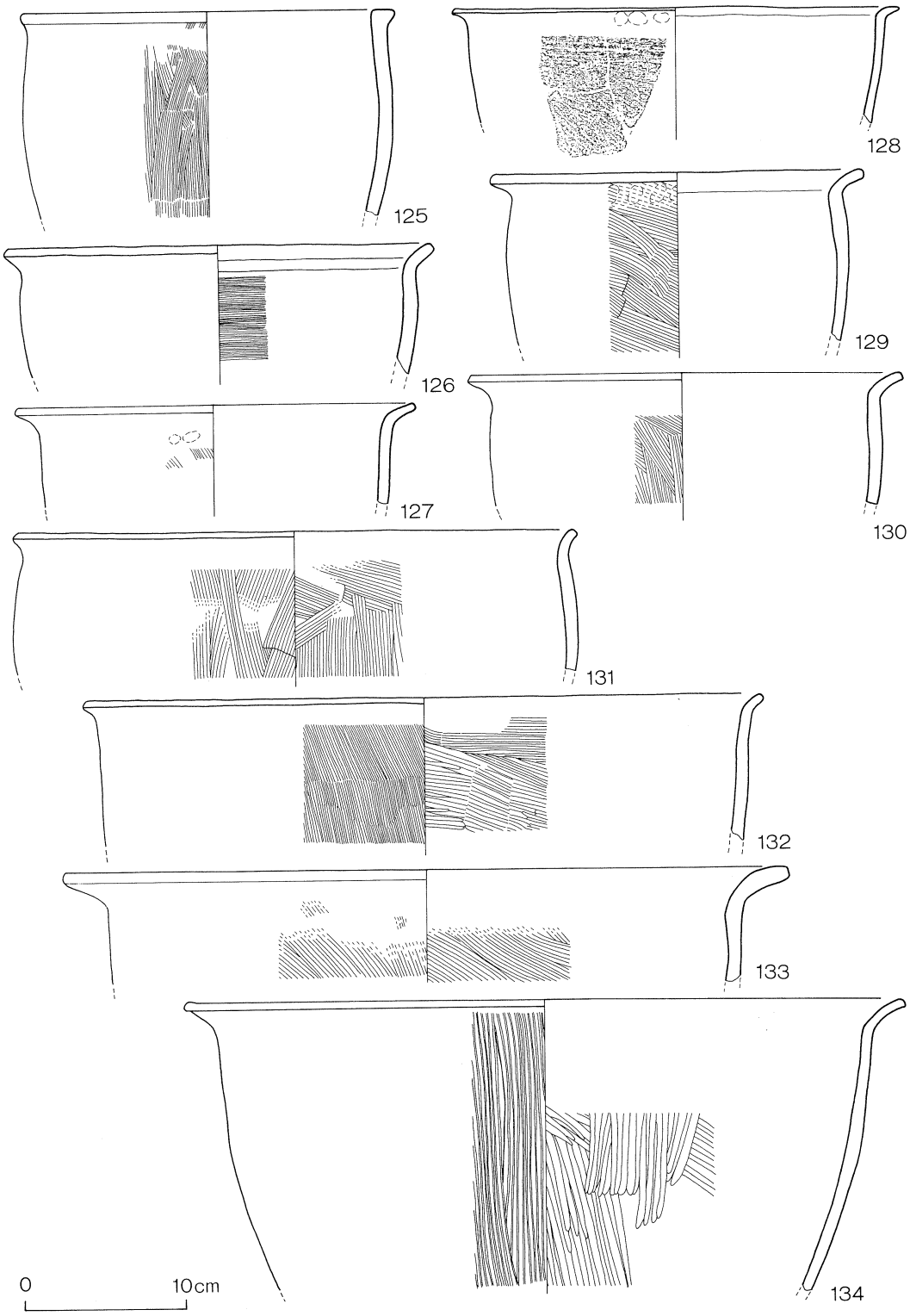
第26図　弥生土器実測図(5)



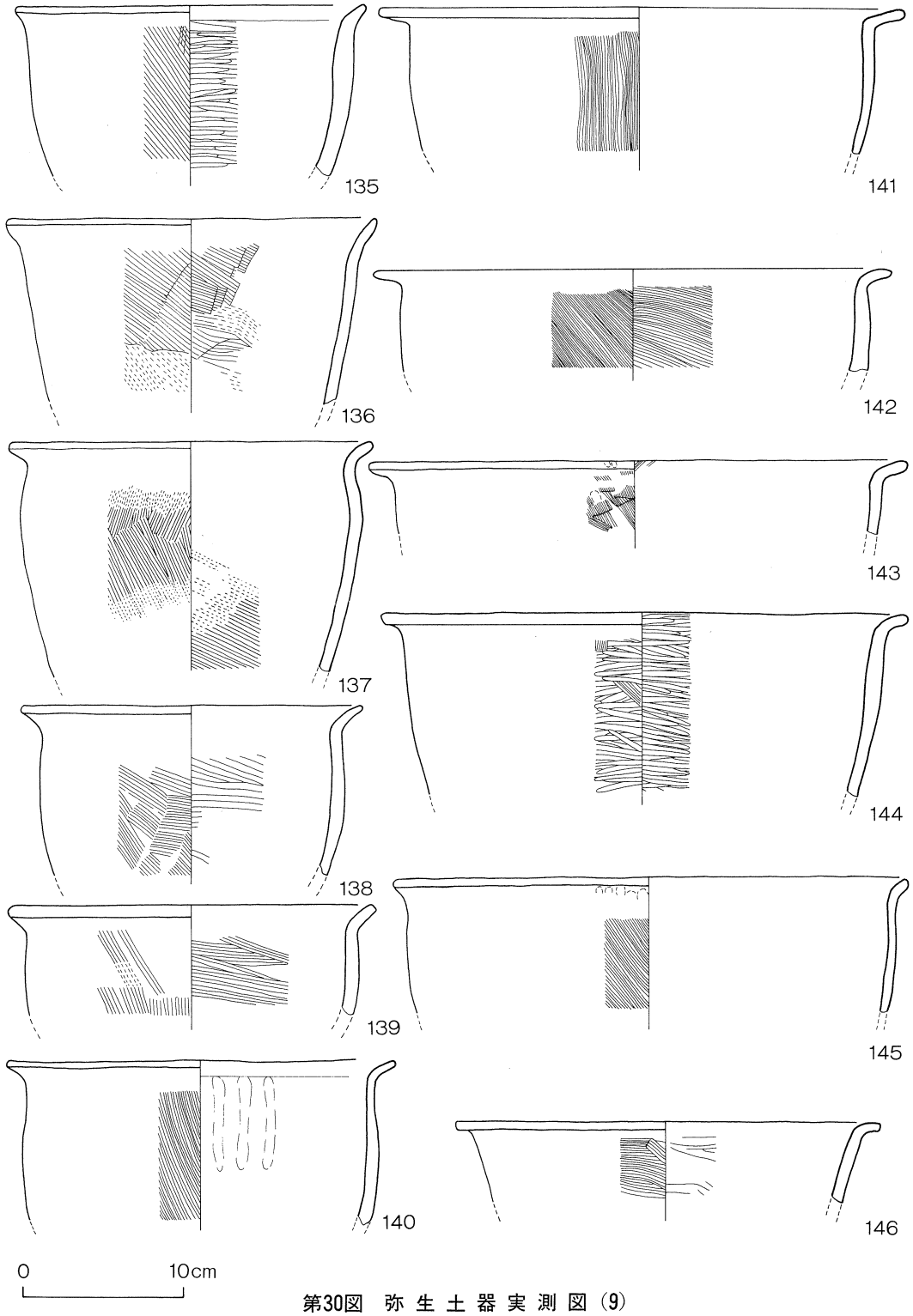
第27図　弥生土器実測図（6）



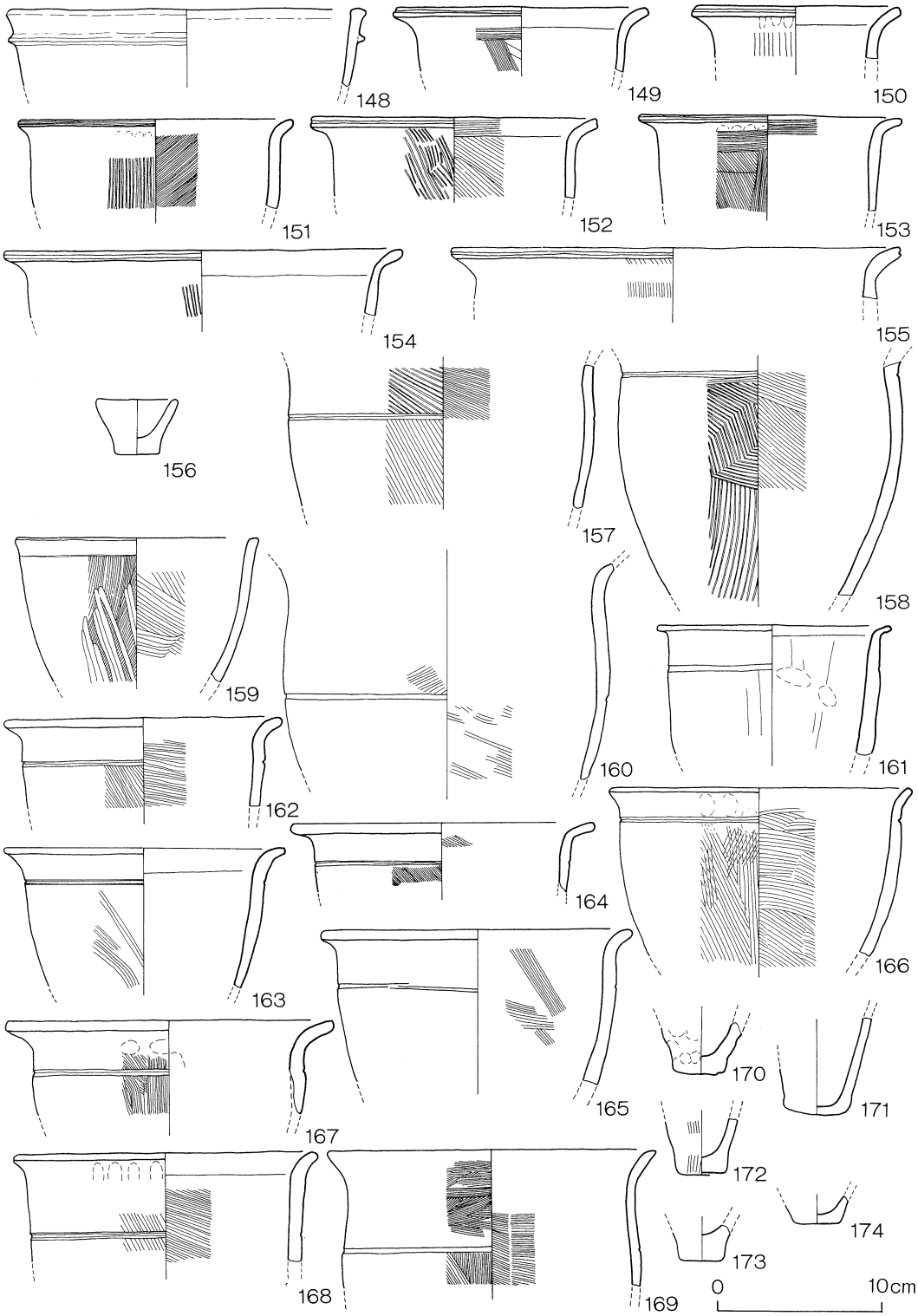
第28図　弥生土器実測図(7)



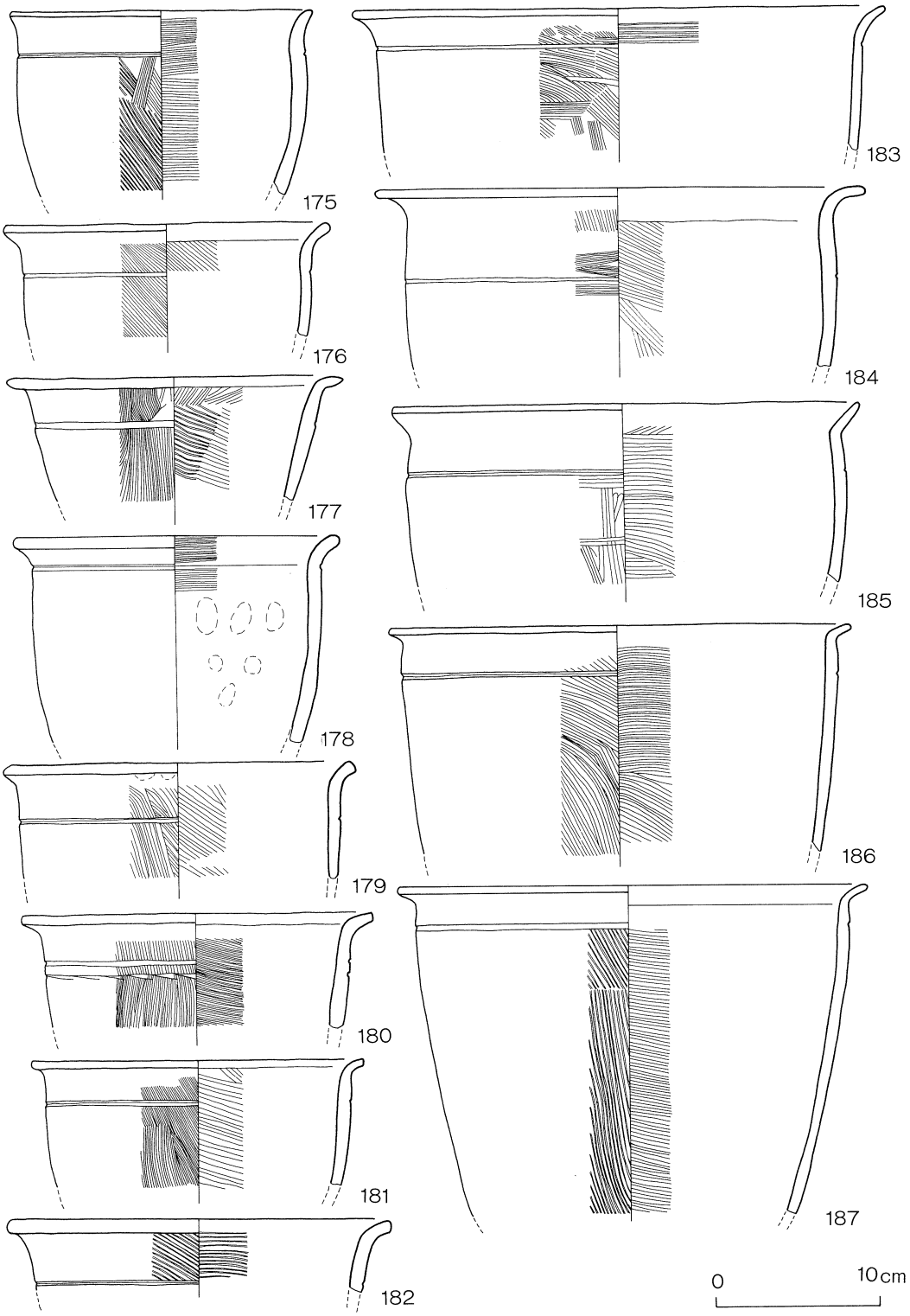
第29図　弥生土器実測図(8)



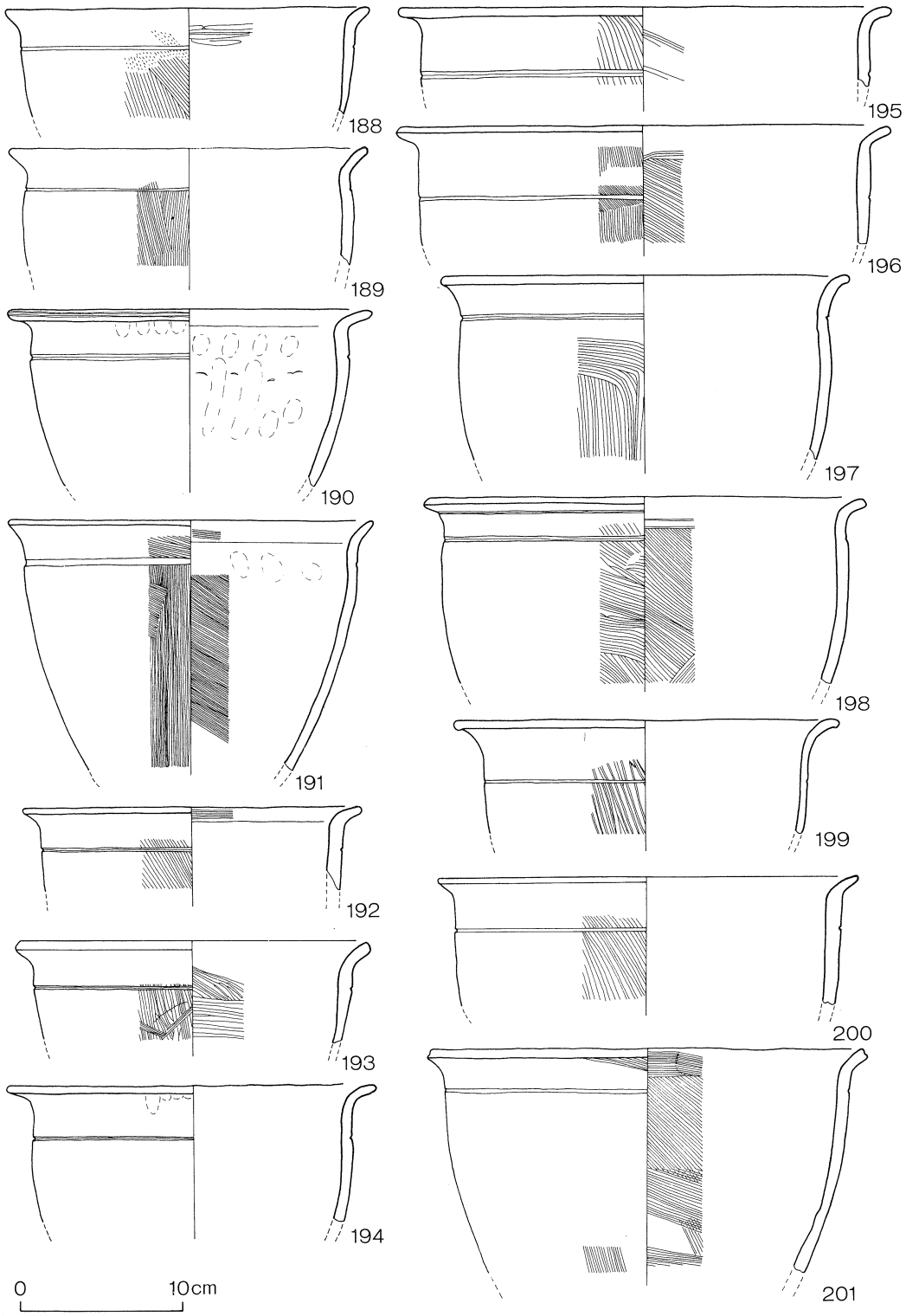
第30図　弥生土器実測図(9)



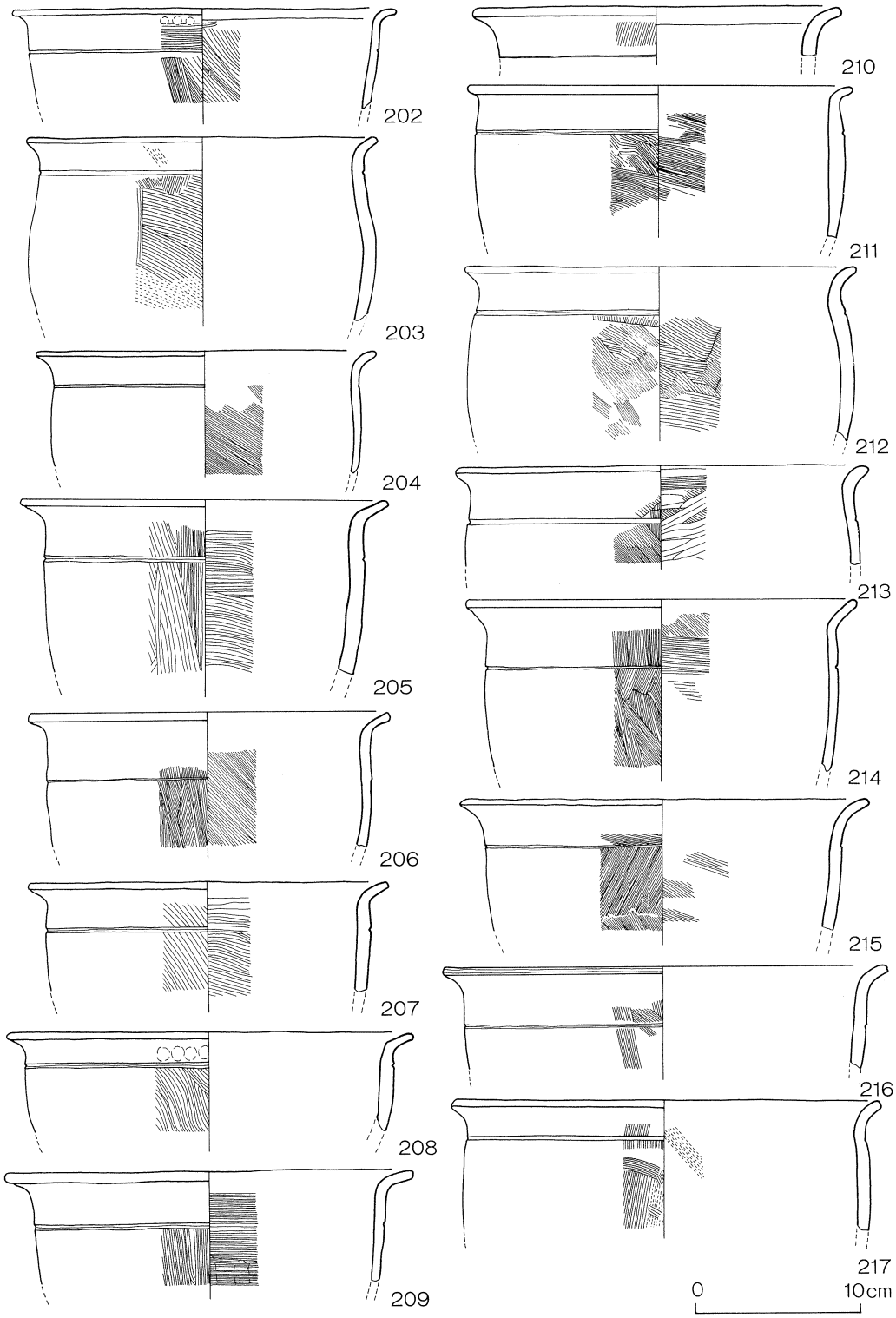
第31図　弥生土器実測図（10）



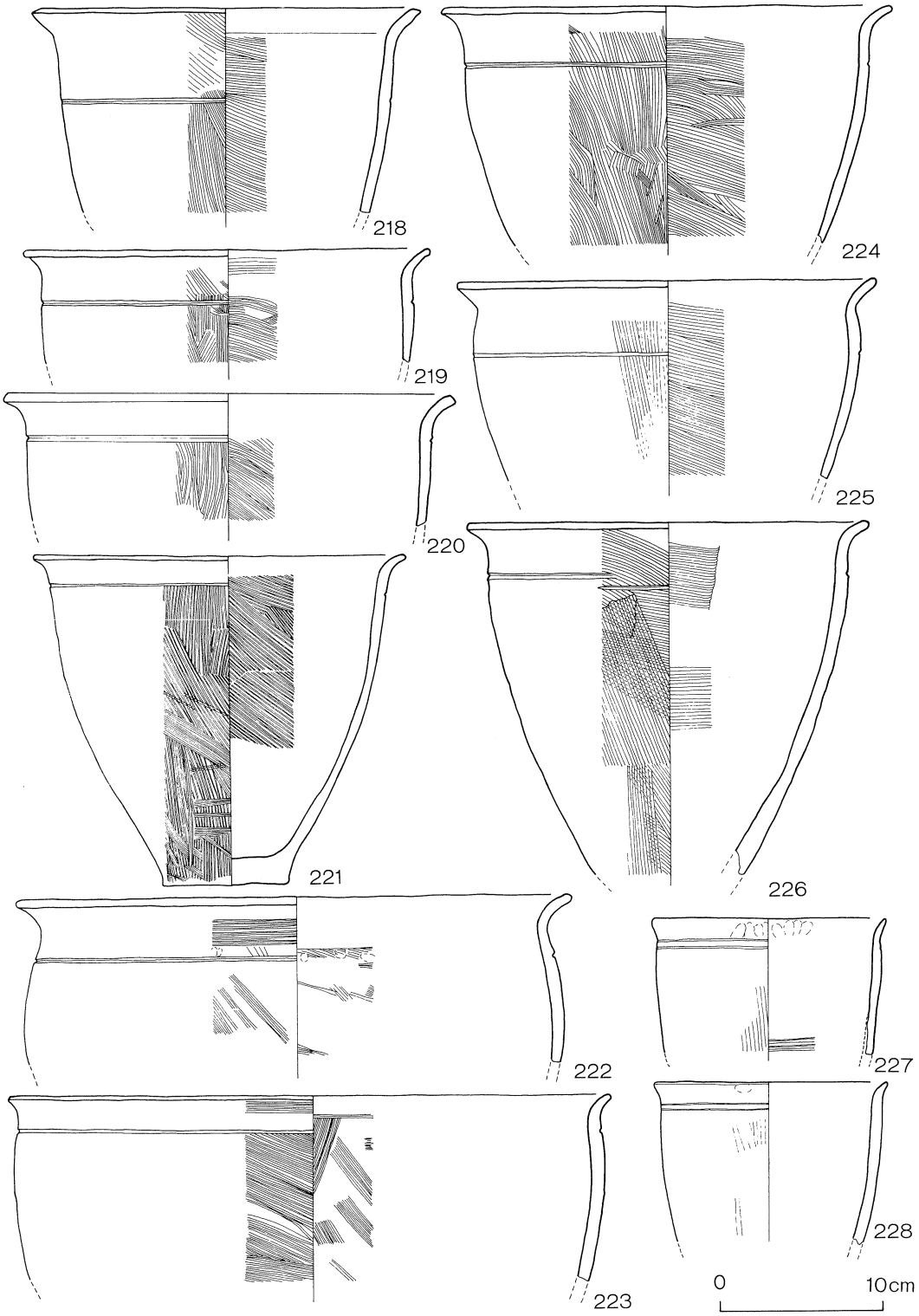
第32図　弥生土器実測図(11)



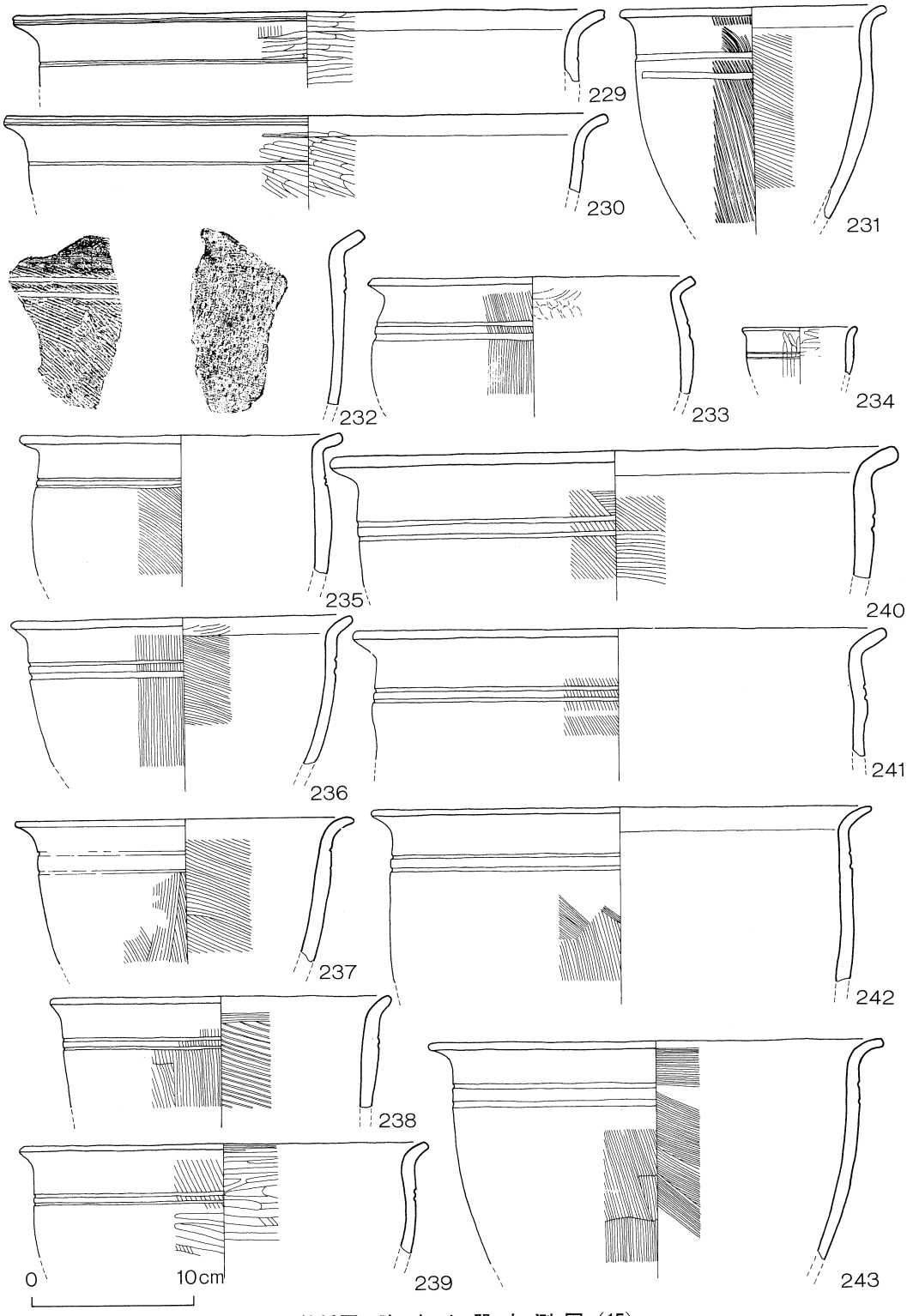
第33図　弥生土器実測図（12）



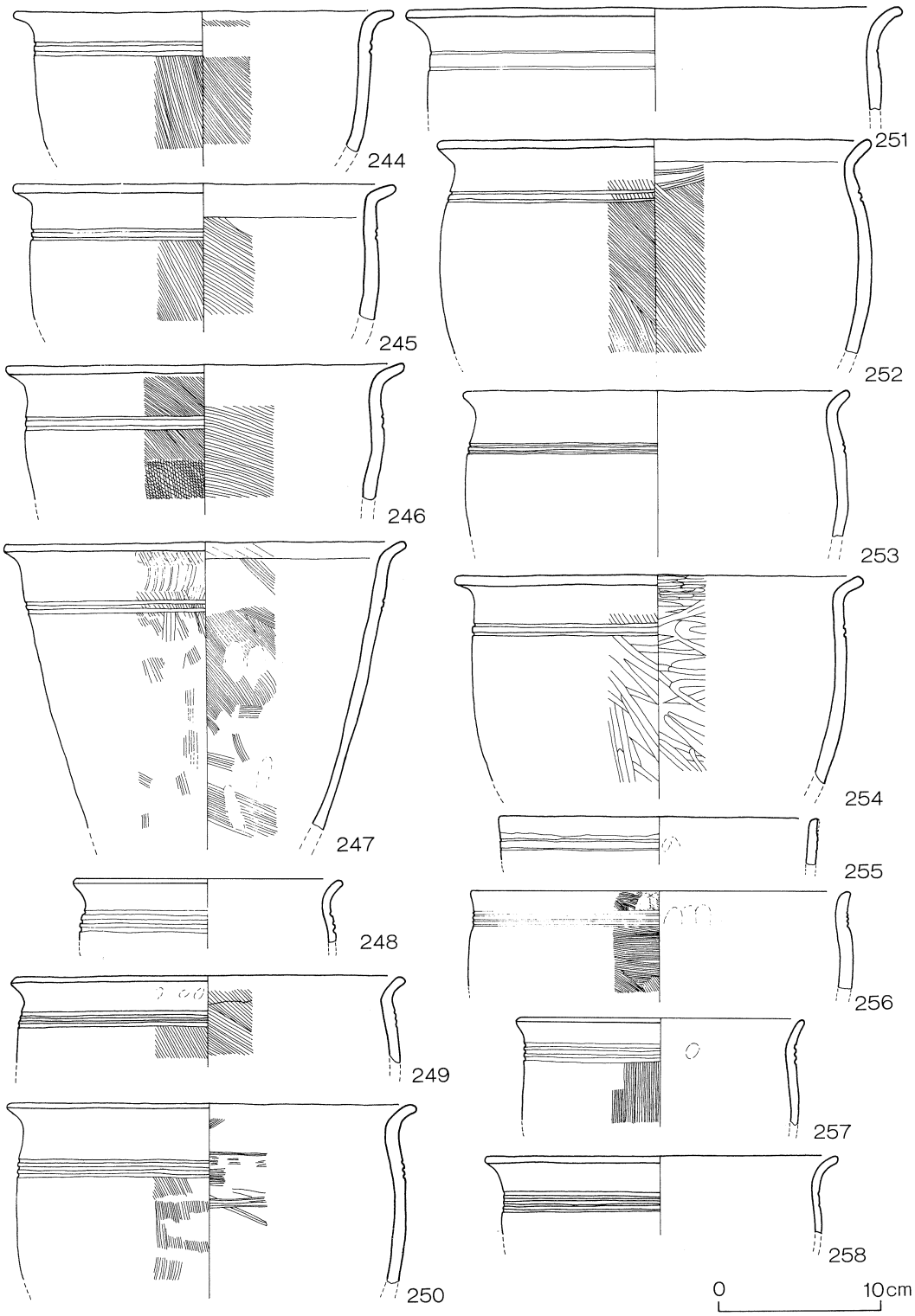
第34図　弥生土器実測図(13)



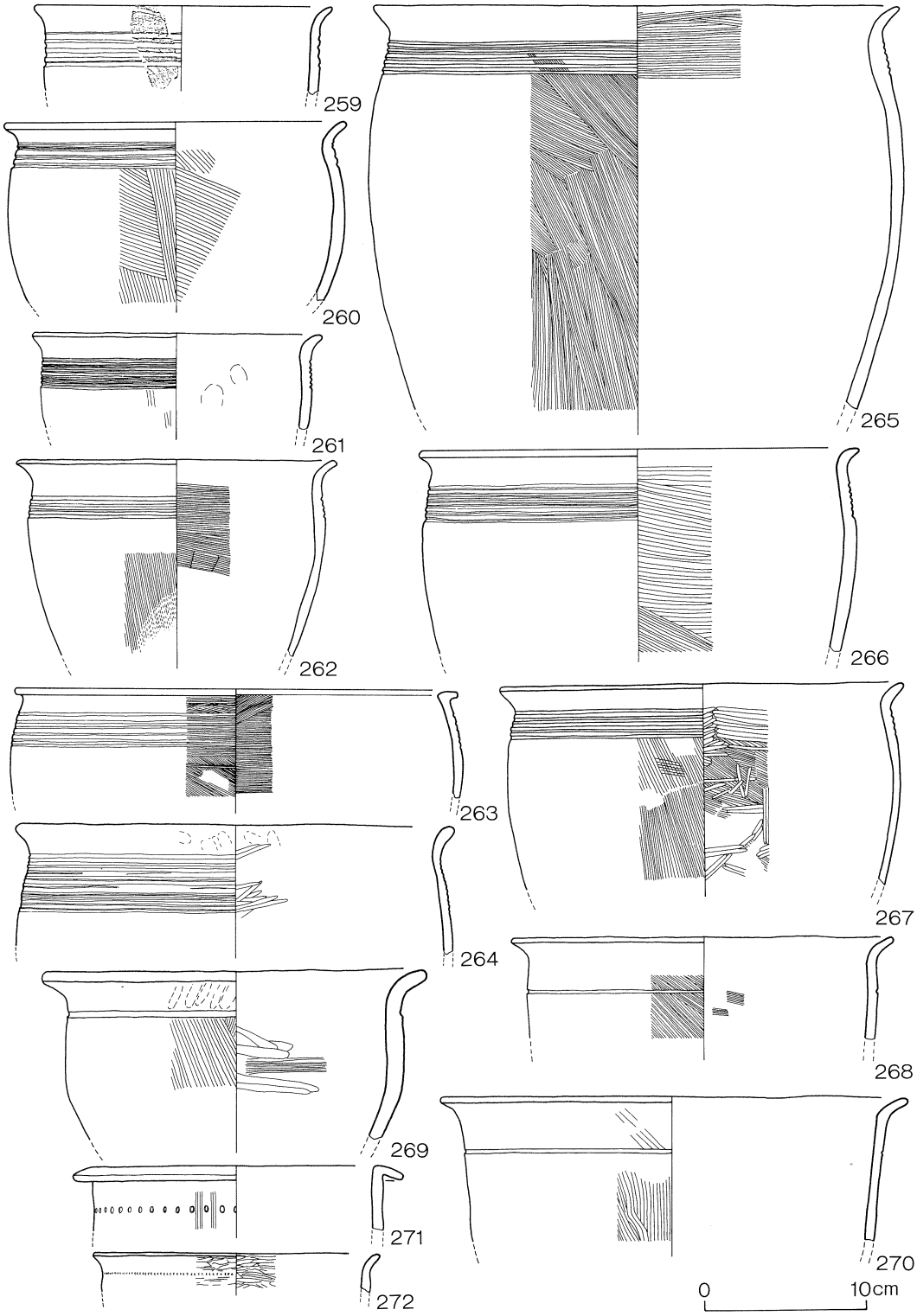
第35図　弥生土器実測図（14）



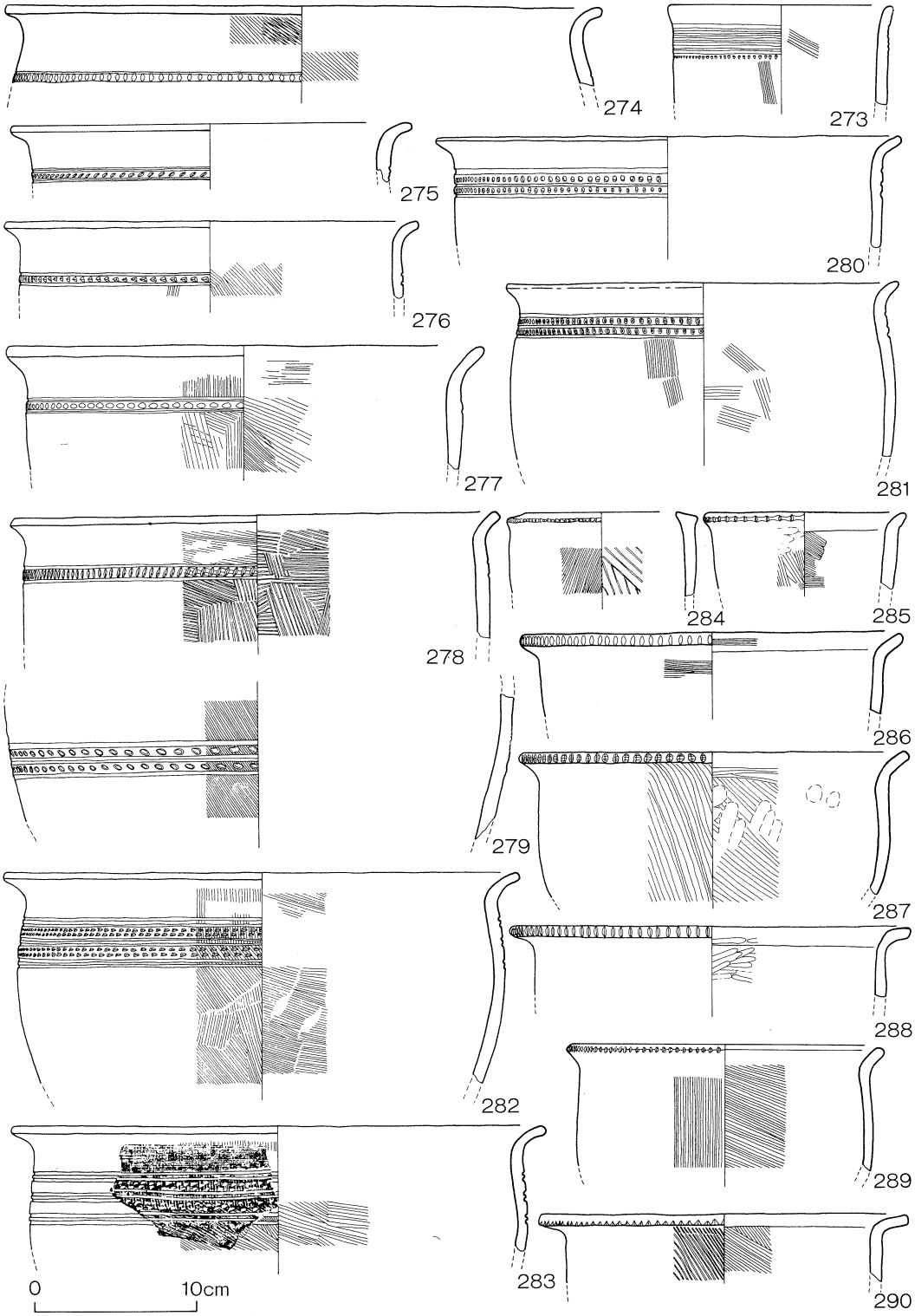
第36図　弥 生 土 器 実 測 図 (15)



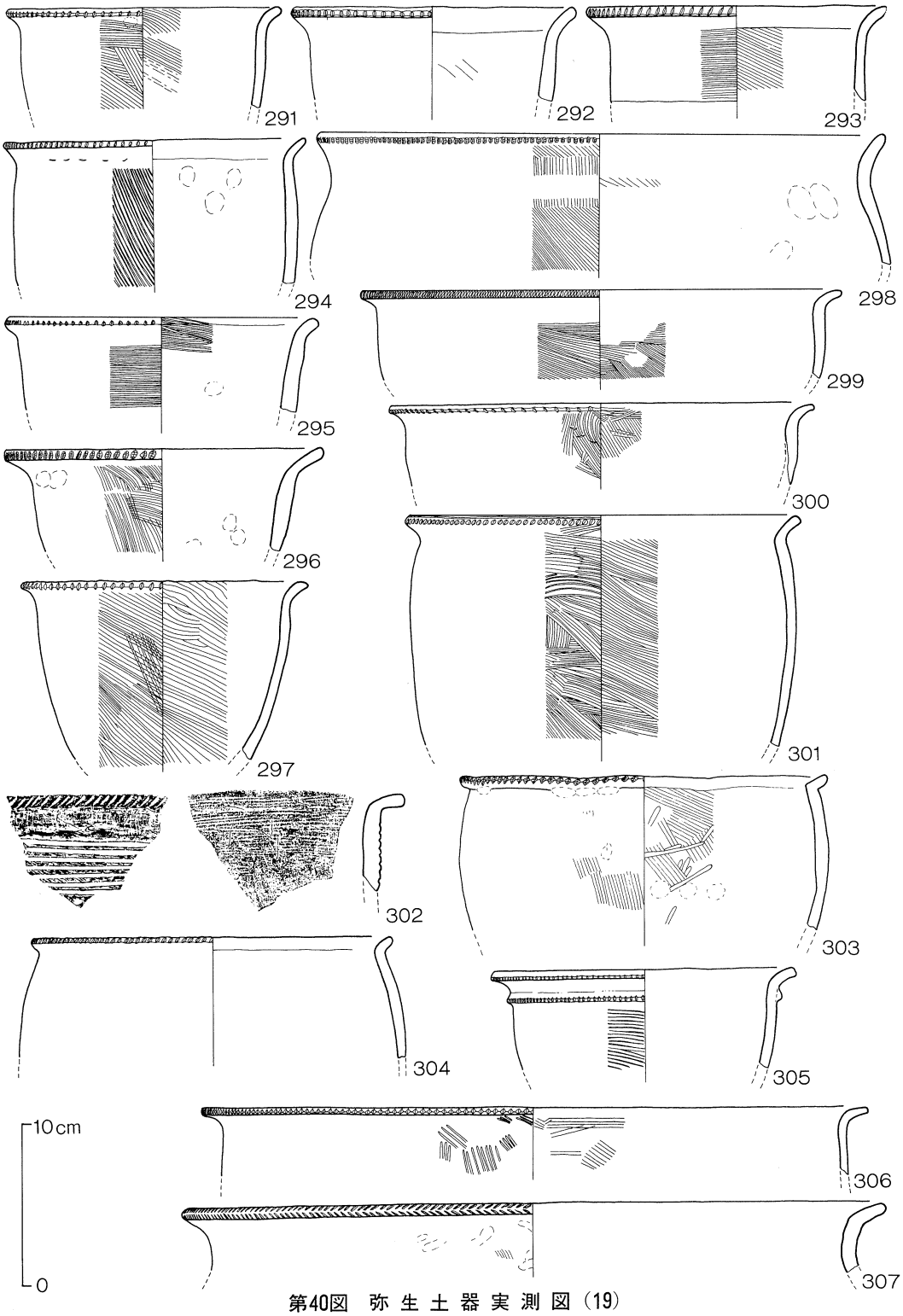
第37図　弥生土器実測図（16）



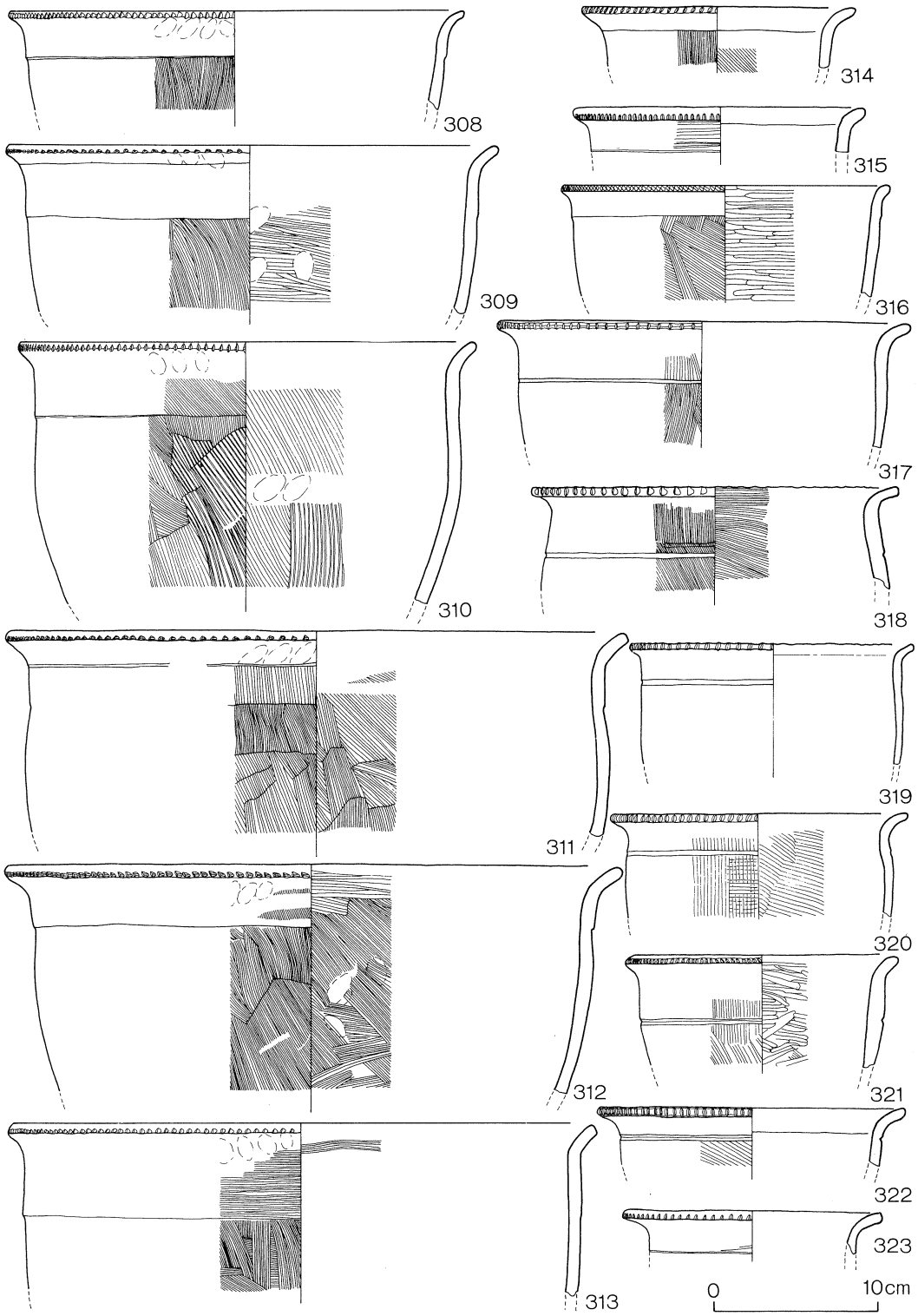
第38図　弥生土器実測図（17）



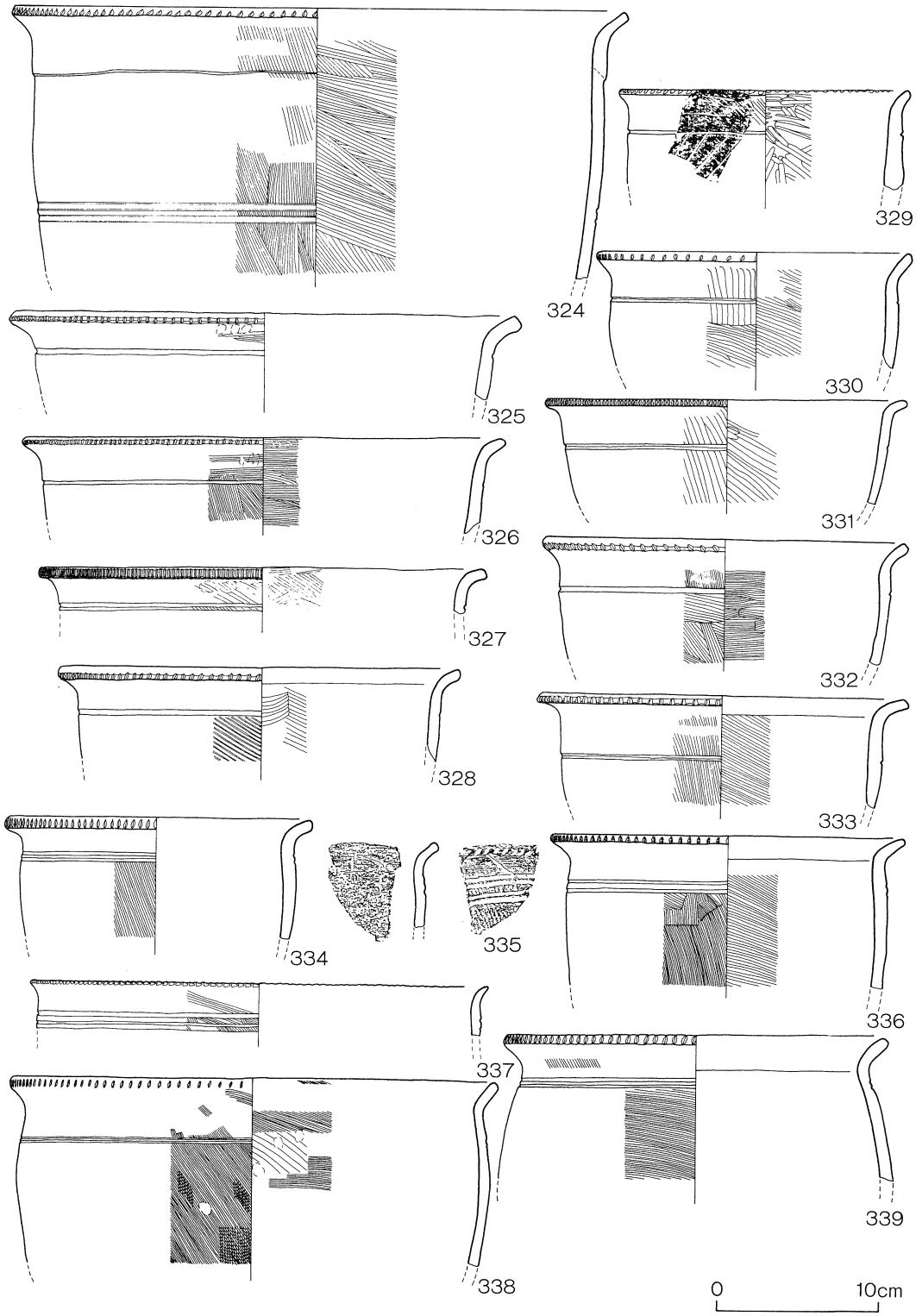
第39図　弥生土器実測図(18)



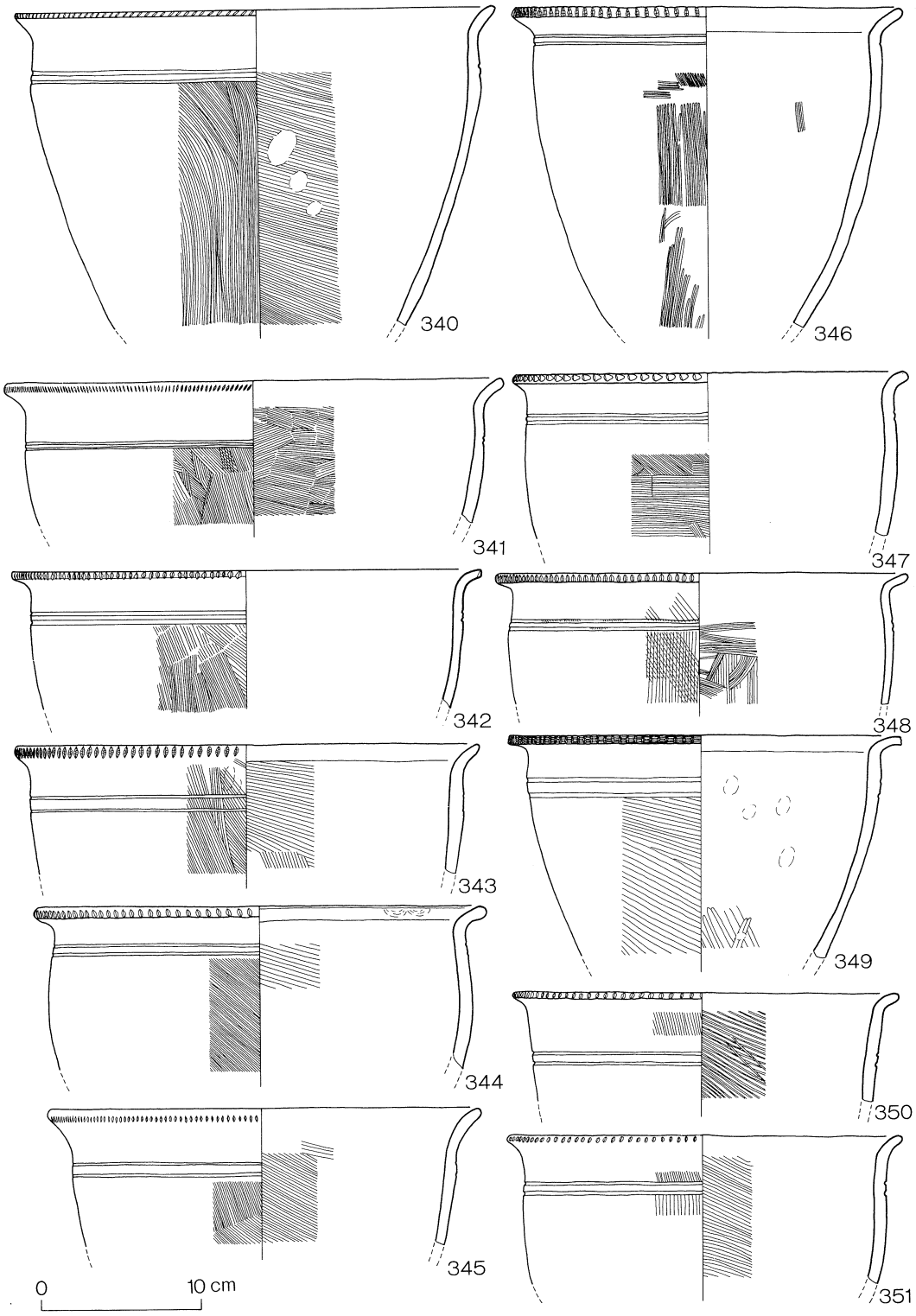
第40図　弥生土器実測図（19）



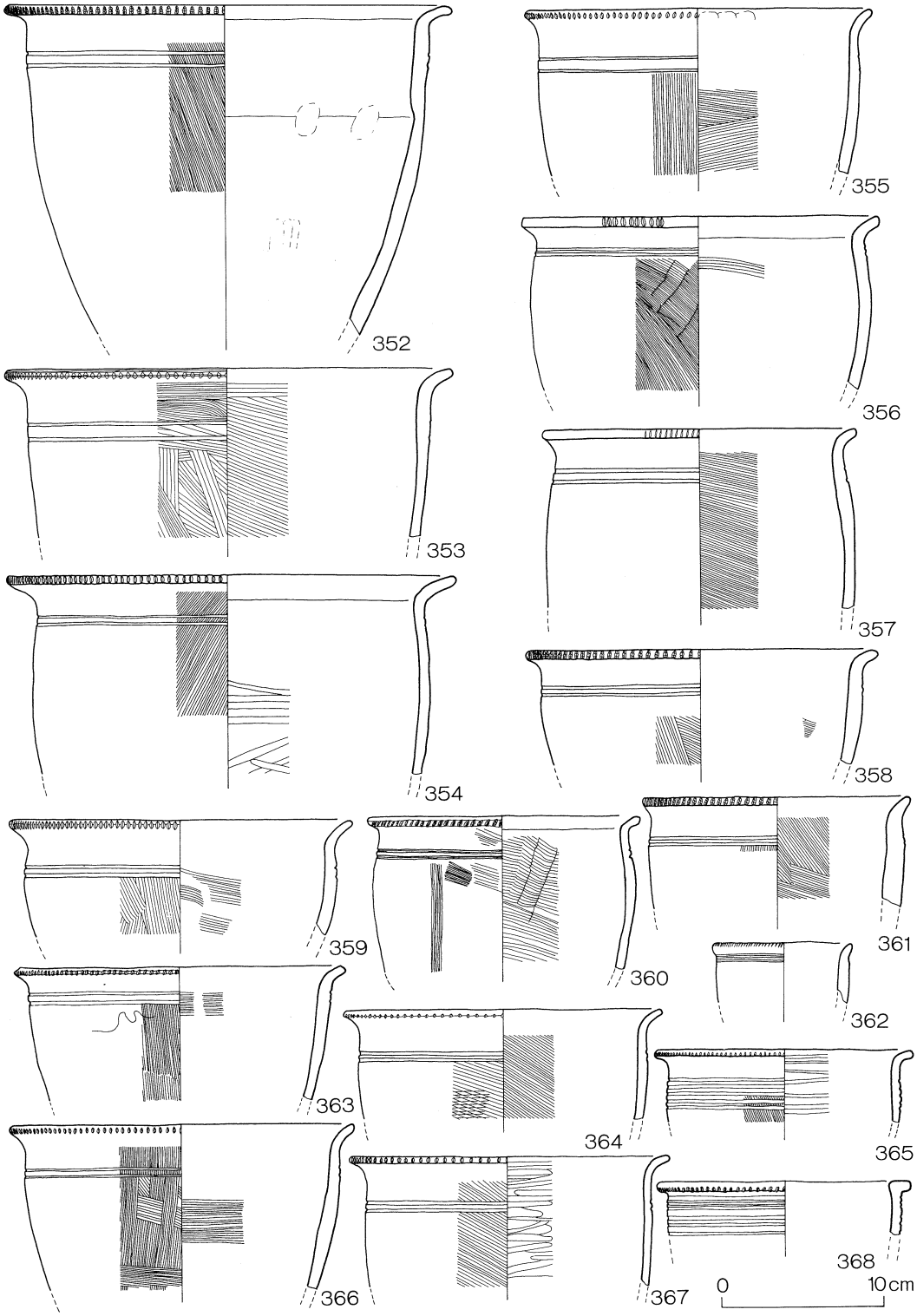
第41図　弥生土器実測図(20)



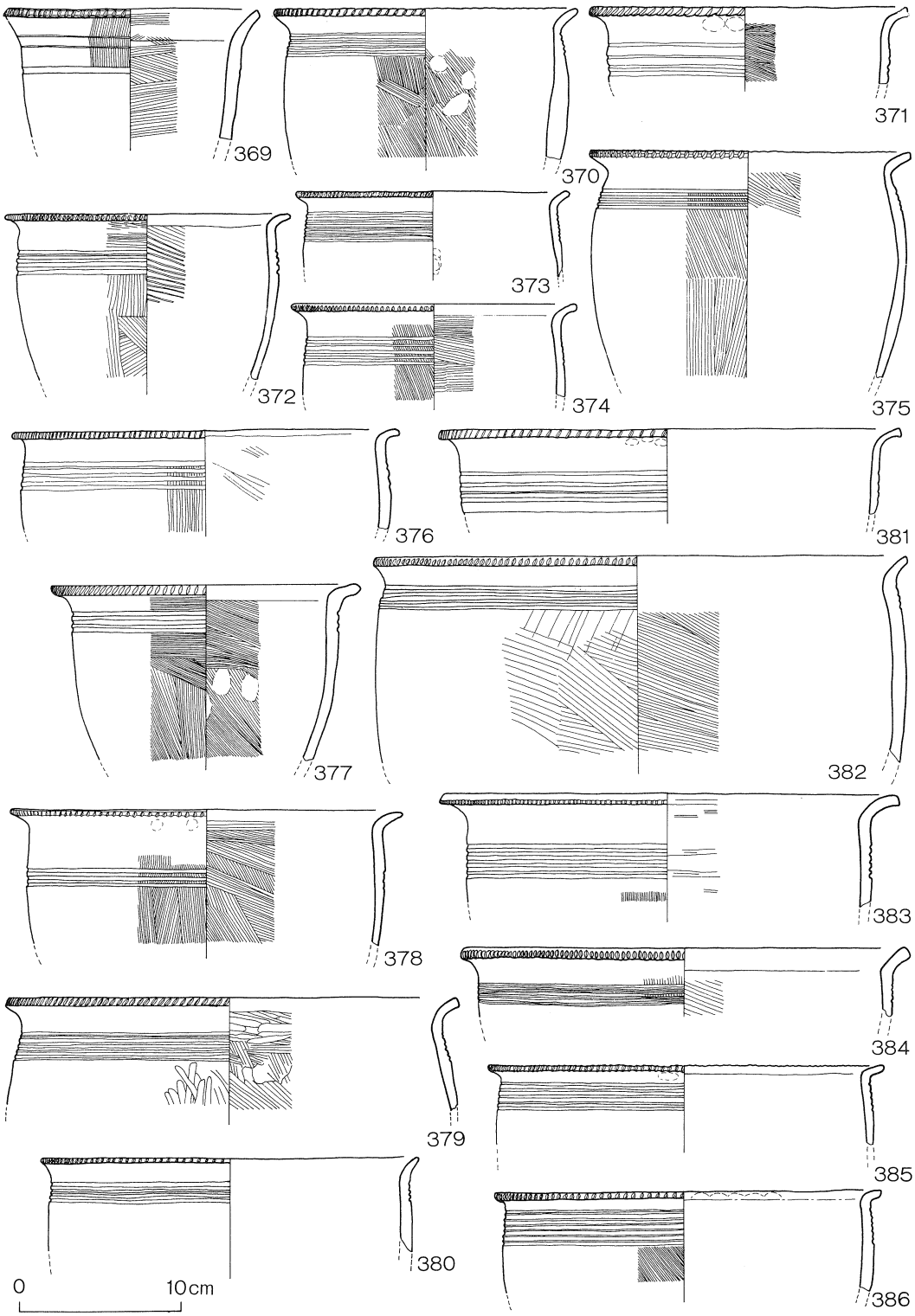
第42図　弥生土器実測図（21）



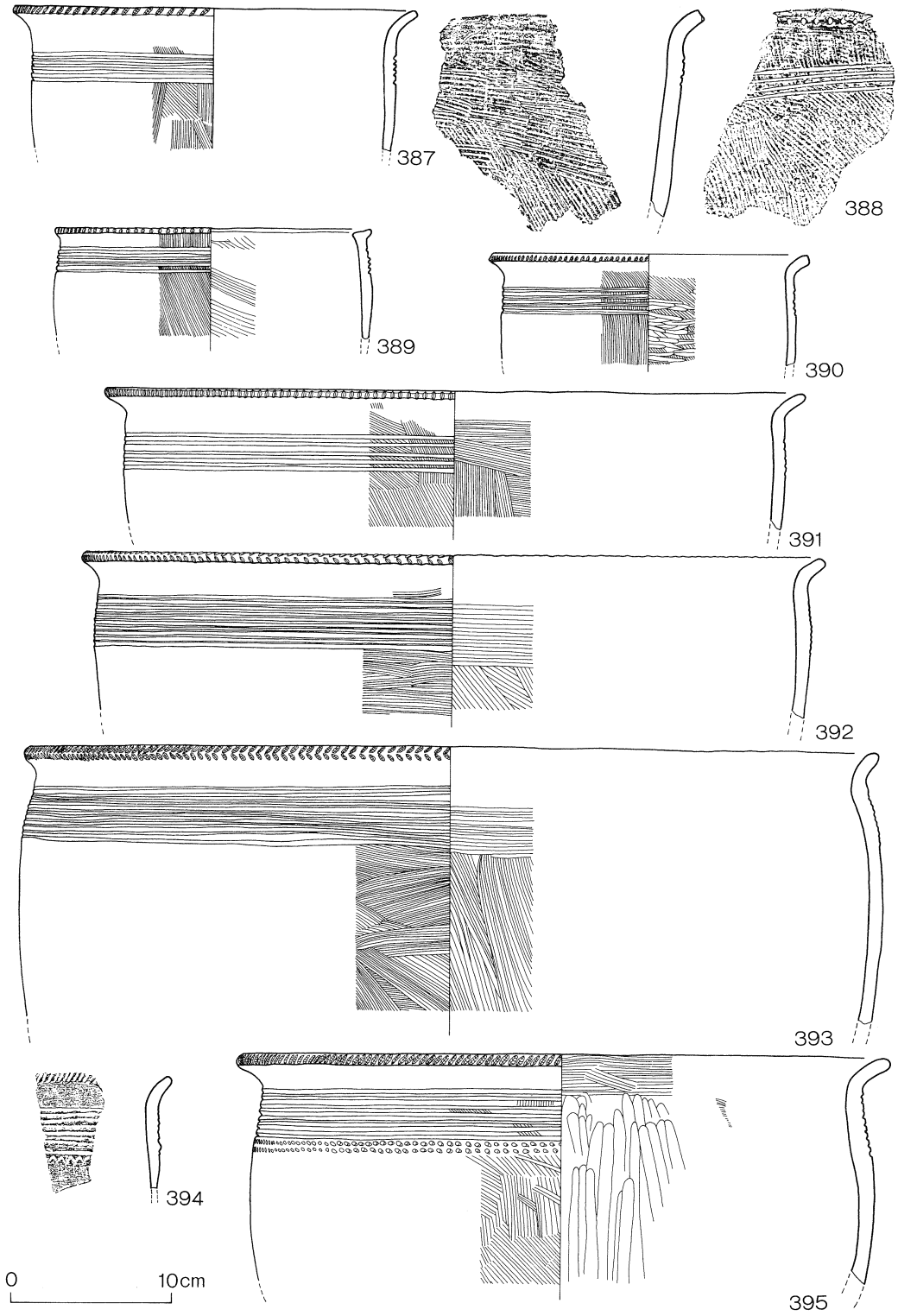
第43図　弥生土器実測図(22)



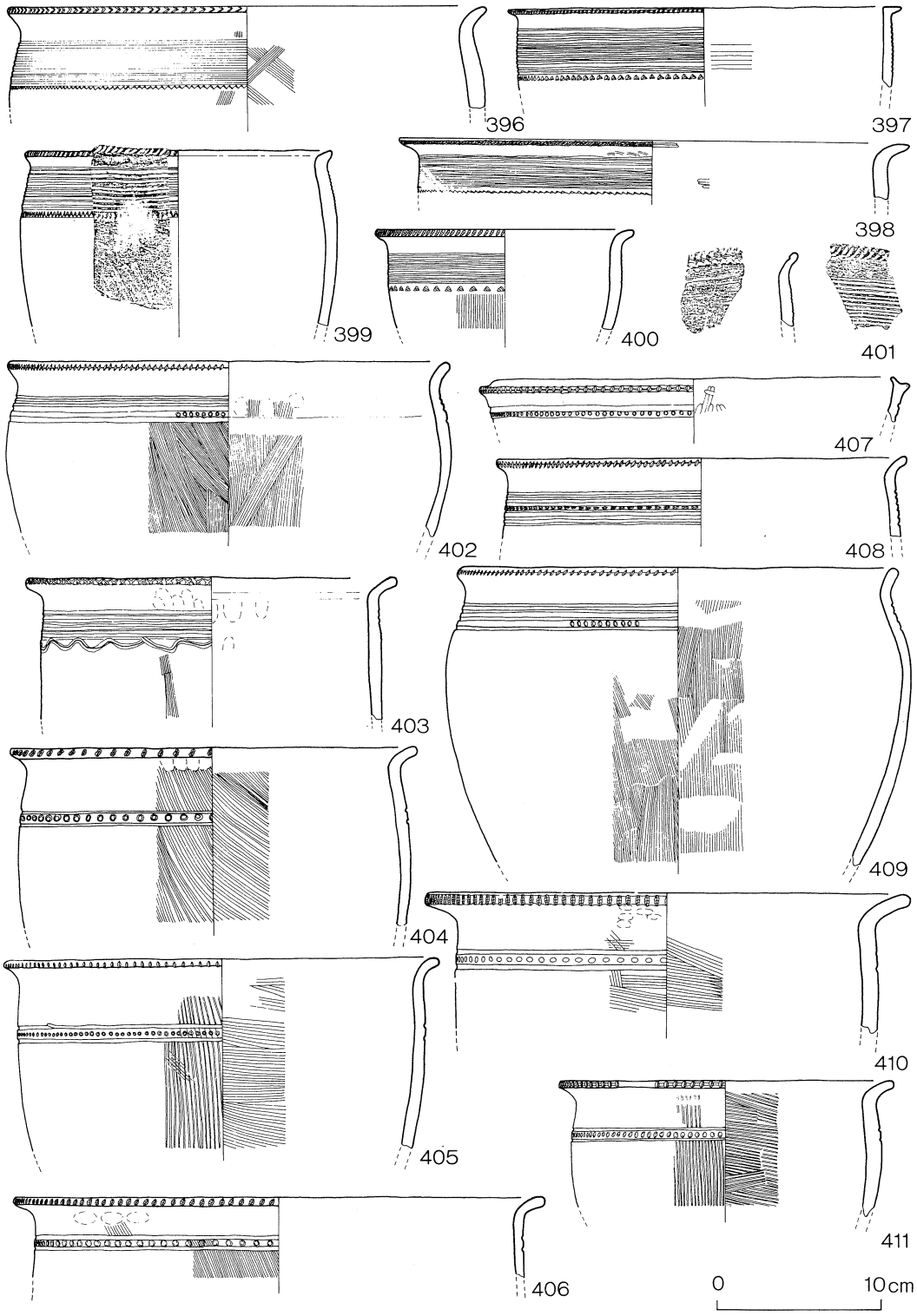
第44図　弥生土器実測図(23)



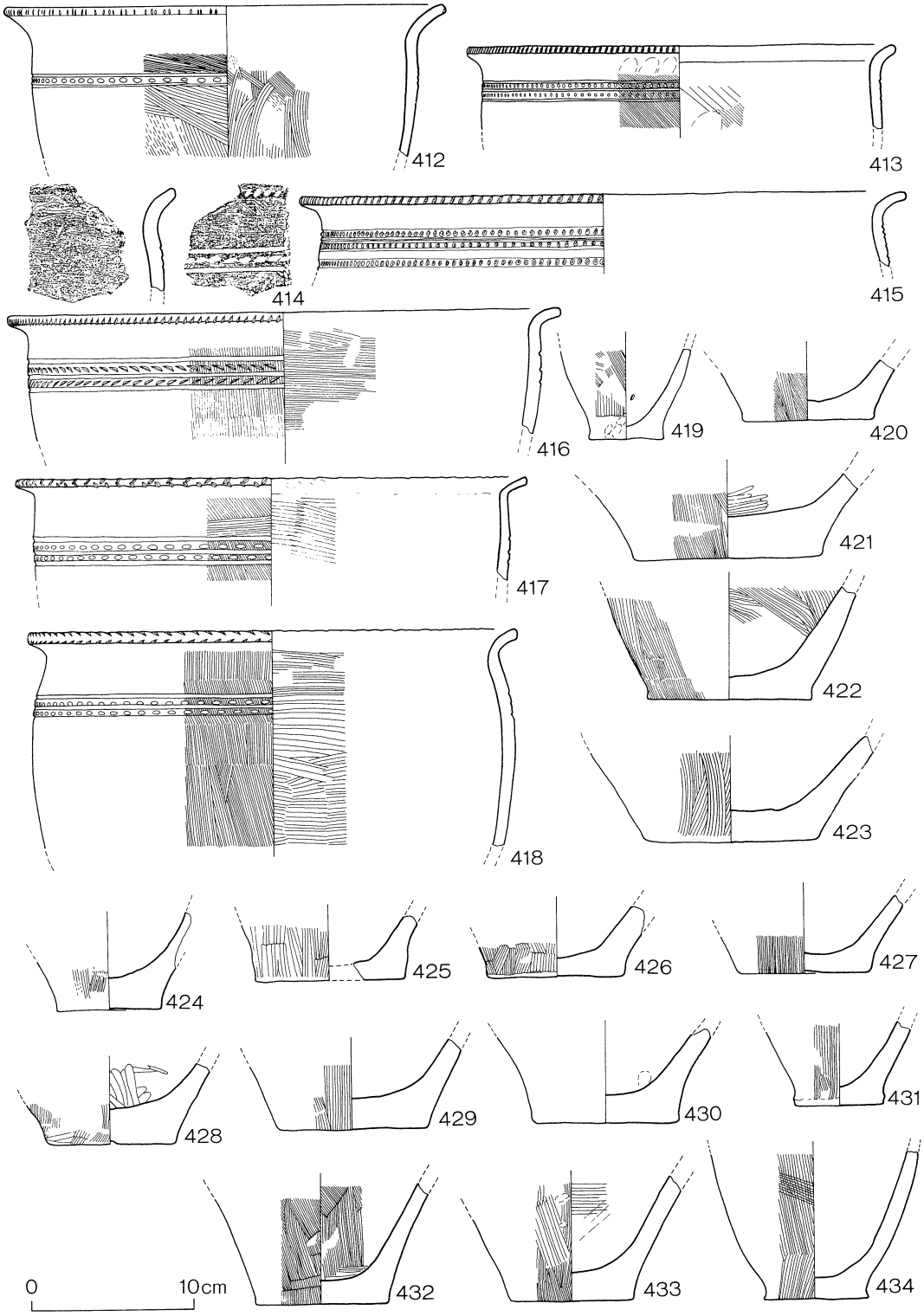
第45図　弥生土器実測図(24)



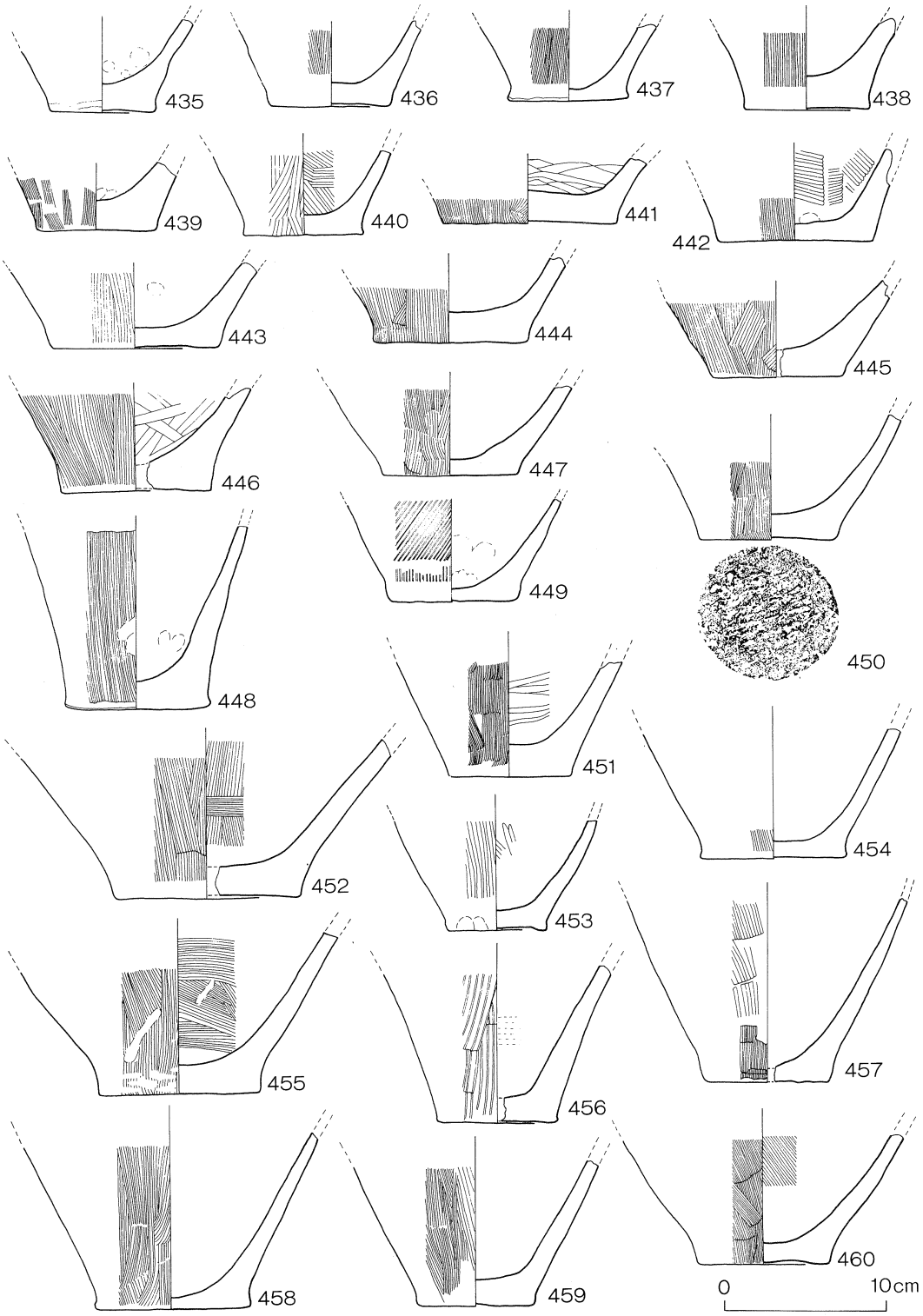
第46図　弥生土器実測図（25）



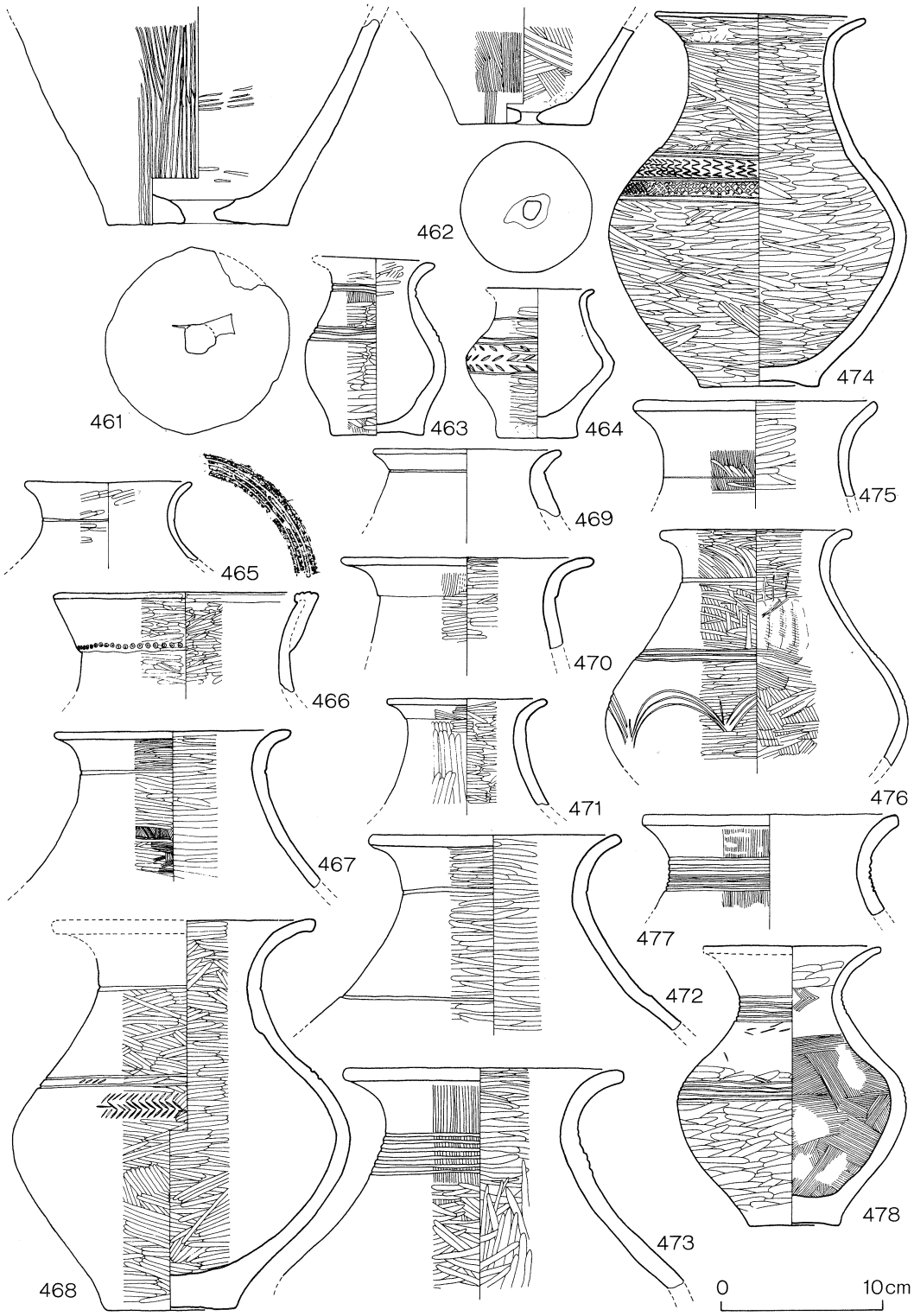
第47図　弥生土器実測図(26)



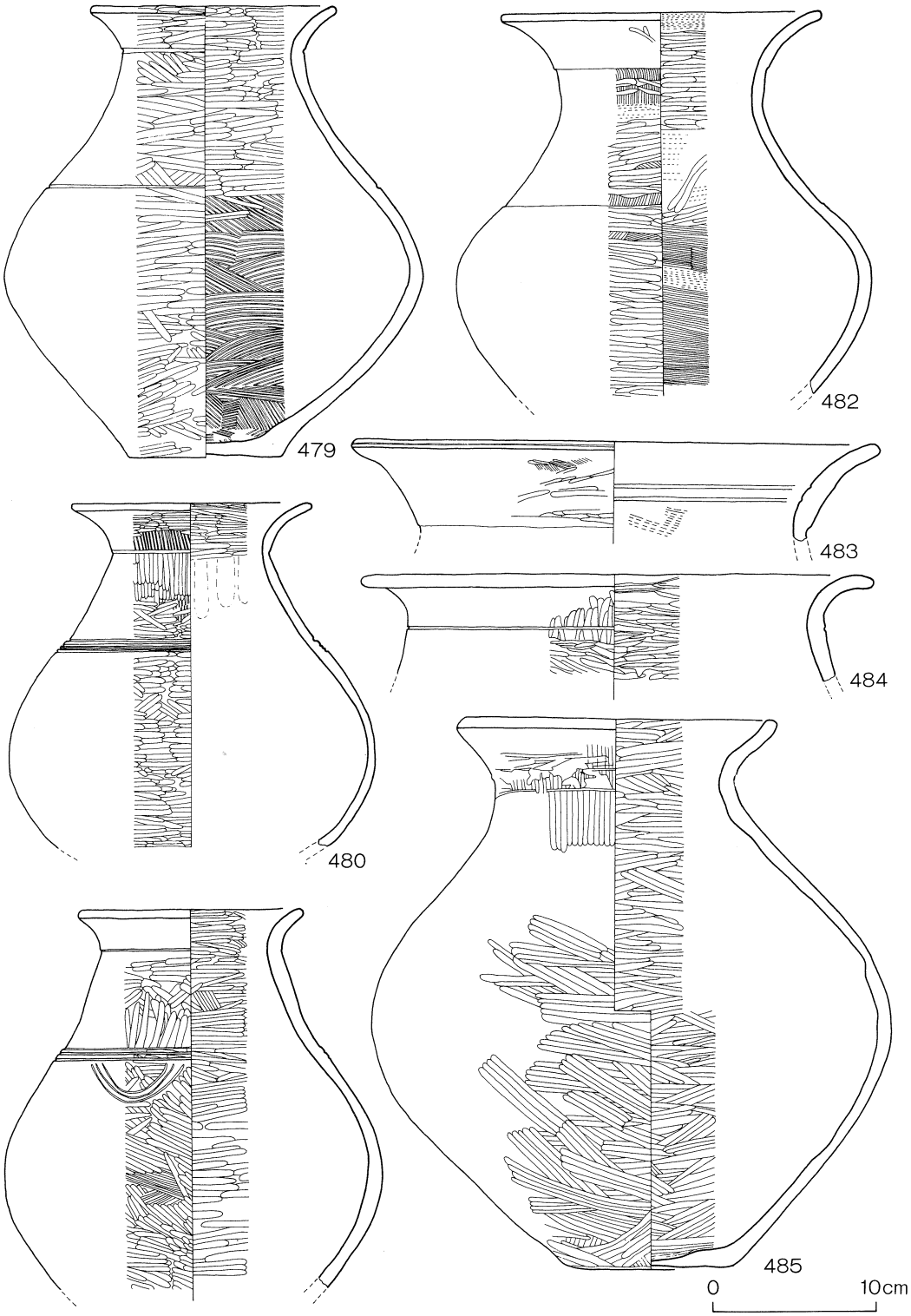
第48図　弥生土器実測図(27)



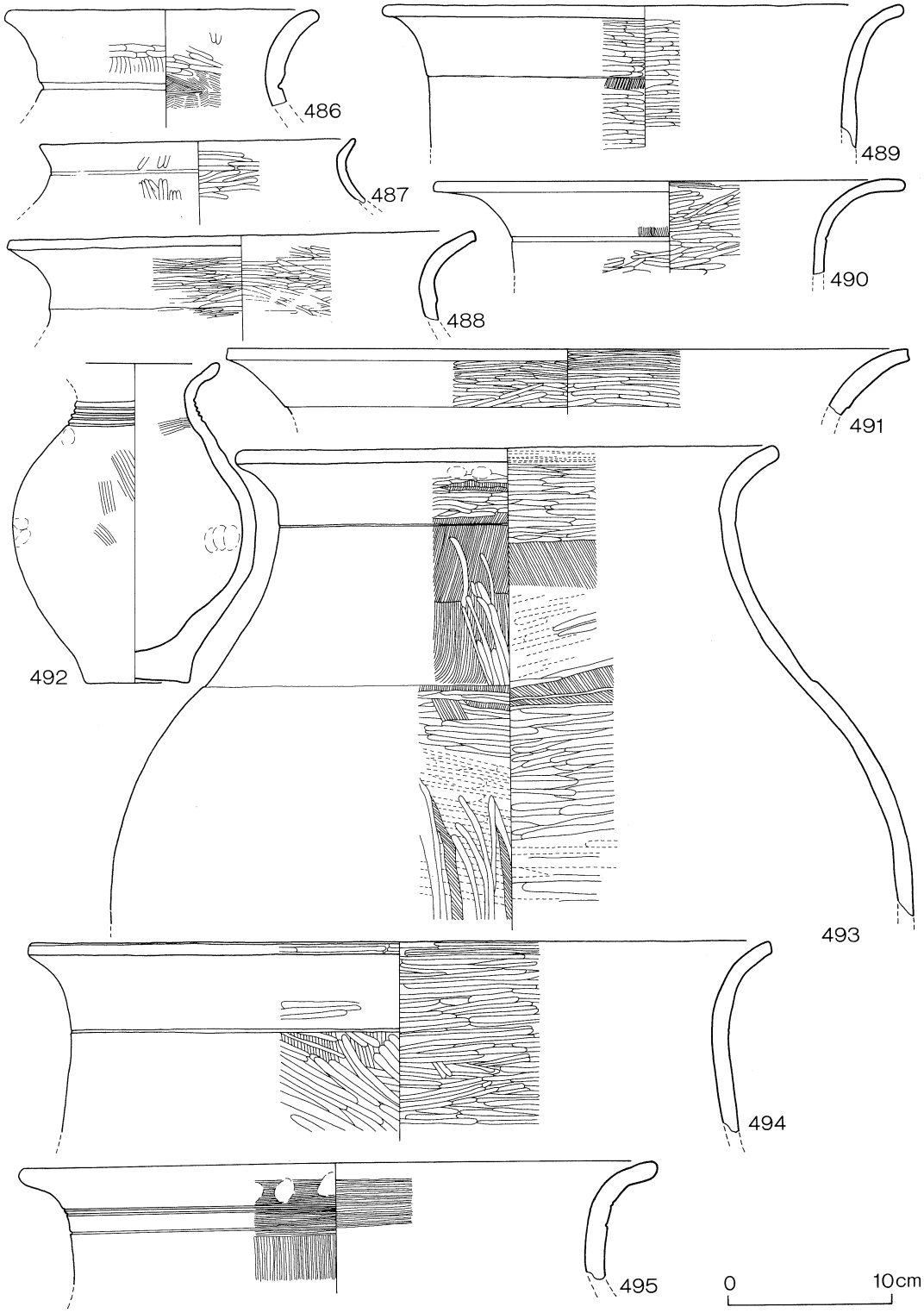
第49図　弥生土器実測図(28)



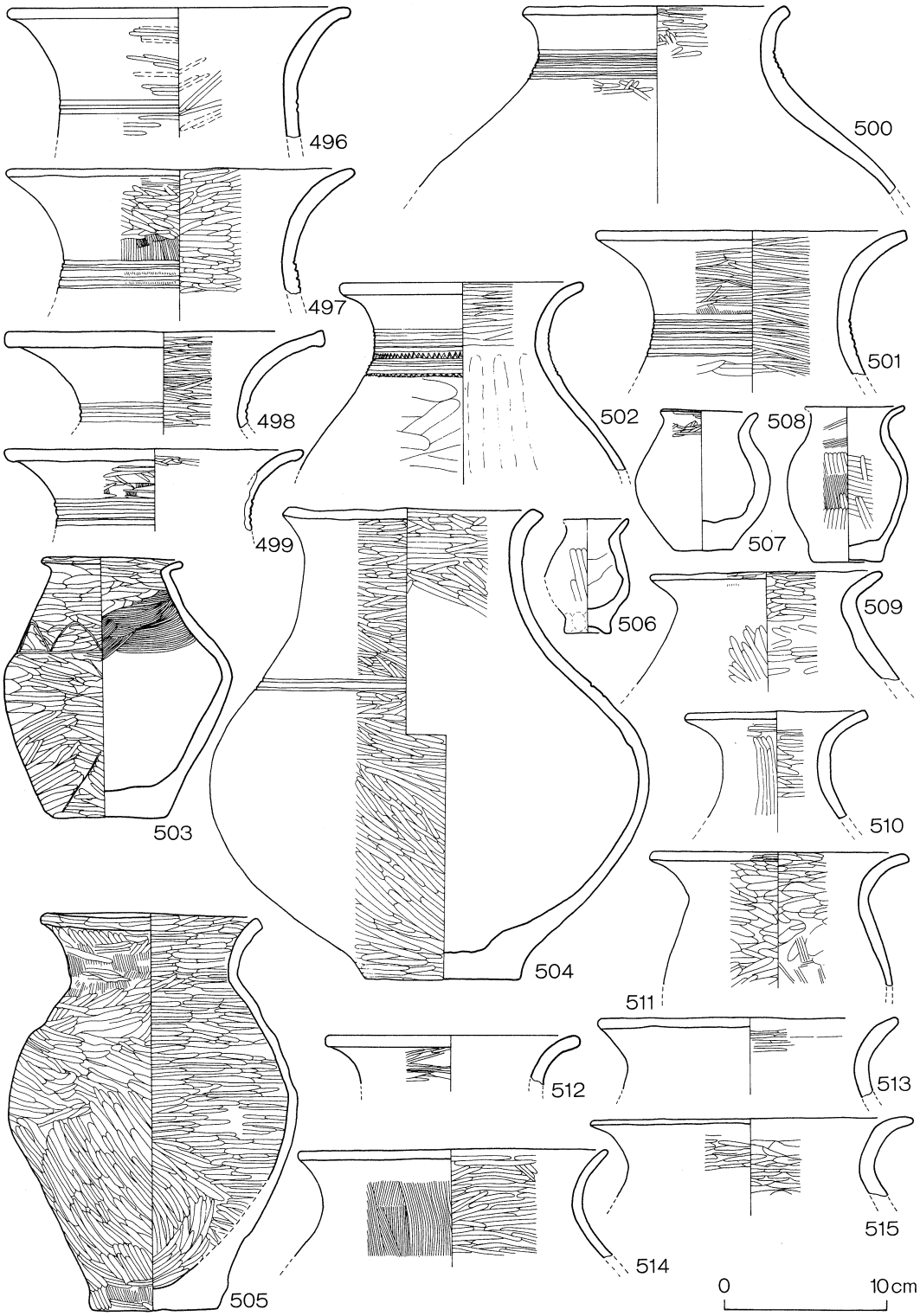
第50図　弥生土器実測図（29）



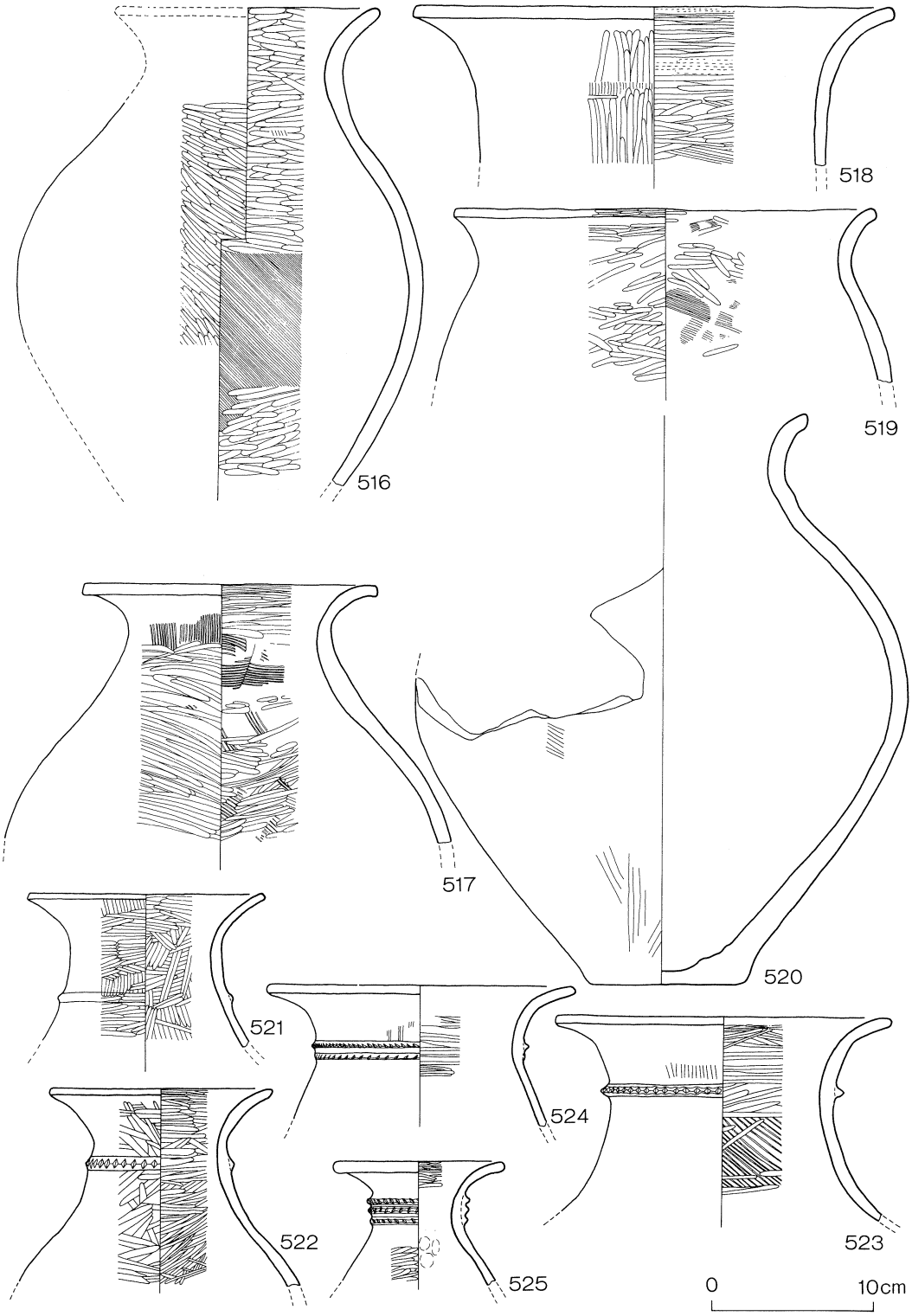
第51図　弥生土器実測図（30）



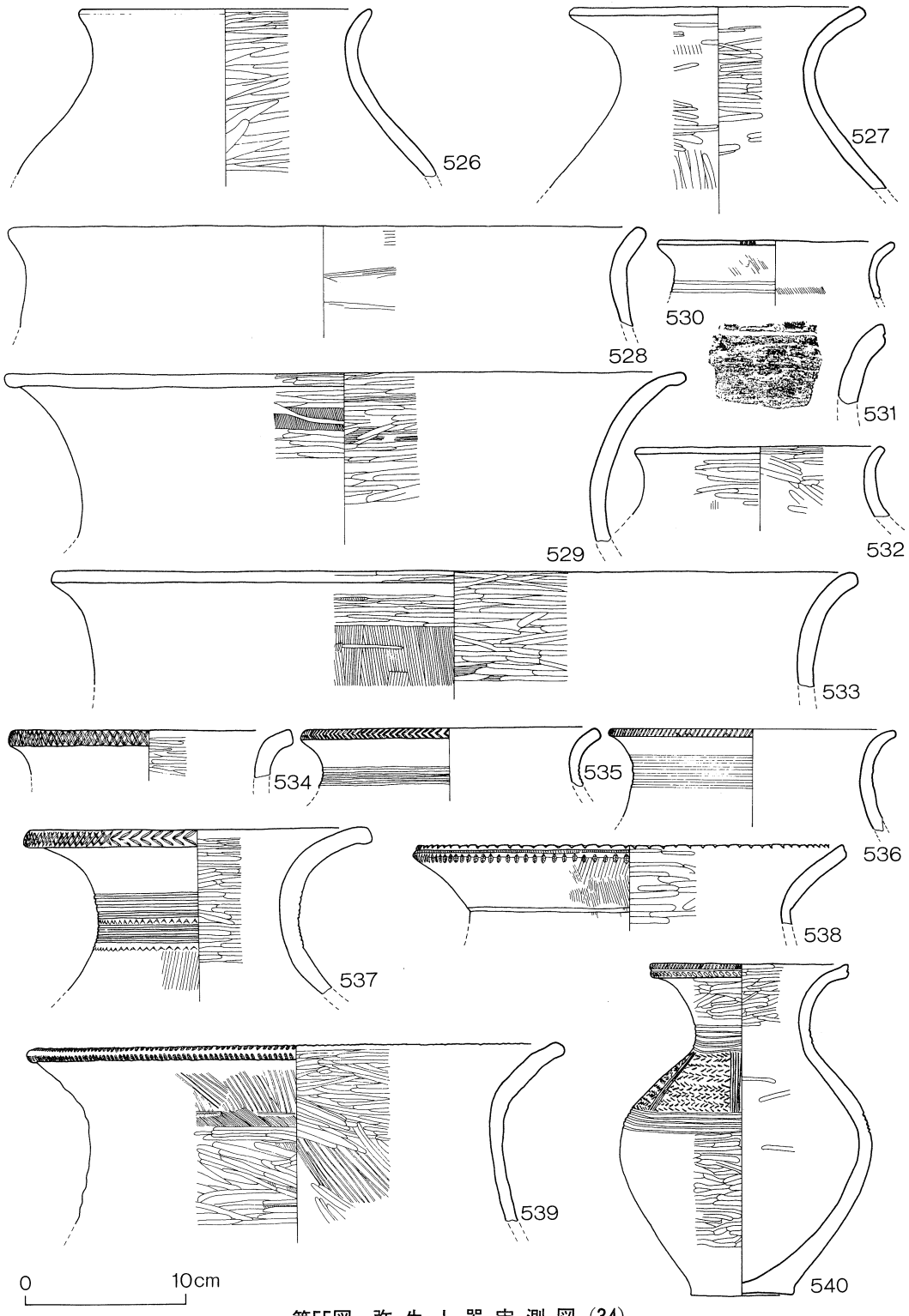
第52図　弥生土器実測図(31)



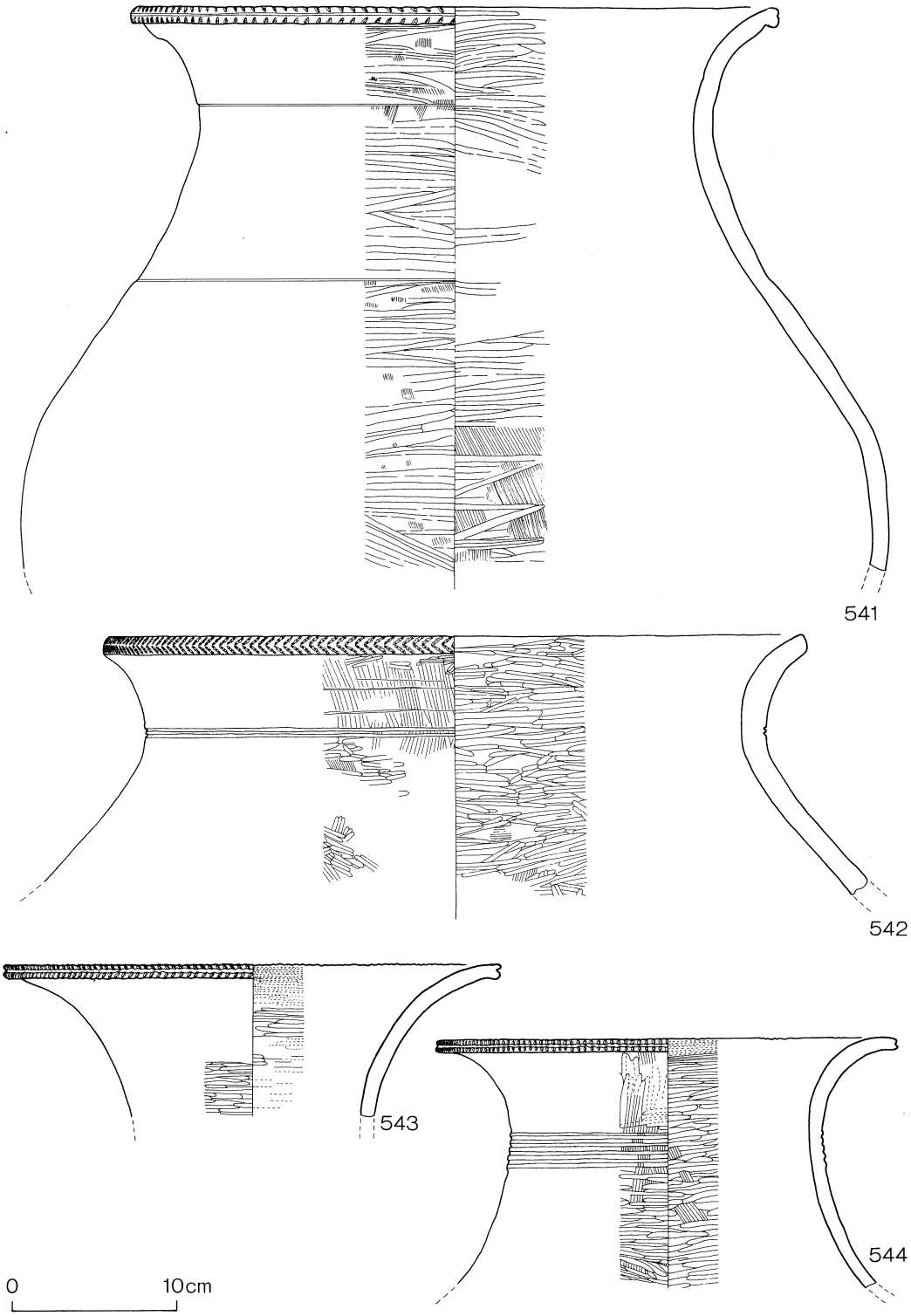
第53図　弥生土器実測図(32)



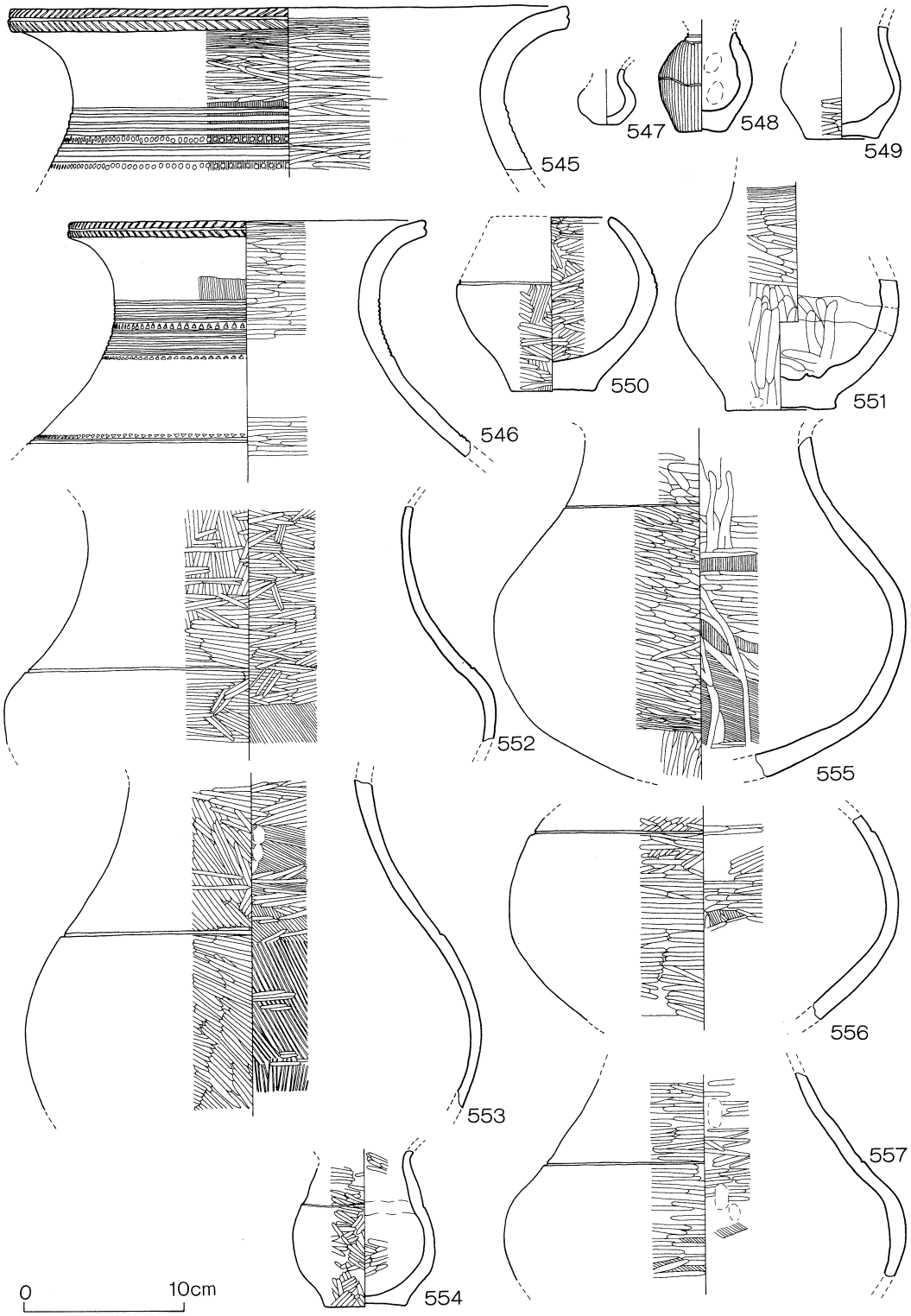
第54図　弥生土器実測図(33)



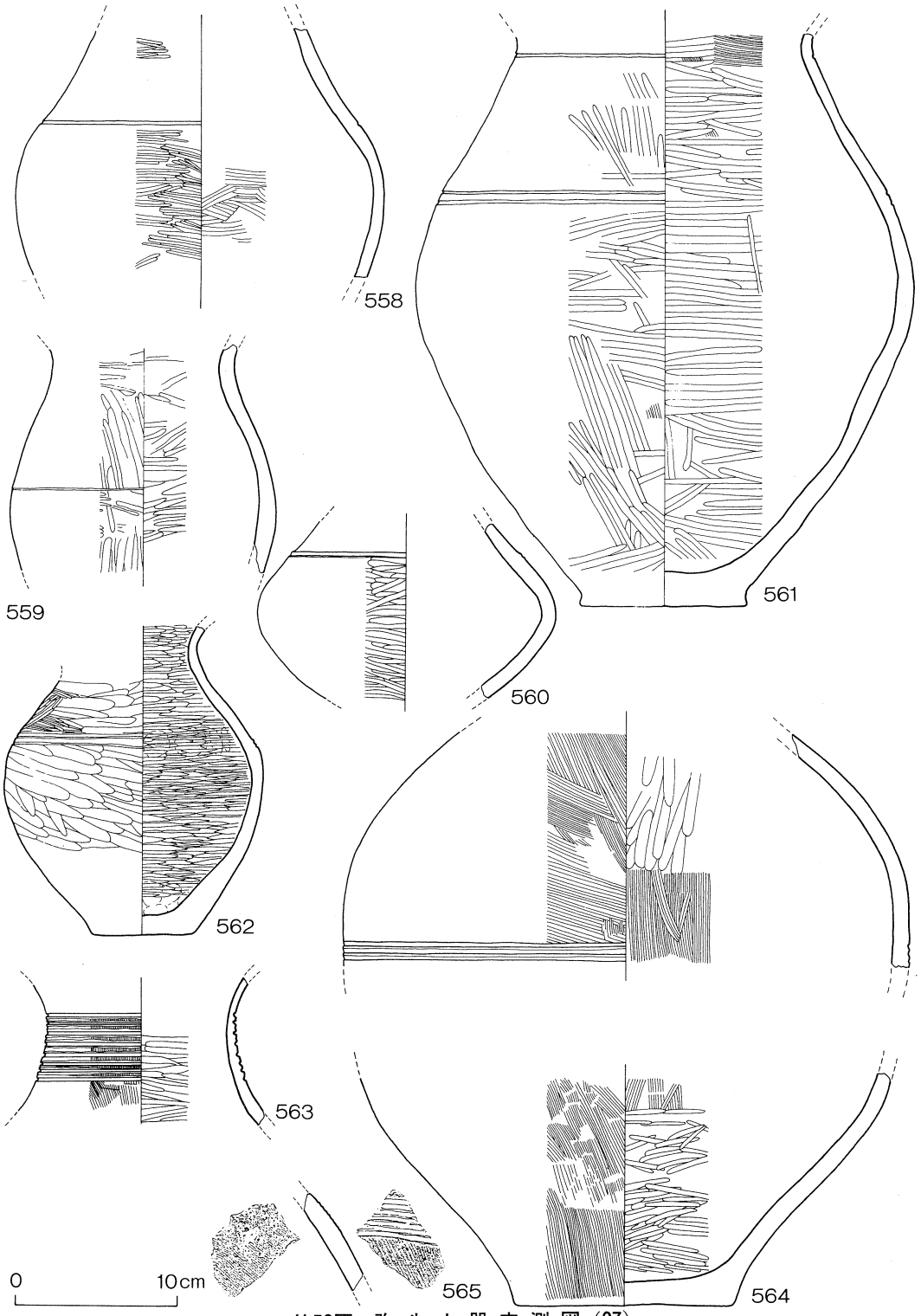
第55図　弥生土器実測図(34)



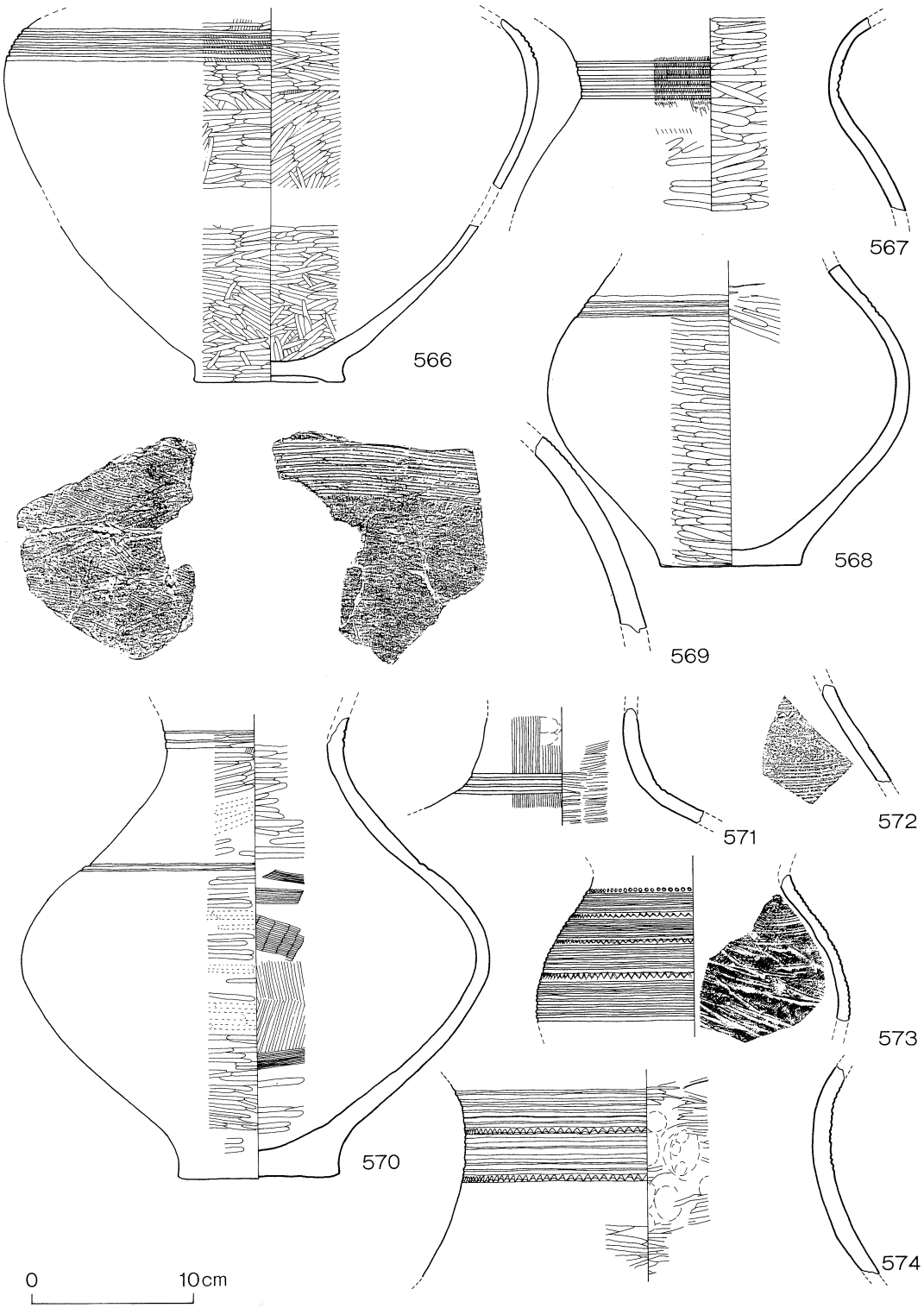
第56図　弥生土器実測図(35)



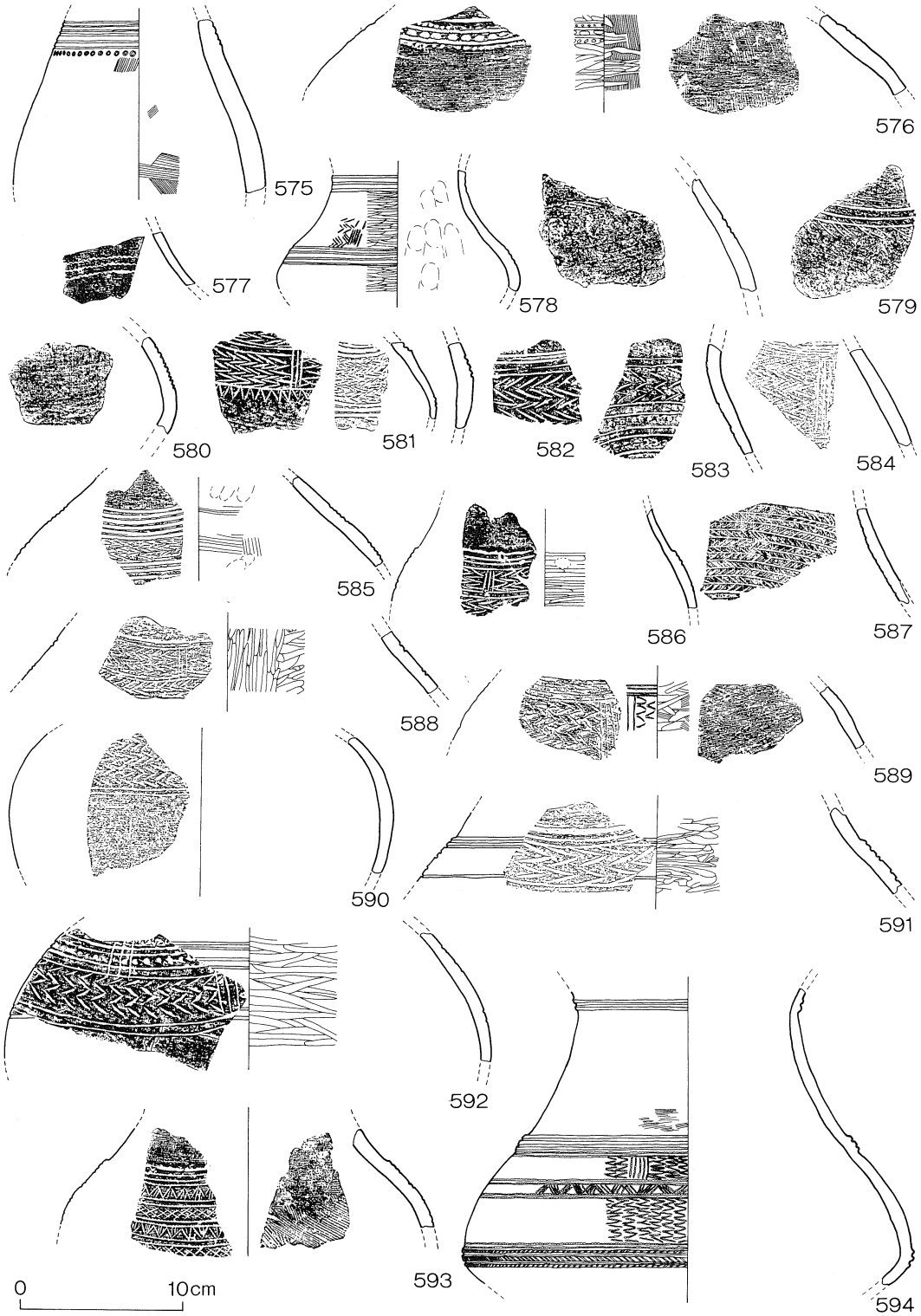
第57図　弥生土器実測図(36)



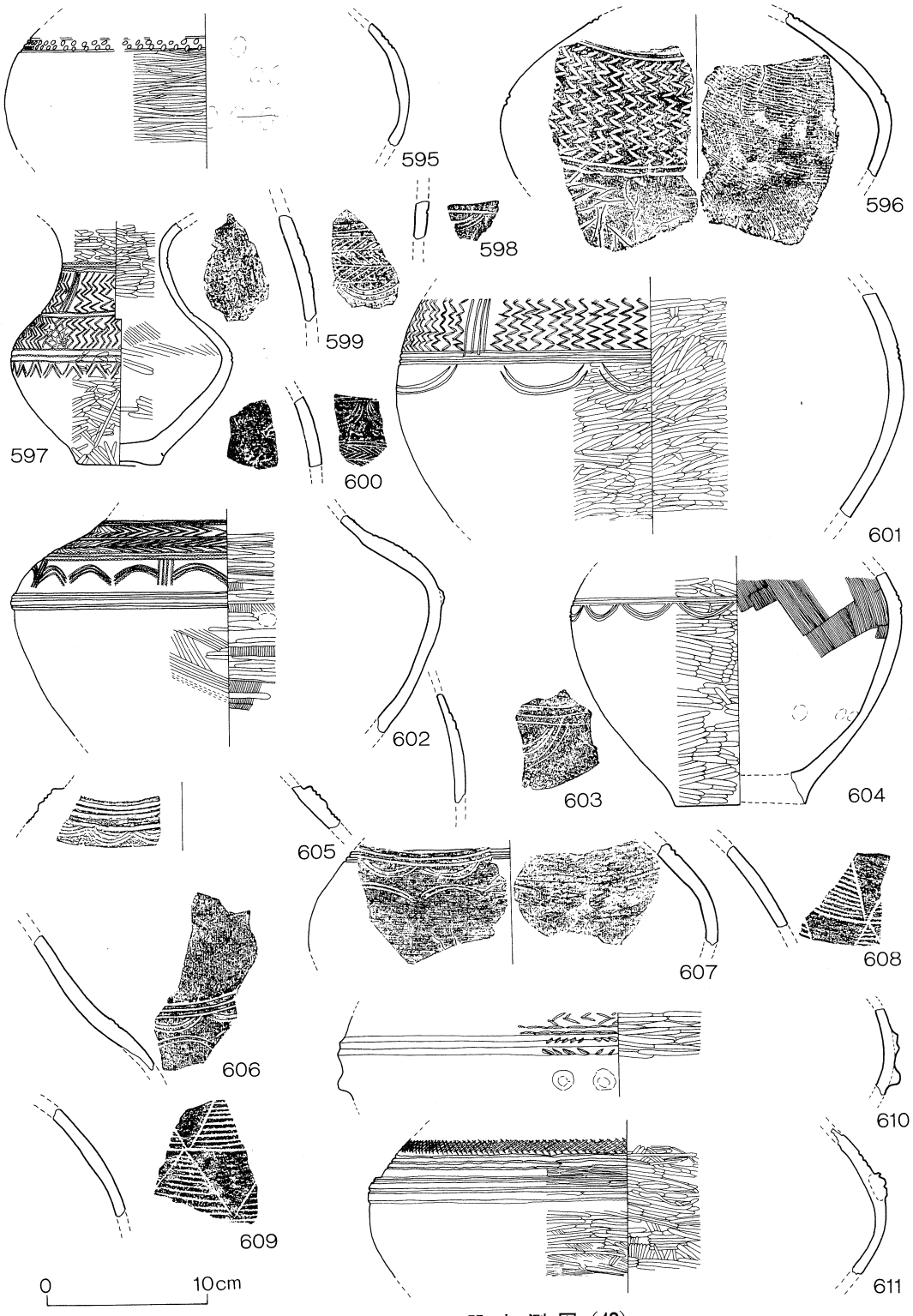
第58図　弥生土器実測図(37)



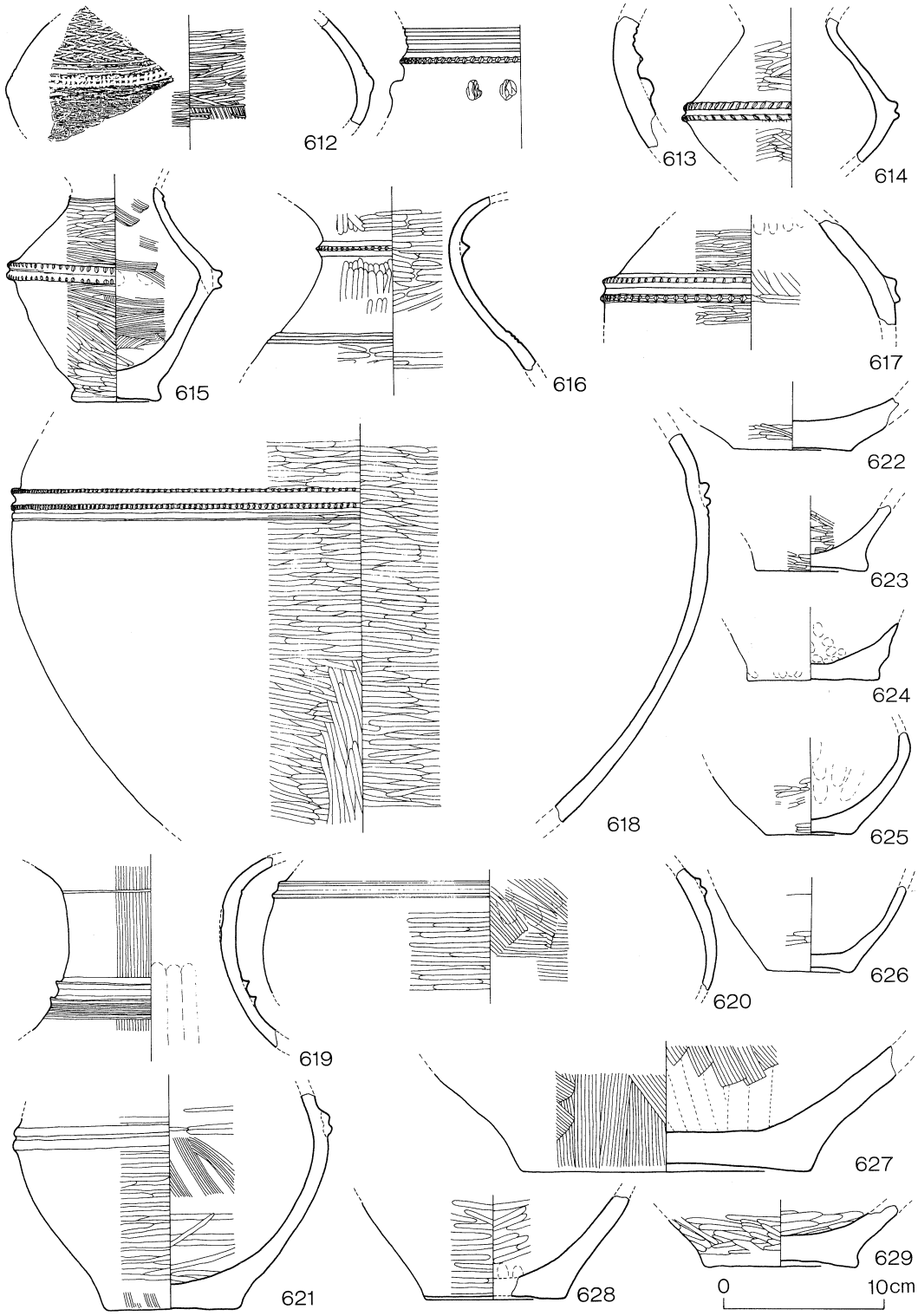
第59図　弥生土器実測図(38)



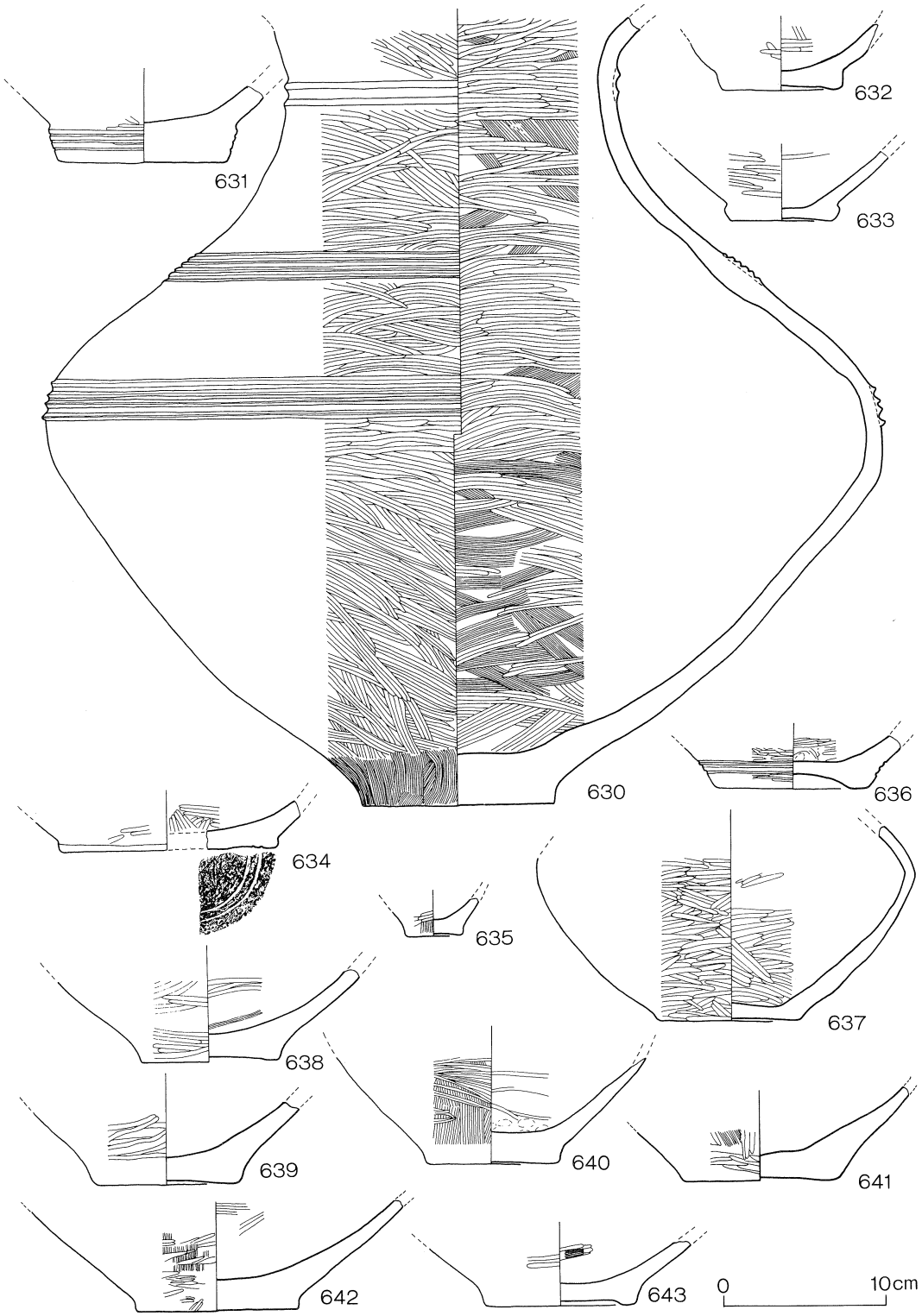
第60図　弥生土器実測図(39)



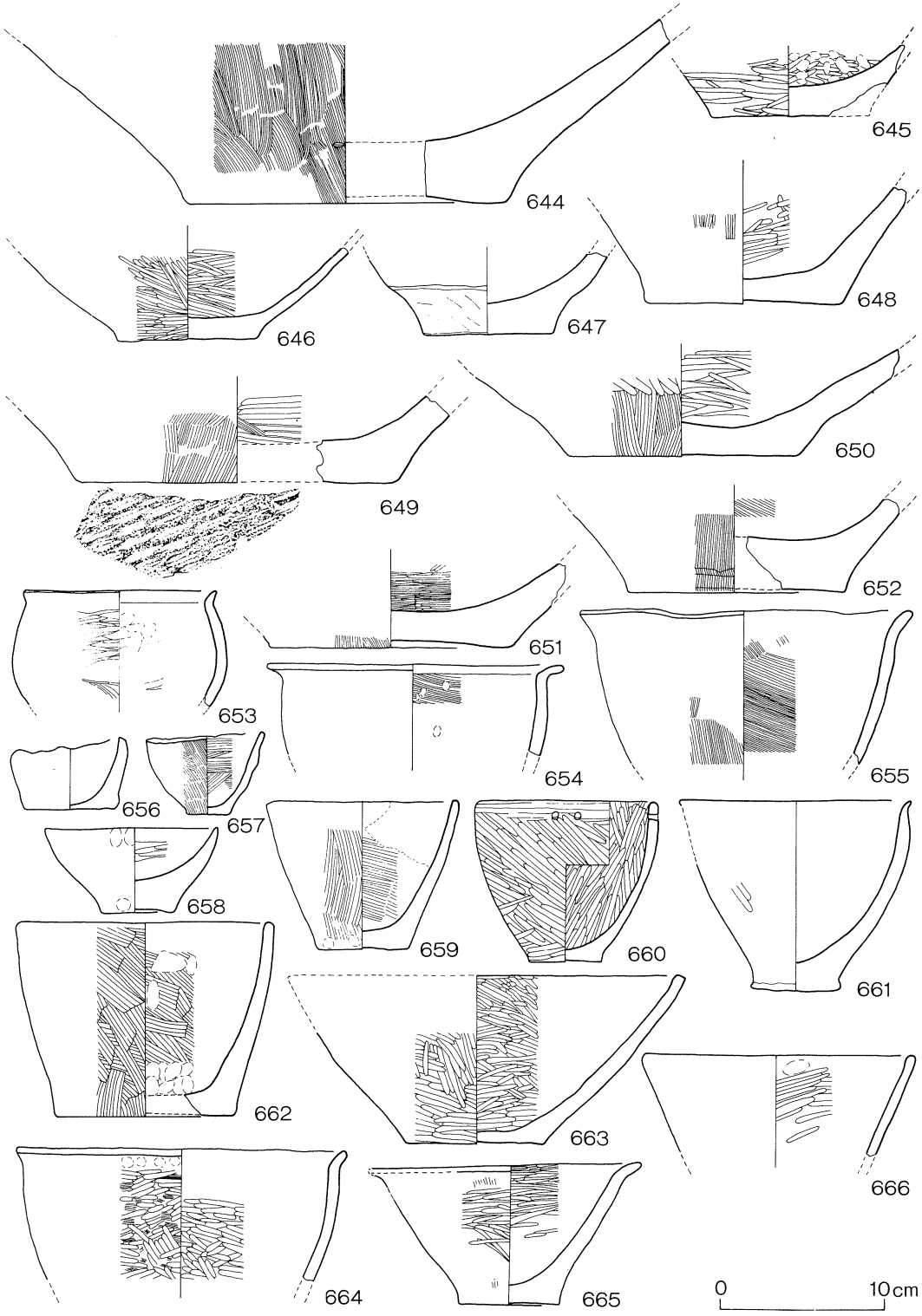
第61図　弥生土器実測図（40）



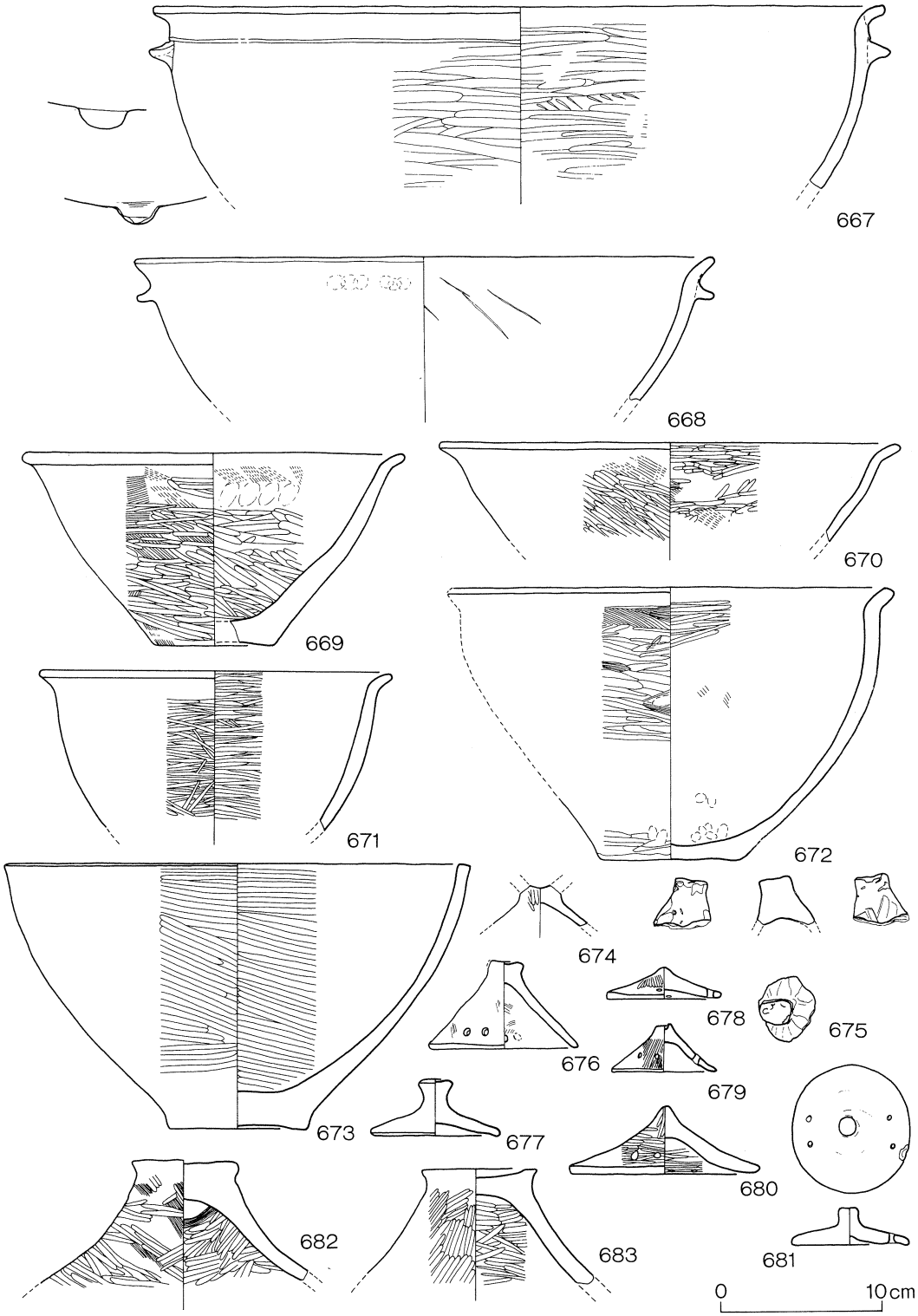
第62図　弥生土器実測図(41)



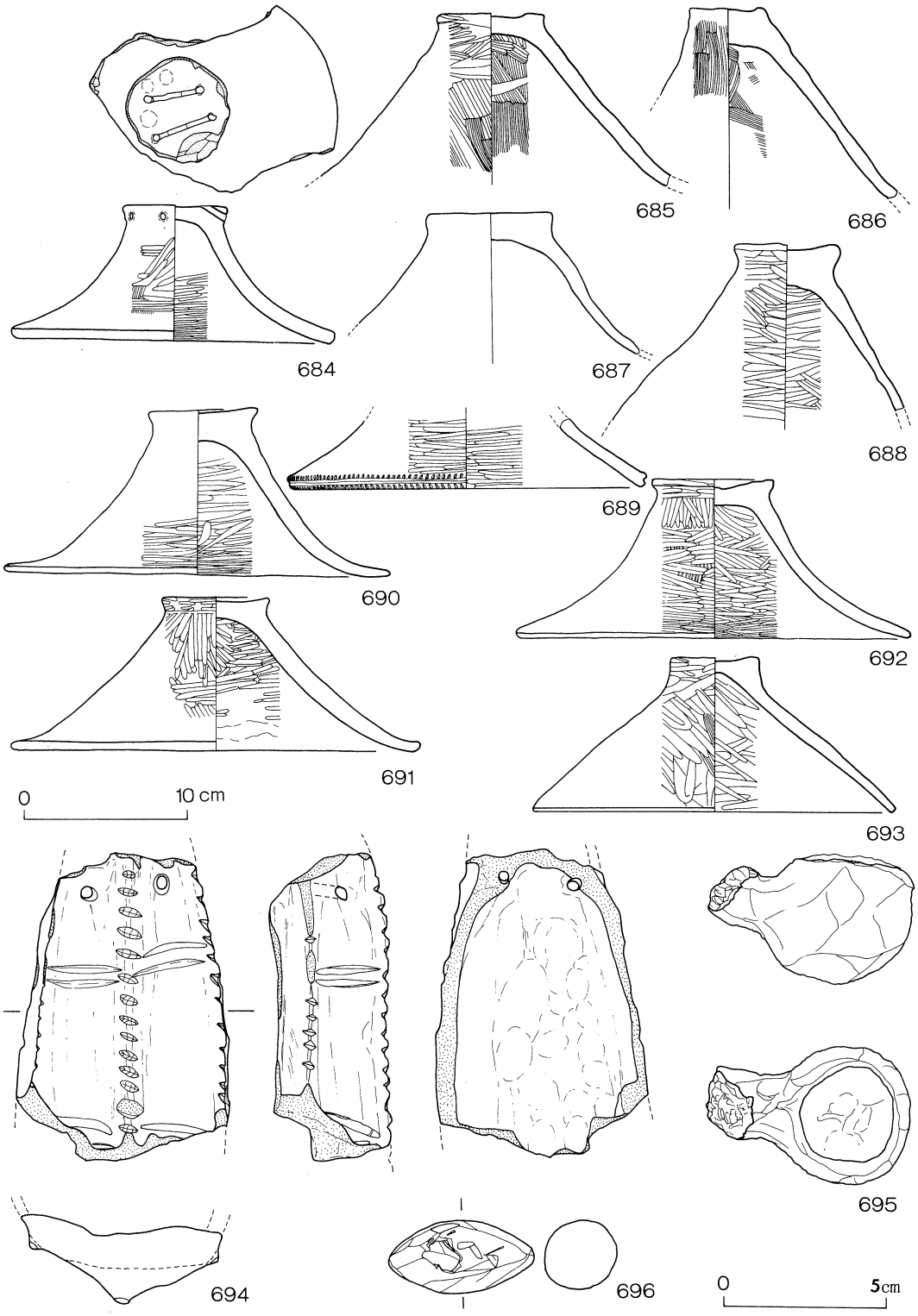
第63図　弥生土器実測図(42)



第64図　弥生土器実測図（43）



第65図　弥生土器実測図(44)



第66図　弥生土器実測図（45）

表1　弥生式土器一覧表 (1)

(法量単位：cm)

挿図番号	器形	法量・特徴	出土層時期	備考(NKY)
22- 1	甕	朝鮮系無文土器	——	——
2	〃	〃	——	——
3	〃	〃	——	——
4	〃	〃	——	——
5	〃	〃	弥生前期	534
6	ミニチュア土器	口径5.6器高5.0底径3.2	弥生前期貝層	2390
7	小形土器	口径9.2	弥生中期	831
8	〃	〃 7.2	——	1014
9	〃	〃 11.2	弥生前期	2303
10	〃	〃 11.2	弥生中期	1348
11	〃	口径8.8器高7.6底径4.4	弥生中期	2360
12	〃	〃 9.6 〃 7.2 〃 3.6	弥生前期	2358
13	〃	〃 10.0 〃 8.4 〃 4.8	弥生中期	2375
14	〃	〃 11.8 〃 8.0 〃 5.2	弥生前期	2404
15	〃	〃 12.8 〃 12.0 〃 6.6	弥生中期	2377
16	〃	底径2.8	弥生中期	2364
17	〃	口径12.4	弥生前期	2308
18	甕	〃 20.0	弥生中期	958
19	〃	〃 21.2	弥生中期	782
20	〃	〃 31.6・外耳土器	弥生中期	757
21	〃	——	弥生前期貝層	2074
22	〃	口径13.6	弥生前期	7048
23	〃	〃 12.0	弥生前期	617
24	〃	〃 12.8	弥生前期	606
25	〃	〃 15.6	——	——
26	〃	〃 16.0	弥生中期	1252
27	〃	〃 16.0	弥生前期	615
28	〃	〃 14.8	弥生中期	462
23- 29	甕	口径13.8	弥生中期	1097
30	〃	〃 17.6	弥生中期	614
31	〃	〃 21.0	弥生前期	2155
32	〃	〃 13.6	弥生前期	576
33	〃	〃 14.8	弥生中期	1263
34	〃	〃 20.4	弥生前期	594
35	〃	〃 14.6	弥生前期	588
36	〃	〃 15.6	弥生中期	2214
37	〃	〃 18.8	弥生前期	599
38	〃	〃 14.8	弥生前期	633
39	〃	〃 16.6	弥生中期	632
40	〃	〃 19.0	弥生前期	603
41	〃	〃 14.8	弥生前期	655
42	〃	〃 16.4	弥生前期	422
43	〃	〃 20.0	弥生前期	635
44	〃	〃 18.4	弥生中期	706
45	〃	〃 17.0	弥生前期	634
46	〃	〃 15.6	弥生中期	2152
47	〃	〃 13.0	弥生前期	572
23- 48	甕	口径18.8	弥生前期	495
49	〃	〃 20.8	弥生前期	573
50	〃	〃 14.8	弥生前期	2087
51	〃	〃 17.0	弥生前期	571
52	〃	〃 16.4	弥生中期	933
24- 53	甕	口径12.6	弥生中期	1783
54	〃	〃 17.4	弥生前期	570
55	〃	〃 15.6	弥生中期	1086
56	〃	〃 15.6	弥生前期	2149
57	〃	〃 16.6	弥生前期	457
58	〃	〃 19.6	弥生中期	979
59	〃	〃 18.4	弥生中期	1463
60	〃	〃 19.2	弥生中期	950
61	〃	〃 16.8	弥生中期	992
62	〃	〃 21.0	弥生前期	600
63	〃	〃 18.6	弥生中期	616
64	〃	〃 17.6	弥生中期	900
65	〃	〃 20.0	弥生前期	592
66	〃	〃 19.8	弥生前期	922
67	〃	〃 29.2	弥生前期	541
68	〃	〃 28.0	弥生前期	567
69	〃	〃 30.4	弥生中期	1051
70	〃	〃 19.4	弥生前期	940
25- 71	甕	口径18.4	弥生前期	2025
72	〃	〃 17.8	弥生前期	475
73	〃	〃 19.6	弥生前期	491
74	〃	〃 22.4	弥生前期	885
75	〃	〃 19.2	弥生中期	639
76	〃	〃 22.0	弥生前期	1129
77	〃	〃 22.4	弥生前期	2022
78	〃	〃 31.6	弥生前期	2209
79	〃	〃 29.2	弥生前期	2312
80	〃	〃 27.6	弥生中期	982
81	〃	〃 29.0	弥生中期	1262
82	〃	〃 30.0	弥生中期	525
83	〃	〃 31.6	弥生前期	656
84	〃	〃 30.4	弥生前期	471
26- 85	甕	口径19.4	弥生前期	1230
86	〃	〃 21.4	弥生前期	893
87	〃	〃 21.6	弥生前期	598
88	〃	〃 22.4	弥生中期	595
89	〃	〃 22.8	弥生前期	593
90	〃	〃 20.8	弥生中期	2217
91	〃	〃 32.8	弥生前期	477
92	〃	〃 33.2	弥生前期	2097

表2　弥生式土器一覧表 (2)

(法量単位：cm)

挿図番号	器形	法量・特徴	出土層時期	備考(NKY)
26- 93	甕	口径27.4	弥生中期	1246
94	鉢	〃 28.8	弥生前期	467
95	甕	〃 29.6	弥生中期	1248
96	〃	〃 32.0	弥生前期貝層	2043
27- 97	鉢	口径20.8	弥生前期	523
98	甕	〃 24.0	弥生前期	499
99	〃	〃 24.0	弥生前期	569
100	〃	〃 24.6	弥生前期	498
101	〃	〃 23.6	弥生前期	2311
102	〃	〃 22.0	弥生前期	575
103	〃	〃 25.2	弥生前期	2203
104	〃	〃 24.8	弥生前期	500
105	〃	〃 32.8	弥生前期	531
106	〃	〃 25.2	弥生前期	540
107	〃	〃 26.4	弥生前期	568
108	〃	〃 26.0	弥生中期	2035
109	〃	〃 26.8	弥生前期	458
110	〃	〃 25.2	弥生前期	591
111	〃	〃 26.2	弥生前期	526
112	〃	〃 28.0	弥生中期	563
113	〃	〃 25.0	弥生前期貝層	1063
28-114	甕	口径21.2	弥生前期貝層	494
115	〃	〃 24.0	弥生前期	2221
116	〃	〃 22.6	弥生前期	917
117	〃	〃 25.0	弥生前期	636
118	〃	〃 22.4器高21.6底径8.8	弥生前期	664
119	〃	〃 32.6	弥生前期	533
120	〃	〃 26.8	弥生中期	476
121	〃	〃 25.0	弥生中期	2265
122	〃	〃 25.6	弥生前期	610
123	〃	〃 31.6	弥生前期	431
124	〃	〃 33.6	弥生前期	564
29-125	甕	口径23.2	弥生中期	2102
126	〃	〃 26.6	弥生前期	597
127	〃	〃 24.8	弥生中期	492
128	〃	〃 27.6	弥生前期	1100
129	〃	〃 23.2	弥生中期	2159
130	〃	〃 26.8	弥生前期	426
131	〃	〃 35.0	弥生前期	2150
132	〃	〃 42.2	弥生前期	2036
133	〃	〃 44.8	弥生前期貝層	2235
134	〃	〃 44.4	弥生中期	529
30-135	甕	口径21.8	弥生中期	1275
136	〃	〃 23.0	弥生前期	2096
30-137	甕	口径22.6	弥生中期	2224
138	〃	〃 21.2	弥生中期	2093
139	〃	〃 22.8	弥生前期	2309
140	〃	〃 24.2	弥生中期	1181
141	〃	〃 32.6	弥生中期	428
142	〃	〃 32.2	弥生前期	497
143	〃	〃 33.6	弥生前期	637
144	〃	〃 32.8	弥生前期	449
145	〃	〃 32.0	弥生中期	596
146	〃	〃 26.4	弥生前期	562
31-148	甕	口径22.2	弥生後期	1368
149	〃	〃 15.8	弥生前期	607
150	〃	〃 12.8	弥生前期	612
151	〃	〃 17.2	弥生前期	611
152	〃	〃 17.6	弥生前期	608
153	〃	〃 16.0	弥生前期	613
154	〃	〃 24.8	弥生前期	605
155	〃	〃 27.6	弥生中期	601
156	ミニチュア土器	口径5.2器高3.4底径2.8	弥生中期	2357
157	甕	——	弥生前期	626
158	〃	——	弥生前期	622
159	〃	口径15.0	弥生中期	1585
160	〃	——	弥生前期	2058
161	〃	口径14.4	弥生前期	440
162	〃	〃 17.2	弥生前期	560
163	〃	〃 17.4	弥生前期	454
164	〃	〃 18.8	弥生前期	1055
165	〃	〃 19.2	弥生前期	2092
166	〃	〃 18.6	——	2098
167	〃	〃 20.4	弥生前期	537
168	〃	〃 18.8	弥生前期	625
169	〃	〃 20.2	弥生中期貝層	751
170	ミニチュア土器	底径3.2	弥生中期	1779
171	〃	〃 4.0	弥生後期	1734
172	〃	〃 3.2	弥生前期	2355
173	〃	〃 2.8	弥生前期	2363
174	〃	〃 2.8	弥生前期	2226
32-175	甕	口径18.8	弥生前期	459
176	〃	〃 20.2	弥生前期	619
177	〃	〃 20.8	弥生前期	448
178	〃	〃 20.4	弥生前期	465
179	〃	〃 22.0	弥生前期	535
180	〃	〃 21.6	弥生前期	881
181	〃	〃 20.6	弥生前期	490
182	〃	〃 23.8	弥生前期	628
183	〃	〃 32.8	弥生中期	2024

表3　弥生式土器一覧表 (3)

(法量単位：cm)

挿図番号	器形	法量・特徴	出土層時期	備考(NKY)
32-184	甕	口径30.2	弥生前期	453
185	〃	〃 28.8	弥生前期	552
186	〃	〃 28.6	弥生前期	554
187	〃	〃 29.2	弥生前期	447
33-188	甕	口径22.4	弥生前期貝層	2232
189	〃	〃 22.2	弥生前期	2299
190	〃	〃 22.6	弥生前期	469
191	〃	〃 22.6	弥生前期	432
192	〃	〃 21.0	弥生前期	624
193	〃	〃 22.0	弥生前期	481
194	〃	〃 22.8	弥生前期	521
195	〃	〃 30.0	弥生前期	561
196	〃	〃 30.4	弥生前期	556
197	〃	〃 25.2	弥生前期	553
198	〃	〃 27.2	弥生前期	470
199	〃	〃 24.0	弥生前期	452
200	〃	〃 26.0	弥生前期	438
201	〃	〃 27.2	弥生前期	2072
34-202	甕	口径23.6	弥生前期	648
203	〃	〃 21.6	弥生前期貝層	2227
204	〃	〃 21.0	弥生前期	987
205	〃	〃 22.8	弥生前期	522
206	〃	〃 22.4	弥生前期	482
207	〃	〃 22.2	弥生前期	558
208	〃	〃 25.2	弥生前期	538
209	〃	〃 25.2	弥生前期	489
210	〃	〃 22.8	弥生前期	627
211	〃	〃 23.8	弥生前期	463
212	〃	〃 24.2	弥生前期	2215
213	〃	〃 25.4	弥生中期	687
214	〃	〃 24.0	弥生前期	483
215	〃	〃 25.2	弥生前期	2082
216	〃	〃 27.2	弥生中期	1284
217	〃	〃 26.4	弥生前期貝層	2233
35-218	甕	口径24.0	弥生前期	429
219	〃	〃 25.2	弥生前期	559
220	〃	〃 27.8	弥生前期	496
221	〃	〃 23.0器高20.0底径7.8	弥生前期	2013
222	〃	〃 34.4	SB 01	870
223	〃	〃 37.2	弥生中期	882
224	〃	〃 27.6	弥生前期	550
225	〃	〃 25.8	弥生中期	2032
226	〃	〃 24.8	弥生前期	2405
227	〃	〃 14.4	弥生中期	1189
228	〃	〃 14.4	弥生中期	1370
36-229	甕	口径36.8	弥生前期	620
230	〃	〃 37.6	弥生前期	623
231	〃	〃 16.8	弥生前期	441
232	〃	——	弥生前期	2071
233	〃	口径20.4	弥生前期	678
234	小形土器	〃 7.2	弥生中期貝層	2324
235	甕	〃 20.0	弥生前期	679
236	〃	〃 21.2	弥生前期	686
237	〃	〃 21.0	弥生前期貝層	2236
238	〃	〃 21.2	弥生前期	891
239	〃	〃 25.6	弥生前期	886
240	〃	〃 35.4	弥生前期	672
241	〃	〃 33.2	弥生前期	896
242	〃	〃 31.2	弥生前期	878
243	〃	〃 28.4	弥生前期貝層	2056
37-244	甕	口径23.4	弥生前期	676
245	〃	〃 23.6	弥生前期	673
246	〃	〃 24.8	弥生前期	874
247	〃	〃 24.8	——	2091
248	〃	〃 16.4	弥生中期	1107
249	〃	〃 24.4	弥生中期	688
250	〃	〃 25.2	弥生前期	883
251	〃	〃 30.8	弥生中期	1389
252	〃	〃 26.8	弥生前期	668
253	〃	〃 24.0	弥生前期	2298
254	〃	〃 25.2	弥生前期	691
256	〃	〃 19.8	弥生中期	998
256	〃	〃 23.4	弥生中期貝層	743
257	〃	〃 17.6	——	1102
258	〃	〃 21.6	弥生中期貝層	754
38-259	甕	口径18.4	弥生中期	1056
260	〃	〃 21.2	弥生中期	1093
261	〃	〃 17.8	弥生前期	991
262	〃	〃 19.6	弥生前期	2338
263	〃	〃 27.2	弥生中期	908
264	〃	〃 27.0	弥生中期	1355
265	〃	〃 32.4	弥生前期	2394
266	〃	〃 27.2	弥生中期貝層	1513
267	〃	〃 25.0	弥生前期	2028
268	〃	〃 23.6	弥生中期	2081
269	〃	〃 23.6	弥生中期貝層	434
270	〃	〃 28.8	弥生前期	551
271	〃	〃 20.4	弥生中期	1408
272	〃	〃 17.8	——	1011
39-273	甕	口径14.0	弥生中期貝層	1512

表4　弥生式土器一覧表 (4)

(法量単位：cm)

挿図番号	器形	法量・特徴	出土層時期	備考(NKY)
39-274	甕	口径36.8	弥生中期	976
275	〃	〃 24.8	——	1106
276	〃	〃 25.6	弥生前期	2019
277	〃	〃 29.6	弥生中期	1268
278	〃	〃 30.2	弥生前期	2020
279	〃	——	弥生前期	581
280	〃	口径28.8	弥生前期	983
281	〃	〃 24.2	弥生前期	2365
282	〃	〃 31.8	弥生前期	2046
283	〃	〃 33.0	弥生前期	2018
284	〃	〃 11.6	弥生中期貝層	1050
285	〃	〃 12.4	弥生前期	640
286	〃	〃 23.6	弥生前期	609
287	〃	〃 24.0	弥生前期	474
288	〃	〃 24.4	弥生前期	602
289	〃	〃 19.6	弥生前期	445
290	〃	〃 22.6	弥生前期	618
40-291	甕	口径17.2	弥生前期貝層	2229
292	〃	〃 17.8	弥生前期	604
293	〃	〃 18.8	弥生前期	643
294	〃	〃 19.0	弥生中期	996
295	〃	〃 19.6	弥生前期	446
296	〃	〃 20.0	弥生前期	456
297	〃	〃 18.0	弥生前期	427
298	〃	〃 35.6	弥生前期	464
299	〃	〃 30.2	弥生前期	530
300	〃	〃 26.6	弥生前期	641
301	〃	〃 24.8	弥生前期	433
302	〃	——	弥生前期	2095
303	〃	口径23.2	弥生中期	2378
304	〃	〃 22.6	弥生中期	1373
305	〃	〃 19.2	弥生中期	850
306	〃	〃 41.6	弥生前期	2057
307	〃	〃 44.0	弥生前期	638
41-308	甕	口径28.0	弥生前期	493
309	〃	〃 30.4	弥生前期	461
310	〃	〃 28.2	弥生前期	473
311	〃	〃 38.0	弥生前期	443
312	〃	〃 38.0	弥生前期	455
313	〃	〃 36.4	弥生前期	466
314	〃	〃 16.8	弥生前期	460
315	〃	〃 18.0	弥生前期	629
316	〃	〃 20.2	弥生前期	450
317	〃	〃 26.0	弥生前期	650
318	〃	〃 22.6	弥生前期	887
319	〃	〃 17.6	弥生中期貝層	1493
41-320	甕	口径18.4	弥生中期貝層	1509
321	〃	〃 16.8	弥生前期	480
322	〃	〃 19.0	弥生前期	631
323	〃	〃 16.0	弥生前期	630
42-324	甕	口径38.4	弥生前期	435
325	〃	〃 31.8	弥生前期	649
326	〃	〃 30.0	弥生前期	651
327	〃	〃 28.0	弥生前期	2069
328	〃	〃 24.8	弥生前期	645
329	〃	〃 18.0	弥生前期貝層	2023
330	〃	〃 19.6	弥生前期	536
331	〃	〃 22.4	弥生前期	555
332	〃	〃 22.4	弥生前期貝層	548
333	〃	〃 22.8	弥生前期	647
334	〃	〃 19.2	弥生前期	813
335	〃	——	弥生中期	1216
336	〃	口径21.6	弥生前期	658
337	〃	〃 28.4	弥生前期	2326
338	〃	〃 30.2	弥生前期	660
339	〃	〃 23.8	弥生前期	796
43-340	甕	口径29.6	弥生前期	444
341	〃	〃 30.8	弥生前期	2049
342	〃	〃 29.0	弥生前期	2112
343	〃	〃 28.8	弥生前期	685
344	〃	〃 28.0	弥生前期	680
345	〃	〃 26.8	弥生前期	807
346	〃	〃 24.2	弥生前期	557
347	〃	〃 24.0	弥生前期	907
348	〃	〃 25.6	弥生前期	666
349	〃	〃 24.4	弥生前期	646
350	〃	〃 24.0	弥生前期	845
351	〃	〃 24.4	弥生前期	681
44-352	甕	口径27.6	弥生前期	532
353	〃	〃 27.6	弥生中期	854
354	〃	〃 27.6	弥生前期	654
355	〃	〃 21.4	弥生前期	793
356	〃	〃 22.0	弥生前期	659
357	〃	〃 19.4	弥生前期	798
358	〃	〃 21.6	弥生前期	786
359	〃	〃 21.2	弥生前期	2105
360	〃	〃 16.8	弥生中期	981
361	〃	〃 16.4	弥生前期	833
362	〃	〃 8.6	弥生中期	842
363	〃	〃 20.4	弥生前期	2197
364	〃	〃 19.6	弥生前期	827

表5　弥生式土器一覧表 (5)

(法量単位：cm)

挿図番号	器形	法量・特徴	出土層時期	備考(NKY)
44-365	甕	口径16.0	弥生中期	1120
366	〃	〃 21.2	弥生前期	642
367	〃	〃 19.8	弥生前期	801
368	〃	〃 15.6	弥生前期	2064
45-369	甕	口径15.8	弥生前期	644
370	〃	〃 18.6	弥生後期	1198
371	〃	〃 19.6	——	1109
372	〃	〃 17.6	弥生中期	837
373	〃	〃 16.8	弥生中期	951
374	〃	〃 17.6	弥生中期	1113
375	〃	〃 19.8	——	2223
376	〃	〃 23.8	弥生中期	974
377	〃	〃 19.2	弥生前期	436
378	〃	〃 24.0	弥生前期	2143
379	〃	〃 27.6	弥生中期	1082
380	〃	〃 23.2	弥生前期	903
381	〃	〃 28.6	弥生中期	988
382	〃	〃 32.8	弥生中期	836
383	〃	〃 28.4	弥生中期	980
384	〃	〃 27.6	弥生中期	909
385	〃	〃 24.4	弥生中期	2086
386	〃	〃 24.0	弥生中期	1112
46-387	甕	口径25.0	弥生前期	2208
388	〃	——	弥生前期	2199
389	〃	口径19.6	弥生前期	898
390	〃	〃 19.6	——	1119
391	〃	〃 43.2	弥生前期貝層	2234
392	〃	〃 46.0	弥生中期	2225
393	〃	〃 52.8	弥生中期貝層	740
394	〃	——	弥生中期	1372
385	〃	〃 口径40.4	——	864
47-396	甕	口径29.6	弥生中期	1291
397	〃	〃 24.0	——	2294
398	〃	〃 30.8	弥生中期	1278
399	〃	〃 19.0	弥生中期	1515
400	〃	〃 16.0	弥生中期	1334
401	〃	——	弥生中期	1478
402	〃	口径27.2	弥生前期	2041
403	〃	〃 22.8	弥生前期	919
404	〃	〃 25.2	弥生中期貝層	750
405	〃	〃 26.8	弥生前期	2021
406	〃	〃 32.8	弥生前期	2017
407	〃	〃 26.4	弥生前期	2175
408	〃	〃 25.2	弥生前期	2044
409	〃	〃 27.2	弥生前期	2034
47-410	甕	口径29.6	弥生前期	2201
411	〃	〃 20.6	弥生前期	2016
48-412	甕	口径27.2	弥生前期	2113
413	〃	〃 26.4	弥生中期	924
414	〃	——	弥生中期	1265
415	〃	〃 口径37.6	弥生中期	1123
416	〃	〃 34.2	——	2314
417	〃	〃 31.6	弥生前期貝層	2062
418	〃	〃 30.2	弥生前期	2053
419	〃	底径4.8	弥生前期	899
420	〃	〃 8.0	弥生前期	2300
421	〃	〃 11.8	弥生前期	2246
422	〃	〃 10.4	弥生前期	577
423	〃	〃 10.8	弥生前期	2243
424	〃	〃 6.4	弥生前期	2213
425	〃	〃 9.2	弥生前期	549
426	〃	〃 8.6	弥生前期	579
427	〃	〃 8.0	弥生中期	478
428	〃	〃 8.0	弥生前期	586
429	〃	〃 9.2	弥生前期貝層	2218
430	〃	〃 9.2	——	1103
431	〃	〃 5.4	弥生前期貝層	2231
432	〃	〃 8.2	弥生前期貝層	2253
433	〃	〃 7.6	弥生前期	2244
434	〃	〃 6.4	弥生中期貝層	764
49-435	甕	底径6.6	弥生後期	1333
436	〃	〃 7.4	弥生前期	2219
437	〃	〃 7.4	弥生後期	1173
438	〃	〃 8.0	SB02	1095
439	〃	〃 7.4	弥生前期	585
440	〃	〃 7.4	弥生前期	2284
441	〃	〃 14.6	弥生前期	542
442	〃	〃 9.6	弥生後期	1211
443	〃	〃 10.2	弥生後期	1175
444	〃	〃 9.6	弥生前期	565
445	〃	〃 8,2	弥生前期	578
446	〃	〃 9.2	弥生前期	543
447	〃	〃 8.4	弥生前期	2257
448	〃	〃 9.0	弥生前期	938
449	〃	〃 8.0	弥生前期	1131
450	〃	〃 8.4	弥生前期	2179
451	〃	〃 7.6	弥生前期	2317
452	〃	〃 11.2	弥生前期	2251
453	〃	〃 6.0	弥生中期貝層	749
454	〃	〃 9.2	弥生前期	2302
455	〃	〃 10.0	弥生前期	2173

表6　弥生式土器一覧表 (6)

(法量単位：cm)

挿図番号	器形	法量・特徴	出土層時期	備考(NKY)
49-456	甕	底径7.4	弥生前期	2336
457	〃	〃 7.8	弥生中期	935
458	〃	〃 9.6	弥生前期	2281
459	〃	〃 7.2	弥生前期	2301
460	〃	〃 8.0	弥生前期	2172
50-461	〃	底径11.2底部穿孔	弥生中期	839
462	〃	〃 8.0　〃	弥生前期	2254
463	小形土器	口径7.6器高10.8底部5.8	弥生前期	2347
464	〃	〃 6.8 〃 9.2 〃 5.2	弥生前期	2341
465	甕	口径10.4	弥生前期	2270
466	〃	〃 16.4	弥生前期	2421
467	〃	〃 14.6	弥生前期	1985
468	〃	〃 16.4器高23.8底径8.0	弥生中期	2002
469	〃	〃 11.6	弥生中期	2029
470	〃	〃 15.6	弥生前期貝層	2038
471	〃	〃 10.0	弥生中期	2061
472	〃	〃 15.6	弥生前期	1983
473	〃	〃 17.4	弥生中期	769
474	〃	〃 13.2器高22.8底径7.4	弥生	
475	〃	〃 15.2	弥生前期	1157
476	〃	〃 12.0	弥生	
477	〃	〃 16.0	弥生中期	879
478	〃	〃 11.2器高17.2底径5.6	弥生中期	201
51-479	甕	口径15.2器高27.6底径9.4	弥生前期	2008
480	〃	〃 14.8	弥生前期	1998
481	〃	〃 13.8	弥生中期	1994
482	〃	〃 19.6	弥生前期	1995
483	〃	〃 32.4	弥生中期	2158
484	〃	〃 31.6	SB01	869
485	〃	〃 19.6器高33.6底径10.0	弥生前期	1890
52-486	壺	口径19.4	弥生中期	2386
487	〃	〃 19.6	弥生前期	2272
488	〃	〃 28.8	弥生前期	2176
489	〃	〃 32.4	弥生後期	1232
490	〃	〃 29.2	弥生前期	2148
491	〃	〃 42.2	弥生前期貝層	2185
492	〃	〃 10.4器高19.4底径6.4	弥生中期	758
493	〃	〃 33.6	弥生前期	1997
494	〃	〃 46.0	弥生前中貝層	1992
495	〃	〃 39.6	弥生中期	539
53-496	壺	口径21.2	弥生前期	2106
497	〃	〃 21.4	弥生前期	2073
498	〃	〃 19.6	弥生中期	1338
499	〃	〃 18.4	弥生前期	1132
53-500	壺	口径16.4	弥生前期貝層	2379
501	〃	〃 19.2	弥生中期	2321
502	〃	〃 15.0	弥生中期	1200
503	小形土器	〃 8.6器高15.8底径7.2	弥生中期	409
504	壺	〃 16.0 〃 28.6 〃 9.6	弥生前期	2010
505	〃	〃 13.6 〃 24.2 〃 9.6	弥生中期	151
506	ミニチュア土器	〃 4.0 〃 6.8 〃 2.8	弥生前期貝層	2389
507	〃	〃 6.0 〃 8.4 〃 3.6	弥生中期	2361
508	〃	〃 6.0 〃 9.6 〃 4.4	弥生中期	2388
509	壺	〃 14.4	弥生中期	2075
510	〃	〃 11.2	——	2068
511	〃	〃 16.0	弥生中期貝層	761
512	〃	〃 15.6	弥生中期	1115
513	〃	〃 18.6	弥生後期	1229
514	〃	〃 19.2	——	2296
515	〃	〃 20.0	弥生前期	901
54-516	壺	口径16.4	弥生前期	2014
517	〃	〃 17.6	弥生前期貝層	2384
518	〃	〃 29.6	弥生前期	2335
519	〃	〃 26.0	——	2090
520	〃	〃 18.0器高34.6底径9.6	弥生中期	910
521	〃	〃 14.6	弥生前期	2004
522	〃	〃 13.6	弥生前期貝層	1981
523	〃	〃 20.8	弥生前期	1980
524	〃	〃 19.0	弥生前期	1984
525	〃	〃 10.6	弥生前期	1986
55-526	壺	口径18.2	弥生中期	1308
527	〃	〃 18.4	弥生前期	2101
528	〃	〃 39.6	弥生中期	877
529	〃	〃 42.4	弥生前期貝層	1990
530	〃	〃 14.8	弥生中期	966
531	〃	——	弥生前期	2177
532	〃	〃 15.6	——	2099
533	〃	〃 50.0	弥生前期貝層	2239
534	〃	〃 17.6	弥生中期貝層	1502
535	〃	〃 18.6	弥生中期	995
536	〃	〃 17.8	弥生中期	1316
537	〃	〃 21.2	弥生前期貝層	2398
538	〃	〃 26.4	——	2292
539	〃	〃 33.6	弥生前期	2323
540	〃	〃 12.4器高20.4底径6.4	弥生前期	1811
56-541	壺	口径39.2	弥生前期	150
542	〃	〃 42.4	弥生前期	2393
543	〃	〃 30.4	——	1991
544	〃	〃 28.0	弥生前期	1993

表7　弥生式土器一覧表 (7)

(法量単位：cm)

挿図番号	器形	法量・特徴	出土層時期	備考(NKY)
57-545	壺	口径34.4	弥生中期	2396
546	〃	〃 22.0	弥生前期貝層	2385
547	ミニチュア土器	底径1.4	弥生前期	2346
548	〃	〃 3.0	弥生後期	1758
549	〃	〃 4.4	弥生前期	2354
550	小形土器	口径7.6器高10.6底径5.2	弥生前期	2408
551	〃	底径6.8	弥生中期	2376
552	壺		弥生前期	2006
553	〃		弥生前期	2009
554	小形土器	底径5.2	弥生前期	2359
555	壺		弥生前期	1989
556	〃		弥生前期	2042
557	〃		弥生前期	2005
58-558	壺		弥生前期	2274
559	〃		弥生中期	1213
560	〃		弥生中期	1987
561	〃	底径10.4	弥生前期	2088
562	〃	〃 6.4	弥生前期	1223
563	〃		弥生前期	2154
564	〃	底径13.6	弥生前期	2286
565	〃		弥生中期貝層	1495
59-566	壺	底径9.2	弥生中期	2399
567	〃		弥生前期	2142
568	〃	底径8.8	弥生中期	1114
569	〃		弥生中期貝層	767
570	〃	底径10.0	弥生前期	2007
571	〃		弥生中期貝層	755
572	〃		弥生中期	1376
573	〃		弥生前期	2329
574	〃		弥生中期	918
575	壺		弥生中期	1283
576	〃		弥生前期	583
577	〃		弥生前期貝層	2228
578	〃		弥生中期	835
579	〃		弥生前期	2278
580	〃		弥生前期	2277
581	〃		弥生中期	190
582	〃		弥生前期	2094
583	〃		弥生前期貝層	2241
584	〃		弥生中期	1290
585	〃		弥生中期	1154
586	〃		弥生前期貝層	2230
587	〃		弥生前期貝層	2242
588	〃		弥生中期貝層	753
589	〃		弥生前期	582
60-590	壺		弥生中期	1319
591	〃		弥生前期	894
592	〃		弥生前期	2164
593	〃		弥生前期	2192
594	〃		弥生前期	2414
61-595	壺		弥生前期	2282
596	〃		弥生中期	2206
597	小形土器	底径5.2	弥生前期	2374
598	壺		弥生中期	26
599	〃		弥生前期	2273
600	〃		弥生前期	2089
601	〃		弥生前期	2413
602	〃		弥生前期	2026
603	〃		弥生前期	2276
604	〃	底径8.0	弥生前期	2011
605	〃		弥生中期	1375
606	〃		弥生前期	2279
607	〃		弥生前期	2100
608	〃		弥生後期	2415
609	〃		——	2416
610	〃		弥生前期	2210
611	〃		弥生前期	2407
62-612	壺		弥生中期	1139
613	〃		弥生前期	2238
614	小形土器		弥生前期	2410
615	〃	底径5.4	弥生前期	2411
616	壺		弥生前期	2000
617	〃		弥生前期	1988
618	〃		弥生前期	2001
619	〃		弥生中期	1214
620	〃		弥生後期	1178
621	〃	底径8.2	弥生中期	1504
622	〃	〃 7.4	弥生前期	2196
623	〃	〃 7.0	弥生前期	2315
624	〃	〃 8.4	弥生中期	897
625	〃	〃 5.6	弥生前期	1999
625	〃	〃 5.2	弥生前期	2247
627	〃	〃 17.8	弥生前期	2200
628	〃	〃 8.8	——	1101
629	〃	〃 9.6	弥生前期	544
63-630	壺	底径12.0	弥生前期	2063
631	〃	〃 10.6	弥生中期	2391
632	〃	〃 7.4	弥生前期	2045
633	〃	〃 6.4	弥生前期	2313
634	〃	〃 13.4外面・沈線	弥生前期貝層	2039

表8　弥生式土器一覧表 (8)

(法量単位：cm)

挿図番号	器形	法量・特徴	出土層時期	備考(NKY)
63-635	壺	底径3.6	弥生前期	2350
636	〃	〃 9.6	弥生中期	873
637	〃	〃 8.8	弥生前期	2409
638	〃	〃 8.4	弥生前期	2291
639	〃	〃 9.0	弥生前期	2191
640	〃	〃 8.2	弥生前期	2289
641	〃	〃 9.6	弥生中期	1099
642	〃	〃 10.0	SB01	861
643	〃	〃 9.4	弥生前期	2288
64-644	壺	底径19.6	弥生前期	2156
645	〃	〃 9.6	弥生前期	547
646	〃	〃 8.6	弥生前期	2285
647	〃	〃 8.0	弥生中期	1204
648	〃	〃 12.0	弥生中期	2102
649	〃	〃 19.6	弥生前期	2290
650	〃	〃 14.0	弥生前期	2250
651	〃	〃 14.8	弥生前期	2180
652	〃	〃 13.4	弥生前期	2255
653	小形土器	口径11.8	弥生中期	902
654	〃	〃 18.0	弥生前期	892
655	〃	〃 20.4	弥生中期	2030
656	ミニチュア土器	〃 7.2器高3.6底径5.6	弥生前期	2340
657	〃	〃 7.2 〃 4.8 〃 3.0	弥生前期	2330
658	〃	〃 10.6 〃 5.2 〃 4.4	弥生前期	2343
659	小形土器	〃 12.0 〃 8.8 〃 5.6	弥生前期	2327
660	〃	〃 10.8 〃 9.6 〃 4.4	弥生中期	418
661	〃	〃 14.4 〃 11.4 〃 5.6	弥生中期	1337
662	〃	〃 15.8 〃 11.8 〃 11.0	弥生前期	442
663	〃	〃 24.4 〃 10.2 〃 8.4	弥生前期	2406
664	〃	〃 20.4	弥生前期	2079
665	〃	〃 16.6器高8.4底径6.2	弥生中期	23.92
666	〃	〃 8.2	——	2297
65-667	鉢	口径44.8外耳土器	弥生中期	2381
668	〃	〃 35.6 〃	弥生中期	2380
669	〃	〃 23.4器高11.6底径7.2	弥生前期	2153
670	〃	〃 28.4	弥生前期	2178
671	〃	〃 21.6	弥生前期	524
672	〃	〃 26.8器高16.6底径8.4	弥生前期	884
673	〃	〃 28.8 〃 16.0 〃 8.4	弥生中期	2401
674	蓋	——	弥生前期	2146
675	〃	——	弥生中期貝層	1048
676	〃	口径9,2器高5.2	弥生中期	2383
677	〃	〃 8.0 〃 3.4	弥生中期	1885
678	〃	〃 7.0 〃 2.0	弥生前期	2397
679	〃	〃 6.4 〃 2.8	弥生中期	1716
680	〃	〃 11.6 〃 4.0	——	2400
681	〃	〃 7.2 〃 2.2	弥生中期	1440
692	〃	上部径6.4	弥生前期	484
683	〃	〃 7.0	弥生前期	2147
66-684	蓋	口径19.6器高8.2	弥生中期	2402
685	〃	上部径6.4	弥生前期	488
686	〃	〃 4.6	弥生前期	487
687	〃	〃 7.6	古墳前期	1614
688	〃	〃 6.4	弥生前期	486
689	〃	口径21.6	弥生中期貝層	1497
690	〃	〃 23.6器高6.0	弥生中期	2387
691	〃	〃 24.8 〃 9.4	弥生中期	2395
692	〃	〃 24.0 〃 9.8	弥生前期	2382
693	〃	〃 22.0 〃 9.6	弥生前期	485
694	鐸形土製品	——	弥生前期	
695	柄杓	匙部最大径8.4	弥生前期	2366
696	投弾	長9.0最大径4.4	弥生前期	

3 土 製 品

第66図694、695、696、及び第67図 円盤状土製品、第68図紡錘車（一部石製を含む）・土錘を土製品として扱った。

694は長さ9.5cm、最大幅6.5cmの不明土製品である。端にむかい幅が狭くなり先端で4.3cmを測るが、両端は破損している。幅の狭い一端に2孔一対の小孔が穿たれている。中央が高くなり、その上にキザミ目刺突文を施している。外面は長軸方向にヘラ磨きが全面になされ、ヘラによる二条の沈線が2ヶ所確認される。また、内側は粗い指ナデが施され周囲は剝離面がみられるので袋状をしていたことが知られる。貝層Ⅰの直上から出土した。

695は柄杓形土製品である。柄の部分を一部欠く。現状では長さ6.0cmを測る小形品である。内外面とも荒い手捏である。

696は投弾と考えられる土製品である。長さ4.4cm、径2.1cmで両端の尖ったフットボール状を呈している。15.0g。山陰地方ではめずらしい出土例である。

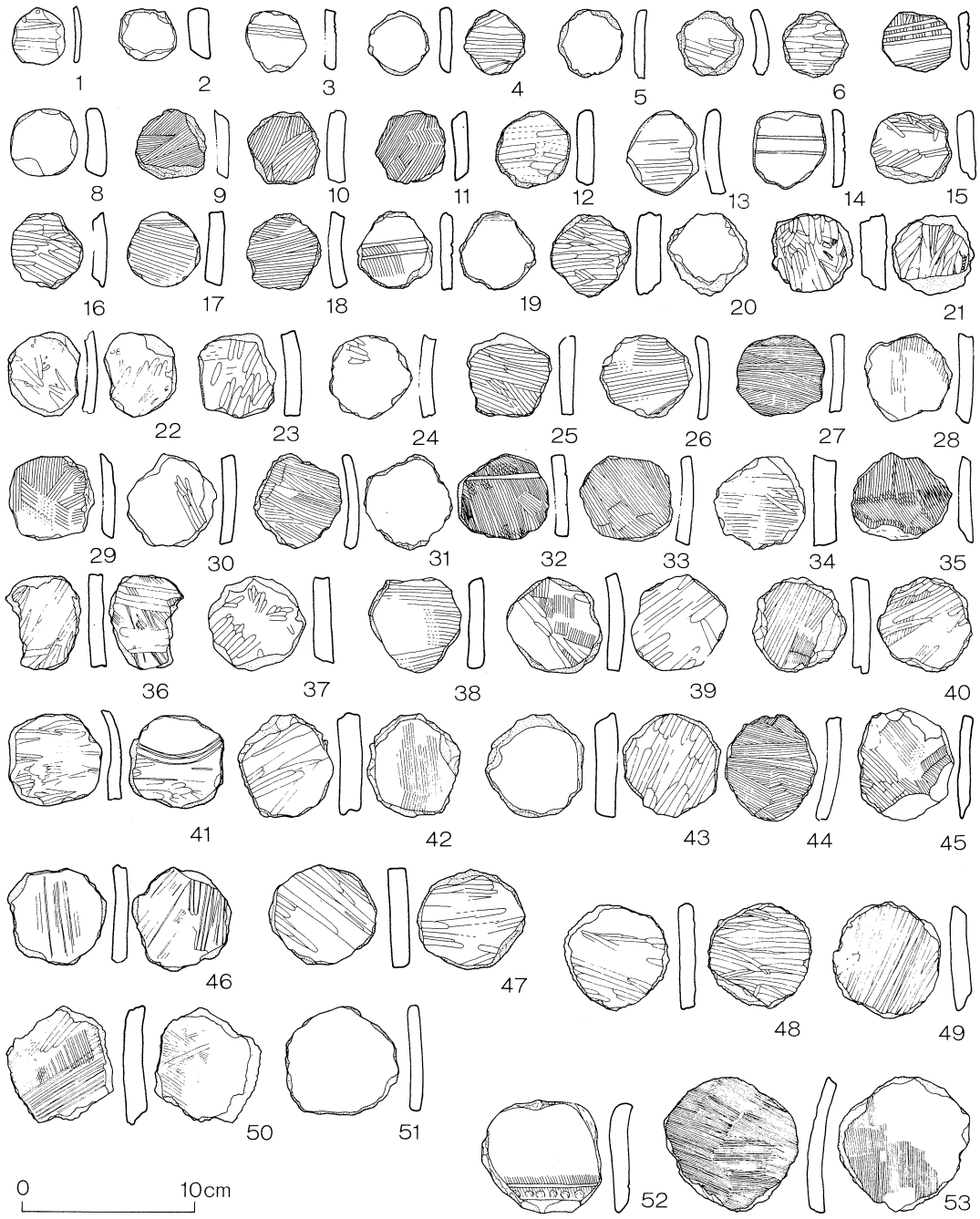
第67図は土器片を再利用し、周囲を打ち欠いて作る円盤状土製品を集成した。小形のものは径3.0cm前後、最大は7.8cmである。平均重量は27.6gである。（表9）

第68図5は第67図で示したような円盤状土製品の周囲をさらに調整し、中央に孔をあけたいわゆる紡錘車と考えられるものである。径は4.0×3.9cm、重さ8.6gを測る。第67図の円盤状土製品の多くはこれの未製品と考えられる。

第68図3、4は紡錘車として製作・焼成された土製品である。3は径4.7cm、厚さ1.7cm、重さ44.4gを測り重い。全面にヘラ磨きが施される。4は径4.5×4.3cm、厚さ0.9cm、重さ21.7gである。

第68図1、2は石製の紡錘車である。2は径4.6×4.6cm、厚さ0.6cm、重さは21.0gで両面ともよく研磨されている。石材は泥岩と考えられる。1は一部を欠損する。径は5.0cm、中央での厚さ1.0cm、重さは33.9cmを測る。外面中央に穿孔途中の孔がみられ、紡錘車の未製品と考えられる。外縁に向かい薄くなっているところが他の紡錘車と異なる特徴である。1～5の平均重量は25.9gで円盤状土製品よりやや重い。

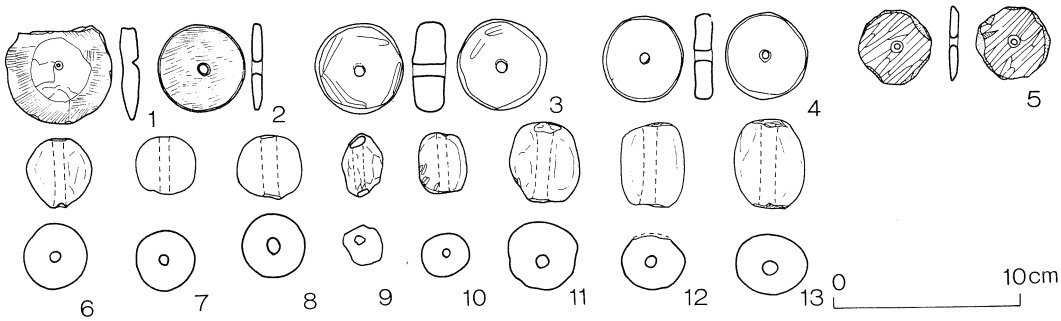
第68図6～13は管状土錘である。形態から6～8の球状と9～13の管状とに分類できる。6は3.6×3.6cm、重さ45.7g、7は3.1×3.2cm、重さ28.7g、8は3.4×3.4cm、重さ31.9gを測る。9、10は小形の管状土錘で、9は長さ3.2cm、径2.1cm、重さ1201g、10は長さ3.2cm、径2.3cm、重さ19.2gを測る。11～13は8、9に比較すると、大形品である。



第67-1図　円盤状土製品実測図

表9　円盤状土製品計測表

挿図番号	縦×横 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	挿図番号	縦×横 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
67－1	3.28×3.1	0.3	5.4	NKY－1460	67－28	5.16×5.04	0.85	25.0	NKY－2040
2	2.98×3.2	1.18	14.2	NKY－2121	29	4.92×4.8	0.68	22.23	NKY－2211
3	3.6 ×3.5	0.7	9.8	NKY－2107	30	5.2 ×4.9	0.78	24.2	NKY－2160
4	3.75×3.4	0.7	9.85	NKY－2269	31	5.44×5.1	0.6	19.5	NKY－2373
5	3.96×3.64	0.6	11.3	NKY－2078	32	4.8×5.23	0.72	23.19	NKY－2166
6	3.83×3.83	0.78	13.64	NKY－2264	33	5.14×5.37	0.72	22.96	NKY－2047
7	3.48×4.05	0.52	9.38	NKY－2151	34	5.3×5.28	1.28	40.0	NKY－2037
8	3.89×3.9	1.22	23.28	NKY－2084	35	5.05×5.8	0.73	26.0	NKY－2212
9	3.98×3.98	0.78	15.3	NKY－2369	36	5.43×4.55	0.88	24.7	NKY－1013
10	4.27×4.28	1.04	20.9	NKY－2371	37	5.1×5.54	1.07	36.1	NKY－2027
11	4.0 ×4.36	0.84	17.01	NKY－2165	38	5.25×5.42	0.9	35.0	NKY－2066
12	4.36×4.28	1.0	24.18	NKY－2174	39	5.73×5.28	0.9	31.6	NKY－2271
13	4.88×4.09	0.82	18.9	NKY－2168	40	5.5×5.2	0.98	32.5	NKY－2372
14	4.5 ×4.22	0.69	19.7	NKY－2167	41	5.3×5.37	0.65	25.3	NKY－ 875
15	4.12×4.4	0.96	25.9	NKY－2367	42	5.93×5.42	1.28	50.1	NKY－2368
16	4.32×4.3	0.72	13.97	NKY－2051	43	6.0×5.58	1.25	56.08	NKY－2262
17	4.3 ×4.24	0.92	21.43	NKY－2161	44	6.1×5.2	0.8	29.21	NKY－2162
18	4.33×4.26	0.8	21.16	NKY－2054	45	6.2×5.5	0.78	32.03	NKY－2065
19	4.13×4.7	0.95	16.0	NKY－2370	46	5.64×6.0	0.8	30.0	NKY－ 905
20	4.8 ×4.7	1.34	34.26	NKY－2305	47	5.78×6.08	1.08	52.11	NKY－2259
21	4.56×4.72	1.54	36.4	NKY－ 752	48	6.2×5.94	0.92	46.0	NKY－2304
22	4.72×4.5	0.6	18.8	NKY－1052 (中期)	49	6.08×6.3	1.08	47.77	NKY－2267
23	5.12×5.08	0.9	25.77	NKY－2169	50	6.92×6.32	1.08	57.17	NKY－2307
24	4.34×4.8	0.79	23.0	NKY－2033	51	6.2×6.38	0.7	34.5	NKY－2268
25	4.65×4.9	0.82	21.8	NKY－2076	52	6.48×6.78	1.03	59.99	NKY－2266
26	4.95×4.68	0.63	21.57	NKY－2122	53	7.82×7.34	0.9	65.08	NKY－2306
27	4.55×5.12	0.61	22.32	NKY－2080	平均 27.6g				



第67-2図　紡錘車・土錘実測図

11は長さ4.3㎝、径3.7㎝、重さ55.2㌘、12は長さ4.5㎝、径3.4㎝、重さ49.8㌘、13は長さ4.7㎝、径3.7㎝、重さ55.3㌘を測る。細分すれば9、10の小形のものと11、12、13の大形のものに分けられよう。

6～13はいずれも漁網用の土錘と考えられるが、このうち6～8の球状のものは土玉である可能性もあろう。9、10と11～13の形態と重量の差は網と魚種の違いによるものと考えられる。

4 土　　笛

第67図、第68図には土笛を集成した。第68図15の表採資料を除くと他はすべて弥生時代前期の層や貝層（第１図）からの出土である。いずれも、玉子の一端を裁断し、前面に２孔二対、後面に２孔一対の小孔を穿った中国の陶塤の流れをくむ[註1]土笛と考えられる。

形態やサイズからａ、ｂ、ｃの三種に分類できるが、破片の中にはいずれにもあてはまらないものもあると思われる。手捏で、10、15、16を除くと外面はヘラ磨きを全面に施したものが多い。

ａ類は、小形品で１、２、３がこれにあたる。１は口径5.6㎝、長さ10.1㎝、径9.5㎝。２は口径6.0㎝、長さ11.0㎝、径8.8㎝を測る。３は１、２よりやや大きい。１、３は器壁が厚い。10、15もａ類の可能性がある。大人の手には持ちにくい。

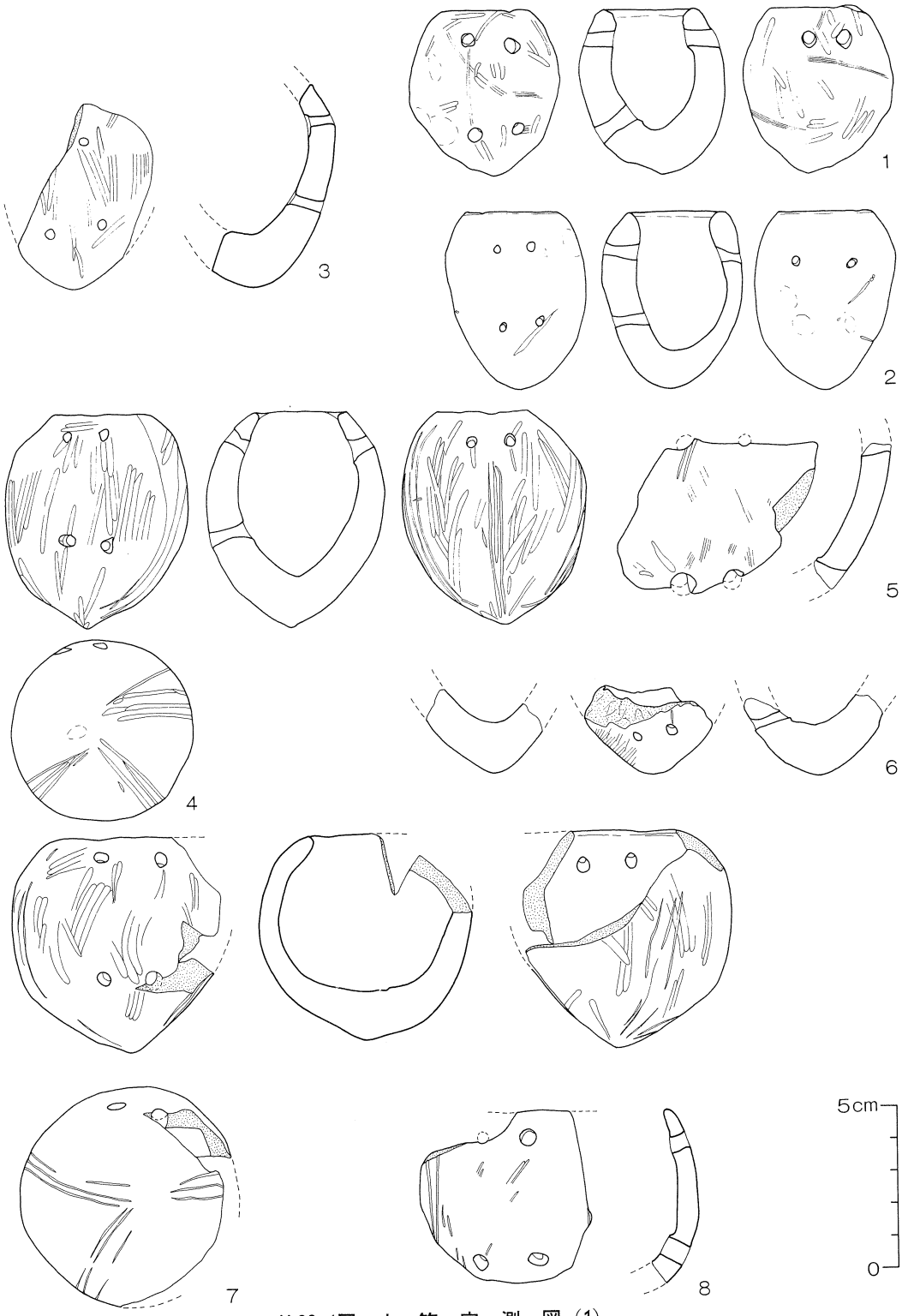
ｂ類は、ａ類と比較するとサイズがひとまわり大きく、長さに対し径が大きく、先端が突起状となるのを特徴とする。４、５、６、７、８がこれにあたり、破片であるが14がこの種に入ると思われる。外面のヘラ磨きが最も丁寧なのもこのｂ類である。４は復元口径6.0㎝、長さ13.2㎝、径11.0㎝、７は口径10.0㎝、長さ13.2㎝、径13.5㎝を測る。

ｃ類は、胴部径に対し長さが長く最もサイズの大きなものである。11、12、13、16がこれにあたり、小破片ではあるが９がこの種に入ると考えられる。11は復元した口径7.8㎝、長さ16.0㎝、径12.5㎝、12は長さ13.5㎝、径11.0㎝、13は復元した口径４.8㎝、長さ17.5㎝、径12.8㎝、16は口径8.0㎝、長さ17.5㎝、径12.8㎝を測る。16は底にあたる部分が厚い。二次焼成、あるいは甘い焼成のためか全体に黒褐色を呈し、もろい。また、内外面とも指頭圧痕が著しい。13は器壁が薄く、口径も小さく、作りは丁寧で淡赤褐色を呈しており、焼成も良好で土笛の中では最も実用品にふさわしい。

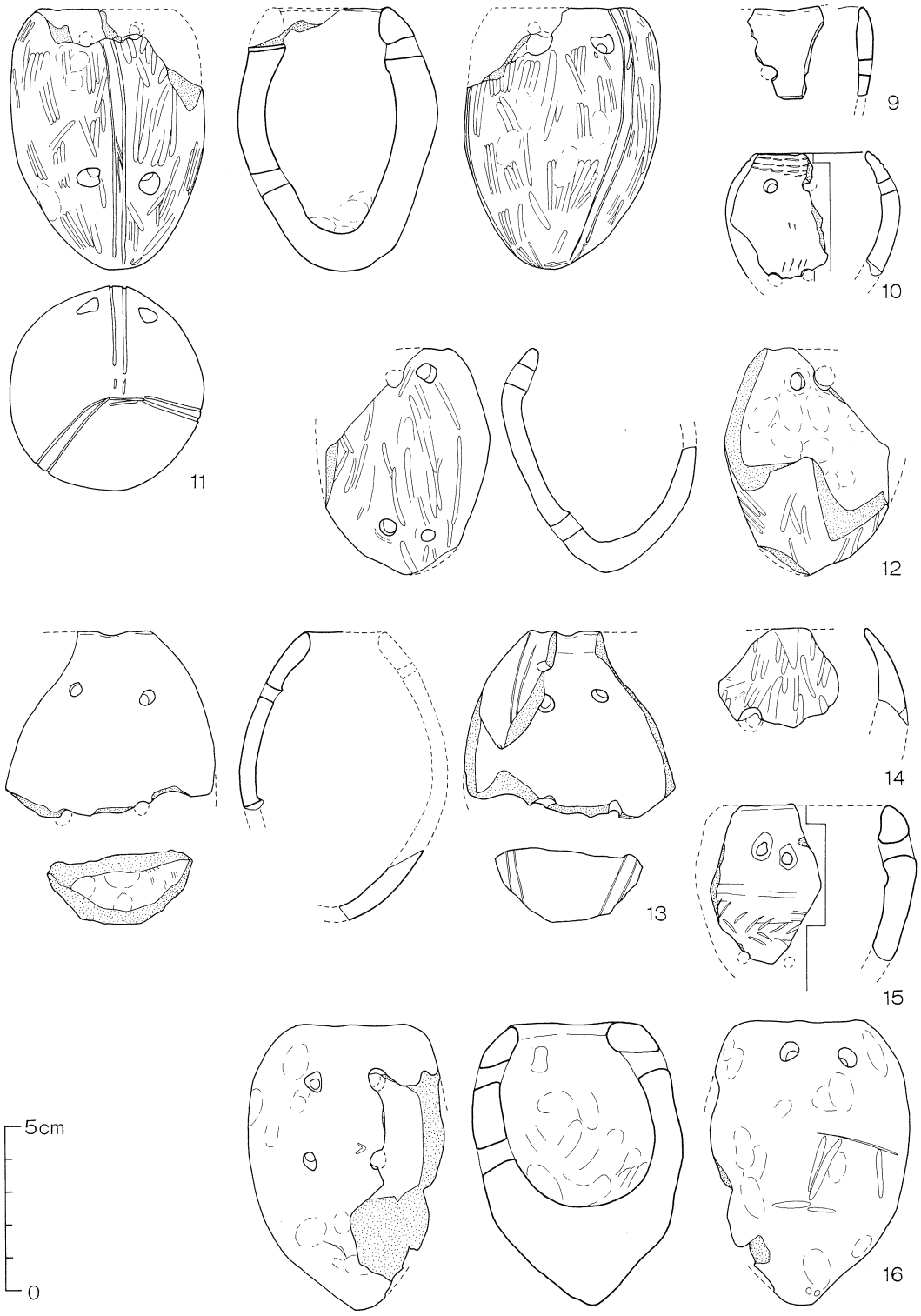
以上の土笛の中には、文様を施したものも相当数みられる。４、７、８、10、11、13、15である。ａ類、ｂ類、ｃ類いずれのものにも、施文のものとそうでないものがある。このうち、４、７、８、11、13は、底より三方向に２～３条を一単位とした浅い沈線を入れている。後述するヒョウタン製容器（第69図２）にも類似した文様が描かれており、木葉文と考えられる。10は復元口径7.2㎝で口唇部に三条の破線を入れているのが認められる15は復元口径11.0㎝で胴部に粗い綾杉状文を施している。

註

国分直一「陶塤の発見」『日本民族と南方文化』金関丈夫博士古稀記念委員会編　昭和51年



第68-1図　土　笛　実　測　図 (1)



第68-2図　土　笛　実　測　図（2）

5　西川津遺跡出土弥生土器の胎土

清　水　芳　裕　（京都大学埋蔵文化財研究センター）

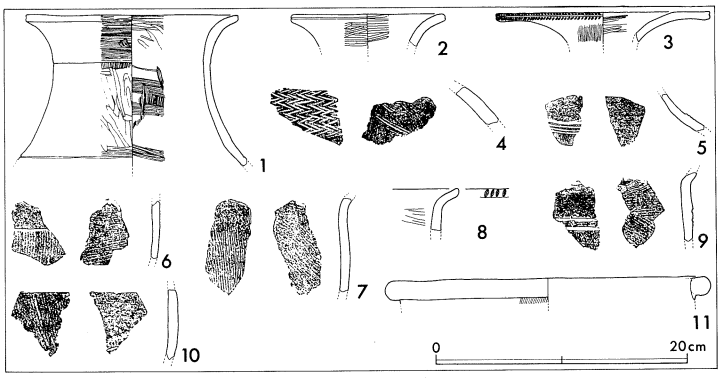
遠賀川式土器10点と擬朝鮮系無文土器１点の計11点につき製作地を同定するための分析をおこなった。分析は胎土に含まれる岩石片および鉱物の名称と成因について分類し、それらの岩石鉱物がいずれの地域の地質構成物と合致するものかを判定する方法をとった。

まず土器片を約３×２㎝の面積で厚さ２／100～３／100㎜の薄片として、これを偏光顕微鏡で調べると個々の鉱物名が、また複数の鉱物の集合であればその岩石名として同定できる。

また、それらの鉱物名の分類とともにそれらの薄片中で占める面積から、それぞれの量的比率をもとめることもできる。地質構成上の特徴として成因の違いを示す岩石鉱物に注目すると、製作地の識別を容易におこなうことができ、とくに単一の岩石からなる離島などの場合では非常に明瞭な結果が得られる。一方、成因を異にする地質構成物が混在する地域では、それぞれ成因の異なる岩石鉱物が含まれる量的な違いも胎土にあらわれてくる。表10はこの種類と量的比較の２点を含めた分類を示すものである。各岩石鉱物の含有量の数値は、胎土に含まれるそれぞれの大まかな比率を示している。つまり４は全体のほぼ１／２以上の量を、これに対して１は微小な結晶として数点だけが認められるもの、さらにこの両者に該当しない量について、比較的多いものを３、比較的少ないものを２として分類している。したがって、量的な比較として４＞３＞２＞１の関係にある。

さて、西川津遺跡の分析試料をみていくと、大づかみにみて、各土器ともに火成岩中の火山性の岩石鉱物と深成岩性の岩石鉱物の２種が混在する。火山性の岩石鉱物は、ここでは融食形の石英、累帯構造を示す斜長石、安山岩、玄武岩類によって、また一方深成岩に属するものは、波動消光を示す石英、パーサイト構造のカリ長石、微斜長石、花崗岩の岩片などによって特徴づけられる。11点の土器の胎土には、この大きく２種の中のいずれかの岩石鉱物が、量の多少は異なるものの含まれている。こうした傾向は、西川津遺跡が立地する地域の地質構成物の特徴を反映しているものと考えてよいであろう。遺跡は現在の沖積地上に立地する。その周辺の地質をみると、西には流紋岩、火山破屑岩などからなる真山やこれをとりまく凝灰岩や砂岩、頁岩などが混在する地質が存在し、東には玄武岩、凝灰岩、あるいは砂岩、頁岩などの混在する一般に松江累層とよばれる各種の地質や、安山岩を中心とする和久羅山などがある。したがって融食形の石英、累帯構造を示す斜長石や安山岩、玄武岩、凝灰岩などの火山岩起源の岩石鉱物が加わる条件は十分に満たされて

いる。さらにこの沖積平野では現地形を形成するまでに土地の沈降や海進などの影響を大きくこうむっているため、対岸の広い部分を占める花崗岩を主とする深成岩起源の岩石鉱物が強く反映していることも事実である。したがってこうした西川津遺跡周辺の沖積地を作り上げている構成物は火山起源と深成岩起元の岩石および鉱物が混在していると考えてよい。この点で11点の土器は、そうした条件のもとで生み出された粘土や砂の堆積物を原材料としたものと考えられ、遺跡周辺で作られたものといえる。ただし土器により、両者の混在の量的な差が大きくみられるものがあることも確かである。その中でも3、5、10、11の胎土には火山岩に属する岩片や累帯構造をもつ斜長石は少量で、深成岩としての花崗岩、パーサイト構造のカリ長石、微斜長石などがはるかに多く含まれるという特徴がある。一方4、6の胎土は逆に安山岩や凝灰岩の岩片など火山岩に属するものが多い。このように胎土に加わる岩石鉱物の量的な面での差は認められるが、これも相対的な一面であり、加わる岩石や鉱物の種類等からみると、その差が土器の材料を採取した地域の差を示すものとする積極的な根拠はない。むしろ土器の原材料の採集が、近い距離での堆積層あるいは場所を異にしたためにそのような現象が生まれたものと考えてよいであろう。



胎土分析資料図

表10 土器中の岩石鉱物

試料＼岩石鉱物	石英	カリ長石 パーサイト	カリ長石 微斜長石	斜長石	黒雲母	白雲母	角閃石	輝石類	ジルコン	カンラン石	ガラス	不透明鉱物	花崗岩	安山岩	石英安山岩	玄武岩	泥岩	凝灰岩
1	4	3		2	1	1	1	1				2	2			2		
2	4	3		2	2	1	1	1	1		1	2	2	2				
3	4	3		2	1		1	1				2	2					
4	3	2	1	2			1	1	1			2		4				2
5	4	3	1	1	1		1			1		2		1	2			
6	3	2		2	1		1	1		1		2		4			2	
7	4	3	2	2	2	1	2					2	2	2			1	
8	4	2	2	2			1	1				2	2		2			
9	4	2		2	1	1	1	1				2	2			2	1	
10	4	2	1	3	1		2	1			1	2	2					
11	4	3		2	2	1	2					2	2				1	

6 木 製 品

第69図～第92図に木製品を掲げた。このうち、第90図106を除いて、すべて弥生時代前期層からの出土資料である。木製品には、漆を使用した装身具類、農耕具、容器類、建築部材等があるが、ヒョウタン製容器もこの項で扱うことにした。

a．ヒョウタン製容器（第69図）

ヒョウタン製容器は2個体あり（カラー図版4、5）、いずれも文様がみられる。1は、発見時に2～3㎝の細片となっていたものから復元実測図を描いたものである。復元した器高は10.8㎝、胴部径8.9㎝を測る。口唇部にあたるところは加工がみられないので、さらに長かったと考えられる。文様はほぼ全面に施されているが、大別すると二つの文様帯で構成されている。上方のものは木葉文と鋸歯文を組み合わせており、その下に幅1.6㎝の無文帯をおいて同心円状の文様を施している。

2は、底部とそれに近い6.2×4.1㎝の破片を残す。底部の中央に1と同様に径1.3㎝の円形の文様を置き、これを中心として上方に文様を描いているが、それは木葉文と考えられる。前述した土笛の中にも、類似した文様を施したものがある。

文様は1、2ともいずれも黒色である。奈良国立文化財研究所の深澤芳樹氏とともに実験をくりかえしたところ、文様は焼き鰻を使用して描かれていることが推定される。このような文様入りのヒョウタン製容器は，弥生時代においては他に例を知らない。

b．装身具（第70図、第71図）

第70図、第71図には、漆を用いた木製装身具を集成した（カラー図版6）。櫛と簪がある。

櫛は木製の籤を10～20本並べて頭部にあたるところを糸で緊縛し、漆でかためたものである。歯部は塗装されていなかったらしく残存するものはほとんどない。漆は黒漆の上に赤漆を塗装したものと思われる。第70図3は頭部の全様をほぼ知ることのできる例で、横4.4㎝、縦4.4㎝、厚さ0.3㎝を測る方形のものである。歯は17本確認される。糸はヨコ方向に34本みえる。4、5、6、7も同様な作りの櫛の一部分と考えられる。第71図もこの種に入れるべき資料と思われるが、ヨコ方向の糸の他にナナメ方向に別の糸で縛った痕跡がみられる。このことは籤の断面が長楕円形をしていることと関係するかもしれない。

第71図10、11、12、13、18は頭部の形を装飾している一群である。このうち、10、11、12、13の4点は、頭頂部を弧状に凹めている。10は幅3.5㎝を測る。頭頂部の緩いカーブの凹みにあわせてヨコ方向に糸と突帯が両面に7条以上認められる。ヨコ方向の糸に直交

する方向に、すなわち、タテ方向に別の糸で緊縛されていることが観察される。両面の突帯は別の籤を弧状に糸で縛り、文様意匠としたものと考えられる。11も同様な技法が頭頂部のみにみられる。12は頭頂部の両端に角状の突起を作り出している。13は頭頂部端のカーブと残存する歯の方向からすると、10～12とは形態が異なるが、全様を推定できるほどの破片ではないので、とりあえずこの種に入れて考えることにした。

第71図18は透かし彫りのある装飾品の頭部である。縦3.7㎝、横3.6㎝、厚さ0.6㎝を測るやや楕円形を呈している。歯は10本である。透かしは、中央に1.9㎝×1.5㎝の玉子形、その周囲に二重に小さな透かしをめぐらせている。櫛の周縁は小さな凹凸で縁取られている。この透かし彫りは、表面的な観察とレントゲン写真による調査の結果、次のような製作技法が判明した（図版86）。まず、第70図３のような方形の頭部を作り、その上に透かし彫りをする文様にあわせて別の籤を縛りつける。その籤と籤との間を透かし彫りする。このような手法による透かし彫りは、今日行われている刺繍の「カット・ワーク」に同様である。ここでは、このような手法を用いた透かし彫りを「カット・ワーク技法」と仮称しておきたい。

第70図８、第71図14、15、16、17も櫛の小破片である。

第71図19は簪である。長さ2.9㎝、厚さ0.4㎝。板を加工し、半月状とし、中央に山形突起を二つ作り出している。その反対側に２本の歯を装着する小孔がみられる。全面に赤漆が薄く塗られている。櫛にみられた黒漆はみられない。第71図12の櫛もこれに類似した意匠であったと推定される。

第71図20は、１本歯の簪、もしくは木鏃であろう。現存する長さは2.4㎝、最大幅0.7㎝、厚さ0.4㎝を測る。櫛と同様に赤漆の前に黒漆を塗装している。

c．農耕具類

第72図～第85図、および第88図の一部は木製農耕具類である。農耕具類の分類は、先に刊行した『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ（海崎地区２）』[註1]に従うことにする。図版76～86。

ミカン割材　第86図80。長さ140.0㎝、幅27.6㎝。

板材　ミカン割材から板状にしたと思われる資料に、第74図25、第84図74、第85図77、78、79がある。25は長さ124.2㎝、幅34.0㎝、厚さ2.4㎝、74は長さ96.6㎝、幅25.2㎝、厚さ3.0㎝、77は長さ72.0㎝、幅27.0㎝、厚さ3.8㎝を測る。これらは広鍬の未成品としてはやや薄いので、田下駄の未成品と考えておきたい。

広鍬A_1類

広鏃で柄つぼが穿たれる隆起を有し、その裏面にいわゆるゲタをつけたものをA類とした。第74図24、第78図36、37、38、39、40、第79図41、42、43、44、第80図45、46、49、50、第82図57、58、59、60、61、62。

24は長さ116.4cm、幅25.6cm、厚さ5.2cm。1枚のミカン割材から4枚の広鏃を作ろうとしている資料である。隆起のある面には4分割するための溝、および隆起となる部分を残し、全面に加工痕がみられる。裏面は2枚の部分にのみ加工痕がみられ、ゲタを削り出そうとしているのが観察される。広鏃A類の製作工程を示す良好な資料である。

36、37、45、46は、24の次の段階を示す資料である。一枚ずつ切断され、全体に加工痕がみられ、隆起もかなり整形され、裏面のゲタの位置も段がつき明確になる。この段階で既に中央あたりで全体がくびれる形を意識した加工がみられる。

41、42、43はさらに加工の進んだ段階のものである。全体に薄く削られ、隆起は舟形が明確になり、頭部や刃部が整えられ、43のようにゲタが完成しているものもある。ただし、舟形隆起への穿孔はまだみられない。41は刃部と両側の縁が一段高くなっているのが特徴である。

38、39、40、44、50は完成品である。いずれも使用のため、破損や刃部が摩耗していると考えられる。38は舟形隆起の両側に方形の小孔がみられる。57～62も完成品であるが、このうち、57、59、60、61はくびれがみられず直線的であるので、形態としては広鏃A_1類を細分できる可能性がある。

広鏃A_2類

ゲタのつかない広鏃をA_2類とした。第76図31、第77図32、33、34、第80図47、第81図52。

31、33、34は広鏃A_2類の未成品と考えられる。広鏃A_1類と比較すると隆起を丸く高く削り出している。また、胴部でのくびれもみられず直線的である。

52はこの種の完成品である。長さ30.0cm、幅16.6cmを測る。舟形隆起はタテ方向に垂れないで丸い。52の場合、舟形隆起の両側に逆三角形の孔が一対と、その外側の縁には凹凸の切れこみが施されている。

広鏃B類

舟形隆起やゲタのみられない広鏃を広鏃B類とした。第75図26、第76図30、第77図35、第80図47。

26は広鏃B類の未成品と考えられる資料である。長さ173.4cm、幅33.2cm。1枚のミカン割材から4枚の広鏃を作ろうとしている資料であるが、さらにもう1枚分存在した可能

性もある。約½が焼成を受け炭化している。柄つぼを装着する方を厚く、刃部を薄くなるよう両面から加工しはじめている。全体に薄い。30は26のような資料から切り離された段階のものと思われるがやや厚い。

35は、26、30に比較すると、長さに対し幅の狭い鍬である。長さ43.4㎝、幅16.8㎝を測る。柄つぼが装着されるあたりはわずかに高くなるのみで、まだ穿孔されていない。47は完成品、もしくは柄つぼ穿孔段階で折れたものと思われる。現存部は長さ35.8㎝。

広鍬B類は、26、30のように幅の広いものと、35、47のように狭いものの二種が存在するものと考えられる。後者は狭鍬B類にすべきかもしれない。第84図75はこれにあたるかもしれない。

以上の他に、広鍬の資料としては、第80図48、51があるが完成品の欠損した一部と思われる。

丸鍬未成品

第72図21は、丸鍬の未成品の最も初期の加工途中の好資料である。長さ106.6㎝、幅29.2㎝、最も厚いところで厚さ8.6㎝を測る。全体に粗い加工痕がみられるが、ミカン割材の原形を未だとどめている。一方の面の端に近いところに25.4×20.6㎝、深さ2.6㎝の加工痕がみられる。この加工痕の位置から、3枚の丸鍬を作ろうとしたことが考えられる。

丸鍬A類

刃部が直線的で横に広い丸鍬。第73図23、第81図53～56、第83図70、71。

23は加工途中の資料で、まだ切り離されていない。長さ77.0㎝、幅26.2㎝を測り、2枚分が残存する。保存状態は良好でない。

53～56、70は切り離された段階のもので、柄つぼの穿孔はみられない。55、56は裏面の加工が始まっている。70は刃部を欠損しているが、柄つぼが穿孔される隆起の周囲に加工痕が顕著である。71は完成品と考えられる。穿孔され、裏面の柄つぼの周辺は粗い加工仕上げとなっている。53～56にみられる隆起の位置、および71の柄つぼの位置は中央より上方に寄っていることが注意される。

丸鍬B類

第83図72は丸鍬B類の完成品である。刃部は丸く30.0×31.0㎝で、うちわの形状を呈す。隆起は高く、柄つぼはほぼ中央に穿たれているのが特徴である。全体に薄い。73はこの種の破片と考えられる。

最近の研究によれば、広鍬と丸鍬との関係は、丸鍬は泥除け具として広鍬に装着して使用されたと考えられている。[註2] 広鍬の形態や舟形隆起の位置と丸鍬のそれらとは関係してい

るのかもしれない。また、第82図63～68の中には鍬の柄が含まれていると考えられる。

田下駄

第88図91、92は田下駄の一部と考えられる。91の材はスギである。[註3] 92は片面にいたみがみられる。第89図97、98も田下駄に関係する資料と思われる。

d．建築関係材

第91図110～113、第92図116～118は建物に使用される柱と考えられる資料である。110は長さ297.4cm、径12.2cmを測る。上頭にのみ二叉部を残し、他は皆、枝は切り落されている。先端には加工痕はみられない。元来、今少し長いものであったと思われる。樹皮が残っていることから、柱の加工途中のものと考えられる。111は柱の完成品であろう。上頭部を欠く。現存部長さ199.8cm、径14.0cm。先端は加工し尖る。先端より50.0cmのところに12.2×6.4cmの長方形の孔が両方から穿たれている。柄穴と考えられる。加工痕が著しく残っている。樹皮はみられない。112は長さ221.6cm、径11.0cm。先端を加工し尖らせている。上頭は二叉部を利用し、使用痕が残る。柱としてはやや短いので、元来、さらに長い柱であったのを杭として再利用したと思われる。113は現存部長さ173.0cm、径17.4×12.8cmを測る。上方は失われている。先端部は尖らず、著しい加工痕がみられる。先端より24.0cmのところに15.8×6.8cmの長方形の柄穴が両方から穿たれている 116は長さ324.0m、径16.0×14.0cmを測る。先端部の形状、加工は113に同様である。上頭は二叉部を残す。先端より25.6cmの位置に11.0×7.4cmの枘穴が両面より穿たれている。117は柱の資料としては最も長く、363.4mを。径は14.8×10.0cm。先端は加工して尖らせている。先端より54.6cmのところに14.8×6.2cmの枘穴を穿つ。上頭は二叉部を残す。中ほどに枝が1か所残されているが、加工途中とは考えられないので、何らかの機能をもたせたものと思われる。枘穴と中ほどの枝のあたりで「S」の字状に歪んでいる。柱の全様を知ることのできる好例でもある。118は長さ352.2cm、径11.6×10.8cmを測る。先端は117のように尖らせている。先端より68.6cmの位置に14.0×6.8cmの枘穴が穿たれている。上頭には二叉部はない。途中の枝は粗く削り落されている。

柱には先端が尖るもの（111、112、117、118）とそうでないもの（113、116)があるが、後者は前者の再利用かもしれない。あるいは、土中の状況によっては、礎板等を敷くなどの処置がとられたのであろうか。また、116、117、118の例をとると、枘穴より先端までの長さは不統一であるが上方の長さはほぼ同じであるので、枘穴は例えば、竪穴住居の土中において柱と柱を結ぶためのものであったと推定される。

第75図27は現存部長さ136.8cm、径5.8cmの杭である。第86図81～85は部材である。いず

れも両端に加工が施されていると考えられる。82は長さ108.2cm、径6.6cmで全様が知られる。83は82にサイズ・形態は同じである。82、83とも全体に入念な加工痕が観察される。81は端部のみに加工が施される他は小枝が切り落されているのみで、径5.4cmの幹をそのまま利用している。

e．弓

第89図99は弓である。現存部長さ66.4cm。径2.6cm。

f．漁撈具

第90図100、101はタモ枠と考えられる。

g．容器類

第90図102、103、104、106、107、108、109は容器類、およびそれに関係する資料である。表面的な観察では、いずれも環孔材が使用されていると考えられる。

102は透かし彫りを施した把手を有する鉢である。これを柄杓ではなく鉢としたのは、①高台が削り出され安定している、②把手は横幅が広く片手では握りにくいこと、③把手に透かし彫りが施されていること等の理由からである。器部は口唇部の一部を欠くが、16.4×18.2cm、器高9.6cmを測る。把手部は長さ8.8cm、最大幅7.6cm。器部に近い方が幅が少し狭くなり、先端は大きく広がる。器部に近い方に2か所、広がった先端部に3か所、三角形の透かし彫りがみられる。高台も器部の形にあわせ7.6×6.8cmと楕円形である。器部の外面胴部中ほどにも一条の幅1.2cmの突帯がめぐり、それは把手部につながっている。したがって、把手のついた輪に、高台付の鉢を入れたような感をいだかせ、全体の形状は鳥が静止している姿を連想させるものである。

103はコップ状の容器である。口径は8.0cmに復元される。外面口縁部に近いところに数条の沈線がめぐる。

104、108は浅鉢、または盤と考えられる。108の復元口径は47.4cm 104は破片であるが、少なくとも径は50cmを越えるものであろう。

109は長さ2.8cmを測る不明の木製品であるが、ここでは例えば、ヒョウタン製容器の栓を想定しておきたい。

h．不明木製品

第90図105は陽刻文を有する反りのある環孔材を用いた木製品である。現状での長さ28.6cm、幅5.0cmを測り、反りのある一端は尖る。一面に流水文の一部が陽刻されている。弥生時代後期層からの出土であるが、便宜上、本報告書で扱った。

第76図29はミカン割材の残りと思われる。

第82図69は径13.4×14.0cm、中央での厚さ3.0cmを測るが、珍しくクリ材を使用している。[註4]

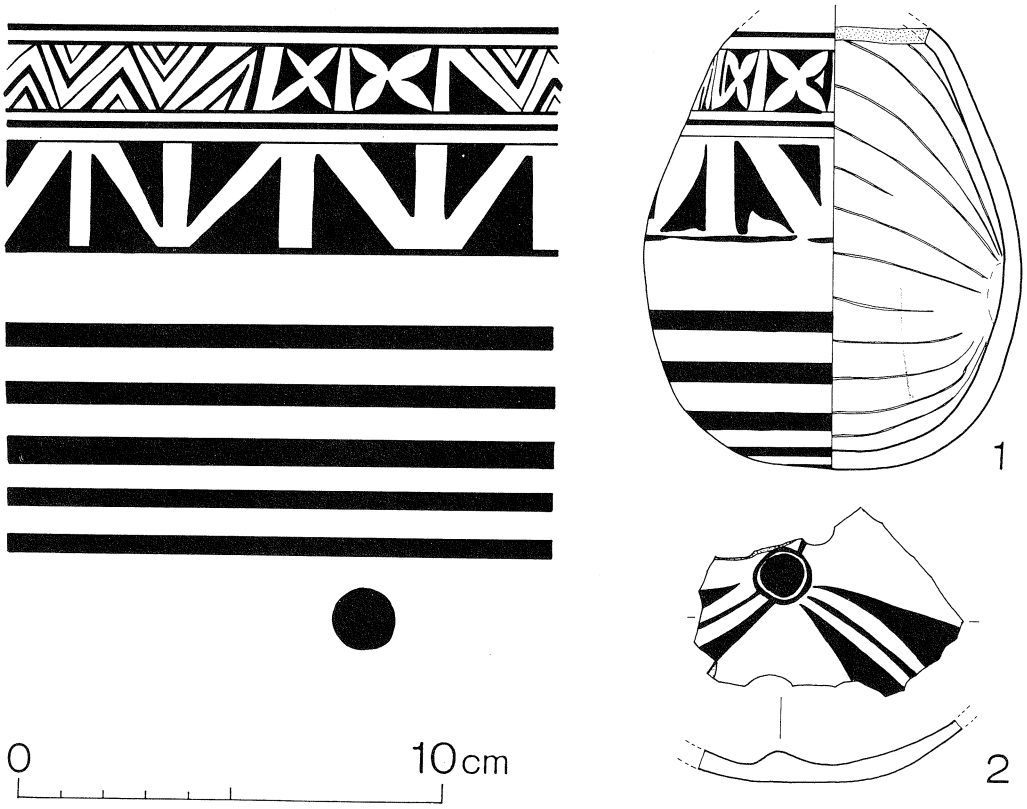
第84図76は細く薄い板状の木製品。第91図114、115は、加工痕のみられない孔がみられる。

i．工具類

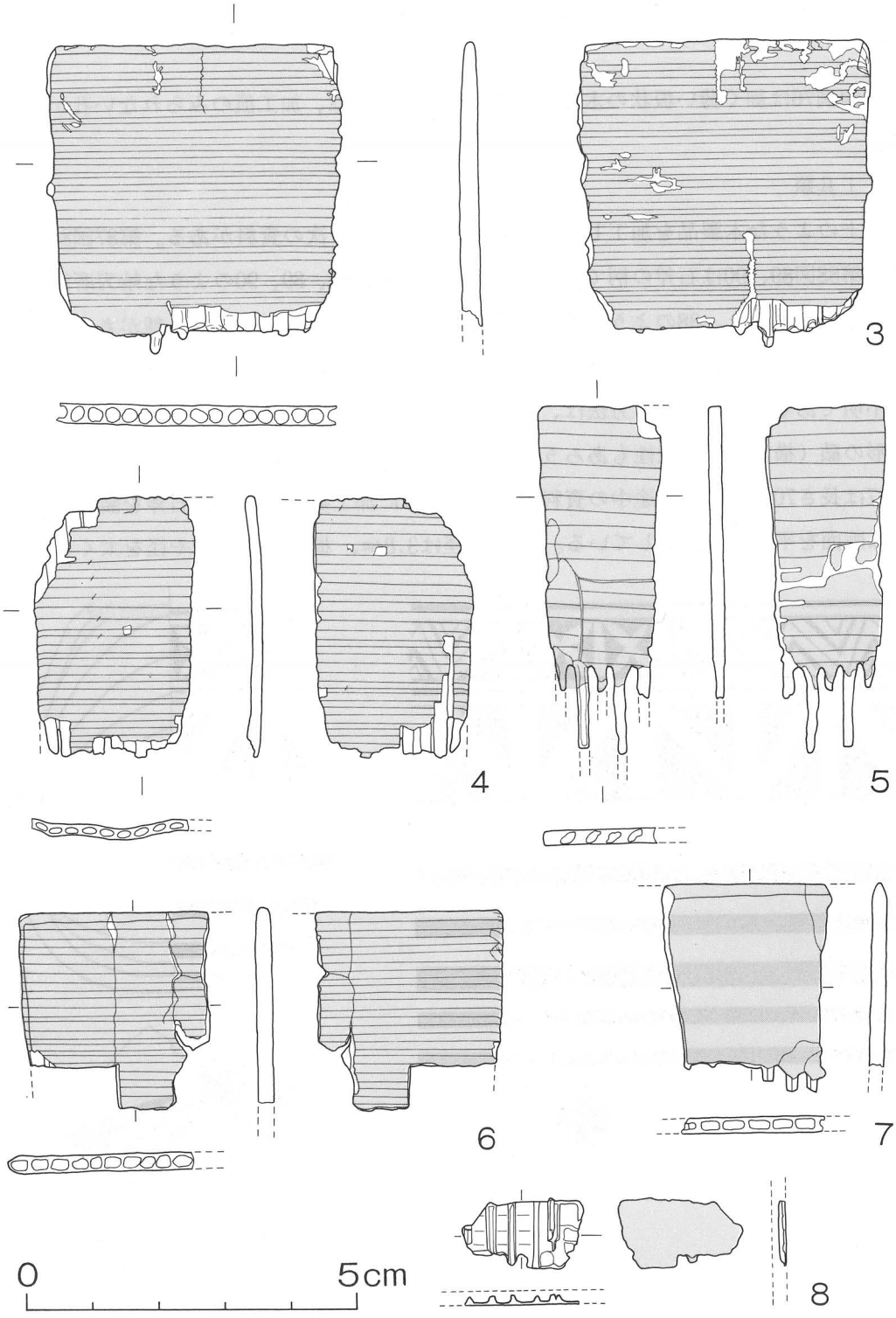
以上のような木製品を加工したと思われる道具には、次の資料がある。第87図86、87、88、第88図89、90は石斧の柄である。これらは、86、87、89、90のような蛤刃磨製石斧が装着されるものと、88のように扁平片刃磨製石斧[註5]が装着されるものの二種がある。

86は長さ81.0cm、最大径11.8cm。樹皮を取り除いた後に、一方から削り始めている。材は不明であるが、木取りの方法は、明らかに石斧の柄と判る87、89、90とは異なるので、大形の砧（横槌）の可能性もあろう。

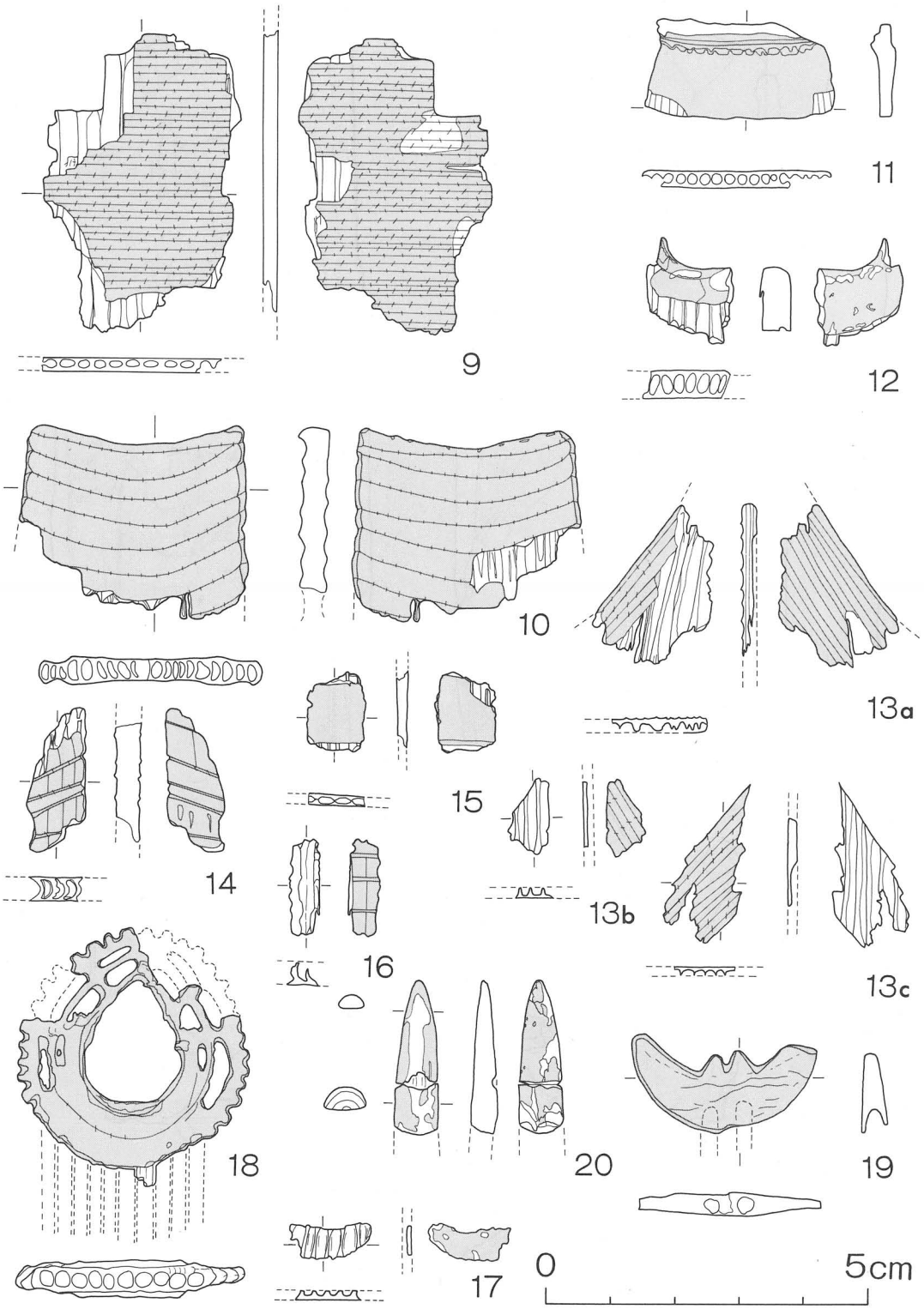
87は長さ70.6cmの加工途中の資料である。全体に加工痕がみられ、石斧を装着するところは両面を平坦に削り出している。握りの径は3.8cm、握りの端はやや径を太くしようと



第69図　木　製　品　実　測　図（1）

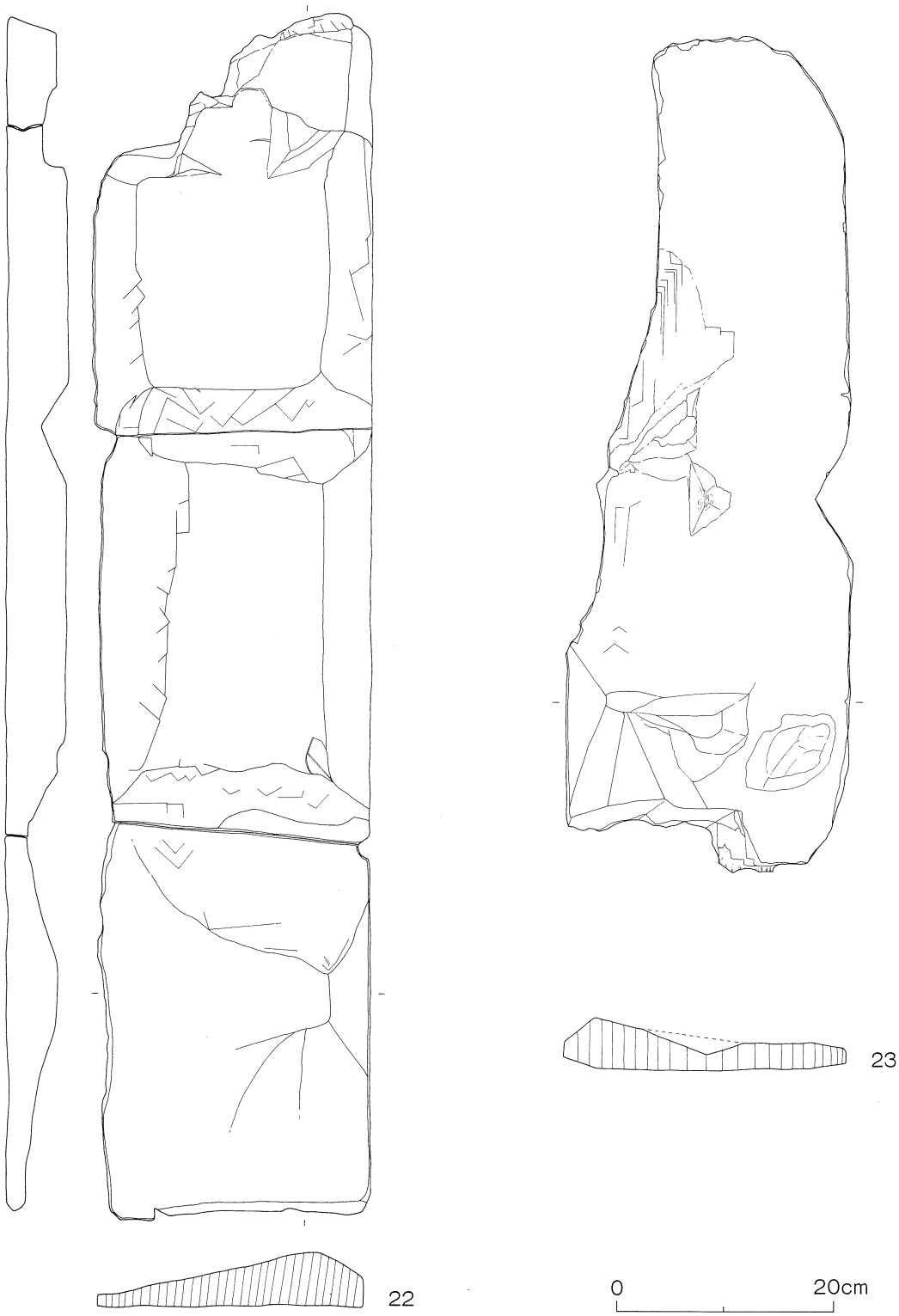


第70図　木　製　品　実　測　図（2）

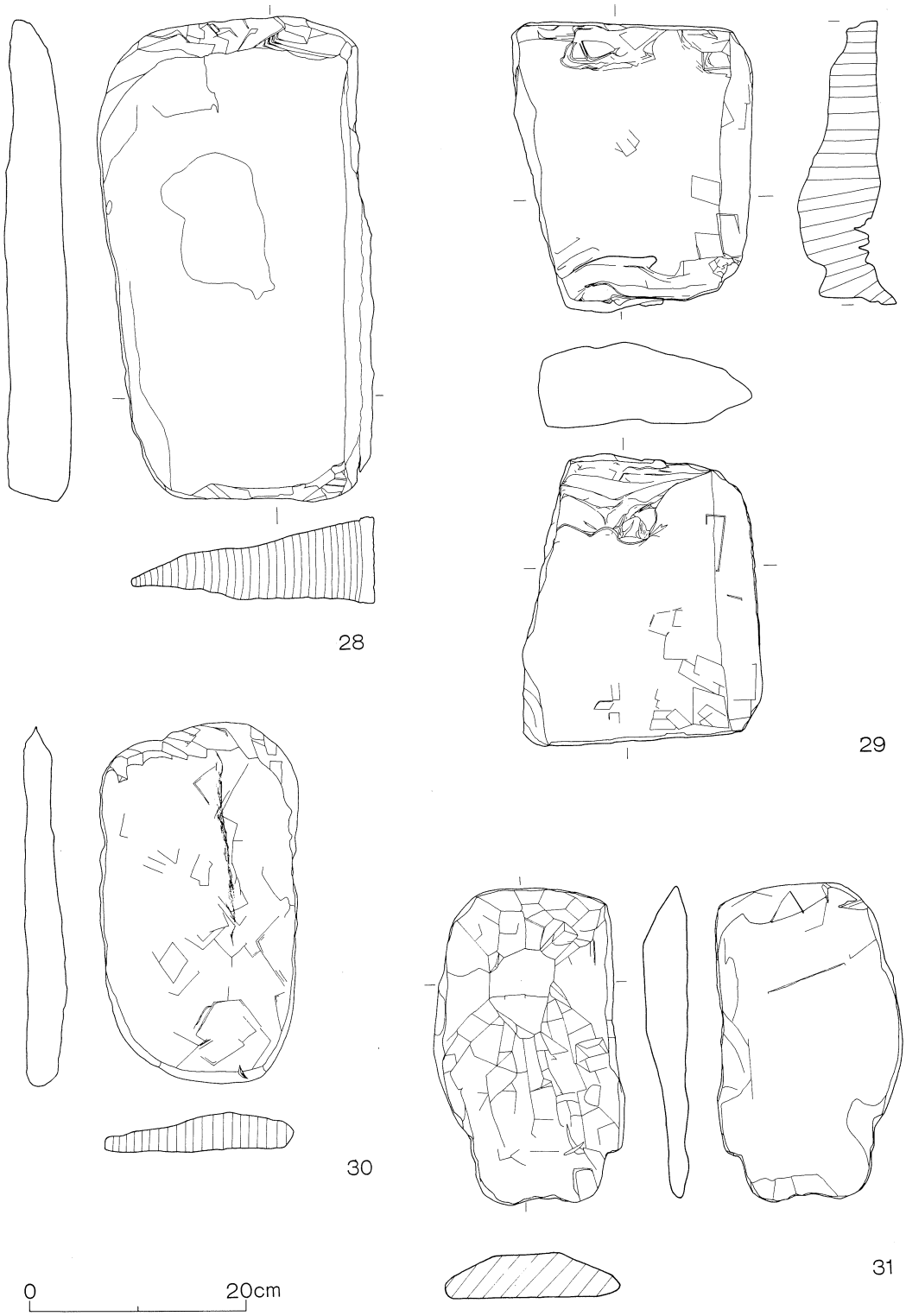


第71図 木 製 品 実 測 図 (3)

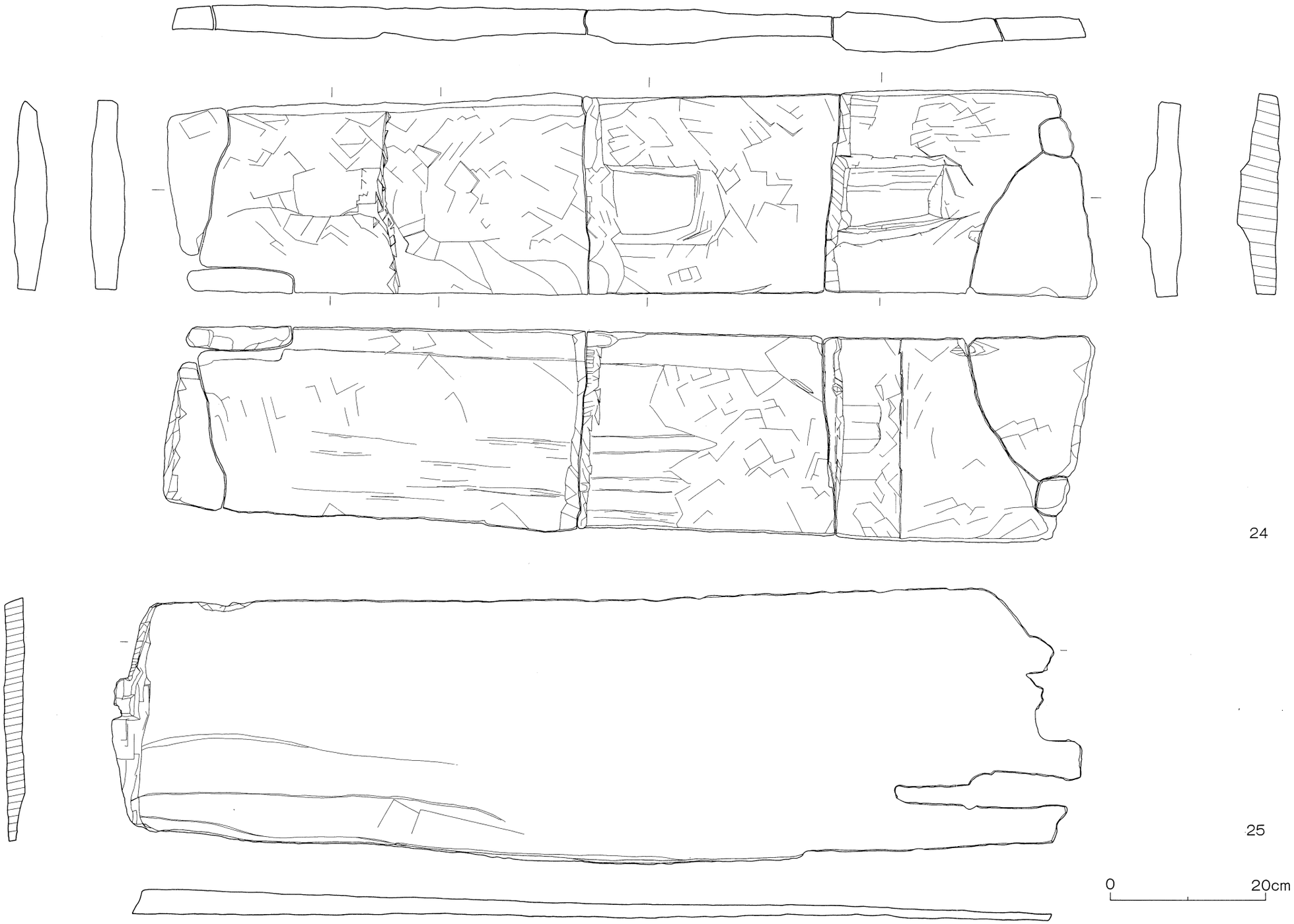
第72図　木　製　品　実　測　図（4）



第73図　木　製　品　実　測　図 (5)

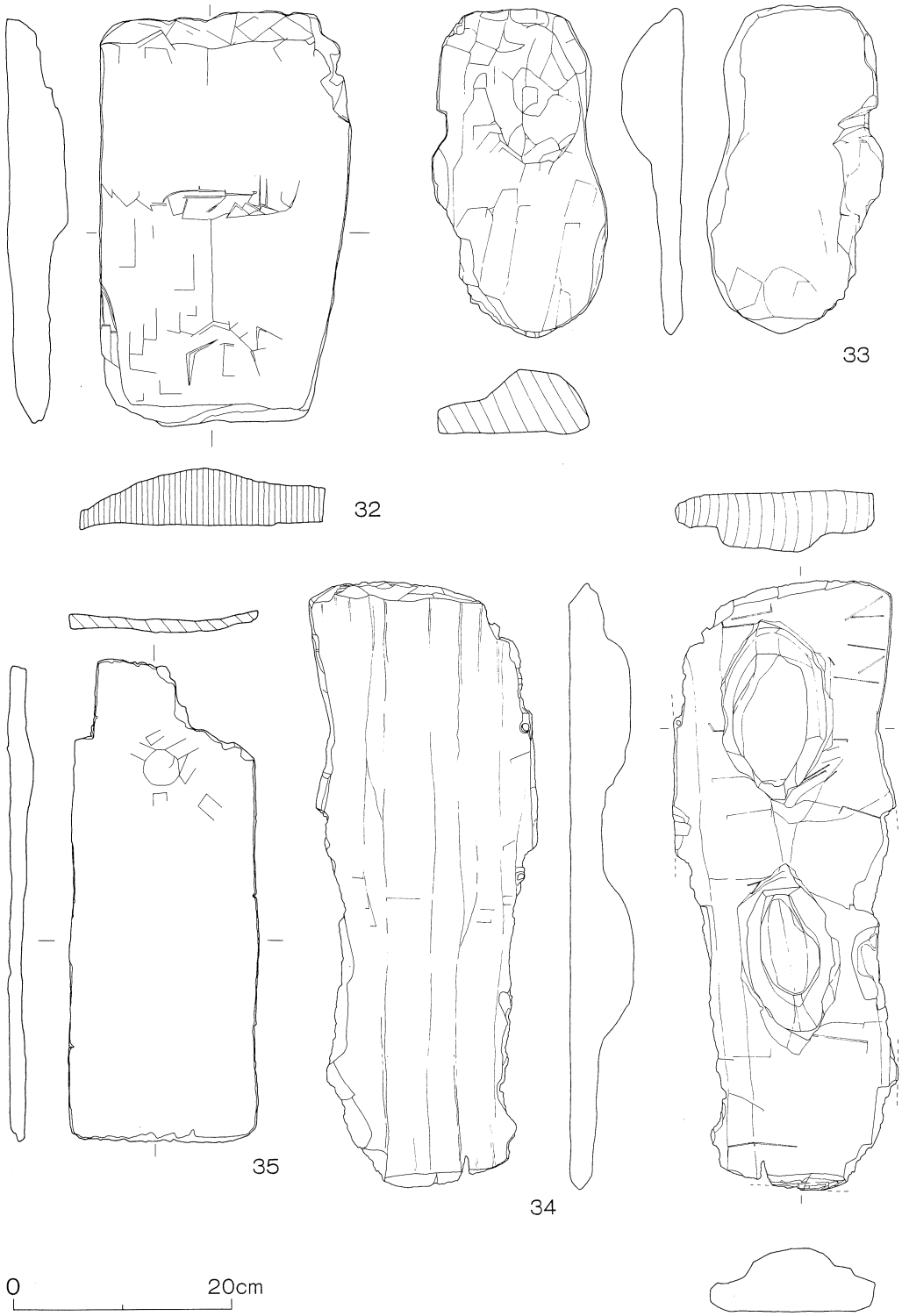


第74図　木　製　品　実　測　図（6）

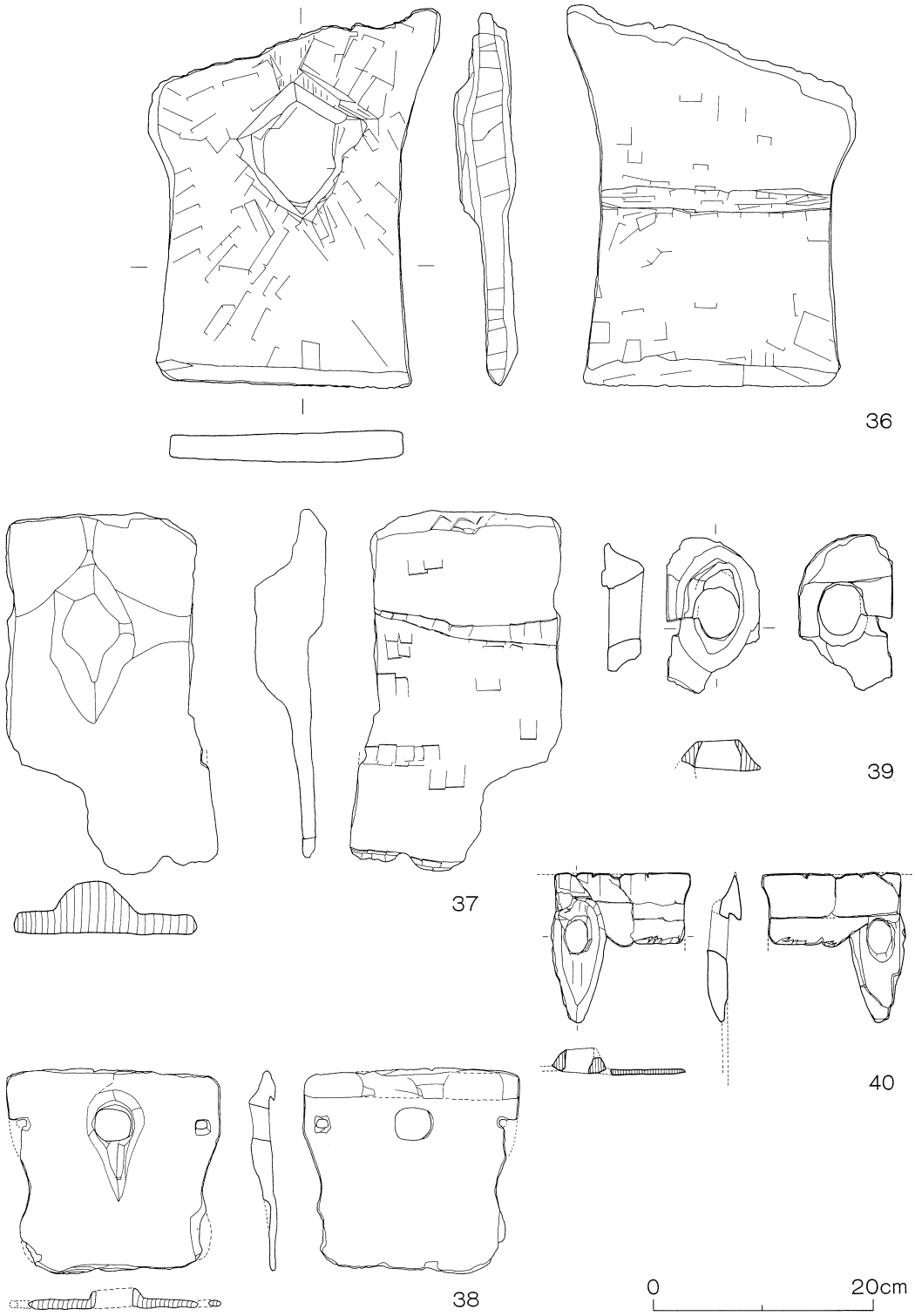


第75図　木　製　品　実　測　図（7）

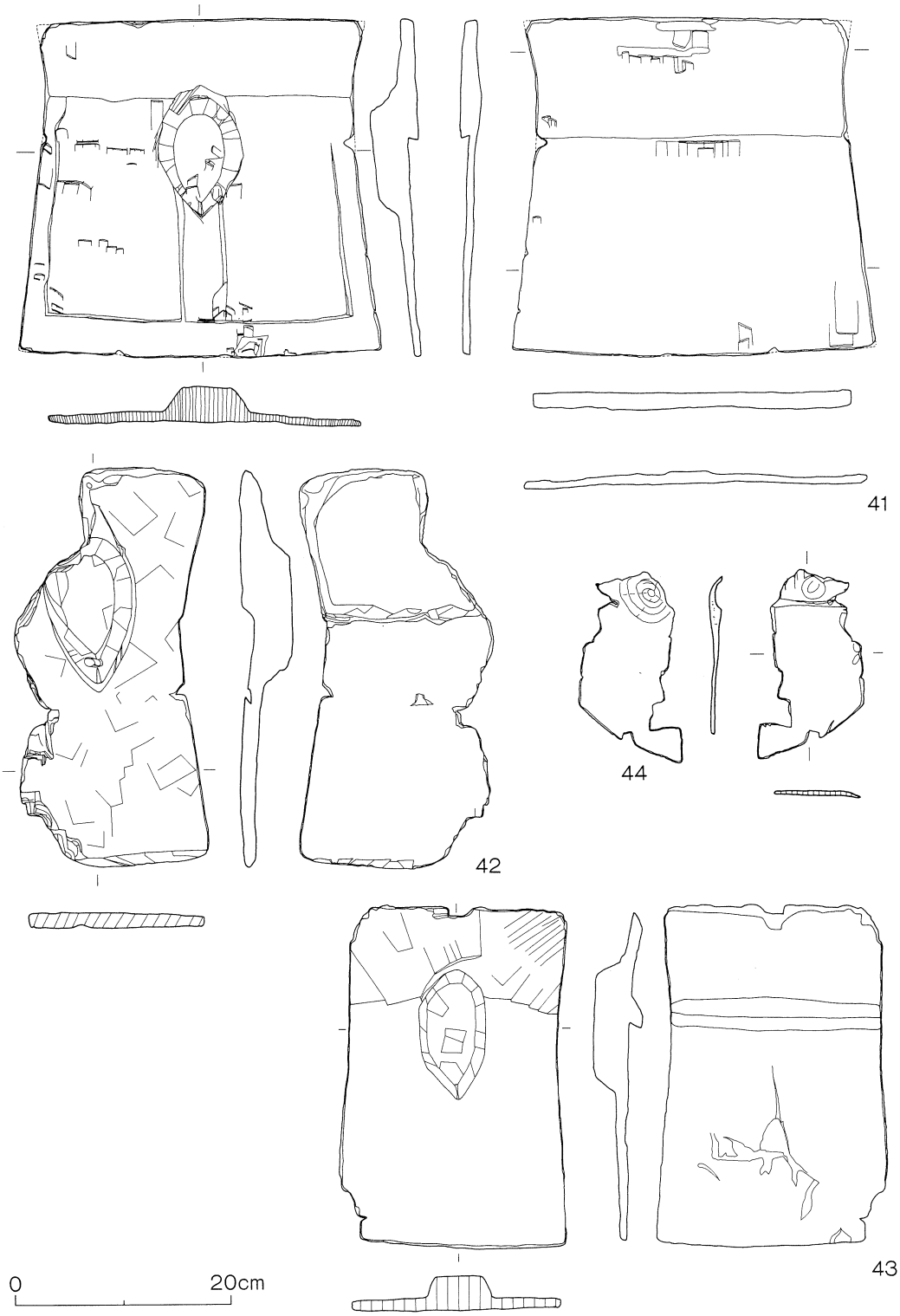
第76図　木　製　品　実　測　図（8）



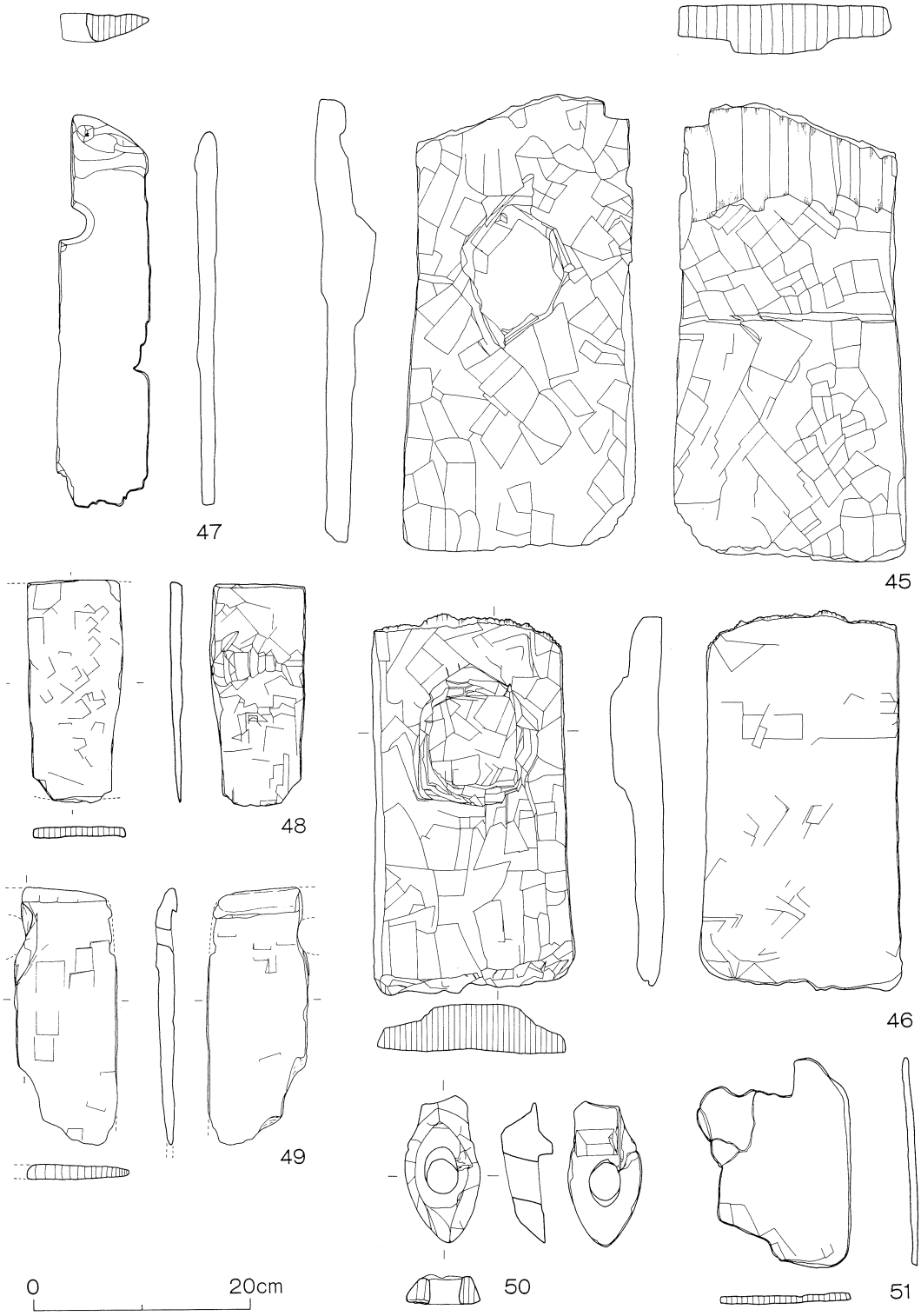
第77図　木　製　品　実　測　図（9）



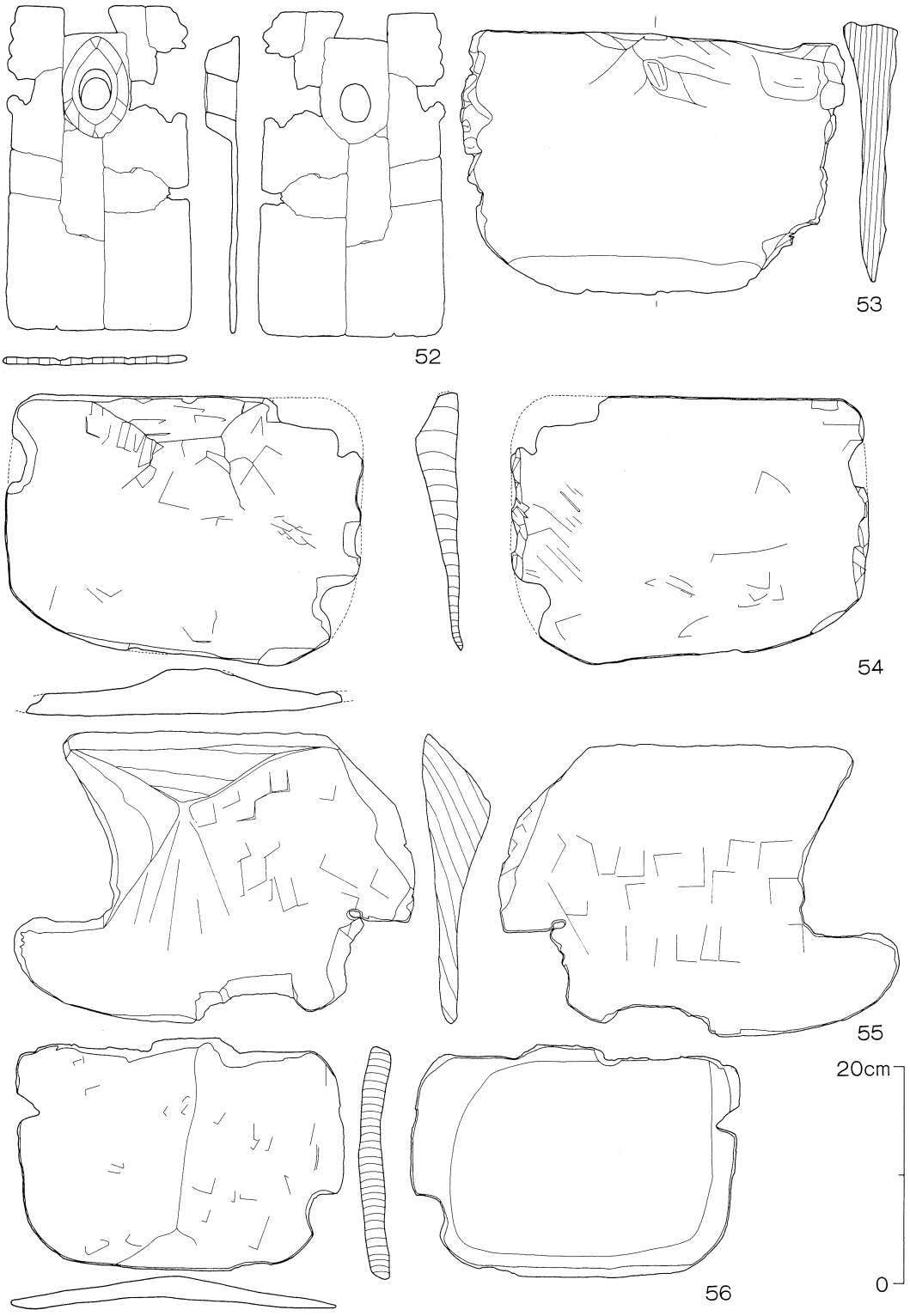
第78図　木　製　品　実　測　図（10）



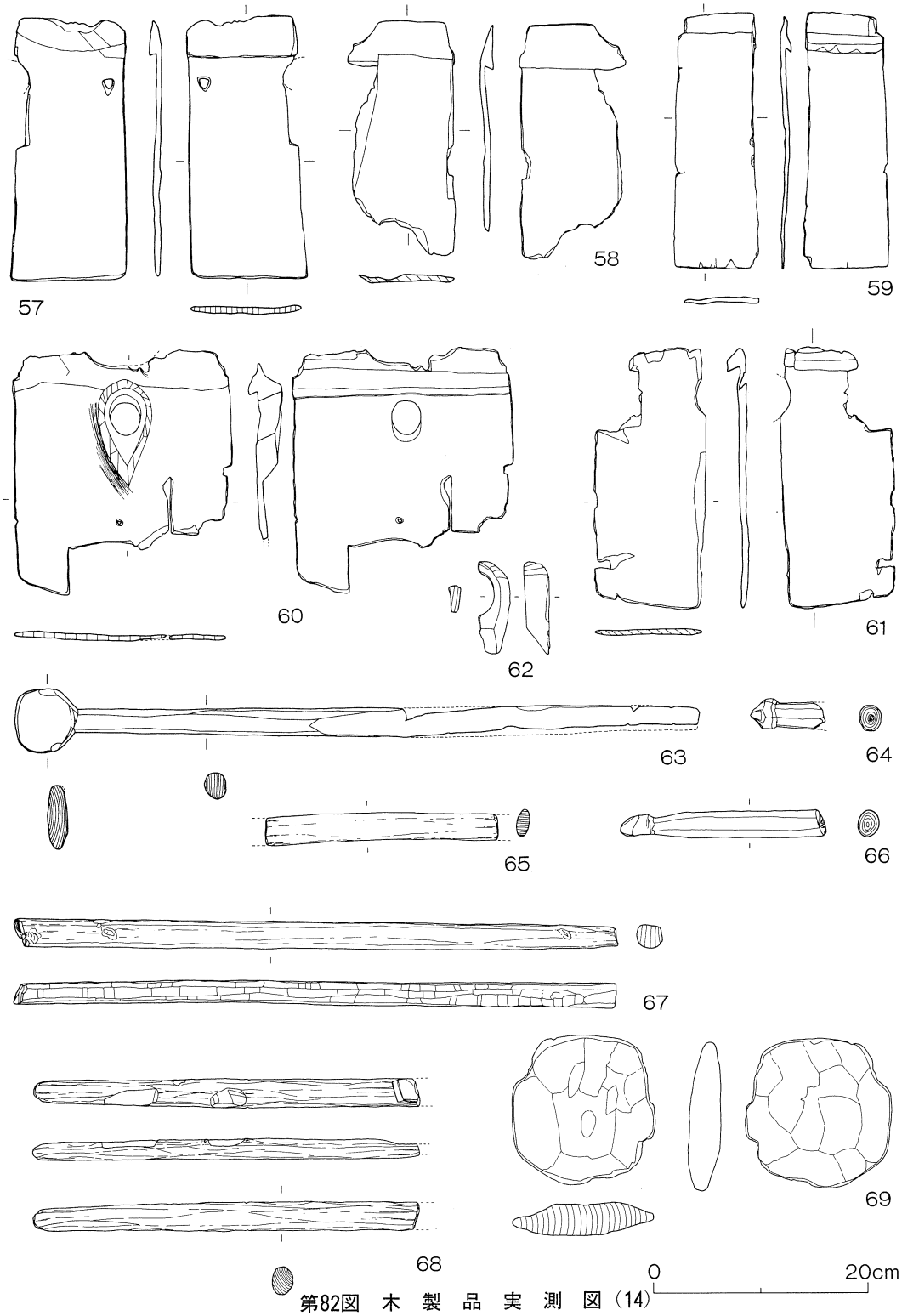
第79図　木　製　品　実　測　図（11）



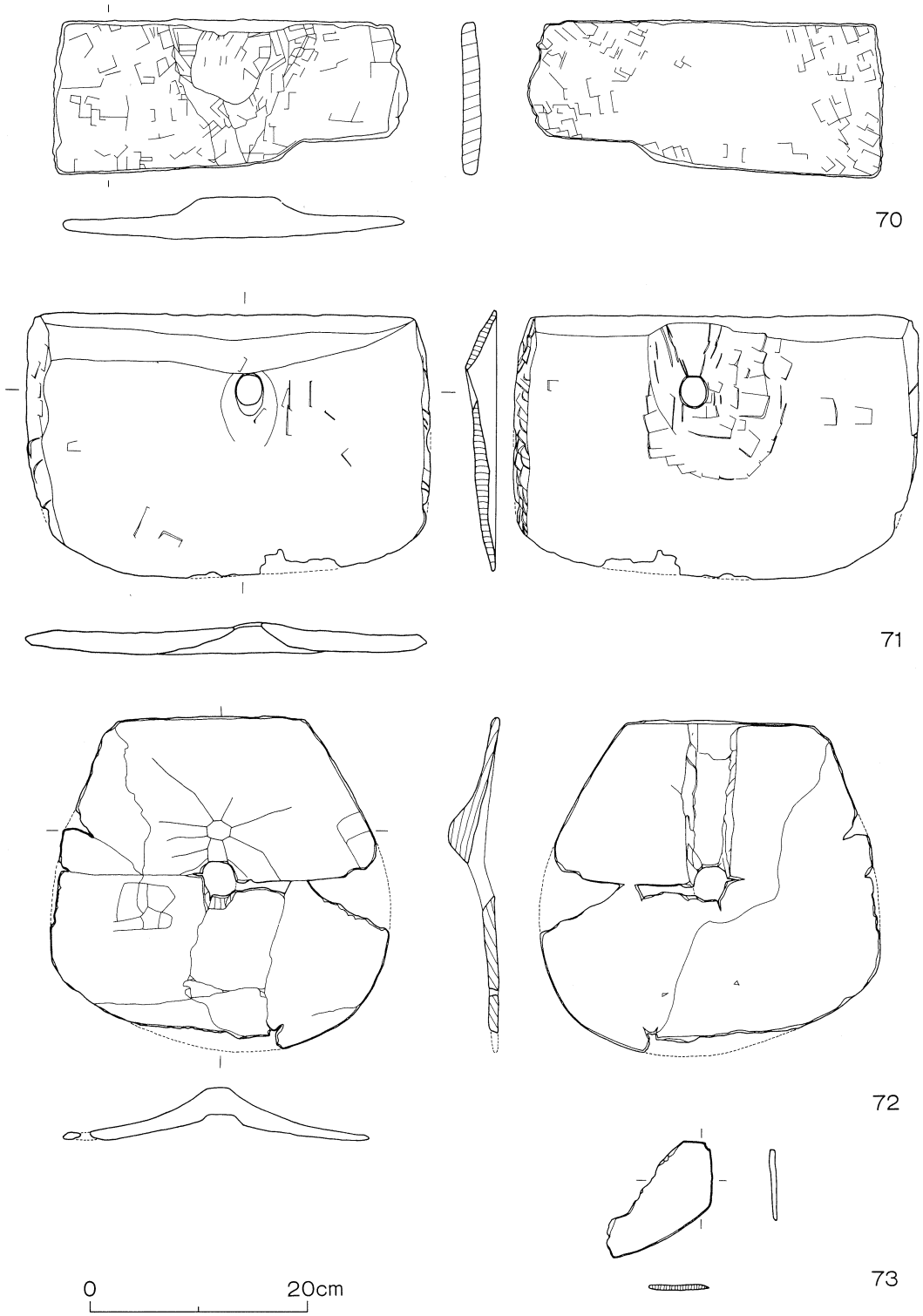
第80図　木　製　品　実　測　図（12）



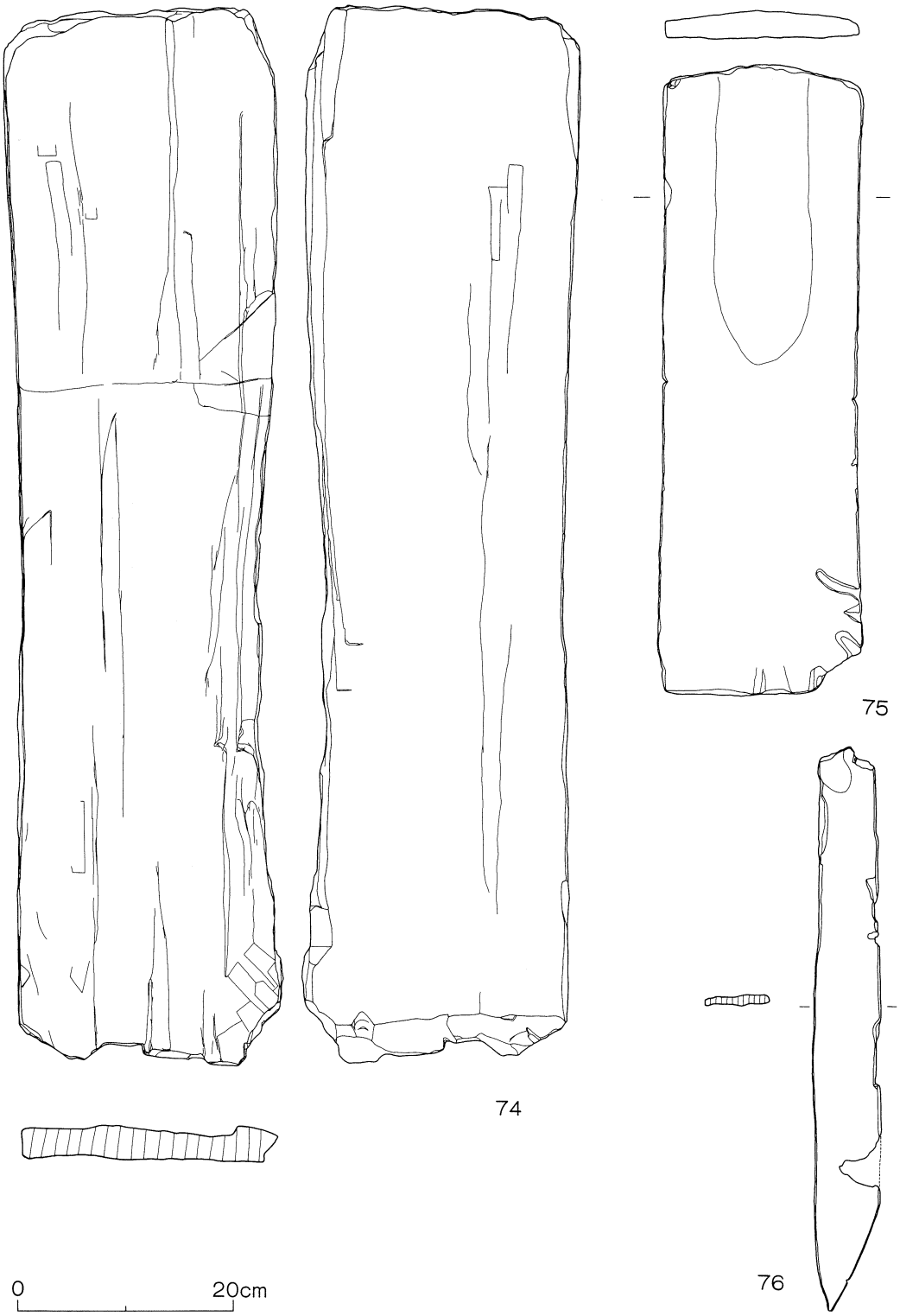
第81図　木　製　品　実　測　図（13）



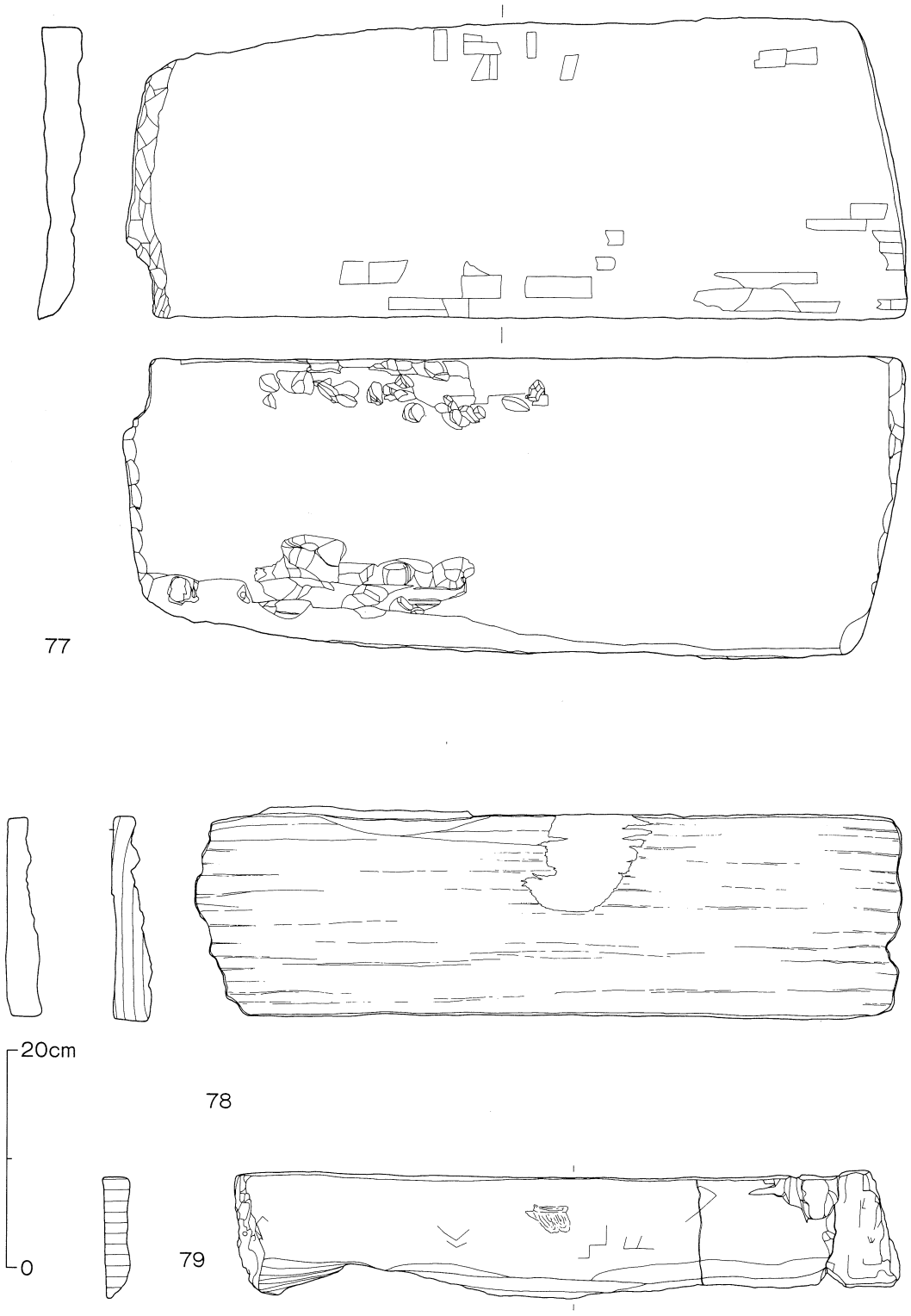
第82図　木　製　品　実　測　図（14）



第83図　木　製　品　実　測　図（15）



第84図　木　製　品　実　測　図（16）



第85図　木　製　品　実　測　図（17）

する意識がみられるが、より加工の進んだ資料といえよう。

90は長さ57.4cmの完成品である。石斧が装着される孔は6.4×5.2cm。握り部の径は3.2cmを測る。石斧の装着される平坦部に対してややナナメに穿たれている。アカガシを材として用いている。[註6]

88は扁平片刃石斧用の柄である。一部を欠くが、完成品に近いものと考えられる。幅約2.0cmの石斧を装着するための枘がみられる。材は散孔材を用いている。また、第82図63～68の中にはこの種の石斧の柄も含まれていると思われる。

g．その他

木製品と関係する遺物として、図版85に示したような桜の樹皮や蔓状の植物がある。

註

1　内田律雄『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ（海崎地区２）』島根県教育委員会　昭和63年３月

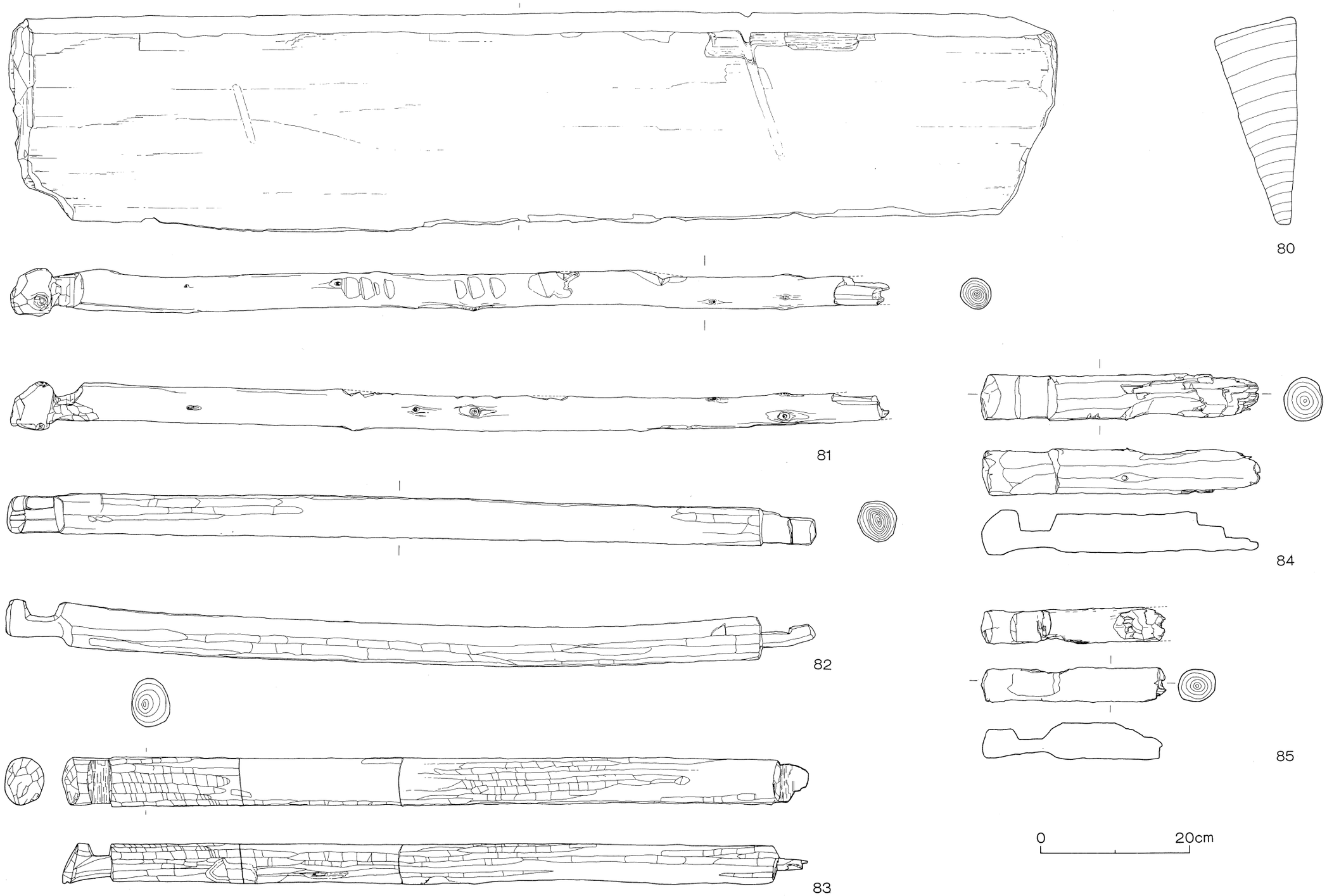
2　黒崎直「西日本における弥生時代農具の変遷と展開」『日本における稲作農耕の起源と展開』日本考古学協会静岡大会実行委員会　昭和63年10月

3　渡邊正巳「松江市西川津遺跡出土木製品の樹種について」『朝酌川 河川改修工事に伴う 西川津遺跡発掘調査報告書　（海崎地区２）』島根県教育委員会　昭和63年３月

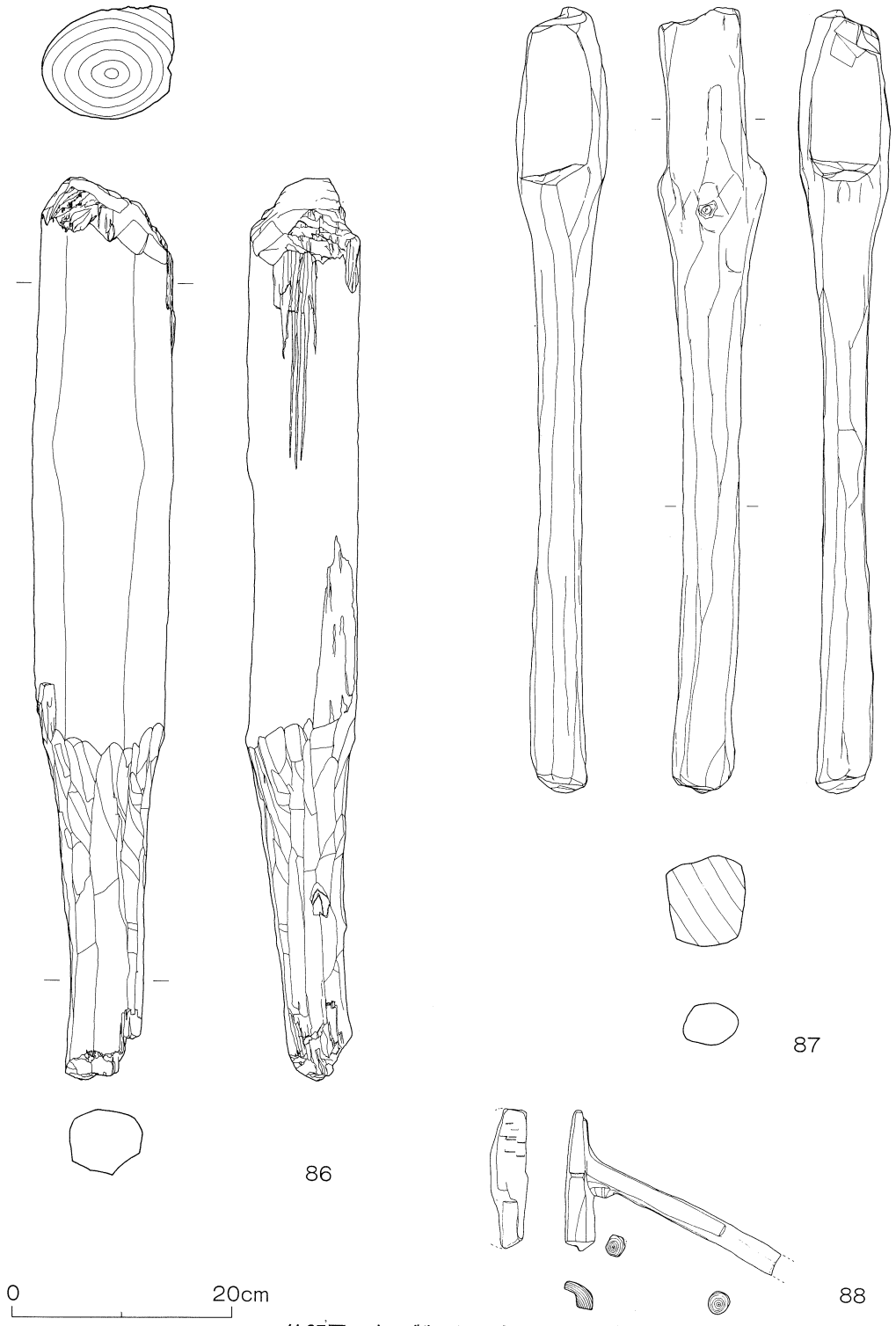
4　註３に同じ。

5　註１に同じ。

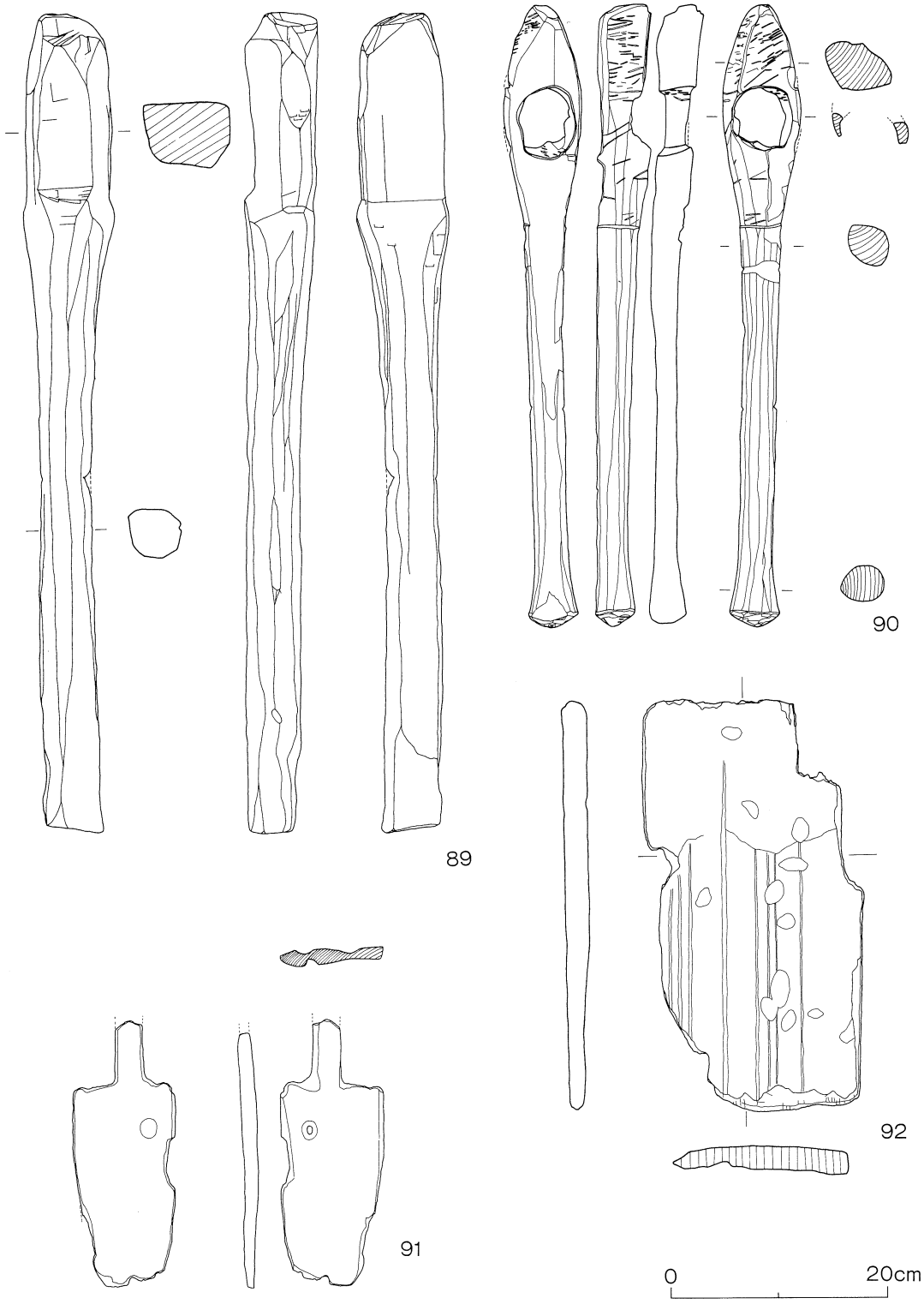
6　註３に同じ。



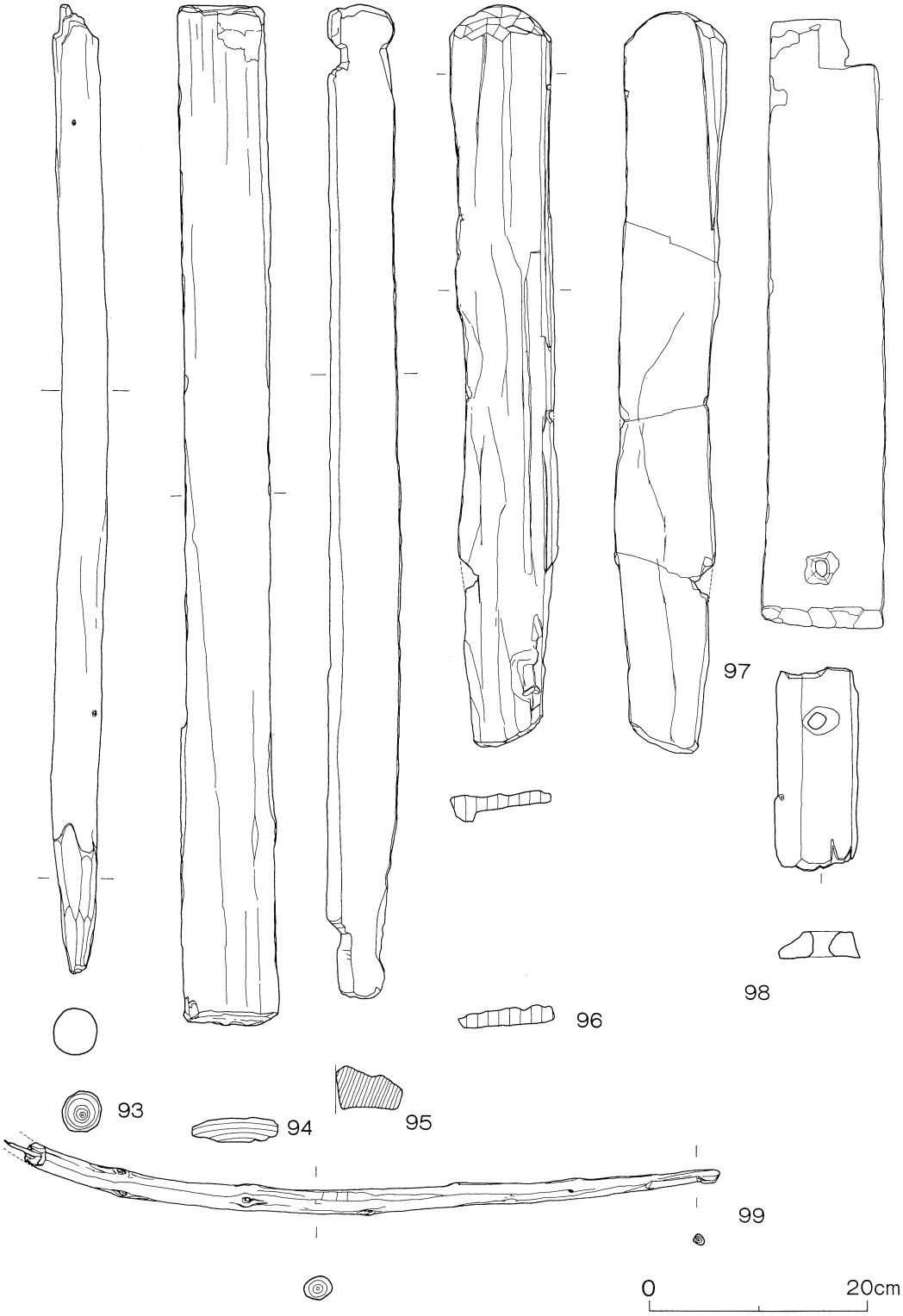
第86図　木　製　品　実　測　図（18）



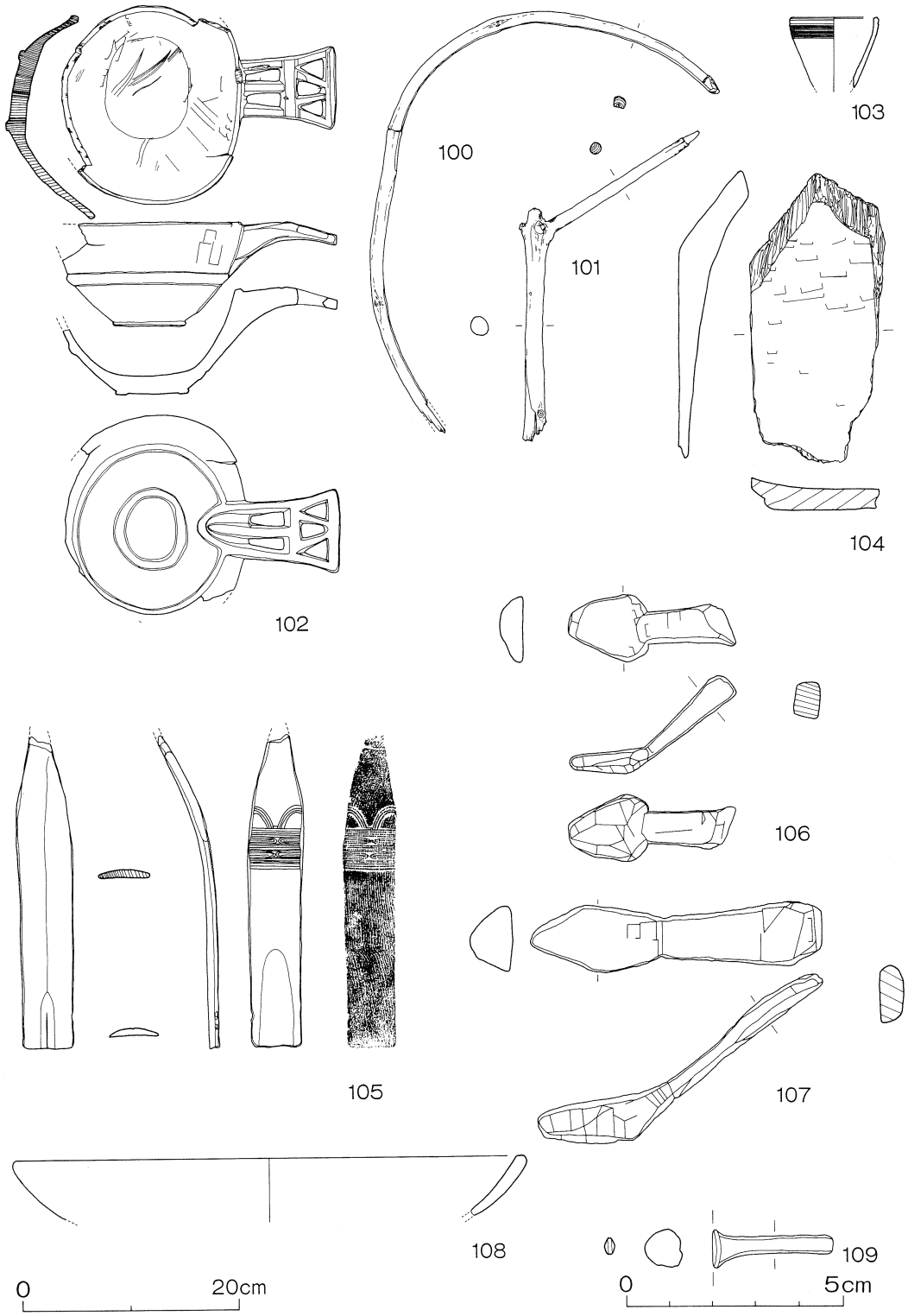
第87図　木　製　品　実　測　図（19）



第88図　木　製　品　実　測　図（20）

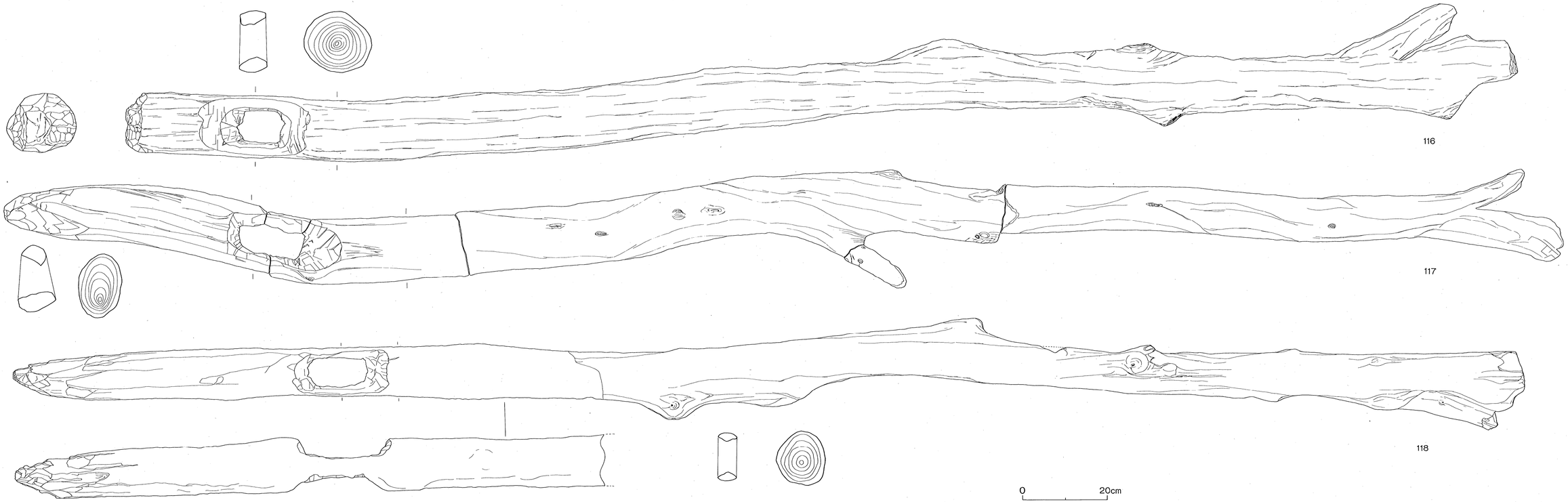


第89図　木　製　品　実　測　図（21）



第90図　木　製　品　実　測　図（22）

第91図 木 製 品 実 測 図 (23)



第92図 木 製 品 実 測 図 (24)

7　木葉紋と流水紋とからみた西川津遺跡

深　澤　芳　樹（奈良国立文化財研究所）

土器はいうにおよばず、木器、石器、骨角器それに金属器など、多様な素材からなる様々な道具が、西川津遺跡ではきわめて豊富に出土している。このため、たとえ遺物に限っても幾つもの視点からこの遺跡を検討することができる。ここではこのうち、当遺跡で出土した遺物に描かれている、木葉紋（このはもん）と流水紋という紋様に着目したい。というのは、これらの紋様はここ数年来興味をもって追いかけまわしているので、わたくしにとって他に比べて圧倒的に馴染みのあるものであることもあるが、実は西川津遺跡で出土した資料のなかに西日本の前期弥生社会を考えるうえで、いわば切り札ともなるきわめて重要な資料が含まれているためである。

まず資料１つ１つについて観察結果を明らかにしておこう。なおこれまでに西川津遺跡で出土した木葉紋や流水紋が描れた土器には、赤い塗料を塗った痕跡はない。

（１）は海崎Ａ－６区青灰色砂レキ層（弥生前期層）から出土した、壺形土器の頸部から胴部にかけての破片。段を頸部と胴部をわける区分紋様とし、篦描沈線を頸部に２条、胴部に１条めぐらす。篦描沈線はどれもみなミガキの後で描いているので、太いが浅い。段の部分には、普通のミガキを施した後に、長さが４cmぐらいでかなり重複させながらひくのを特徴にする縁取沈線を加えている。刺突紋を段と胴部の沈線との間に施す。この下に、篦状工具で連続型か並列型の無軸木葉紋を描く。直線紋→縦の区画線→弧線の順に描いている。

（２）は海崎ハ－２区貝層Ｂ（弥生前期層）から出土した、壺形土器の胴部上半かとみられる破片。篦状工具でミガキの後に並列型無軸木葉紋を描く。篦描沈線はどれも細く浅い。横の区画線→縦の区画線→弧線の順に描いている。

（３）は海崎Ｃ－６区トレンチ（弥生前期層）から出土した。ヒョウタン製の容器の外面に、まさに黒い焼絵風の彩色表現で紋様を描いている。残った部分の最上段には、放射型無軸木葉紋を２つと、三角紋と山形紋をめぐらす。この下段には、連続型無軸木葉紋がめぐる。さらに直線紋が５条、最下段の中心に丸を描いている。この容器には特殊な方法で２種類の無軸木葉紋が描かれていて、どちらの木葉紋も木葉形の輪郭線が閉じていない点に特に注意しておきたい。

（４）は西川津遺跡1980年調査区から出土した、壺形土器の頸胴部の破片。段を区分紋様とする。ここには縁取沈線はない。篦描沈線はどれもみなミガキ後に描く。頸部に縦軸木

葉紋を描く。縦の区画線を入れこれに沿って外側から順に弧線を描く。それから段に沿ってやはり外側から弧線を描いていったようだ。

（５）は海崎Ａ―５区黒灰色微砂粒層（弥生中期層）から出土した、壺形土器の胴部上半かとみられる破片。木葉紋にせよ、直線紋にせよ、陰刻表現の紋様はすべて、貝殻の縁を押しあてた貝殻施紋によっている。ミガキは破片の全面に認められる。ミガキを施してから紋様を描く。木葉紋は，縦軸で、軸線を入れてから弧線を描いている。

（６）は海崎北側排水溝（弥生前・期層）から出土した、壺形土器の頸部から胴部にかけての破片。胴部でもっとも張った部分、すなわち胴部最大径部の３条の直線紋が篦描きなのを除けば、上下３段からなる縦軸木葉紋はすべて貝殻施紋によっている。胴部最大径部の篦描直線紋→ミガキ→貝殻による直線紋→貝殻による縦の区画線→貝殻による弧線の順に描いている。

（７）は海崎Ｂ―５区土層観察用サブトレ内青灰色砂層（弥生前期層）から出土した。ヒョウタン製容器の破片。描き方は（３）とまったく同様で外面に黒い焼絵風の彩色表現で紋様を表わしている。ただし紋様の意匠は（３）とは異なって、どうも縦軸木葉紋であるらしい。ヒョウタンの芯にあたる部分に円を描き、そこから有軸木葉紋を３葉描いている。

（８）は海崎Ｃ―６区青灰色砂レキ層（弥生前期層）から出土した、壺形土器の胴部上半の破片。頸胴部の区分紋様として削出突帯をめぐらし、この上に篦描直線紋を２条と山形紋を描き加える。ミガキとの先後関係はわからない。ただし縁取沈線は施していない。胴部に斜軸木葉紋がある。これはミガキの後に篦状工具で描いている。縦の区画線の有無は不明だが、直線紋→軸線→弧線の順に描きたしている。

（９）は海崎Ｃ―５区黄茶色砂礫層（弥生前・期層）から出土した、壺形土器の頸胴部の破片。内外面ともに表面が荒れているので、ミガキとの先後関係は明らかでない。頸胴部の境い目にある直線紋は、他の沈線に比べてはるかに太く深いので、この直線紋だけがミガキの前に施され、他はミガキの後に描かれた可能性はある。ともあれ区分紋様の直線紋→胴部最大径部の直線紋→縦の区画線→軸線→弧線の順に描いている。

(10)は海崎Ｃ―２区青灰色砂レキ層（弥生前・期層）から出土した、壺形土器の頸胴部の破片。篦描沈線はすべて、ミガキ後に施している。区分紋様は篦描直線紋で、この下に斜軸木葉紋がめぐる。直線紋や縦の区画線の描き順は、この破片ではわからないが、木葉紋は軸線→弧線の順に描いている。

(11)は西川津ＡＫ102.2区青白色砂レキ層から出土した、壺形土器の頸胴部の破片。ミガキ後に、区分紋様として篦描直線紋を１条描く。篦描木葉紋は斜軸で、当初縦の区画線

の位置は少しだけ右側にひき、この左側に右上と左下とを結ぶ軸線を入れていたが、ミガキで消して少しだけ左側に描きあらためた。直線紋→縦の区画線→軸線→弧線の順に描いている。

(12)は海崎C－5区青灰色砂レキ層（弥生前期層）から出土した、壺形土器の頸胴部の破片。土器の表面がはなはだ荒れているので、ミガキと篦描沈線との先後関係はわからない。区分紋様として沈線が少なくとも1条はある。また斜軸木葉紋の軸線→弧線の順に描いている。

(13)は海崎D－4区貝層（弥生前期層）から出土した、壺形土器の胴部上半かとみられる破片。上下の位置は図が正しい。これは斜軸木葉紋に含めて考えるべき紋様である。ただし単独に描かれ、かつ軸線がちょうど十字架状になっているので、普通の斜軸木葉紋とはかなり異なった印象を受ける。この問題については後で述べる。ミガキ後に篦状工具を用いて描いている。軸線→弧線の順番で描いた。

(14)は海崎ト－5区最下層排水用トレ（弥生・中期層）から出土した、壺形土器の頸胴部の破片。段を区分紋様とする。ここに縁取沈線はない。篦描沈線を描いてからミガキを施した。直線紋1条と直線紋2条との間に隅丸長方形帯流水紋（以下、長方型流水紋と略す）を上下2段にわたって描いている。直線部→反転部の順に描いて、1つ1つ流水紋を完成させながら、全周描いていったようだ。なお上下の流水紋はその反転部の位置をずらして配置している。

(15)は海崎B－6区青灰色砂レキ層（弥生前期層）から出土した、壺形土器の胴部上半かとみられる破片。これもミガキと篦描沈線との先後関係はわからない。またここにある流水紋が長方型なのか横型なのか、この土器片からはわからない。この流水紋は直線部→反転部の順に描いている。

(16)は参考資料として掲げた。タテチョウ遺跡N7E8第10層で1987年に出土した、壺形土器の頸胴部の破片[1)]。段を区分紋様としている。段の部分には縁取沈線は施されていない。この下に1条か4条の貝殻施紋による直線紋をひいてから、やはり貝殻施紋で長方型流水紋を描いている。直線部→反転部の順に描いている。これもまた上下の反転部が縦一列に並ばないようにしている。なお表面が荒れているので、貝殻で紋様を描いたのが、ミガキの前か後かわからない。

(17)は海崎ト－4区（弥生後期層）から出土した。篦状の木器で、長方型なのか、横型なのかは決まらないが、陽刻流水紋を彫っている。

以上みてきた資料が、西川津遺跡で出土した木葉紋や流水紋をめぐらせたものの代表例

である。これまで1つ1つの資料について記してきたこまかな特徴は、多くの場合、これらの資料が西日本のなかで年代的地域的にどのような位置を占めているかを理解するときに必要な項目である。そしてこれらの項目を活用して、この2つの紋様のこまかな分類、その出現順序や分布のあり方について行なわなければならない論証は、なかなか厄介なので別の機会に譲るとして、これらの資料をとおして西川津遺跡をみた場合、それが西日本のなかにどのように位置づけることができるか述べてみたい。

木葉紋の原型は、木葉状の紋様を陽刻で表現する縄紋晩期の橿原式紋様のなかにある。近くでは鳥取県河原田遺跡で出土したが[2)]、これは西日本一円にひろく分布している。この紋様から弥生前期に(1)〜(3)の無軸木葉紋が生まれた。このうち橿原式紋様の意匠の細部の特徴を、より正確に模倣しているのは、実は篦状工具で描いたものにはなく、彩色で表わしたもののなかにあるのである。そして西日本で出土している彩色木葉紋のなかでも、特に古い特徴をそなえているのが、(3)に掲げたヒョウタン製容器の紋様である。縄紋社会から弥生社会への受け渡しは、どうも岡山県・香川県を中心とした中部瀬戸内地域でなされたようだ。わたくしはまだ中部瀬戸内地域で、このヒョウタン製容器に描かれた木葉紋に匹敵する資料が出土したとの報に接していない。が、このヒョウタン製容器の存在はこれと同種の紋様が条件さえ整えば、この地域で検出される見込みの高いことを示しているとみることができる。さらにこの種の木葉紋から(1)や(2)の無軸木葉紋が発生したとみなすことができる。(1)と(2)に共通するミガキ後の木葉紋施紋、(1)の段部に施された沈線状ミガキの存在は、西日本一円でみられる癖にまさに共通する。

無軸木葉紋につづいて(4)〜(7)の縦軸木葉紋が発生した。これは近畿地方かその西辺で起こったらしい。縦軸木葉紋の場合は彩色表現が古いのか、陰刻表現が古いのかまだ決まらない。(7)もきわめて特殊な描き方をしているようだが、意匠に注目すると、資料としては比較的多く発見されている、赤い塗料を水にといて土器や木器に塗ったと思われるものと何ら変わらない。また(4)の土器の段の部分には縁取沈線はなかった。縦軸木葉紋には無軸木葉紋と違って、この縁取沈線のないものもあるのである。さらに貝殻を用いて描いたものとなると、無軸木葉紋にはなくて、縦軸と斜軸とからなる有軸木葉紋に限られる。縦軸木葉紋についてはわたくしの知る限り、今のところこの西川津遺跡例を除けば、愛媛県来住V遺跡[3)]でみつかっているにすぎない。篦描木葉紋は、島根県東部を西限とする西日本のほぼ東半分に分布しているのに対して、貝殻による施紋法それ自体は西日本の大体西半分にひろまっている。だからこの2つが重複した地域で、両者が合体し、縦軸木葉紋を貝殻で描くようになったとみなすことができるのである。

縦軸木葉紋から斜軸木葉紋(８)～(13)が生まれる。この紋様のある土器で縁取沈線を施した例を知らない。この点で(８)は他の地域のそれと同じだ。この紋様は、中部瀬戸内地域で発生し、九州地方から東海地方まで、すなわち西日本一円にひろまったらしい。なお(13)は、その意匠が(８)～(12)とはやや異質である。そのうえその分布地域も、山口県土井ヶ浜遺跡[4]、島根県西川津遺跡・同タテチョウ遺跡[5]、鳥取県長瀬高浜遺跡と[6]、あたかも山陰地方に偏っているようだ。つまりこの木葉紋は他の斜軸木葉紋と比べて、意匠や分布地域に違いがありそうだ。だからおおきくは斜軸木葉紋のなかに含めながらも、別の扱いをしたほうがよいのかもしれない。だが今はまだ、実例の数が少なすぎるので、斜軸木葉紋に一括しておくことにしたい。

前期弥生社会の流水紋は、近畿地方で晩期縄紋社会の工字紋が伝わって成立した。まず(17)のような、陽刻表現を弥生社会は受け入れたようだ。もっともこの木器は弥生時代後期の土層から出土したというし、近畿地方でもなにも陽刻流水紋は前期に限られているわけではないので、この木器が作られたのは前期まで遡らないのかもしれない。

(14)・(15)は土器に篦状工具で描いた流水紋である。他の遺跡で出土した資料をみると、土器で陰刻表現の場合は、どの意匠かはっきりするものは大阪府城山遺跡出土の唯一の横型例を除けば[7]他はすべて長方型に限られている。これを参考にすると、(15)も長方型の可能性が高い。また篦状工具で流水紋を描いたのはみなミガキの前で、段の部分に縁取沈線のある例はない。このような癖は少なくとも(14)に共通する。流水紋土器の出土地が島根県東部・兵庫県を西限としているのを考え合わせると、これらの土器は、実はすべて近畿地方などの遠隔地から持ち運ばれてきたのであって、この地域で作られることはなかったとも推論できそうだ。そこで参考にしたいのが、タテチョウ遺跡で出土した(16)である。(16)の土器は、ミガキとの先後関係は表面が荒れているのでわからないが、紋様の種類と縁取沈線の有無は他の陰刻流水紋土器のあり方に一致する。ただ貝殻で描いた点だけが異なっているのである。これにさきにみた貝殻施紋の縦軸木葉紋(５)・(６)のあり方を考えれば、(16)は本来篦描きのはずの陰刻流水紋をこの地域で貝殻の縁を押しあてて描かれた可能性がきわめて高いことになるだろう。となれば(16)の土器に限らず、(14)や(15)の土器もこの地域で作られた可能性は充分にあることになる。

よく知られているように、木葉紋と流水紋は、ともにもともと晩期縄紋社会のものであった。前期弥生社会がこれを取り込んで、この２つの紋様はあらたな展開を遂げることになった。木葉紋と流水紋はこの特殊な性格をもっているので、前期弥生社会の中身について興味深い情報をわたくしたちに提供してくれるのである。西川津遺跡では、各種の木葉

紋と流水紋が出土している。それは各種の意匠がその都度その都度この地域に確かに到達していたことを示している。縁取沈線の有無や紋様とミガキとの先後関係のようにきわめてこまかな点まで、西日本の動向によく一致した動きを示していた。すなわち木葉紋と流水紋からみれば、他の地域で発生した事柄がこまかな内容までこの西川津遺跡のある地域まで伝わってきて、この地域の人々はそれを正確に受け入れていた場合の多かったことが理解できる。と同時に、異なった地域から伝えられた要素を組み合わせて、あらたな紋様を作りだすことのあったことも明らかである。西川津遺跡に伝えられた紋様の発生場所を並べていくと，中部瀬戸内地域（無軸木葉紋）→近畿地方かその西辺（縦軸木葉紋）→中部瀬戸内地域（斜軸木葉紋）→西部瀬戸内地域（貝殻施紋）→近畿地方（流水紋）となる。そしてこのあり方は、前期弥生社会の事情をよく明らかにしていると同時に、この地域がこのように日本海沿岸の地域に限らず方々の地域と、直接か間接かはわからないにしても、深く交渉して他とは異なった１つの地域性を形成していたことを証している。

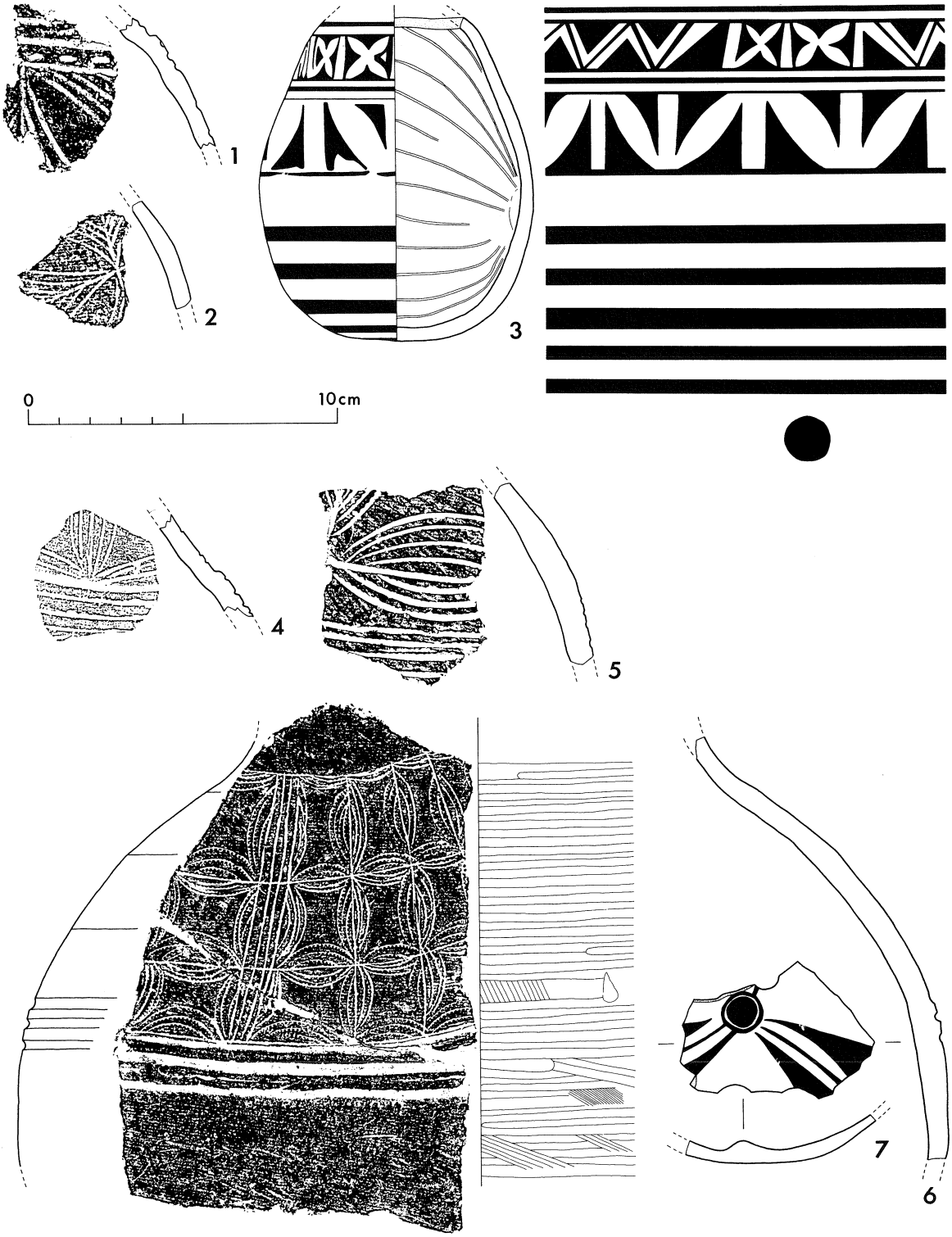
これまで述べてきた事柄については、西川津遺跡の場合、別の資料から得られた成果と組み合わせて、その時代や地域についてもっと突っ込んで考えることが可能である。この意味で、今後もわたくしたちは西川津遺跡とこれをとりまく地域について、注視しつづけなければならないだろう。

本稿をまとめるにあたっては、内田律雄氏、松本岩雄氏、柳浦俊一氏をはじめ、多くの方々に協力していただいた。また図版の製図は佐藤順子女史にお願いした。わたくしは、ここにあらためて深い感謝の意を表する。

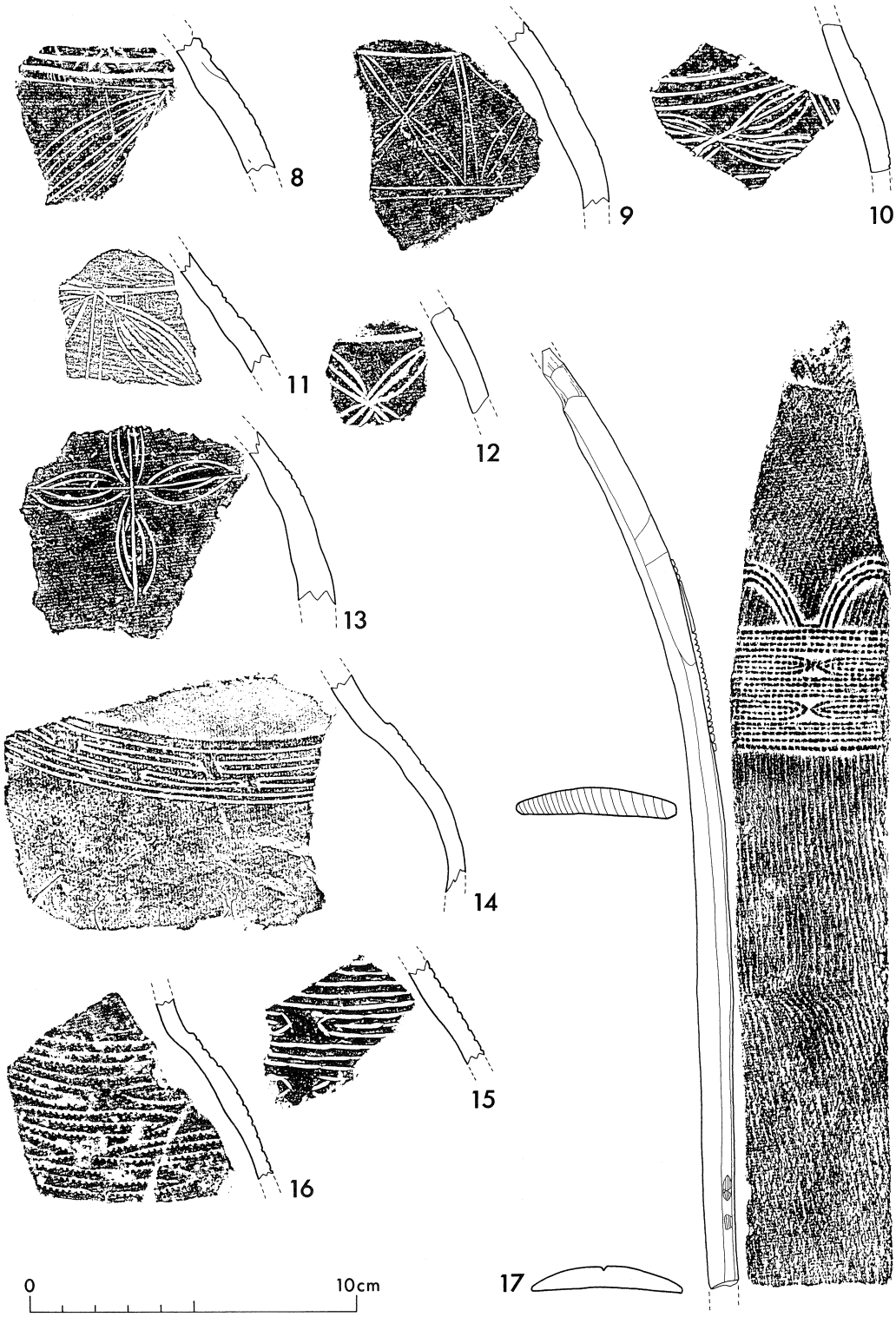
（1988年８月６日）

註

1) 柳浦俊一・大谷祐司「タテチョウ遺跡発掘調査略報」『島根県文化財愛護協会誌季刊文化財』第62号1988年第２図１。
2) 淀江町教育委員会『宇田川鳥取県淀江町・宇田川地区土地改良に伴う調査概要』1981年5頁１。
3) 愛媛県教育委員会・愛媛県埋蔵文化財調査センター『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ1981年第２図―４・５・９～12。
4) 豊北町教育委員会『土井ケ浜遺跡第10次発掘調査概報』（豊北町埋蔵文化財調査報告第７集）1986年第11図３。
5) 島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書』Ⅰ1979年第21図16、第24図２。
6) 鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅵ1983年挿図326―Po136・137。
7) 大阪府教育委員会・大阪文化財センター『城山（その２）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』1986年　ＰＬ.156―Ｅ―50。



第93図　西川津遺跡出土木葉紋・流水紋（1）



第94図　西川津遺跡出土木葉紋・流水紋（2）

8　西川津遺跡（海崎地区）、弥生時代の植物遺体

島根大学理学部　大　西　郁　夫

Ⅰ　はじめに

西川津遺跡（海崎地区）の発掘調査は、1983年に始められ、数々の考古学的成果があげられている（島根県土木部河川課ほか、1987、1988）。この発掘では、貝層やその他の堆積物を、層準ごとに、ブロックサンプルをとり、脊椎動物、貝類、植物の遺体の洗いだしが行われた。それらの遺体のうち、植物遺体を検討したので、ここに報告する。

この研究の機会を与えられた、島根県教育委員会文化課・内田律雄氏に感謝する。

Ⅱ　植物遺体の産出層準

植物遺体は、次の35の層準・グリッドにまとめられていた。このうち、A～Yはすべて弥生中期相当層である。

A：ＳＫ01．840717、840730、840801、840809、840820

B：ＳＺ017内．850807

C：イ－６区　弥生中期層．850525

D：イ－６区　青灰色砂礫間粘土層．850809

E：イ－５区　粘土間砂層．85

F：イ－１区　黒灰色微砂粒層．850618

G：イ－５区　同前．850613～850620

H：イ－６区　同前．850613～850711

I：A－５区　同前．850613～850621

J：A－６区　同前．850612～850628

K：A－５区　貝層．850628

L：A－５区　貝Ⅰ層．850627

M：A－６区　同前．850626

N：A－５区　Ⅰ．850809

O：D－６区　貝層Ⅰ（上）．840016

P：A－４区　貝層Ⅰ．850626

Q：同前　850627

R：A－６区　同前．850627

S：イ－４区　同前．850629

T：A－６区　貝層Ⅱ．850809

U：イ－６区　同前．850629

V：A－６区　貝層Ⅲ．850809

W：ハ－５区　貝層Ⅱと貝Ⅱ層との間層．850909

X：ハ－５区　大溝砂礫層．

Y：チ－６区　貝層最下層．850701

a：弥生後期貝層．

b：弥生中期貝層以外．

c：同前ドングリ貯蔵庫．B区　840111

d：同前貝層．

e：弥生前期貝層以外．

f：同前クルミⅠ群．D－５区　841026

g：同前クルミⅡ群．C－５区　841026

h：同前クルミⅢ群．D－６区　841106

i：同前クルミⅣ群. D－6区　841106　　j：同前貝層.

これらの植物遺体を種類ごとに計数した。

しかし、Aのアブラナ科の種子、dのスゲ属・ホタルイ属、eのセリ科の果実などは、数が多過ぎて数え切れなかった。また、Qについては全体の40／55を、Rについては62／181を処理した。なお、jの小型の遺体は1／3ほどが未処理である。

Ⅲ　植物遺体の種類と部位

全試料を通して、同定された種類と部位は下記のとおりである。なお、微小な種子などで未同定のものも残されている。

裸子植物	Gymnospermae	
イチイ科	Taxaceae	
カヤ	*Torreya nucifera* (Linn.) Sieb. et Zucc.	(種皮)
イヌガヤ科	Cepharotaxaceae	
イヌガヤ	*Cepharotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch f. *drupacea* (Sieb. et Zucc.) Kitamura	(内種皮)
マキ科	Podocarpaceae	
イヌマキ	*Podocarpus macrophyllus* (Thunb.) D. Don	(葉)
マツ科	Pinaceae	
モミ	*Abies firma* Sieb. et Zucc.	(種子鱗片)
アカマツ	*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.	(球果)
被子植物	Angiospermae	
クルミ科	Juglandaceae	
オニグルミ	*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura	(核)
ノグミル？	*Platycarya strobilacea* Sieb. et Zucc. ?	(序果)
カバノキ科	Betulaceae	
ハンノキ属	*Alnus* sp.	(果序)
ブナ科	Fagaceae	
コナラ属	*Quercus*	
コナラ亜属	Subgen. *Quercus* sp.	(幼果・総包・果皮底部付着部)
アカガシ亜属	Subgen. *Cyclobalanopsis* sp.	

		（幼果・総包・果種皮・果皮底部付着部・子葉）
ツブラジイ	*Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky	（果皮）
バラ科	Rosaceae ?	（核）
モモ	*Prunus persica* Batsch	（核）
マメ科	Leguminosae	
フジ属？	*Wisteria* ? sp.	（莢果）
ヤマゴボウ科	Phytolaccaceae	
マルミノヤマゴボウ	*Phytolacca japonica* Makino	（種子）
ツヅラフジ科	Menispermaceae	
コウモリカズラ	*Menispermum dauricum* DC.	（種子）
アブラナ科	Cruciferae	（種子）
ミカン科	Rutaceae	
サンショウ	*Zanthoxylum piperitum* DC.	（種子）
カラスザンショウ	*Fagara ailanthoides* (Sieb. et Zucc.) Engler	（種子）
センダン科	Meliaceae	
センダン	*Meria azedarach* Linn. var. *subtripinata* Miquel	（核）
カエデ科	Aceraceae	
カエデ属	*Acer* sp.	（果実）
ムクロジ科	Sapindaceae	
ムクロジ	*Sapindus mukorossi* Gaerth.	（種子）
トチノキ科	Hippocastaneaceae	
トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume	（果皮・種皮）
ブドウ科	Vitaceae	
ノブドウ	*Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv.	（種子）
ヤブガラシ	*Cairatia japonica* (Thunb.) Gagn.	（種子）
ブドウ属	*Vitis* sp.	（種子）
ミズキ科	Cornaceae	
クマノミズキ	*Cornus macrophylla* Wallich	（核）
セリ科	Umbelliferae	（果実）

エゴノキ科	Styracaceae	
エゴノキ	*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.	(種子)
ハクウンボク	*Styrax obassia* Sieb. et Zucc.	(種子)
クマツヅラ科	Verbenaceae	
クサギ	*Clerodendron trichotomum* Thunb.	(核)
ヒシ科	Trapaceae	
ヒシ属	*Trapa* sp.	(果実)
スイカズラ科	Caprifoliaceae	
ガマズミ属	*Viburnum* sp.	(核)
ウリ科	Cucurubitaceae	
マクワウリ	*Cucumis melo* Linn.	(種子)
ヒョウタン	*Lagenaria leucantha* Rosby. var. *gourda* Makino	(種子)
キク科	Compositae	
オナモミ	*Xanthium strumarium* Linn.	(総包)
カヤツリグサ科	Cyperaceae	
スゲ属	*Carex* sp.	(種子)
ホタルイ属	*Scirpus* sp.	(種子)
イネ科	Gramineae	(茎)
イネ	*Oryza sativa* Linn.	(内乳)

全般的に、大型の遺体では、オニグルミ（以下クルミという）・トチノキ・コナラ属アカガシ亜属（以下カシ類という）・イヌガヤ・カヤ・モモ・ヒシ属などの食用植物やセンダンのような薬用植物が多く、モミ・アカマツ・ノグルミ？・ハンノキ・カエデ属など、現在、周辺の丘陵に普通に見られる樹木はほとんど産出しない。小型の遺体でも、サンショウ・ブドウ属・ヒョウタン・マクワウリ・イネなどの食用・有用植物が多い。

Ⅳ　産出部位について

大型の遺体では、各種ごとに産出部位やこわれ方にそれぞれ特徴がある。

クルミ：結合線のところで半分に割れた核が多い。弥生前期では、クルミⅠ～Ⅳ群のクルミはすべて半分以下である。貝層では約95％が、貝層以外では約85％が半分以下である。また、弥生中～後期では97％以上が半分以下である。しかも、完形の核の40～60％が

1～2カ所に、動物による食跡を持っている。

トチノキ：幼果はあまりこわれていないが、成果の果皮はほとんどが1／3以下にこわれている。種皮も、完形のものは少なく、半分以下にこわれているものが多い。

カヤ・イヌガヤ：種皮や内種皮も1／2以下の破片が多い。

カシ類：幼果・果種皮・同底部の付着部・子葉・総包が産出する。果種皮（ドングリの皮としぶ皮）は完形または一部が破損したのみのものが多いが、完全に壊れて底部の付着部の小円盤のみとなったものも多い。子葉（ドングリの中身）はそのままでは遺体として残りにくいが、炭化した子葉が産出する。

モモ：2㎝位の大型と1㎝位の小型の核がある。完形のものが多い。

イネ：炭化した内乳（炭化米）を産出する。

Ⅴ　遺体群集の特徴

層準ごとに産出遺体の特徴をまとめる。

A：ヒョウタンの果実が産出し、ヒョウタンの貯蔵施設と考えられている（島根県土木部河川課ほか、1988）。ヒョウタンの種子も多いが、それ以上に膨大なアブラナ科の種子を産する。オナモミ、マクワウリ、ブドウ属なども多く、栽培植物のタネの保存庫と考えられる。

B：ウッドサークル内の弥生時代中期層である。ほぼ半分のトチノキの種皮を産した。

C：ここからは、トチノキの種皮破片を産した。

D：カシ類の果種皮が17、モモの核1、トチノキ種皮破片3を産した。

E：クルミの核半分、完全なトチノキの種皮および破片、果皮破片、各1を産した。

F～J：カシ類の果種皮が多く、炭化したカシ類の子葉、トチノキの果皮と種皮、クルミやモモの核を伴う。

K：カシ類の幼果を産する。

L・M：カシ類の幼果・総包・果種皮などが多い。

N：木本種ではカシ類が多いが、マクワウリ・オナモミなどの草本種も多い。

Q～S：カシ類が多く、サンショウ・カラスザンショウ・クマノミズキ・エゴノキ・ブドウ属・クルミなどを伴う。ヒョウタンや炭化米なども多い。

T・U：カシ類・ブドウ属・オナモミ・炭化米などが多い。

V：カシ類・クマノミズキ・マクワウリなどが多い。

W：炭化米が多く、サンショウの種子2、カシ類の果種皮1、イヌガヤとトチノキの種

皮破片を伴う。

X：カシ類の果種皮17、同子葉1を産した。

Y：モモの核、エゴノキの種子、各1を産した。

a：全般的に数は少ないが、モモの核が多い。

b：カシ類が多く、クルミなどを伴う。

c：ドングリの貯蔵庫で、カシ類の果種皮が圧倒的に多い。トチノキの果皮が1片伴われるのみである。

d：クルミの核の半分とカシ類が多い。また、ヒシの果実の破片も多い。

e：クルミの核が多いが、完全なものの比率が高い。トチノキなども伴われる。ここでは特にセリ科の果実が多産する。

f～i：クルミ群と呼ばれているように、クルミが圧倒的に多い。

j：クルミ・カシ類が多く、ブドウ属・ヒシ属・クマノミズキ・エゴノキ・センダン・サンショウ・イヌガヤ・ヒョウタン・トチノキなども多い。

Ⅵ　植物遺体群集の時代的変遷

種子貯蔵庫（A）、ドングリ貯蔵庫（c）、クルミ群（f～i）など、特定の状況によって、一定の種類が多産することがある。

しかし、貝層や貝層以外の堆積層では多くの種類が産出し、その量比は、弥生前期～後期の時代ごとに比較すると、かなりの違いがみられる。

弥生前期の貝層では、クルミとカシ類が最も多く、ブドウ属・エゴノキ・クマノミズキ・センダン・イヌガヤ・サンショウ・ヒシ属・ヒョウタンなども多い。トチノキ・モモなどもみられるが、それほど多くはない。しかし、同時期の貝層以外では、クルミ・カシ類以外は少なくなる。セリ科はこの層準のみで多産し、トチノキは相対的に多くなる。

弥生中期の貝層では、クルミが最も多く、カシ類・エゴノキ・ヒシ属・ヒョウタンなどを伴うが、それ以外は少なくなる。スゲ属・ホタルイ属はこの層準で特に多い。モモも相対的に多くなる。同時期の貝層以外では、カシ類の果種皮と炭化した子葉・クルミなどが多く、サンショウ・クマノミズキ・ブドウ属・マクワウリ・ヒョウタン・オナモミなどを伴う。

弥生後期の貝層からは、植物遺体の産出は少ない。しかし、モモは、前・中期の貝層と変わらないぐらいの量を産出する。

大西ほか（1988）は、弥生前・中期の自然木と考えられる木材を調べ、遺跡周辺の山野

は、カシ類・イスノキ・サカキなどの常緑広葉樹が優勢な照葉樹林におおわれていて、花粉分析結果で産出するマツ・スギ・モミなどの針葉樹は、かなり遠い上流部に成育していたと推定している。大西・原田（本報告書）の花粉分析結果をみると、弥生前・中期は、カシ類・シイ類・ナラ類が優占し、スギ属・マツ類・モミ属・イヌマキ属などの針葉樹を伴う花粉組成を示し、トチノキ属やクルミ属―サワグルミ属はわずかに伴われるにすぎない。そして、このような花粉組成は弥生の全期間を通じて大きな変化はない。

針葉樹の遺体が稀にしか産しないのに、花粉の産出量が針葉樹よりさらに低いクルミやトチノキ・モモなどの食用植物の遺体が多産することから、それらは弥生人によって、周辺の山野から採集され、食べかすが貝殻などと共に捨てられたものと考えられる。このことは、前述のように、クルミ・トチノキなどに破片が多いこととも、矛盾しない。

このように弥生時代の植物遺体群集は周辺の植生を代表していない。前述した遺体の時代的な変化は、弥生人の食べものの変化と食べかすの捨て場の変化を表しているものと考えられる。

文　　献

大西郁夫・渡邊正巳・内田律雄（1988）松江市、西川津遺跡の材化石。山陰地域研究（自然環境）、4、65～79。

島根県土木部河川課・島根県教育委員会（1987）朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ、283P。

島根県土木部河川課・島根県教育委員会（1988）朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ、274P。

表11　西川津遺跡の植物遺体（ただし、Aは多数、Mは普通、＋は破片のみ、を示す）

種類・部位 ／ 層準	A	F	G	H	I	J	K	L	M	N	Q	R	S	T	U	V	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
カ　ヤ　種子	4																	1		2	3			1		5
イヌガヤ　内種子	1										1	3	1	1		1		3		13	1			2	1	229
イヌマキ　葉																										1
モ　ミ　種子鱗片																				1						
アカマツ　球果																1										2
ノグルミ？　果序																										1
オニグルミ　核	＋				1		＋		＋				＋	1				1		5	8					49
同半分			2	1	2	4		3	1	1	3	11		2		1	1	41		168	42	37	10	831	38	908
ハンノキ属　果序																				1						
コナラ属																										
コナラ亜属　幼果	1															2										1
総包												1				2				2	1					6
果皮底部																2										
アカガシ亜属幼果	3						3	5	1		12	39	6	9		14		2		38						399
総包	1						1	2	3	6	8	14	4	17	1	9		1		85						175
果皮	＋	46	54	59	273	6	2	2	1	1	5	20	2	4	1	2		148	624	46	2					307
果皮底部								3		12	40	116	19	30				8		17						146
子葉	2	2	2	15	15	1					1	1	1	2				25		9						81
ツブラジイ　果皮																				2						1
バラ科？　核	2							1			4	4	1	4	1	2		6		12						139
モ　モ　核	2		1	1	6	1		3			2	1					8			9						10
同半分	3			1	2												1	1		1						3
フジ　莢果																				＋						
サンショウ　種子	2						1	4		1	27	27	1	5		4		16		1						209
カラスザンショウ種子										2	7	18	1	11		3		8		3						43

表12　西川津遺跡の植物遺体（つづき）

種類・部位 ／ 層準		A	F	G	H	I	J	K	L	M	N	Q	R	S	T	U	V	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
センダン	核											4	11		2		1	2	2		8						311
カエデ属	果実										1																1
ムクロジ	種子												1														
トチノキ	果皮	+		3		1	+			+		+	1				1		5	1	11	13			1		16
	種皮	+	+	3	3	9	+		+	+	+	1	1	+	+		1		8		1	30			4		89
クマノミズキ	核								1	1	3	9	39	7	18	1	11		13		7	1					352
エゴノキ	種子	2						1	2		2	15	29	3	7		6	1	4		38	2					352
ハクウンボク	種子																		1		1						2
クサギ	核	2						1					9		5				3		4						16
ガマズミ属	核	1									4	2	2		7		3		5								58
マルミノヤマゴボウ	種子																										4
コウモリカズラ	種子											1	1														14
アブラナ科	種子	A																									
ノブドウ	種子								4			3	22		5		4		4		4						
ヤブガラシ	種子	+											1						1								
ブドウ属	種子	M									3	20	49	2	34		7		26		2	1					447
ヒシ属	果実	+						+	+	+	+	+	+	+	+		+		+		A						A
セリ科	果実												1									A					
マクワウリ	種子	M									21	4	9		16	2	13		18		4						62
ヒョウタン	種子	A									2	6	45		10		1		16		29						191
オナモミ	総包	A							2		22	10	3		36		3		15		19						53
スゲ属	種子	M																			A						
ホタルイ属	種子																				A						
イネ科	茎												3														
イネ	内乳	+						2	M		7	A	A	11	A		5										

9　西川津遺跡（海崎地区）の花粉分析

島根大学理学部　大　西　郁　夫
自動車機器株式会社　原　田　吉　樹

Ⅰ　はじめに

西川津遺跡の花粉分析はすでに報告されている（大西・渡辺、1987）。しかしそれは、弥生中期とそれ以前の限られた層準からの11試料にすぎず、極めて不充分のものである。

遺跡の発掘は、その後も継続され、縄文後・晩期以後の各時代の遺物包含層とその下位の泥炭質泥層をはさむ泥質堆積物まで進み、後者には、厚さ１～２㎜のガラス質火山灰層が発見された。その結果、この遺跡からは、完新世前期以後の堆積物が継続的に得られる見通しが強くなった。そこで、改めて、試料採取し、花粉分析を行った。その結果をここに報告し、花粉分帯・地層対比・時代区分・古地理変化などについて考察する。

なお、試料採取にあたり、島根県教育委員会文化課・内田律雄氏をはじめ発掘現場の多くの方々に種々の便宜をはかっていただいた。深く感謝します。

Ⅱ　試料採取と分析結果

発掘のトレンチは、ほぼ北東―南西方向に延びる長方形である。試料採取は、ほぼ北西側の壁面（第95図のＹ―Ｙ’：以後北壁面という）とほぼ南東側の壁面（Ｘ―Ｘ’’南壁面）とで行った。

北壁面：北壁面の模式スケッチと試料採取位置を第96図に示す。ここでは、下位に、ガラス質火山灰層をはさむ泥質堆積物がある。朝酌川の旧河道と思われる谷がそれを削り込んでいて、中位の砂質堆積物がその谷をうめている。さらにそれらをやや平坦な面で削って上位の礫質堆積物があり、最上位には表土へと連続する砂質泥層がみられる。試料採取は、下位の泥質堆積物と中位の砂質堆積物から行った。

トレンチ底の最深部は、下位の泥質堆積物のほぼ中位の層準にあり、ガラス質火山灰層の下位約20㎝である。そこから、深さ１ｍ以上堀り込んで、試料番号Ａ―１～Ａ―23を採取した（第97図）。最下位の試料のさらに下位に砂礫層があるということである。より上位の泥質堆積物については、削り込みが最も少ない排水溝壁から、試料番号Ｃ―１～Ｃ―25を採取した（第97図）。

中位の砂質堆積物は、下に凸な斜交層理をもち、おもに中～粗粒砂層からなり、礫層・

泥層などをはさむ。比較的連続性の良い泥層などを基準にして、柱状図を作成し、試料番号B－1～B－40を採取した。壁面では、遺物がみられず、砂質堆積物の年代はわからない。しかし、トレンチ内では、最下位の砂礫質堆積物には縄文後・晩期の遺物を含むということなので、埋積谷の削り込みの時期は縄文後期以後と考えられる。

南壁面：南壁面の模式スケッチと試料採取位置の概略を第99図に示す。ここでも、下位は、ガラス質火山灰層をはさむ泥質堆積物で、上位は、縄文後期～弥生後期の遺物を含む砂～礫質堆積物およびそれ以後の砂礫を主とする堆積物からなる。

上位の砂～礫質堆積物は、はっきりした削り込み面を境にして、縄文後・晩期～弥生前期の遺物含有層，弥生中～後期の遺物含有層およびそれ以後の無遺物層に3分される。試料採取は、上位の砂～礫質堆積物から、それぞれの層ごとに、泥質層が最も厚い位置を選んで行った。

縄文後・晩期～弥生前期の遺物含有層は、下部の砂・泥互層（FⅠ）、中部の砂層（FⅡ）、および、上部の砂・泥互層（FⅢ）に分けられる。中部の砂層は北東方向にしだいに泥層をはさむようになる。第99図に示した位置から、試料番号F－1～F－13を採取した（第100図）。

弥生時代中～後期の遺物含有層は、下位層を削り込んだ谷を埋めて堆積した砂がちの互層である。おもに泥層から、試料番号E－1～E－10を採取した（第100図）。

弥生時代よりも新期の堆積物は、下位層を削り込んだ谷の斜面を斜めに埋めた泥～礫の互層で、層相変化が著しい。柱状図を作成しながら、試料番号D－1～D－35を採取した（第101図）。

Ⅲ　花粉分析結果と花粉組成にもとずく区分

第97・98・100・101図に示した試料を分析した。結果は第102・103図および第95表に示す。下記の花粉が同定された。

（木本花粉）

マキ属 *Podocarpus*，モミ属 *Abies*，ツガ属 *Tsuga*，マツ属複維管束亜属 *Pinus* Subgen. *Diploxylon*（以下マツ類という）、スギ属 *Cryptomeria*，コウヤマキ属 *Sciadopitys*，ヒノキ科—イチイ科 Cupressaceae-Taxaceae，ヤマモモ属 *Myrica*，クルミ属—サワグルミ属 *Juglans-Pterocarya*，ノグルミ属 *Platycarya*，ヤナギ属 *Salix*，ハンノキ属 *Alnus*，カバノキ属 *Betula*，ハシバミ属 *Corylus*，クマシデ属 *Carpinus*，コナラ属コナラ亜属 *Quercus* Subgen. *Quercus*（以下ナラ類という）、アカガシ亜属 *Q.* Subgen.

Cyclobaranopsis（以下カシ類という）、シイ属—マテバジイ属—クリ属 *Castanopsis-Pasania-Castanea*（以下シイ類という）、ブナ属 *Fagus*，ニレ属—ケヤキ属 *Ulmus-Zelkova*，エノキ属—ムクノキ属 *Celtis-Aphananthe*，サクラ属 *Prunus*，カエデ属 *Acer*，モチノキ属 *Ilex*，トチノキ属 *Aesculus*，クロウメモドキ科 Rhamnaceae，キハダ属 *Phellodendoron*，モクセイ科 Oleaceae，ツツジ科 Ericaceae，タニウツギ属 *Weigela*，ハイノキ属 *Symplocos*，グミ属 *Elaeagus*，ガマズミ属 *Viburnum*，ブドウ科 Vitaceae，ウコギ科 Araliaceae，クワ科—イラクサ科 Moracea-Urticaceae

（草本花粉）

タデ属イブキトラノオ節 *Polygonium* Sect. *Bistorta*，サナエタデ節—ウナギツカミ節 *P.* Sect. *Persicaria-Echinocauron*，ソバ属 *Fagopyrum*，ギシギシ属 *Rumex*，アカザ科 Chenopodiaceae，ナデシコ科 Caryophyllaceae，セリ科 Umbelliferae，コウホネ属 *Nuphar*，カラマツソウ属 *Thalictrum*，アカバナ科 Onagraceae，キク科 Compositae，ヨモギ属 *Artemisia*，ガマ属 *Typha*，ミクリ属 *Sparganum*，カヤツリグサ Cyperaceae，イネ科 Gramineae，サジオモダカ属 *Alisma*

層準ごとの花粉組成の類似性から、次のような区分が可能である。

北壁面（第102図）では、下位より、区分Ⅰ～区分Ⅷに分けられる。

区分Ⅰ（試料番号A—23、21、17、9、5）：花粉・胞子をほとんど含まない。

区分Ⅱ（試料番号A—1、C—25、21、17）：針葉樹種ではマツ類が多く、マキ属・モミ属を伴う。広葉樹種ではカシ類・シイ類・ニレ属—ケヤキ属・エノキ属—ムクノキ属・ナラ類・クマシデ属が多い。草本種ではイネ科が多い。また、低率ではあるがコウホネ属が見られる。

区分Ⅲ（試料番号C—13）：マツ類・マキ属・モミ属などの針葉樹種は減少し、カシ類・シイ類・ナラ類などの広葉樹種が増加する。草本種ではイネ科がさらに多くなる。

区分Ⅳ（試料番号C—9、5）：マツ類・マキ属・モミ属などの針葉樹種が増え、カシ類・シイ類・ナラ類などの広葉樹種が減少する。草本種ではイネ科が多い。また、低率ではあるがガマ属・ミクリ属なども見られる。

区分Ⅴ（試料番号C—1）：マツ類・モミ属などの針葉樹種が減少し、カシ類・シイ類・エノキ属—ムクノキ属・ナラ類・クマシデ属などの広葉樹種が増加する。草本種ではイネ科が減少する。

区分Ⅵ（試料番号B—1、5、9）：針葉樹種が少なく、カシ類・クマシデ属・ニレ属-ケヤキ属・エノキ属—ムクノキ属・クルミ属—サワグルミ属などの広葉樹種が多い。ナラ

類・シイ類は少ない。草本種では、イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属などがあるが、いずれも低率である。

区分Ⅶ（試料番号B—13、17、21、25）：カシ類は下位から引き続き高率であるが、クマシデ属・ニレ属—ケヤキ属は減少する。シイ類・ナラ類・クルミ属—サワグルミ属などは増加する。

区分Ⅷ（試料番号B—29、33、37、40）：クマシデ属・ニレ属—ケヤキ属が増加し、ナラ類・カシ類はやや減少する。針葉樹種ではマキ属が増加する。草本種は低率である。

南壁面（第103図）では、下位より、区分a～区分jに分けられる。

区分a（試料番号F—13）：ニレ属—ケヤキ属・カシ類が高率で、クマシデ属・ナラ類も多い。草本花粉は低率である。

区分b（試料番号F—12、11、10、9、5、1、E—10）：スギ属が急増して、20%に達する。ナラ類・シイ類はやや増加し、ニレ属—ケヤキ属・クマシデ属は減少するが、カシ類はあまり変化しない。草本種ではイネ科が急増し、ヨモギ属もやや増加する。

区分c（試料番号E—9、5、1、D—35）：スギ属が低率となる。広葉樹種はあまり変化しないが、クマシデ属・ニレ属—ケヤキ属は一般に低率である。草本種には大きな変化はみられない。

区分d（試料番号D—33、29、28）：スギ属がやや高率となる。広葉樹種はあまり変化しないが、ニレ属—ケヤキ属は区分cの最上部から増え初め、エノキ属—ムクノキ属はこの区分の最上部からやや増加する。草本種には大きな変化はみられない。

区分e（試料番号D—27）：スギ属が急減する。ほとんどの広葉樹種はやや増加するが、ナラ類は減少傾向にある。イネ科・カヤツリグサ科などの草本種も急減する。

区分f（試料番号D—26、25、24、23、22）：スギ属は低率のままである。広葉樹種もあまり変化しないが、エノキ属—ムクノキ属はやや増加する。草本種では、イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属などがやや増加する。

区分g（試料番号D—21）：ニレ属—ケヤキ属・クマシデ属が急増し、ナラ類・カシ類・シイ類は減少する。また、イネ科・ヨモギ属などの草本種も急減する。

区分h（試料番号D—17、13）：シイ類・ナラ類・カシ類が増加し、ニレ属—ケヤキ属・クマシデ属は減少する。エノキ属—ムクノキ属はあまり変化しない。草本種では、イネ科が増加する。セリ科・ヨモギ属などはこの区分の上半で増加し始める。

区分i（試料番号D—9、8、7、6、5、4、3、2）：下半部ではマツ類が増加し始め、上半部では20%前後となる。スギ属・ナラ類・シイ類もやや増加するが、カシ類は

やや減少する。ニレ属—ケヤキ属・エノキ属—ムクノキ属は急減し、ほとんど見られなくなる。草本種では、イネ科・セリ科・ヨモギ属などが増加する。

区分j（試料番号D—1）：マツ属はさらに増加し、40%程度となる。広葉樹種では、カシ類・シイ類・ナラ類以外の樹種はほとんど見られない。草本種では、イネ科が減少するが、その他の種類には大きな変化はない。

Ⅳ 考　　察

1. 1983年の花粉分析層準について

大西・渡辺（1987）は、この遺跡の北東部（第1図のz地点）において、花粉分析を行い、A～Dの4花粉帯を識別した。このうち、A～C帯の、縄文時代の3花粉帯は、灰色火山灰層の上位10cmと、下位80cmの黒灰色泥炭質泥層から得られたものである。灰色火山灰層は、今回も南壁面の北東部に認められた。この下を掘り下げたところ、灰色火山灰層の下位165cmに、ガラス質火山灰層があり、その間には、著しい層相変化は認められなかったということである。また、島根県土木部河川課ほか（1987）の第23図によると、縄文時代早期末～前期初頭の遺物包含層は、灰色火山灰層（第23図の白色土）の約50cm下位にあり、さらにその下位には黒色と灰色の縞状の層（最下層）がある。ガラス質火山灰層をはさむ泥質堆積物も、この最下層と同様な層相をであるので、ガラス質火山灰層の下位から灰色火山灰層の上位までが一連の堆積物であると考えられる。花粉組成からみても、A～C帯では、マツ類とイネ科花粉が多く、今回の区分Ⅱ～Ⅳと類似している。両火山灰層の間には165cmの堆積物があり、今回分析した泥質堆積物の最も上位の試料は、ガラス質火山灰上位約80cmである。もし層厚が変化していないとすると、大西・渡辺（1987）のA～C帯は、区分Ⅴの上に、ほぼ連続的に重なるものと考えられる。ここでは、区分A～Cと呼び、区分ⅤとⅥの間にはさまれるものと考える。

2. 花粉分帯

中海・宍道湖周辺地域においては、すでに、いくつかの地点で、縄文時代以後の堆積物の花粉分帯がなされている。

大西（1977）は、完新統を、NⅠ、NⅡa、NⅡb、NⅢaおよびNⅢbの5花粉帯に分帯し、それぞれの花粉帯の下底の年代を、約1万、約9000、約5500、約3000および約1500年前と推定した。その後、NⅢ帯はイネ科花粉帯と呼ばれ、さらに次の4亜帯に細分された。それぞれの亜帯の下底の年代は次のように推定されている（大西、1985）

マツ—スギ亜帯　　A.D.1900頃

マツ亜帯	A.D.1500頃
典型亜帯	古墳時代後期頃
スギ亜帯	弥生時代の始め

また、大西・渡辺（1987）は、イネ科花粉帯に先行する花粉帯として、カシ―シイ花粉帯を提唱した。それは、ほぼNⅡb帯に相当し、縄文前期～晩期のものと考えた。

代表的な花粉タクサの、西川津遺跡の各区分における消長をみると、イネ科は、区分Ⅱ～Cで多いが、区分Ⅳ～aでは少なく、区分b～jでまた多くなる。また、スギ属は、区分a以下では少なく、区分b～dでやや多くなる。

イネ科花粉帯の始まりはイネ科とスギ属の急増によって特徴づけられる（大西、1985）から、区分b以上はイネ科花粉帯に属するものと考えられる。区分bの下底は縄文後・晩期～弥生前期の遺物包含層の最下部にあり、これまで推定されていた時代と矛盾しない。また、スギ属のやや多い区分b～dはスギ亜帯に、マツ類が増加し始める区分j・iはマツ亜帯に、その間の区分e～hは典型亜帯に対比される。この対比は、これまで古墳時代後期以後とされている典型亜帯の下底が、弥生中・後期の遺物包含層を削り込む地層の下部にあり、矛盾はない。

イネ科花粉帯の下位層は、マツ層とイネ科の多い下半部（区分Ⅱ～C）と、それらが少なく、カシ類・シイ類・クマシデ属・エノキ属―ムクノキ属・クルミ属―サワグルミ属・マキ属の多い上半部（区分Ⅳ～a）とに分けられる。

大西・渡辺（1987）は、区分A～CをNⅡb帯と対比して、カシ―シイ花粉帯を提唱した。しかし、区分A～Cは縄文時代前期頃であり、年代的にNⅡb帯と一致しない。むしろ、区分Ⅵ～aの方が、ブナ属・ハシバミ属がほとんどなく、マツ類・モミ属も少ないことを除けば、NⅡb帯との類似性が強い。ここで、大西・渡辺（1987）を訂正して、新たに区分Ⅵ～aをカシ―シイ花粉帯と呼ぶことにする。この花粉帯には、少なくとも縄文時代後期～晩期が含まれるものと考えられる。

区分Ⅱ～Cは縄文時代前期頃と推定される。この時期の堆積物の花粉分析は、宍道湖底のSB―1（大西、1977）と米子市の目久美遺跡（大西、1986）から報告されている。SB―1では、ブナ属・ツガ属・マツ類・モミ属などが多い。目久美では、マツ類とニレ属―ケヤキ属が多く、ナラ類・カシ類・クマシデ属・ムクノキ属―エノキ属などを伴う。ツガ属とブナ属は少ない。大西・渡辺（1987）が述べたように、ブナ属やツガ属は中国山地で繁茂していて、斐伊川などによって運ばれて、宍道湖には集積した。しかし、西川津付近の島根半島や目久美付近の低山には、それが及ばなかったと考えれば、この3者はマ

ツ―モミ花粉帯としてまとめられる。

3. 古地理変化

この遺跡では、縄文早期～前期と後・晩期の間にギャップがみられる。そして、マツ―モミ花粉帯に属する縄文前期までは、この付近は宍道湖の北端に位置し、湖沼の泥質堆積物が穏やかに堆積していた。しかし、カシ―シイ花粉帯に属する縄文後・晩期には陸化して谷底平野となり、その後、朝酌川の河道変遷にしたがって、旧河道を埋積する砂礫層がほぼ連続的に堆積したと考えられる。

それに対し、下流部のタテチョウ遺跡では砂礫層が堆積し始めるのは弥生以後であり、イネ科花粉帯スギ亜帯の始まりはヤマトシジミを含む泥層の上部にあり、奈良・平安時代の遺物含有層におおわれている。

すなわち、縄文時代早期末～前期には、宍道湖は拡大していて、湖岸は西川津遺跡よりも上流にあった。縄文後・晩期から湖岸の後退が始まり、弥生の始めには、西川津遺跡とタテチョウ遺跡の間に達し、ついには、タテチョウ遺跡の下流まで後退した。

その後、宍道湖は拡大し、奈良時代頃には、橋本（ガラガラ橋）の上流まで達していたことが、条里制遺構の分布から推定される。しかし、湖は、西川津遺跡までは達せず、そこでは、河道の変更に従って砂礫質堆積物が堆積するのみであった。

文　　献

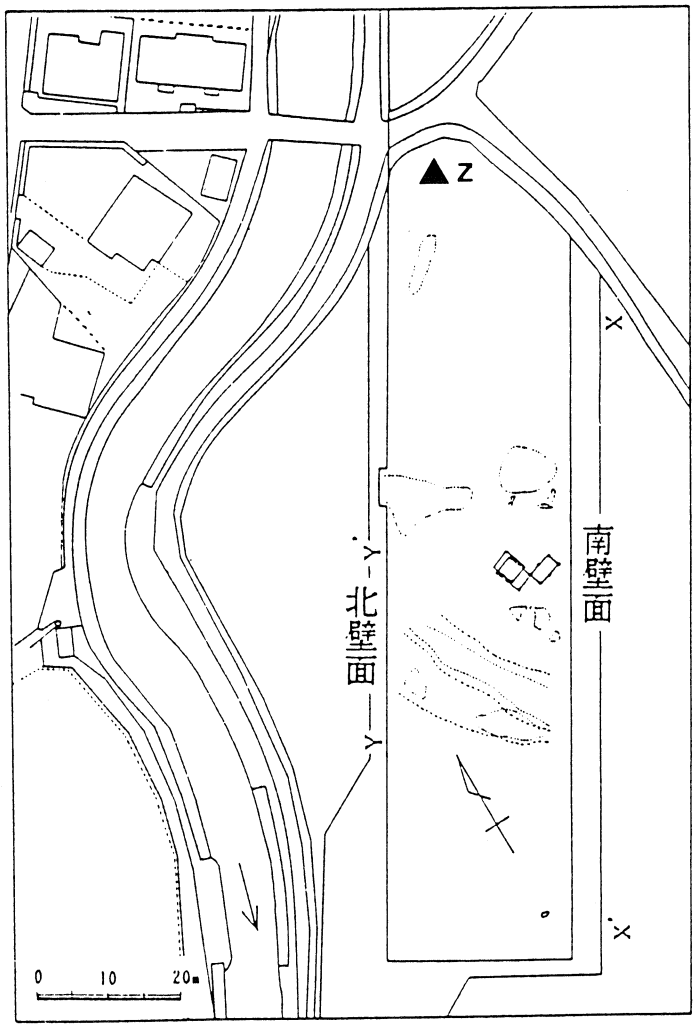
大西郁夫（1677）出雲海岸平野下第四紀堆積物の花粉分析。地質学雑誌、83、603―616

大西郁夫（1985）中海・宍道湖湖底およびその周辺地域の最上部完新統の花粉分析。島根大学地質学研究報告、(4)、115―126

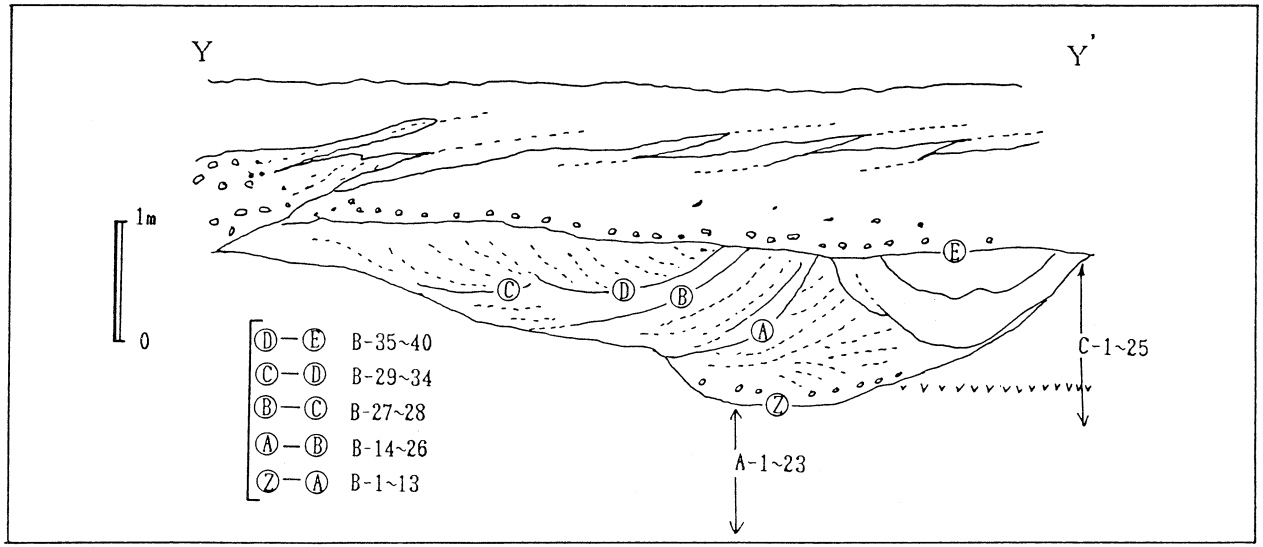
大西郁夫（1986）米子市目久見遺跡の花粉分析。目久見遺跡―茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、68―77、米子市教育委員会・鳥取県河川課

大西郁夫・渡辺正巳（1987）西川津遺跡（1983）の花粉分析。朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ、252―261、島根県土木部河川課・島根県教育委員会

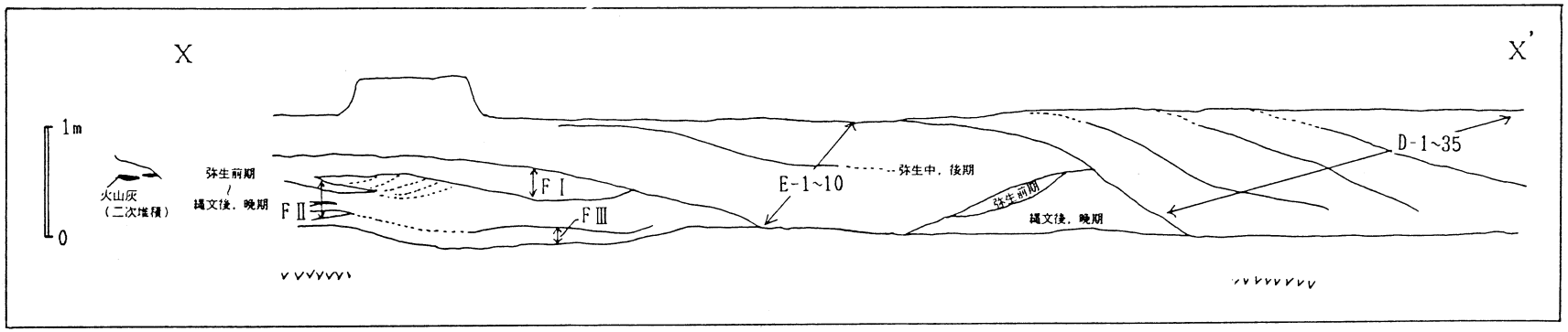
島根県土木部河川課・島根県教育委員会（1987）朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ（海崎地区Ⅰ）、283P。



第95図　西川津遺跡調査区



第96図　北壁面（A・B・C）模式スケッチ

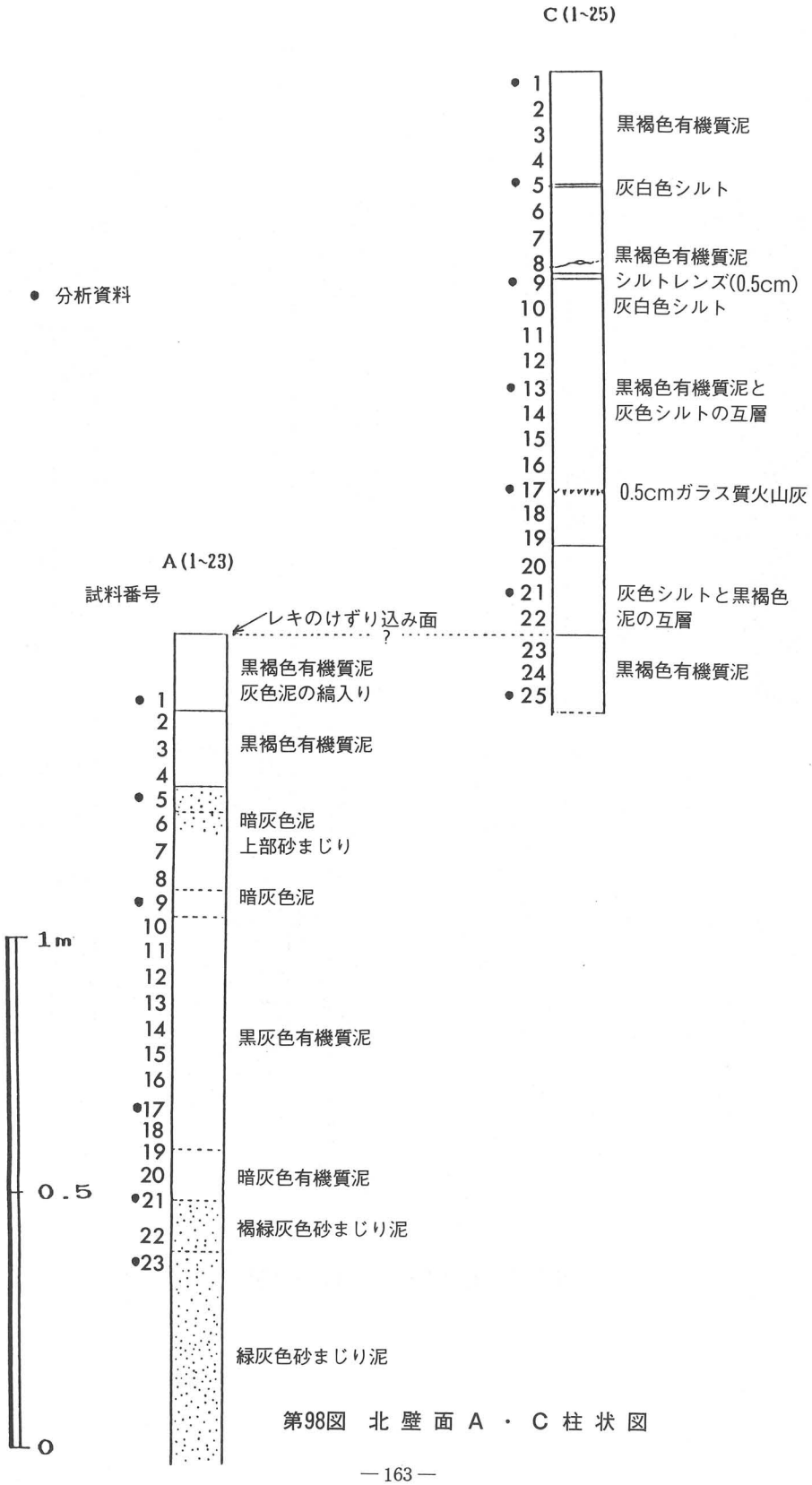


第97図　南壁面（F・E・D）模式スケッチ

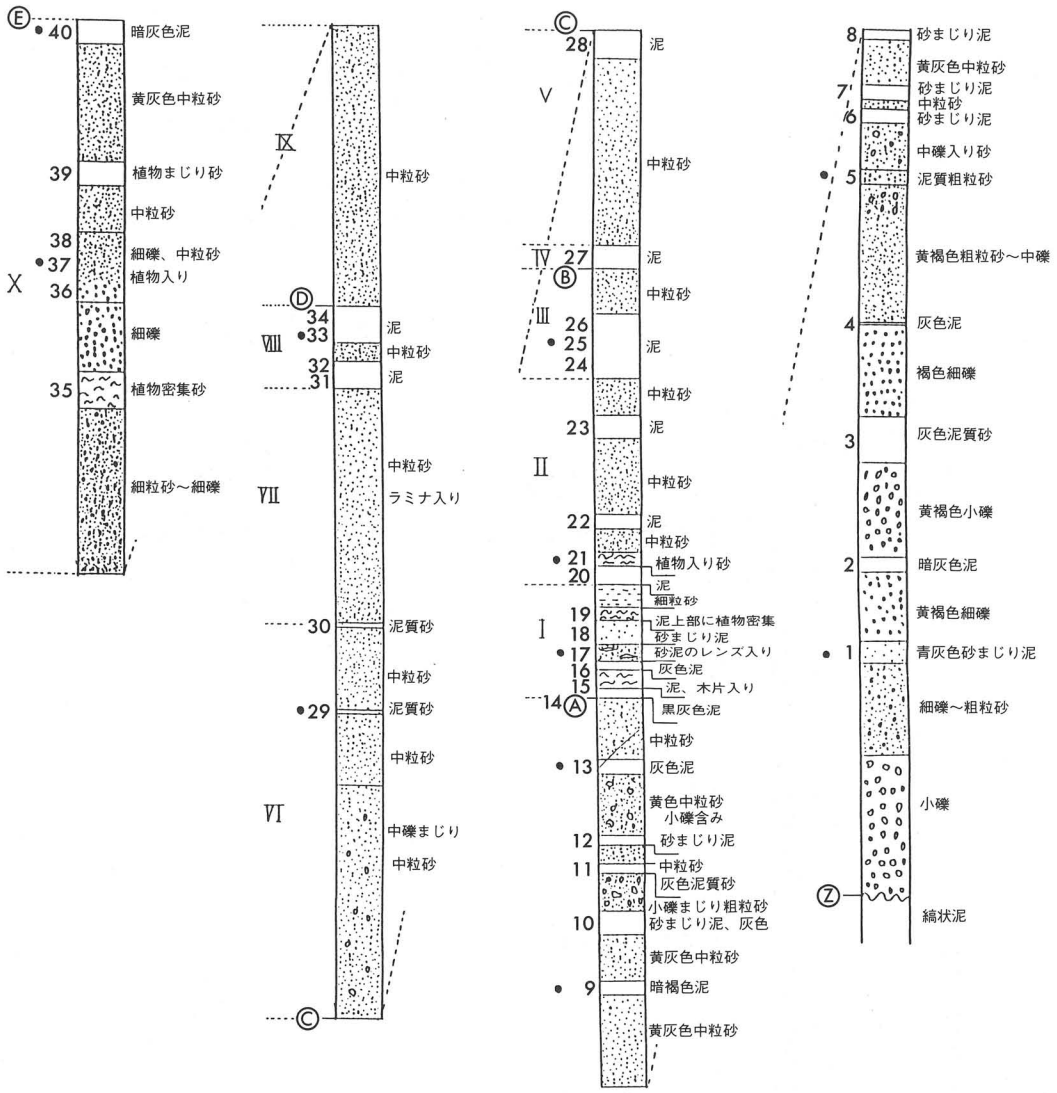
Sample No.	D-1	D-2	D-3	D-4	D-5	D-6	D-7	D-8	D-9	D-13	D-17	D-21	D-22	D-23	D-24	D-25	D-26	D-27	D-28	D-29	D-33	D-35	E-1	E-5	E-9	E-10
Sciadopitys																										
Ericaceae	0.4		0.4								0.4		0.3		0.7											
Weigela											0.7									0.4	0.4			0.3		
Symplocaceae	0.4																									
Elaeagnaceae							+			0.4																
Viburnum																										
Salix																										
Prunus																										
Ilex								0.4																		
Platycarya				0.4	0.3	0.4	+																			
Thalictrum																								0.7		
Onagraceae						0.3				0.4										0.4						
Bistorta																										
Alisma										0.4			0.3													

Sample No.	F-1	F-5	F-9	F-10	F-11	F-12	F-13	B-40	B-37	B-33	B-29	B-25	B-21	B-17	B-13	B-9	B-5	B-1	C-1	C-5	C-9	C-13	C-17	C-21	C-25	A-1
Sciadopitys																							0.4			
Ericaceae																0.3		0.3								
Weigela							0.4	0.4				0.4		0.4				0.3					0.4			
Symplocaceae																										0.4
Elaeagnaceae											0.4															
Viburnum																0.3										
Salix																	0.3									
Prunus																0.3										
Ilex																										
Platycarya																	0.3									
Thalictrum	0.7																			0.4						
Onagraceae																										
Bistorta																	0.3			0.4						
Alisma																										

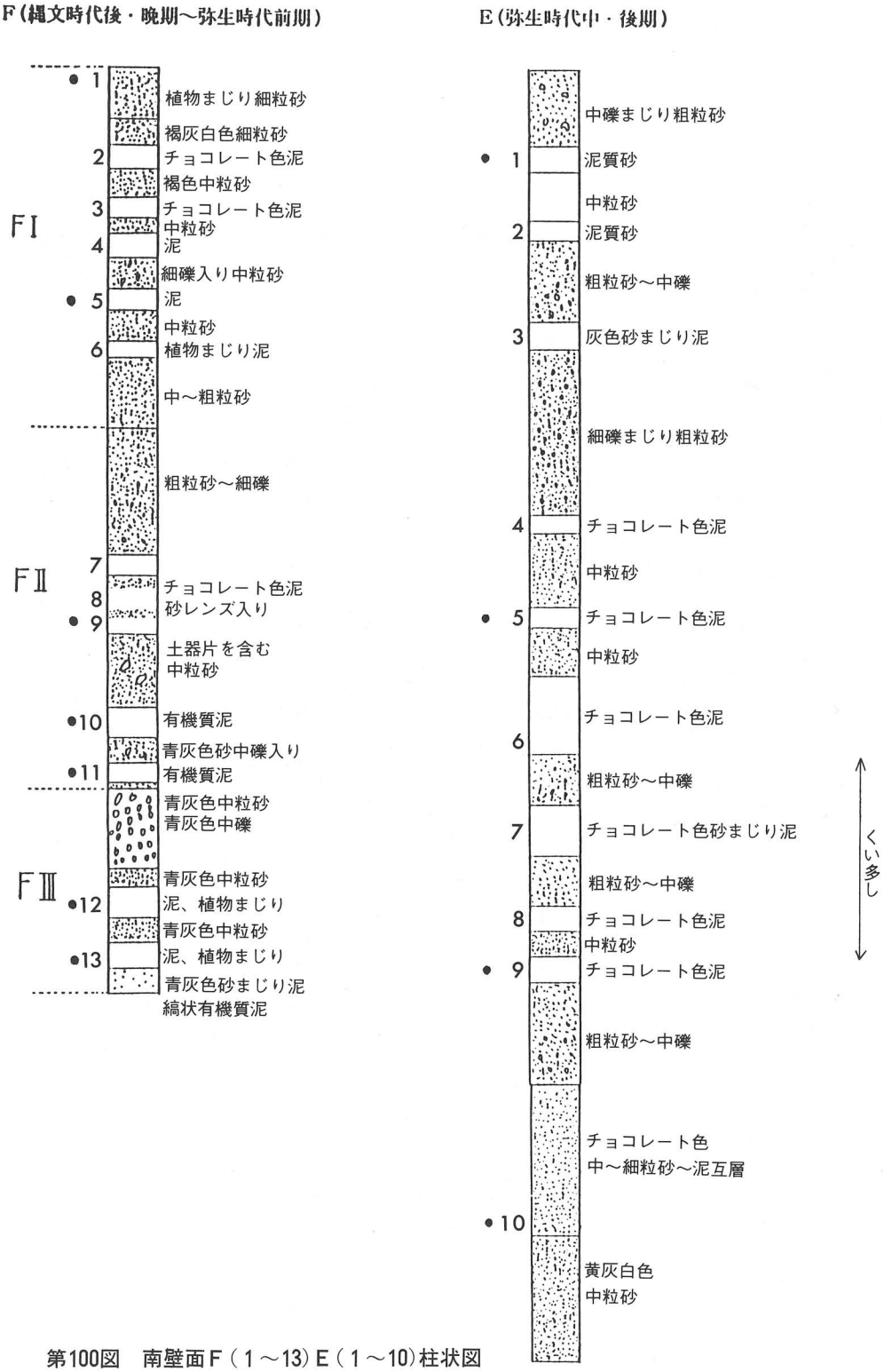
表13　西川津遺跡海崎地区の花粉（１％未満）



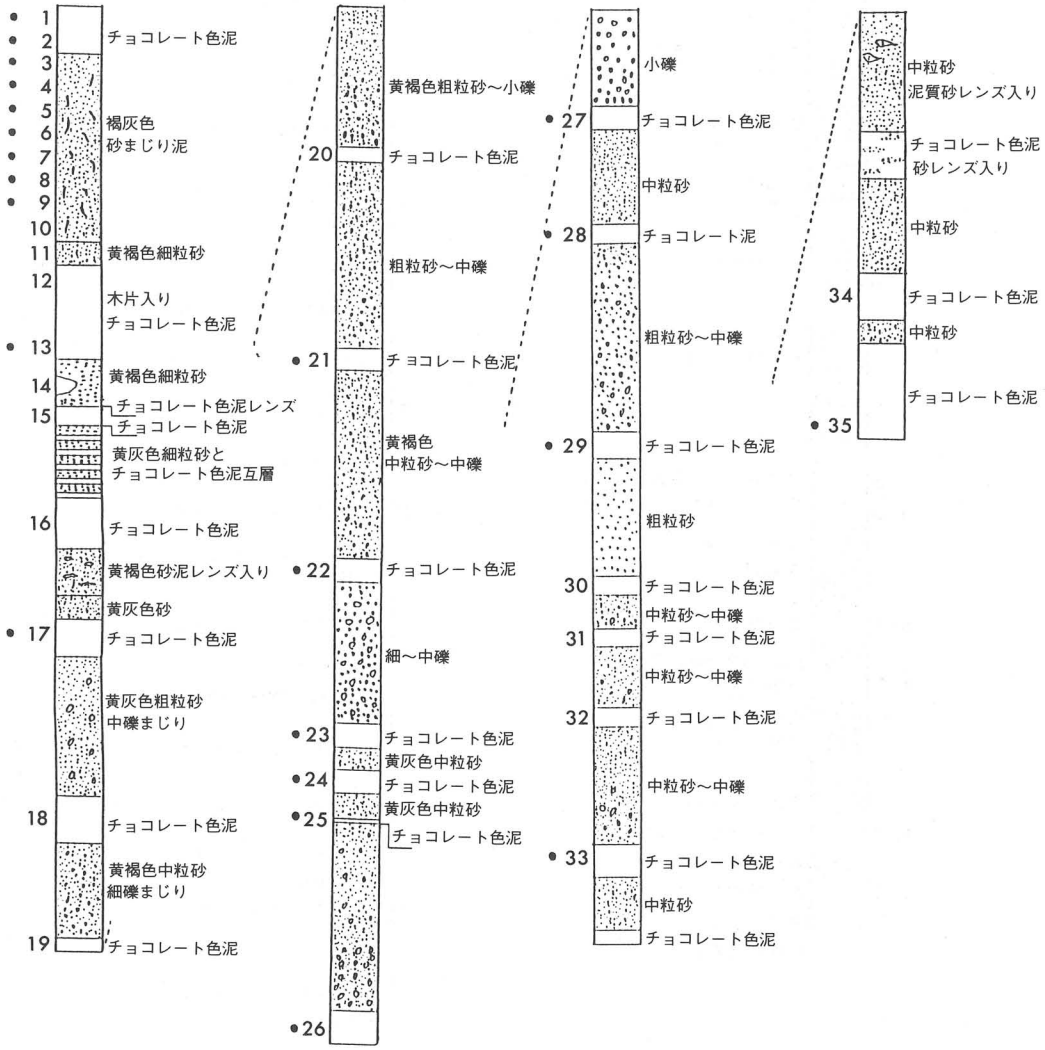
第98図　北壁面A・C柱状図



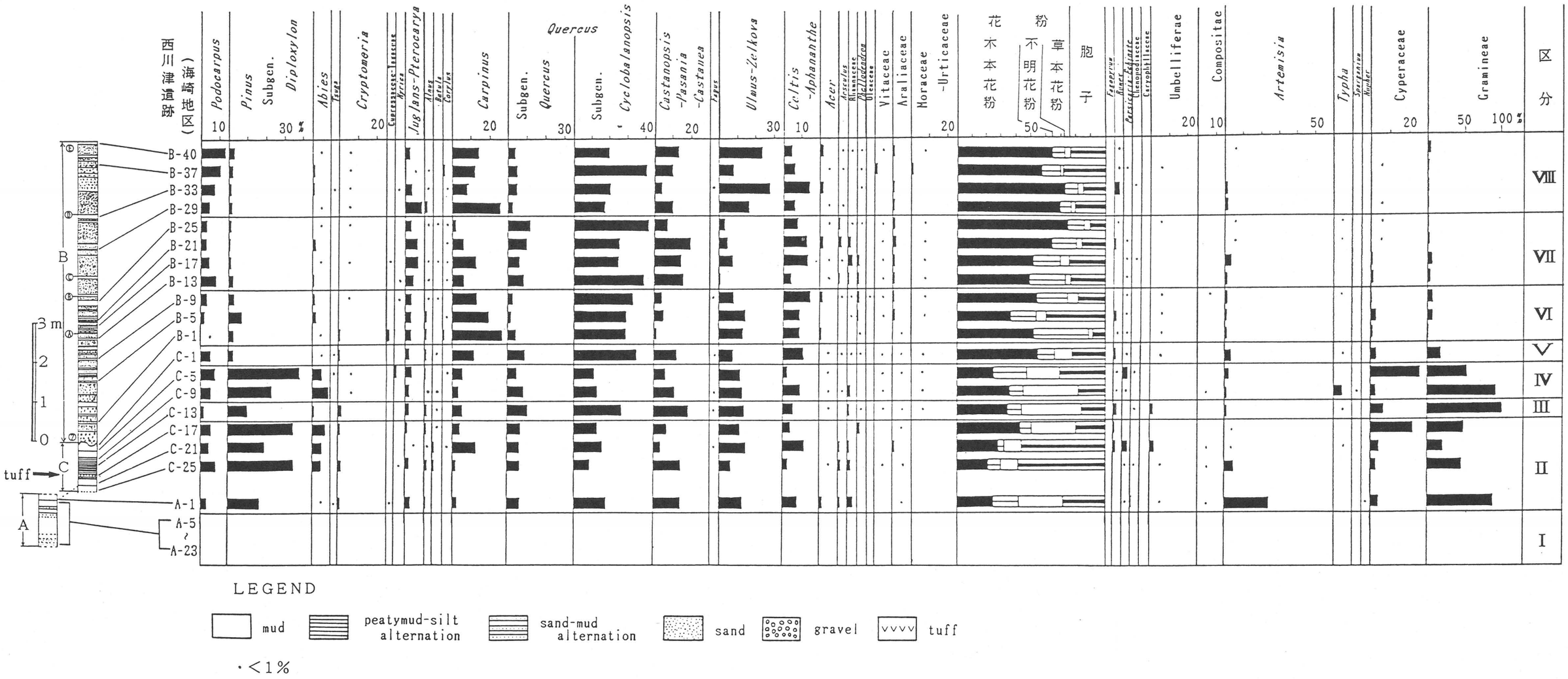
第99図　北壁面B（1～40）柱状図



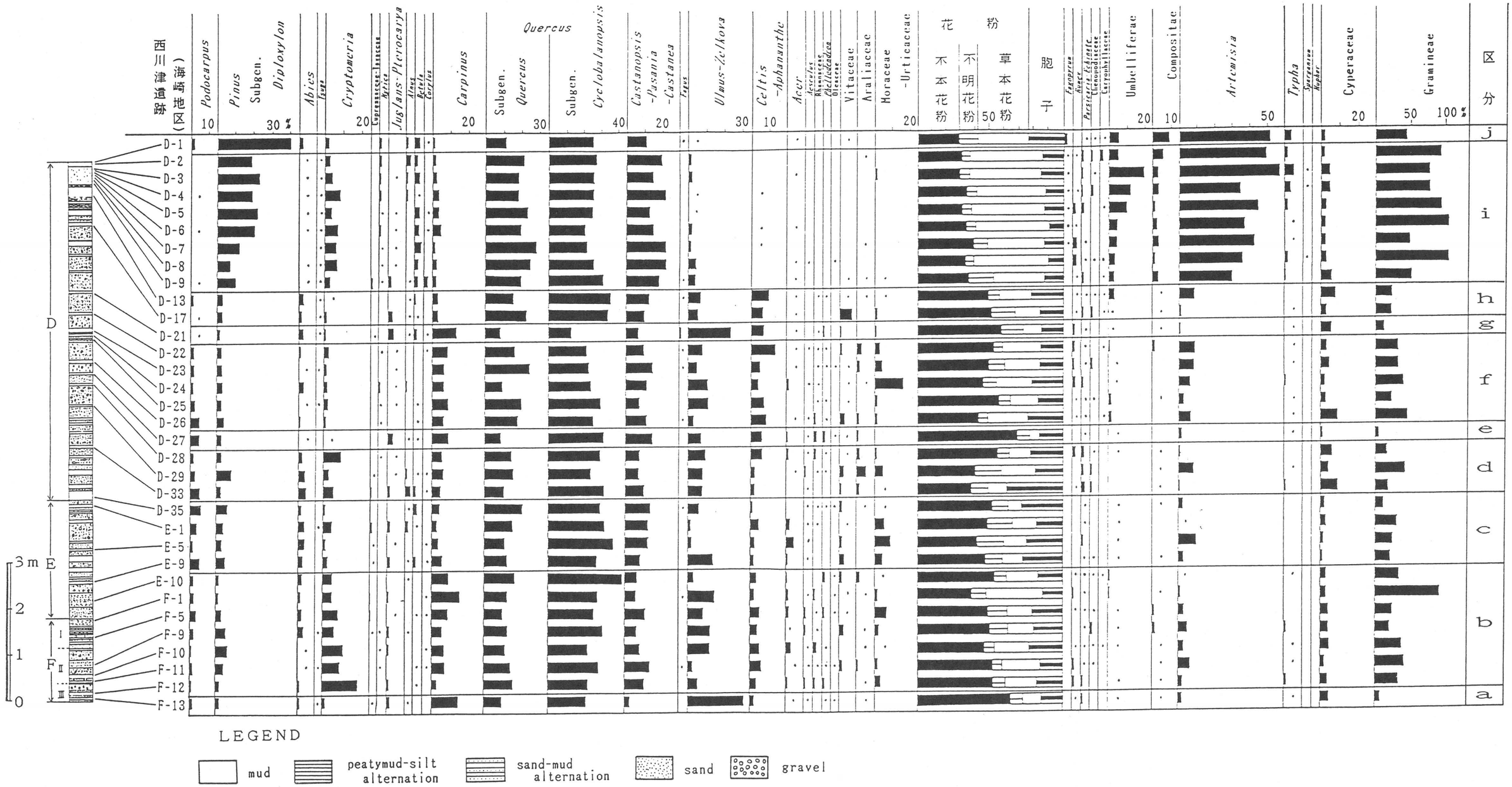
第100図　南壁面F（1～13）E（1～10）柱状図



第101図　南壁面D（1～35）柱状図



第102図 北壁面花粉ダイアグラム



第103図　南壁面花粉ダイアグラム

10 石　　器

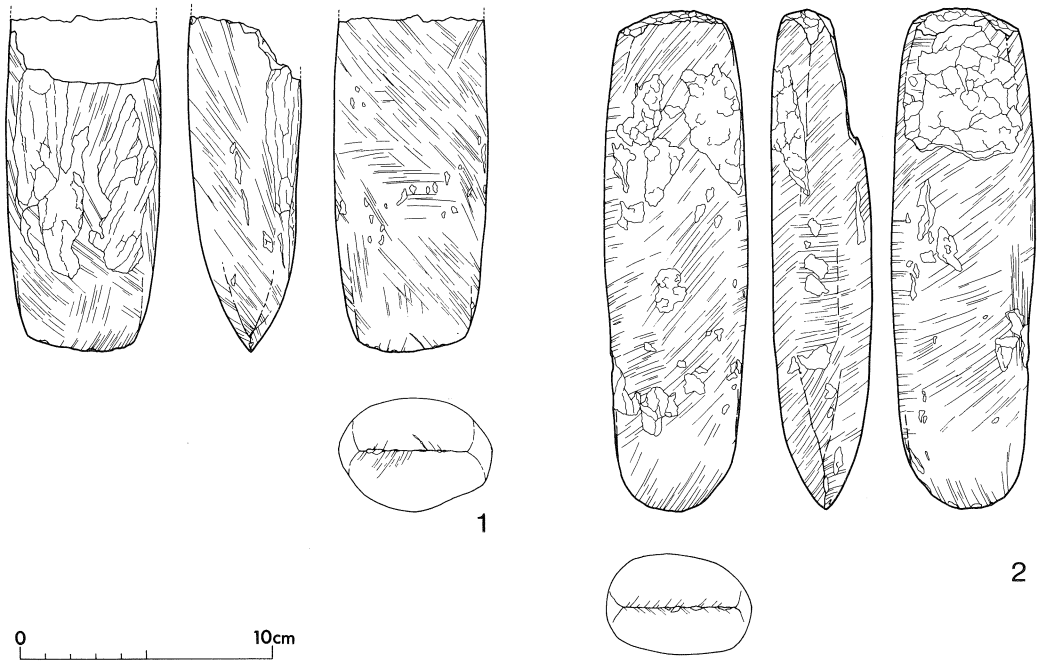
石器として取り上げたものは、蛤刃磨製石斧、環状石斧、石包丁、石錘、砥石、石皿等である。他の石器類については既に報告した。

蛤刃磨製石斧

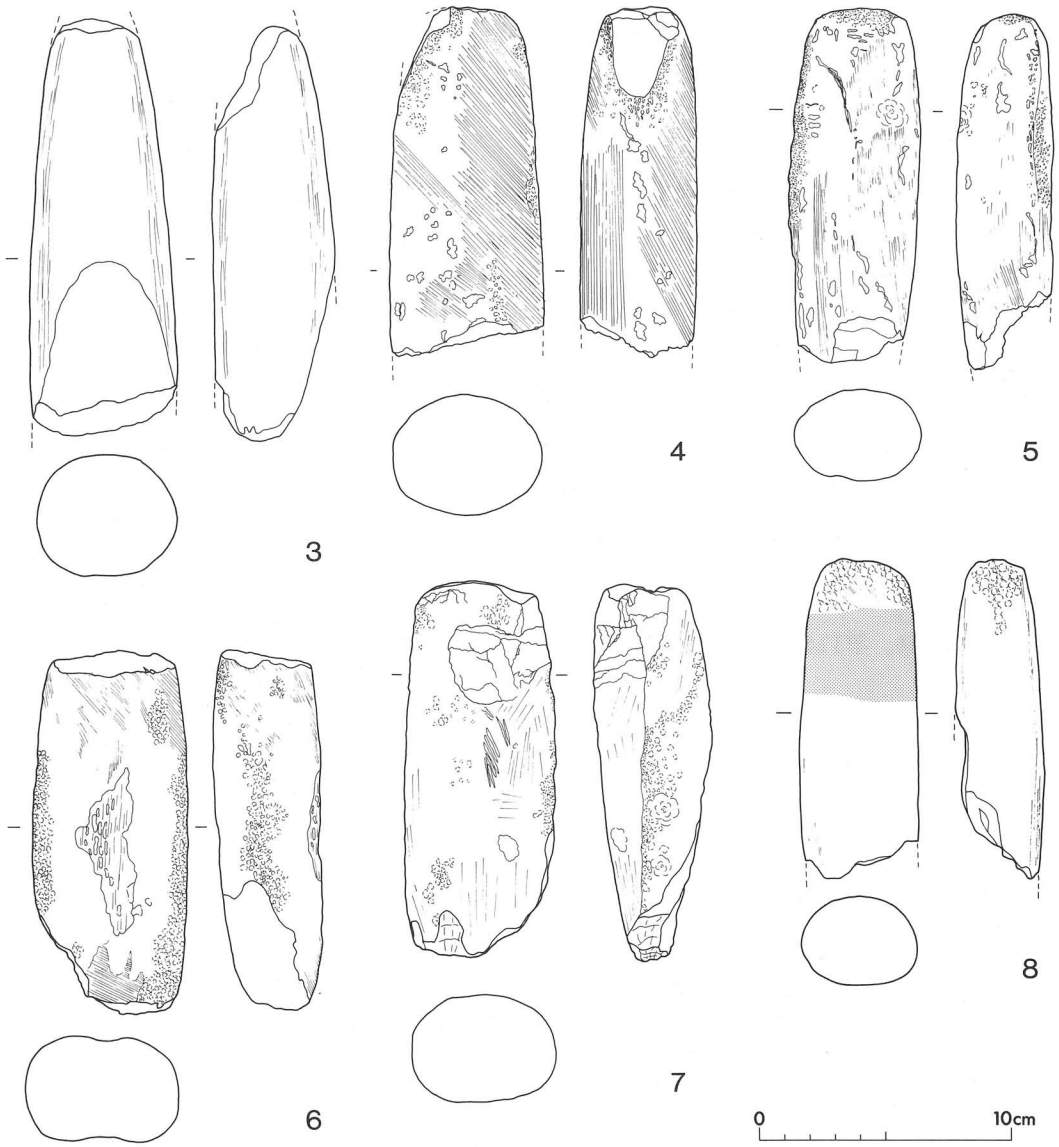
第104図～第123図には弥生時代と考えられる蛤刃磨製石斧の一部を掲載した。表面的には、石材はいずれも玄武岩を用いていると観察される。

これらは、およそ原石→荒割（打抉き）→敲打→研磨という製作段階を考えることができる。第119図～第122図は原石・荒割成形段階のものである。87、88、90は柱状の原石の周囲を打抉きはじめた段階で多くの自然面を残している。そのうち、90は加工途中で折れたものと考えられる。その時の打撃痕が認められる。91、92、94～100、102、103は87、88に比較すると扁平で、周囲の打抉成形もかなりすすんだものが多い。94、99、102、103は加工途中で折れたものであろう。第118図83もこの段階と思われるが、径は最も大きい。

第113図54、第114図62、66、67、第117図、第118図85、第119図89、第120図93は敲打を



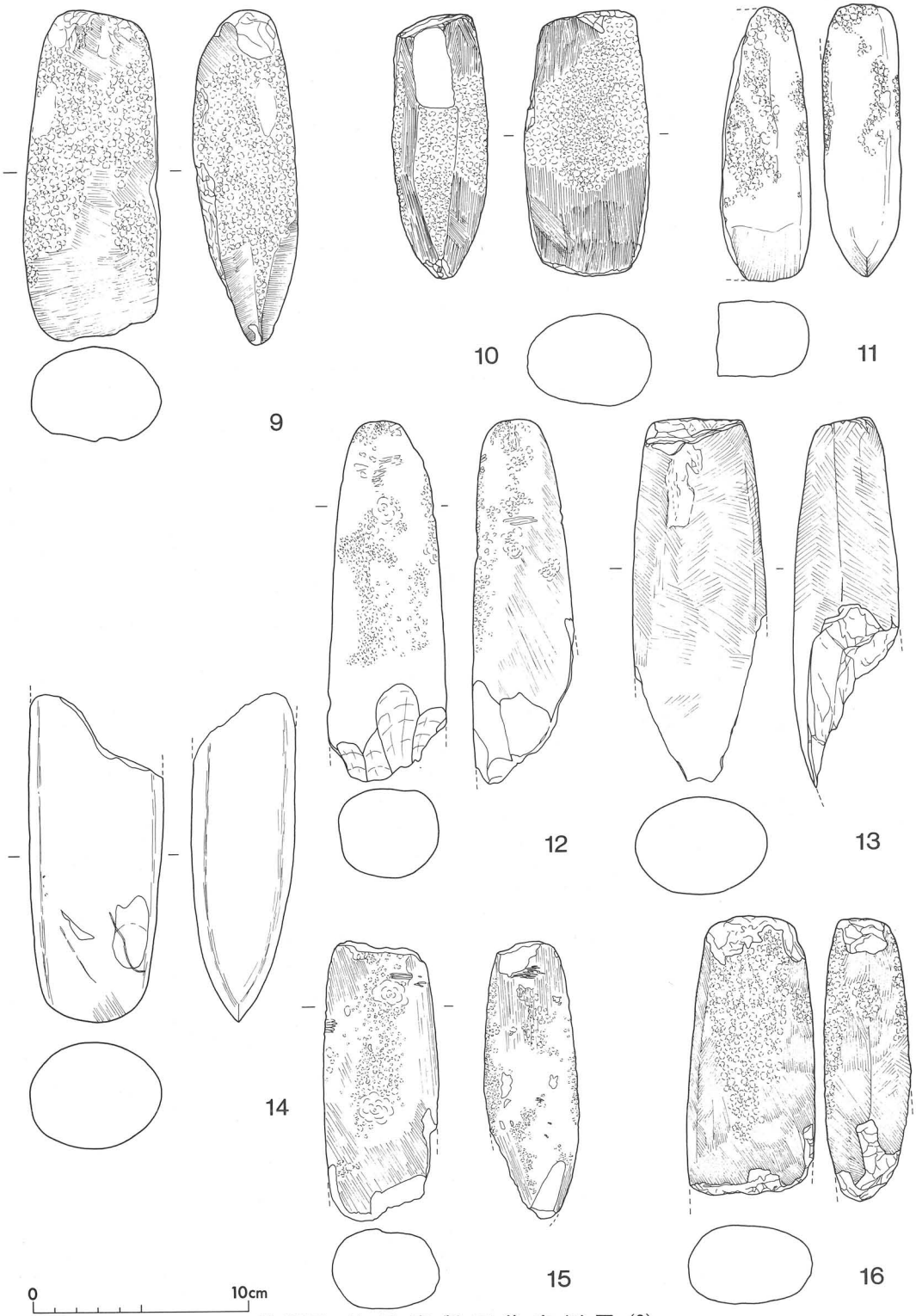
第104図　蛤刃製磨石斧実測図（1）



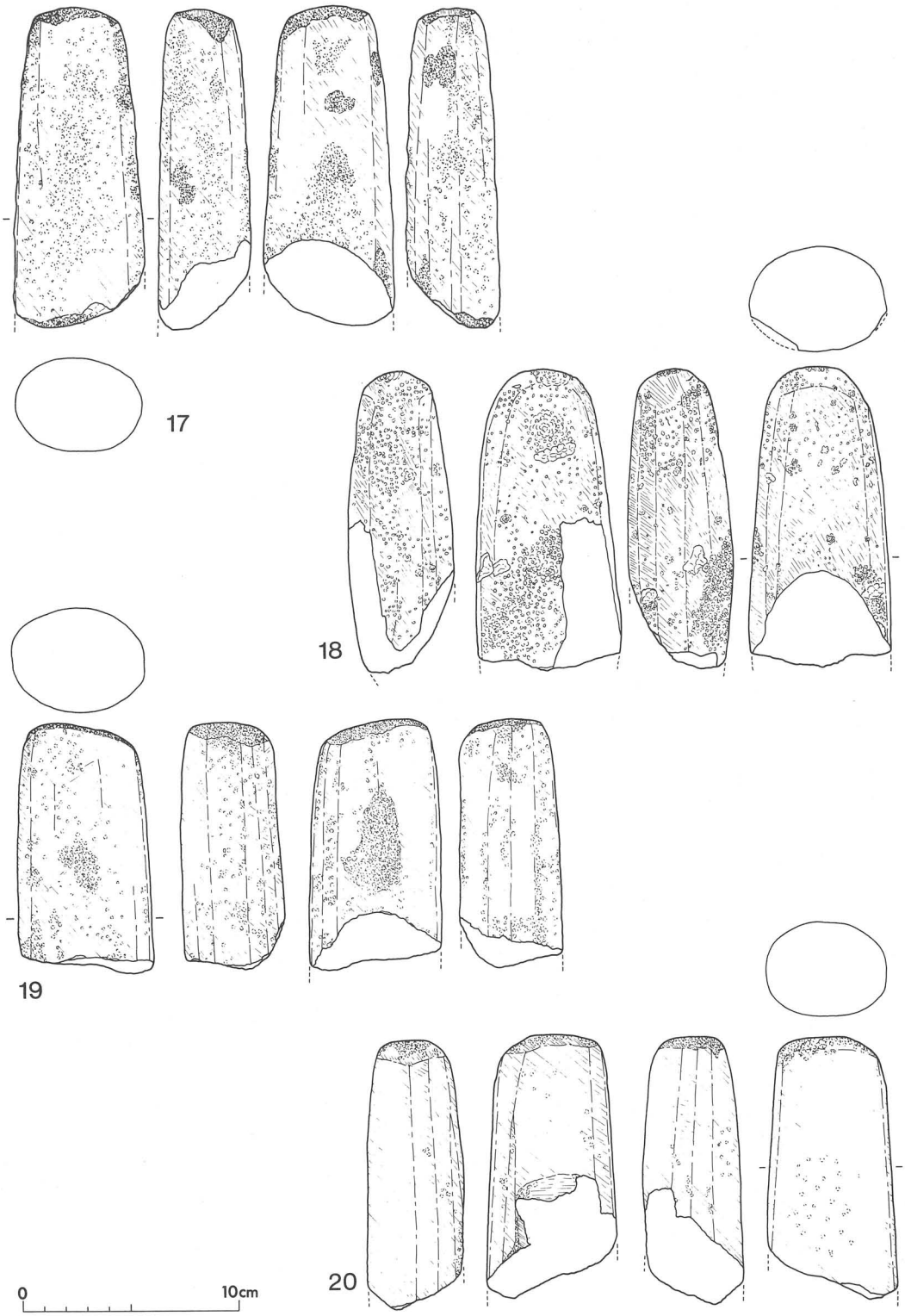
第105図　蛤刃磨製石斧実測図（2）

加えた段階のものである。断面が楕円形、もしくはそれに近いまで敲打により成形している。最大のものは、第117図82で、長さ32.7㎝、径8.4×6.6㎝、重量は3,300ｇを測る。この段階では形態上、刃部と頭部が明確になってくるが、刃部にはまだ刃はみられない。第118図86は敲打の段階で折れた可能性がある。

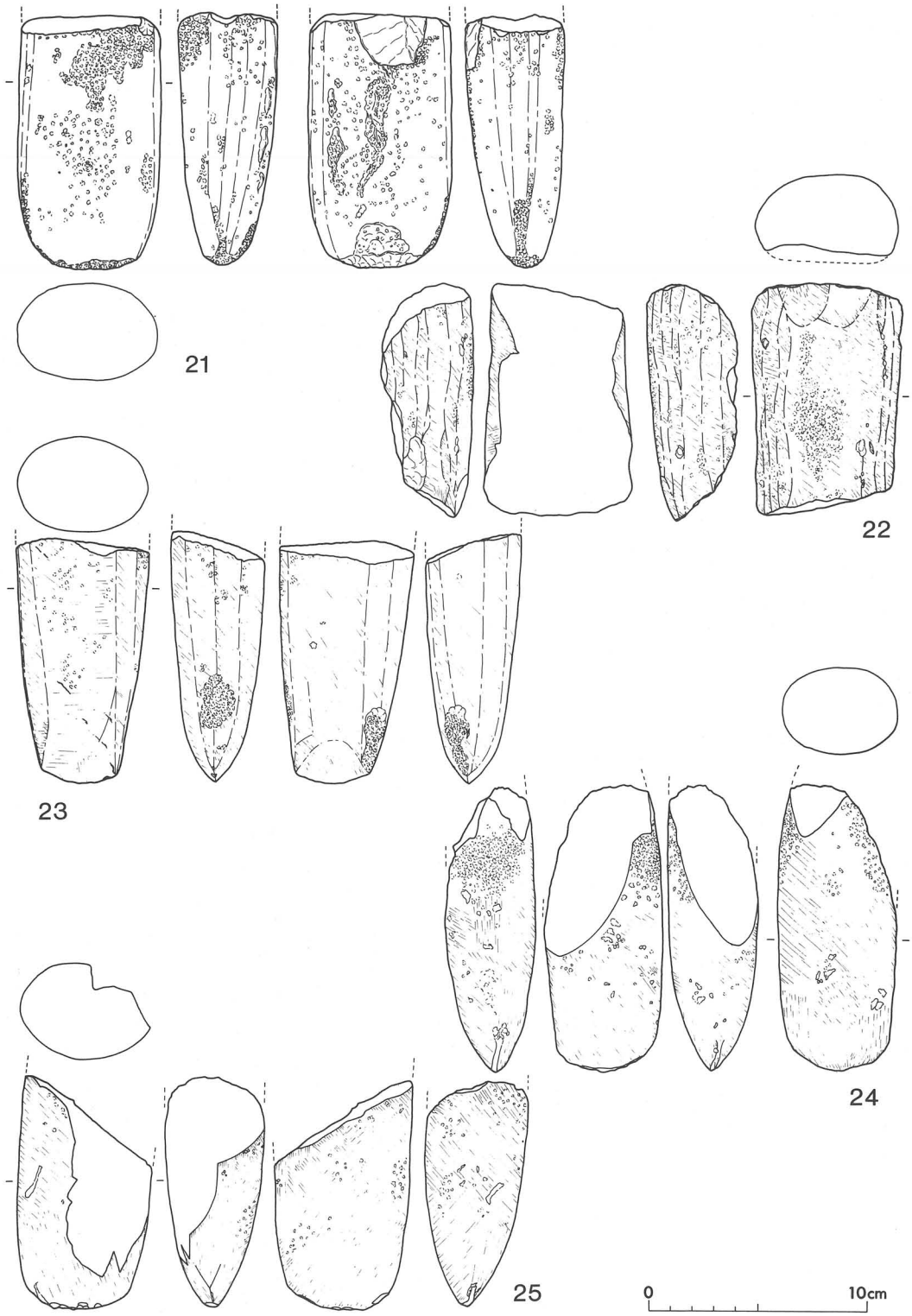
第106図９、10、第108図21、第110図32、33、第112図47、第113図54、56、第114図65、



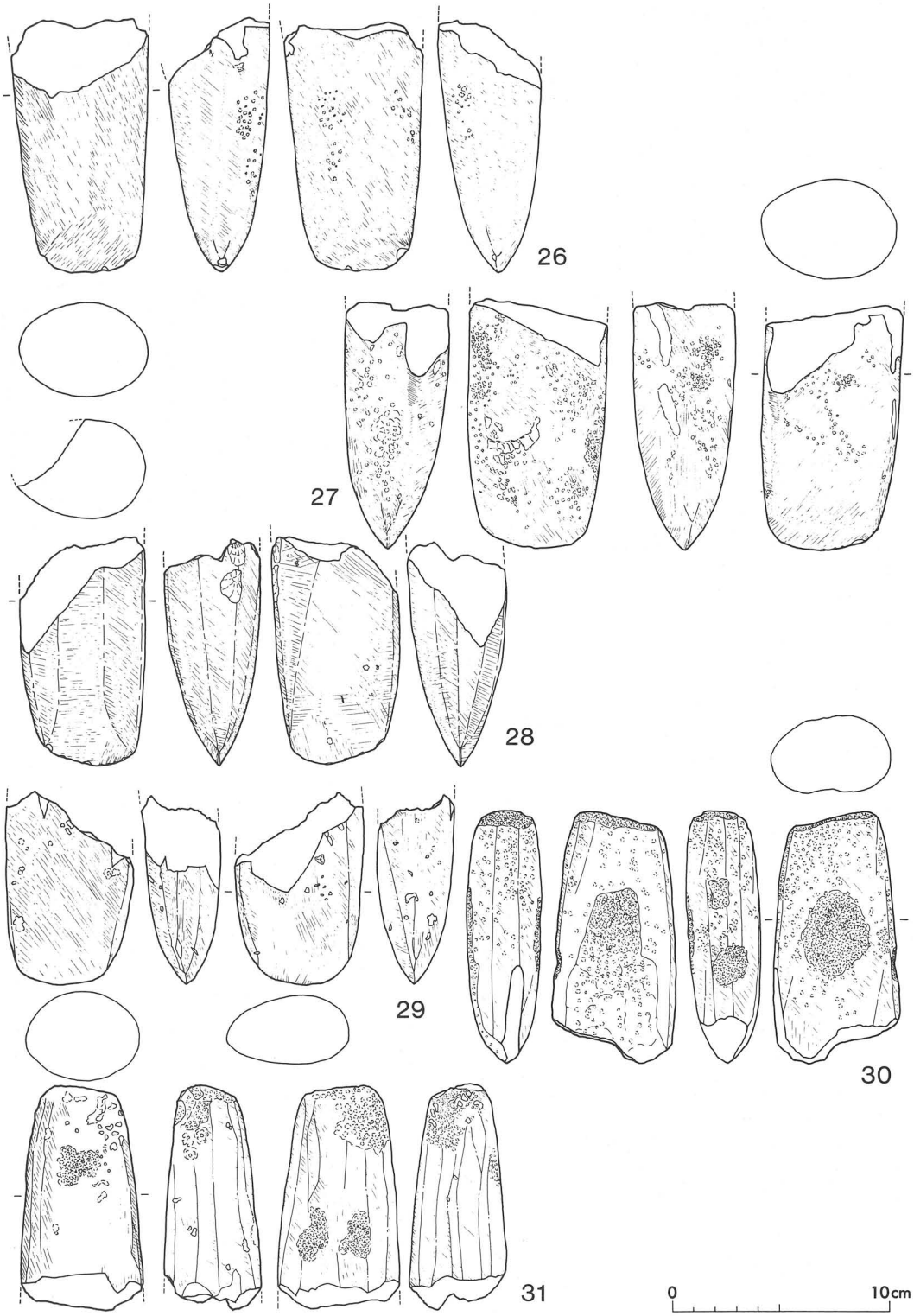
第106図　蛤刃磨製石斧実測図(3)



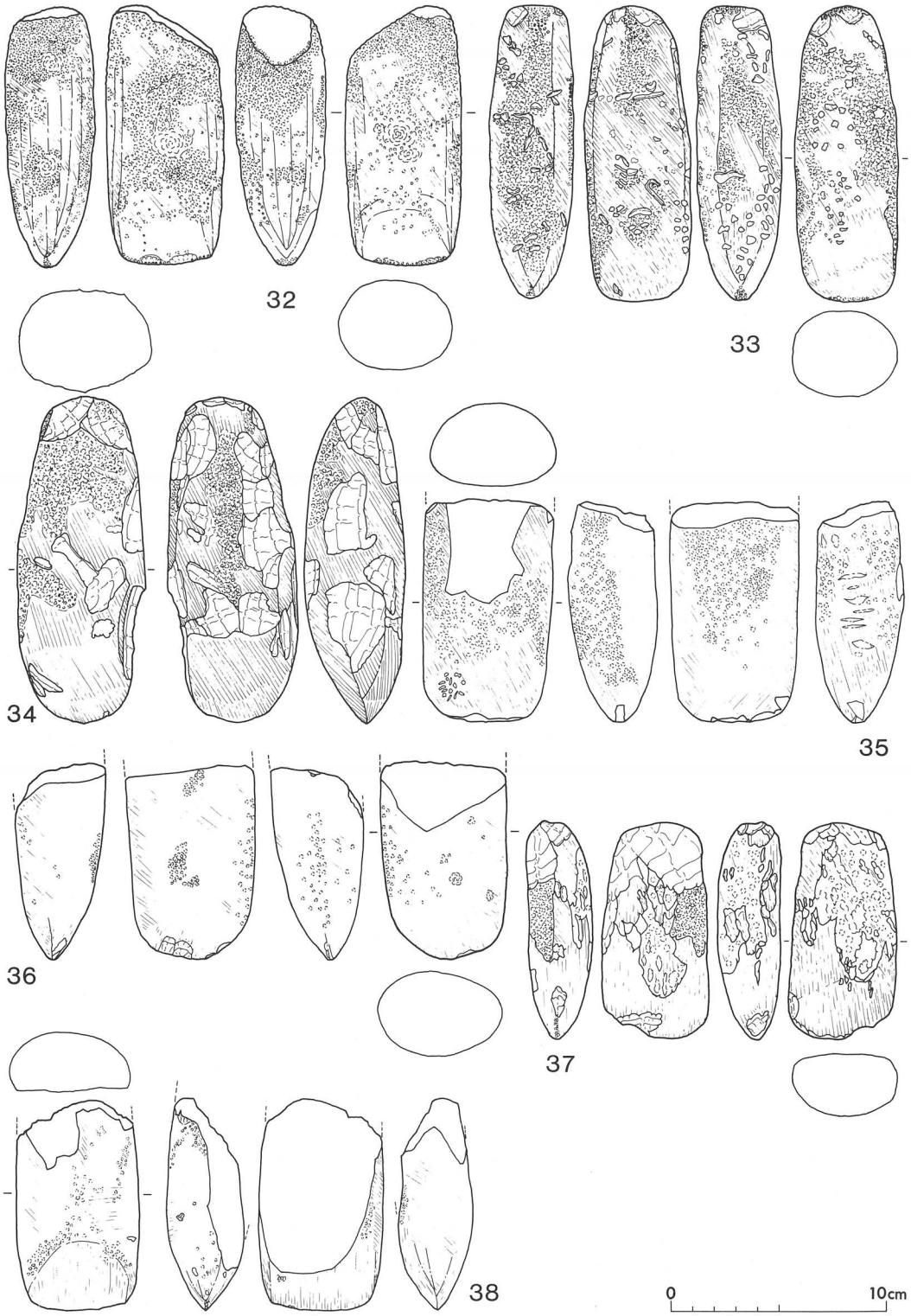
第107図　蛤刃磨製石斧実測図(4)



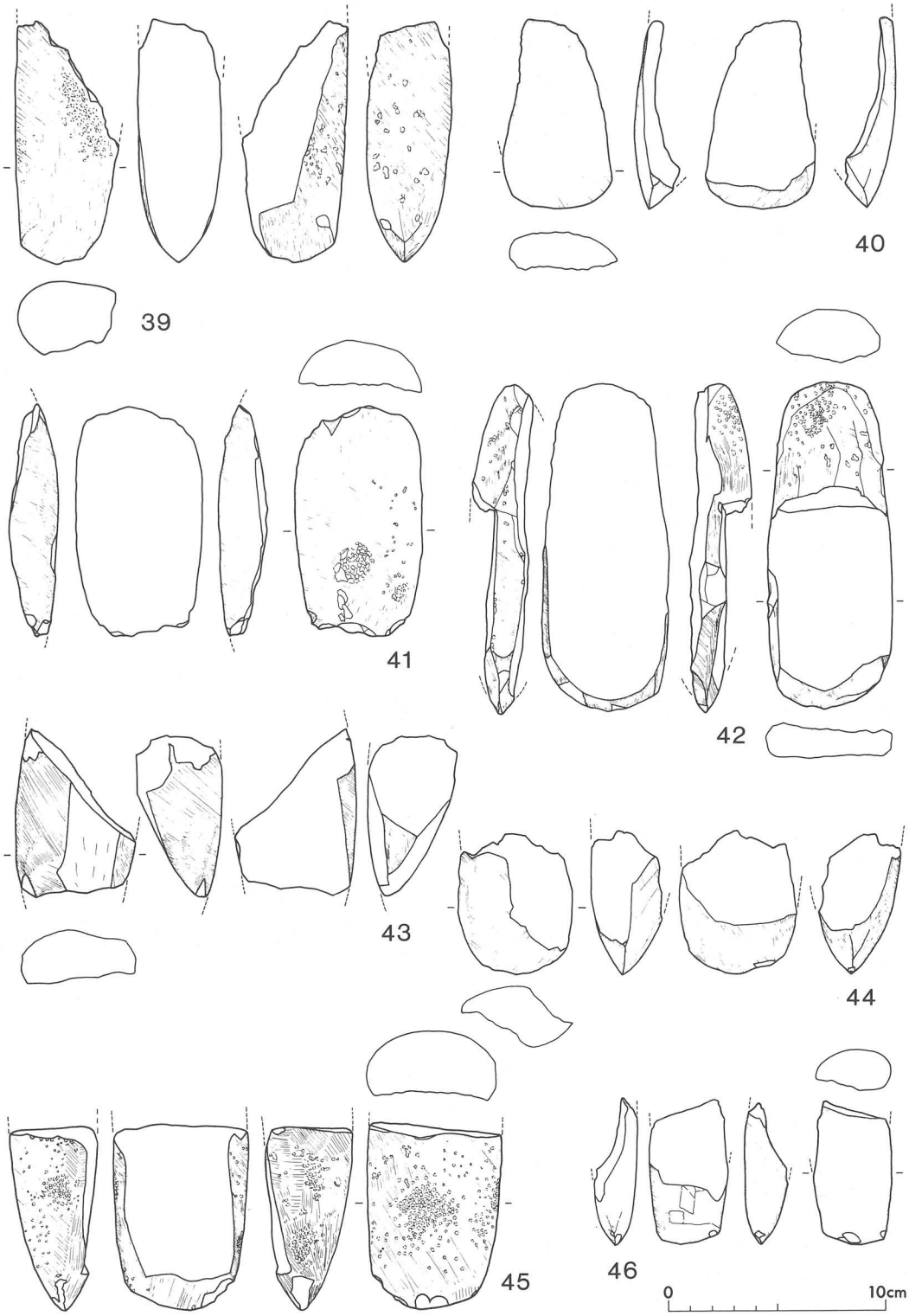
第108図　蛤刃磨製石斧実測図(5)



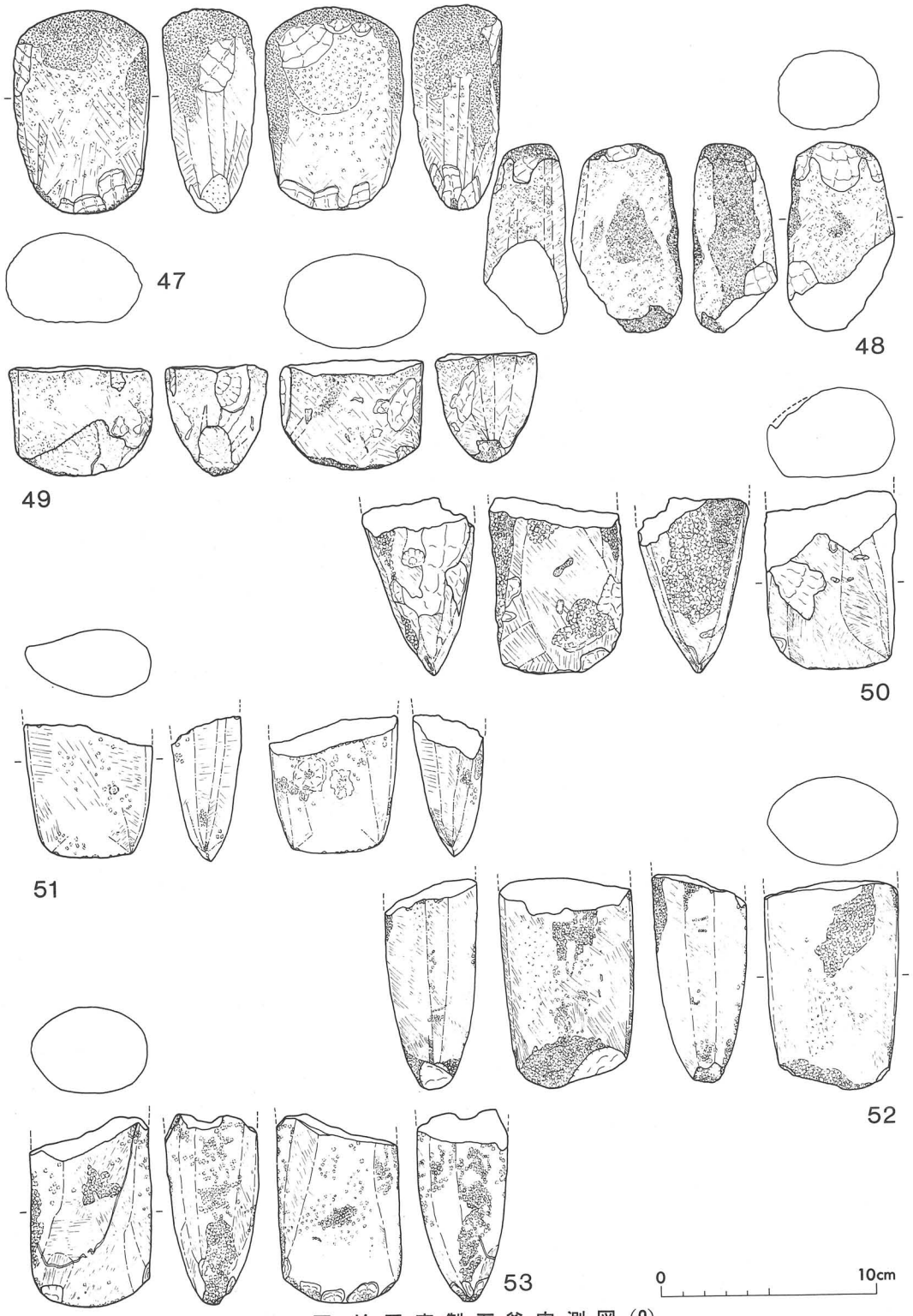
第109図　蛤刃磨製石斧実測図(6)



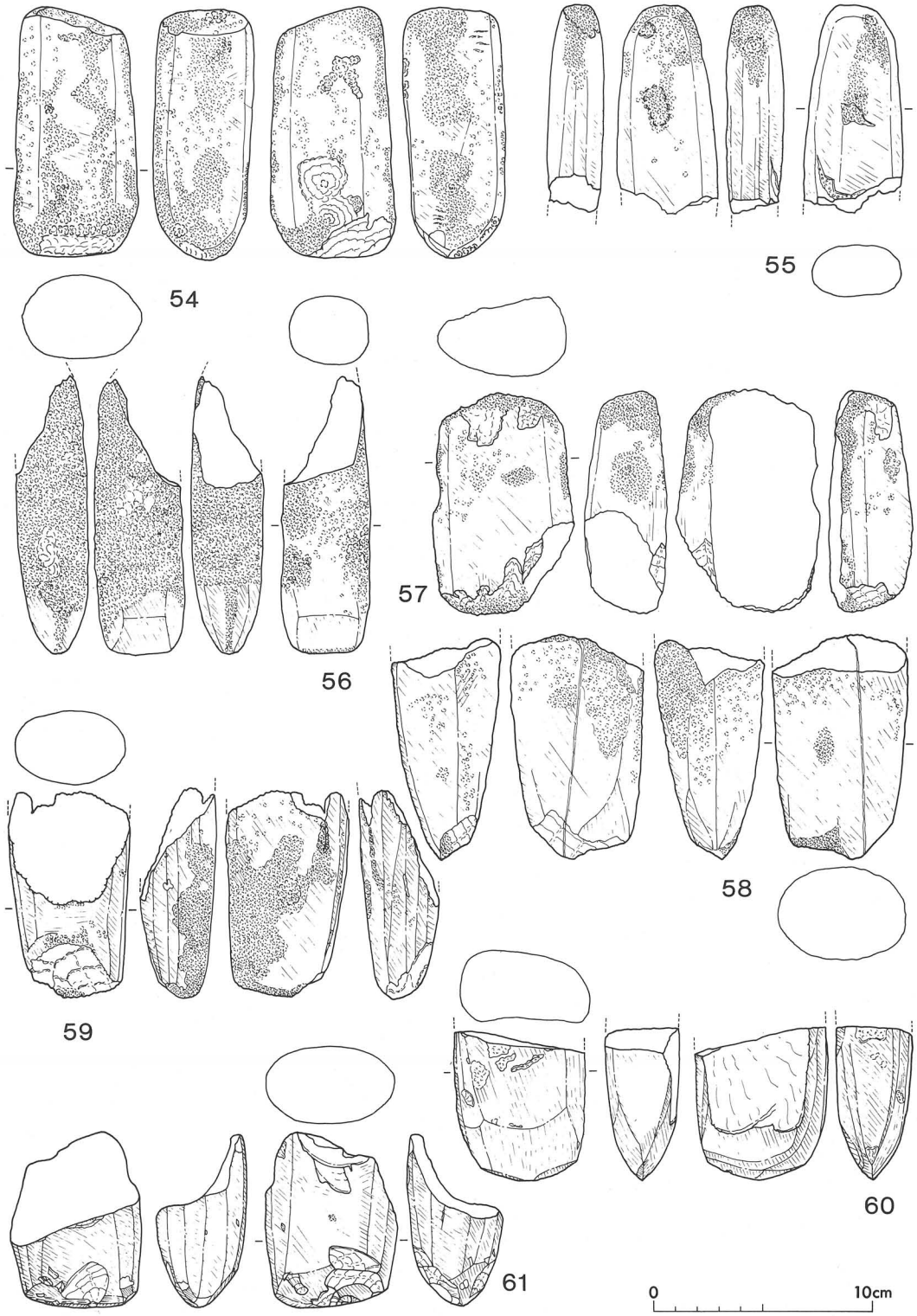
第110図　蛤刃磨製石斧実測図(7)



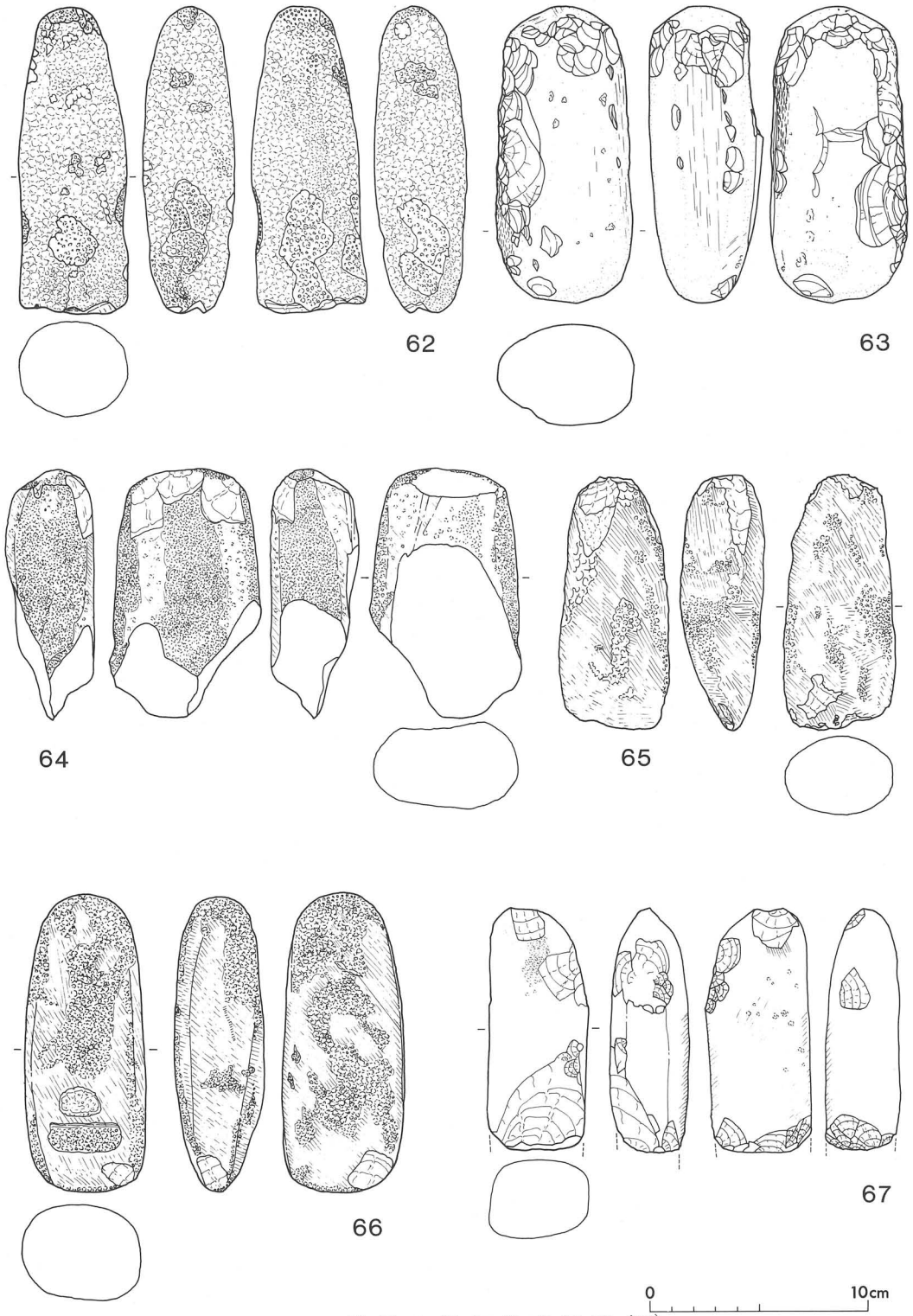
第111図　蛤刃磨製石斧実測図(8)



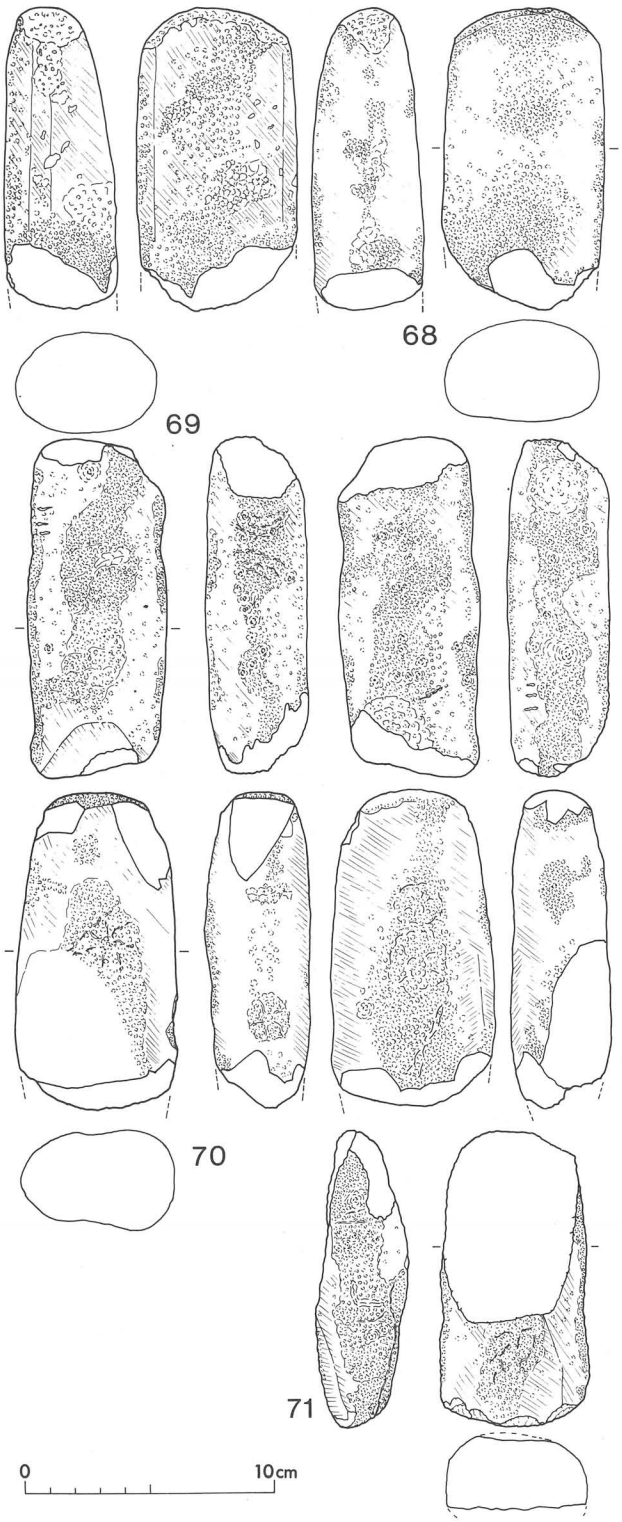
第112図　蛤刃磨製石斧実測図(9)



第113図　蛤刃磨製石斧実測図（10）



第114図　蛤刃磨製石斧実測図（11）

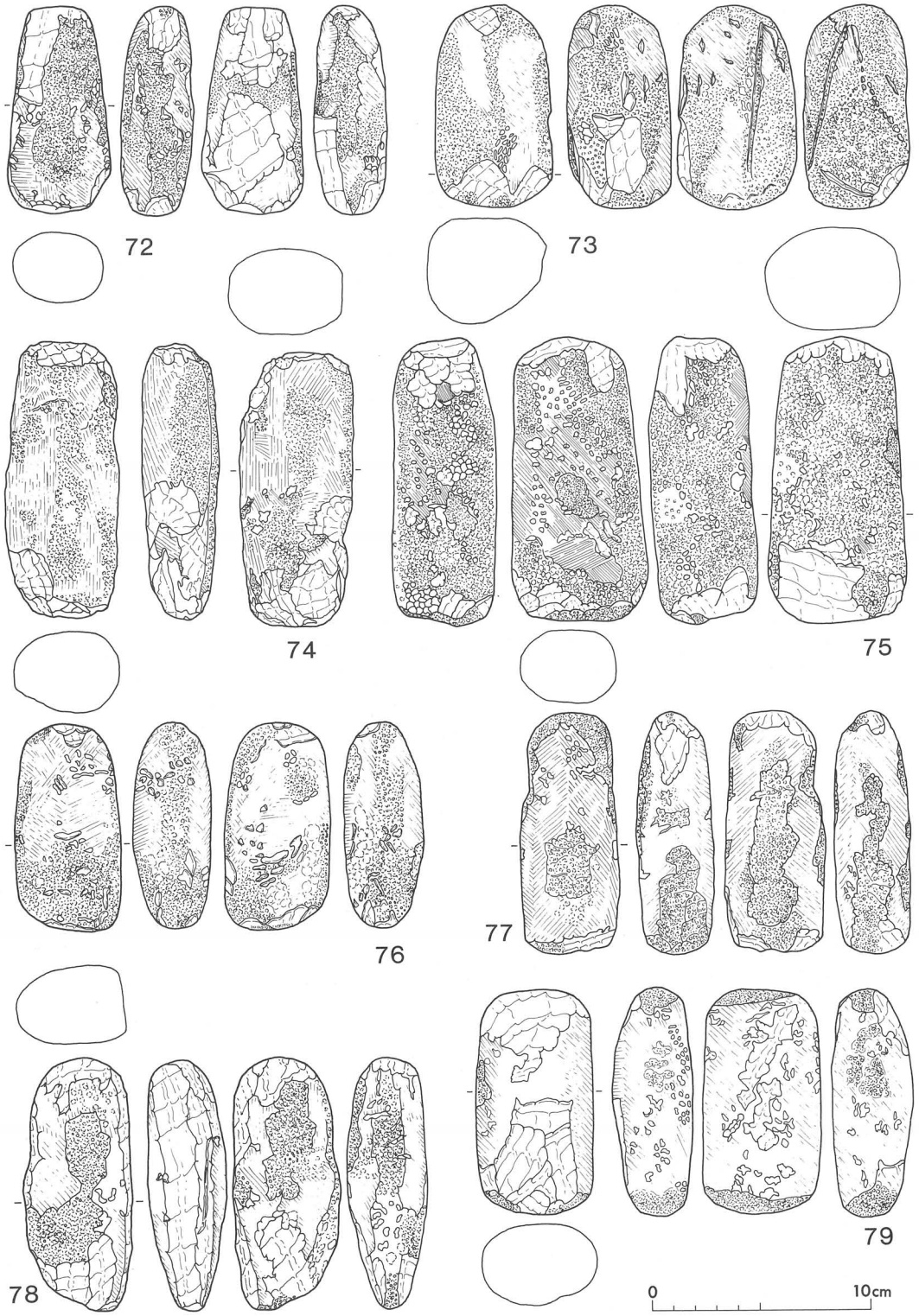


第115図　蛤刃磨製石斧実測図(12)

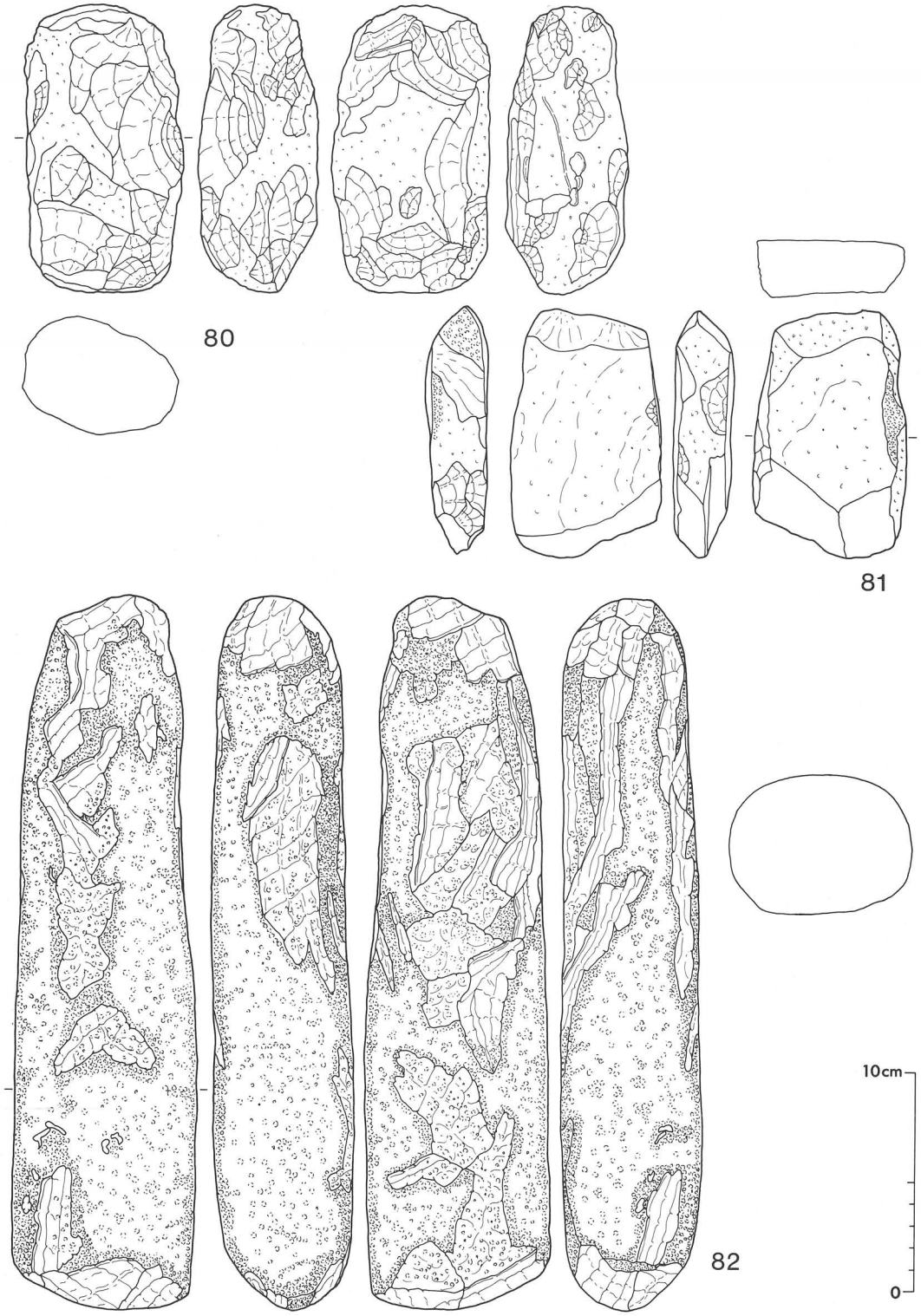
66、第115図68、69、71、第116図72～79、第122図101、第123図106は研磨を加えた段階と考えられるものである。第116図は研磨を始めたころのもので、胴部に磨きがみられるが、擦痕の方向は一様でない。第106図9、10、第108図21、第110図32、33等は刃部を研ぎ出そうとしているが、刃は鋭くない。第122図101はほとんど敲打をしないまま、研磨の段階に入ったものである。この研磨の段階のものの中には、完成品の刃部が磨滅や刃こぼれしたり、欠損したものを再度、研ぎ出そうとしたものが相当量含まれると思われるが、明確に区別はできなかった。

以上の他は、いずれも完成品、もしくはその使用中に欠損したものと考えられる資料である。荒割・敲打の痕跡はわずかに残る。全様が判るものは第104図2のみである。長さ20.0㎝、径5.7×3.9㎝、重さ805㌘を測る。第105図8は頭部より約2.5㎝のところに幅3.0～4.0㎝の柄の痕跡が認められる。

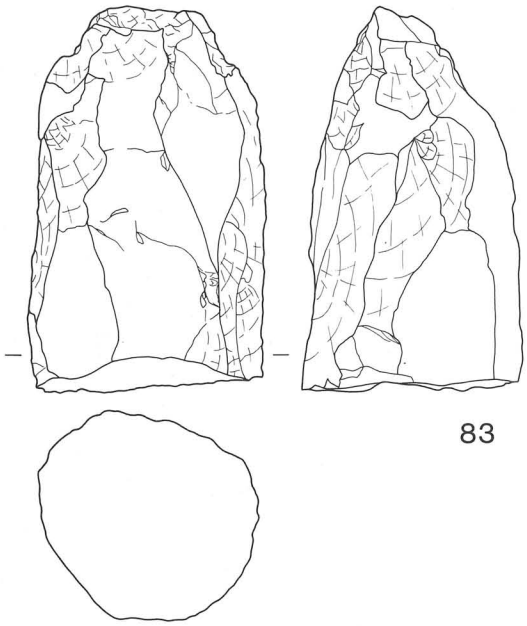
欠損のしかたは、刃部の先端より5.0㎝以上のところでナナ

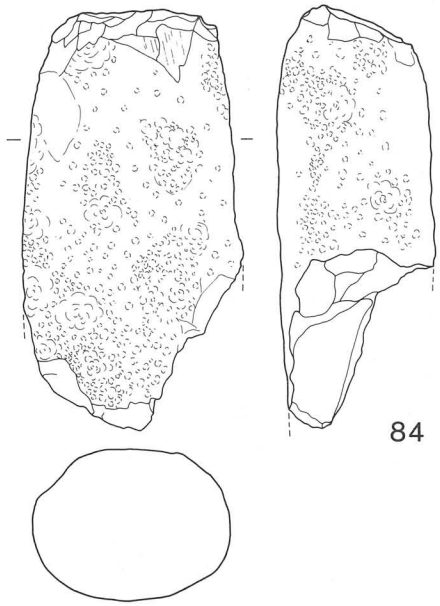


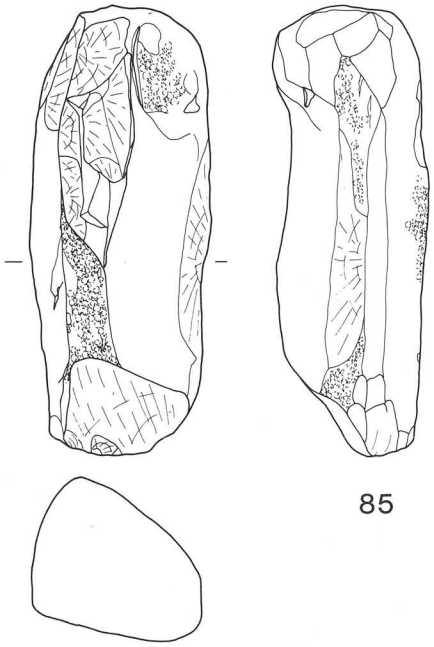
第116図　蛤刃磨製石斧実測図(13)

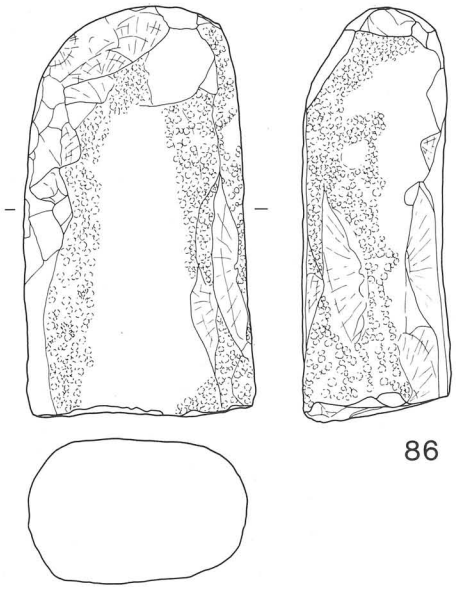


第117図　蛤刃磨製石斧実測図(14)



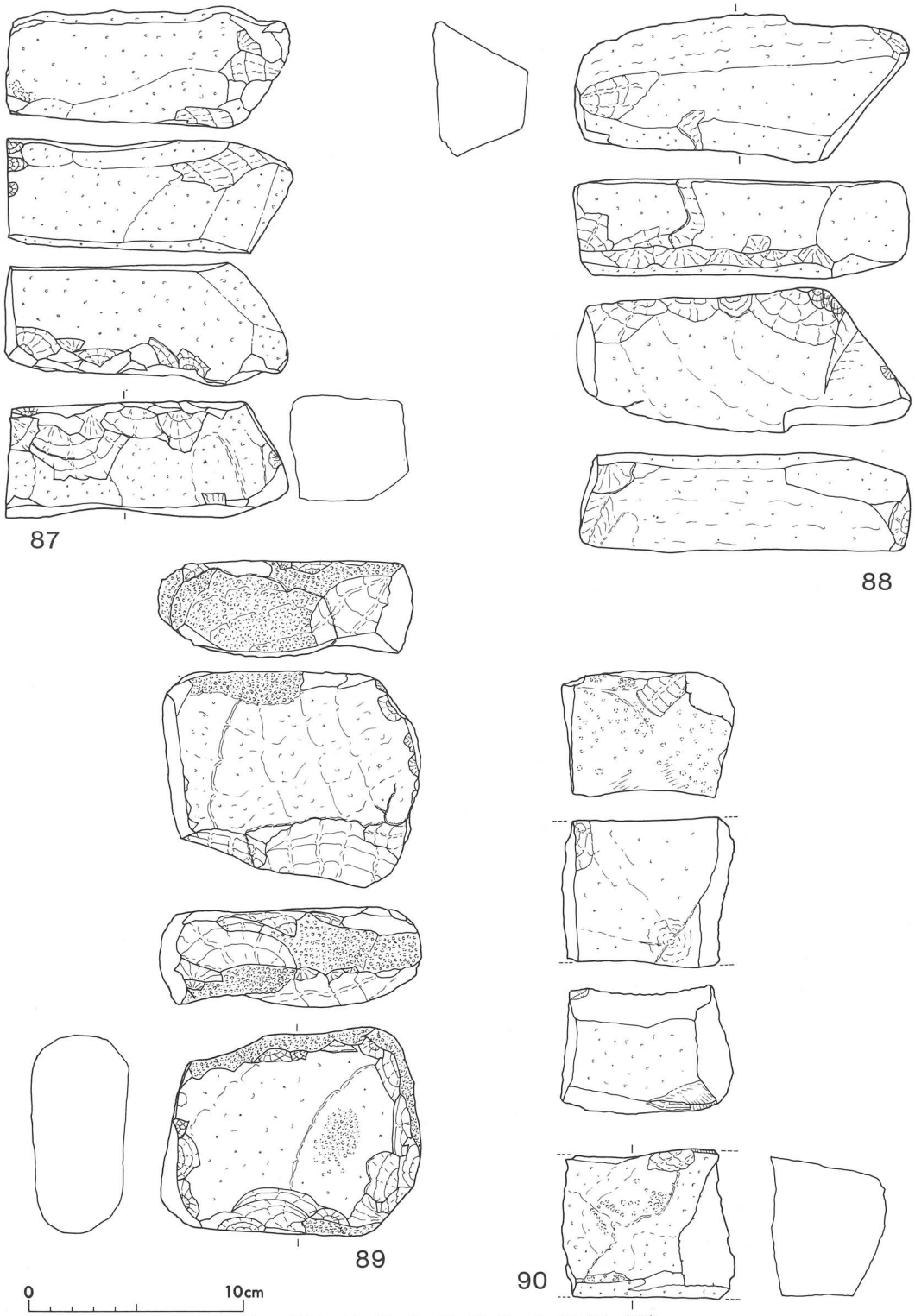




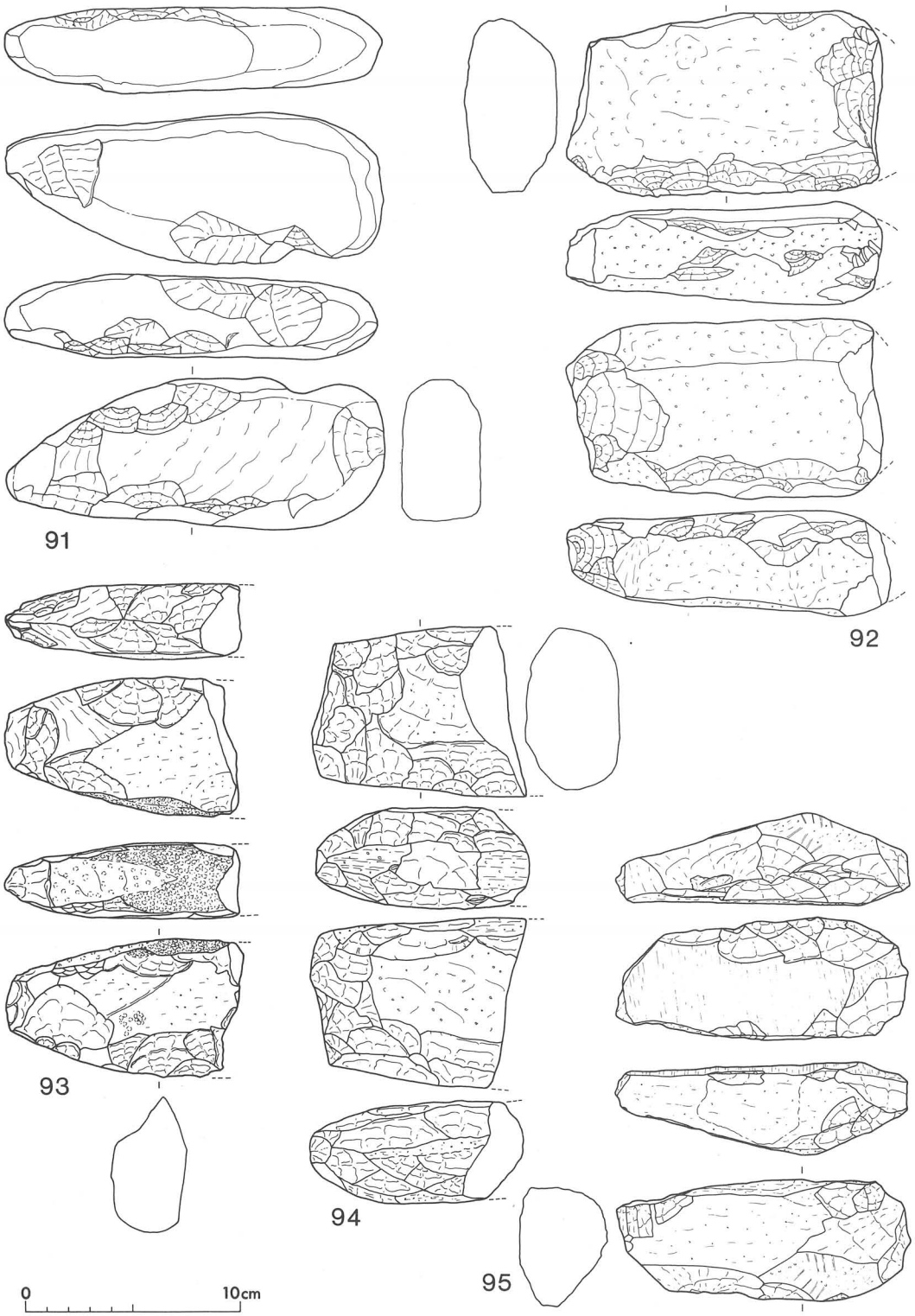


0 10cm

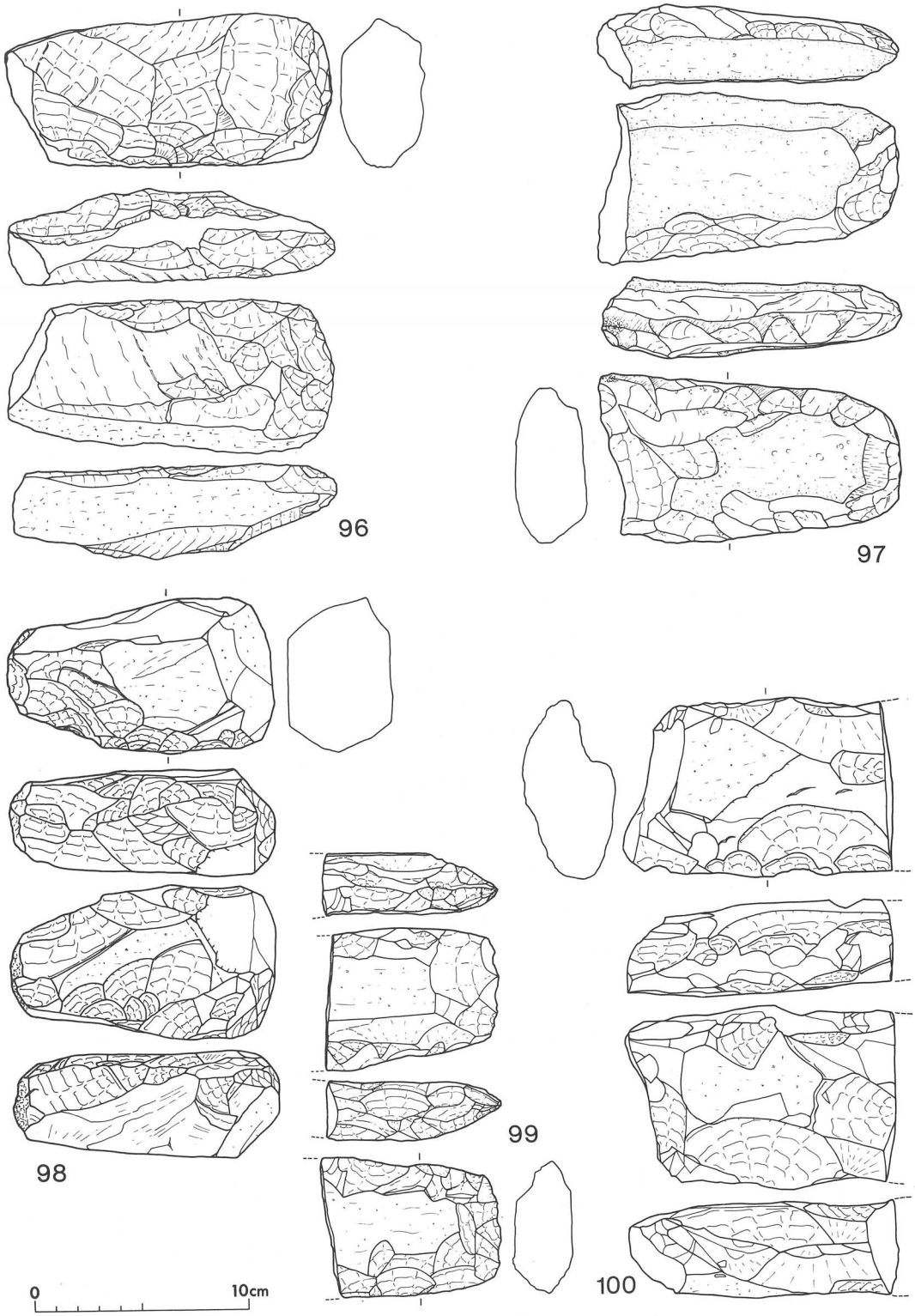
第118図 蛤刃磨製石斧実測図(15)



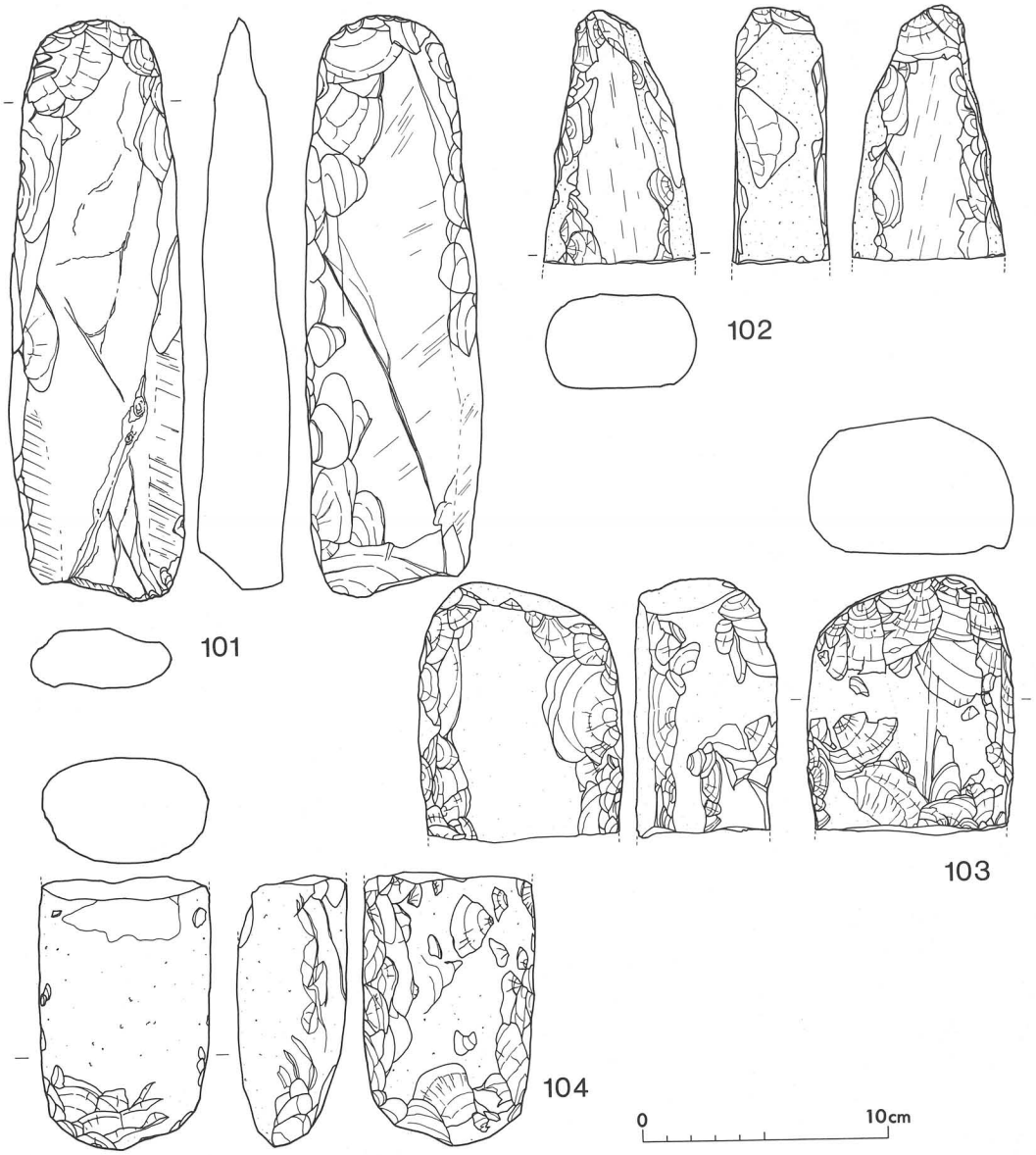
第119図　蛤刃磨製石斧実測図（16）



第120図　蛤刃磨製石斧実測図（17）



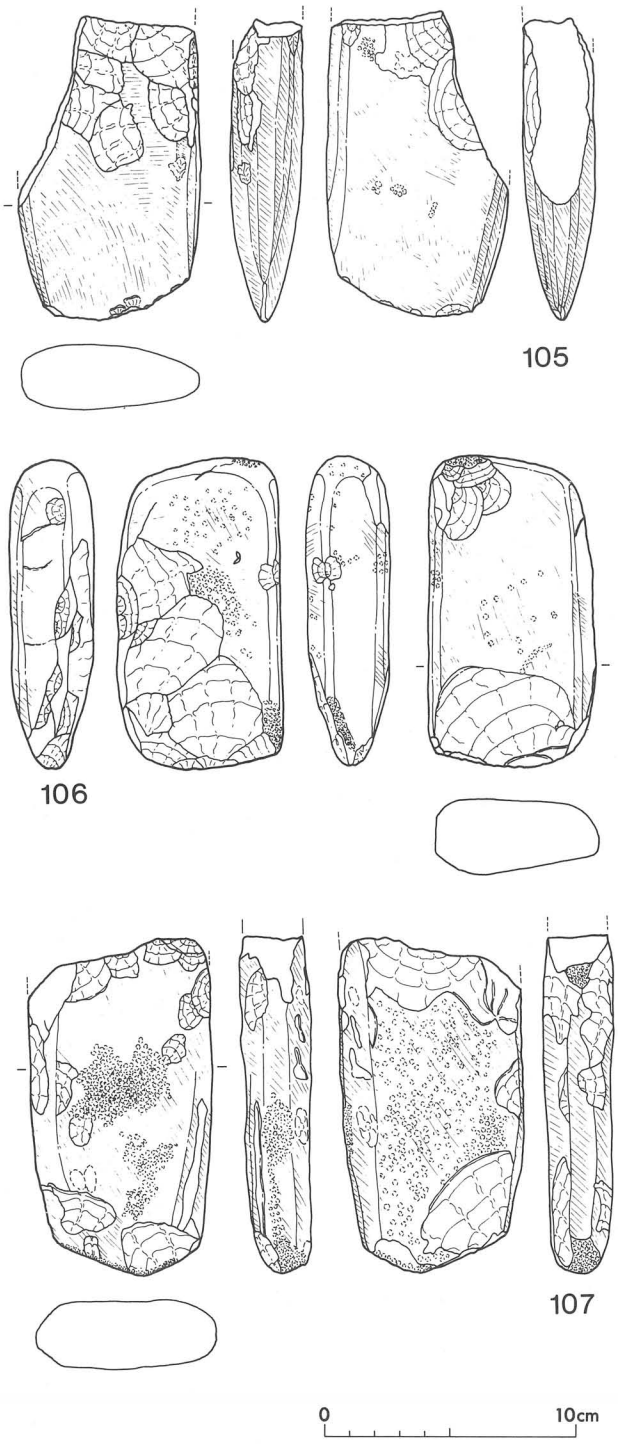
第121図　蛤刃磨製石斧実測図(18)



第122図　蛤刃磨製石斧実測図(19)

メに折れているものが多い。完成品において刃部に残る擦痕は両面ともナナメ同一方向であり、使用痕と考えられるが、この方向と欠損部の折れている方向は、図示した資料の範囲内ではナナメ同一方向となる傾向がある。このことは石斧の使用方法と欠損のしかたに一定の関係があることを予測させるがさらに多くの資料を用いて検討したいと考えている。

完成品における石斧の胴部での断面は大別すれば第104図2に代表されるような楕円形



第123図　蛤刃製磨石斧実測図（20）

のものと、第123図105のように扁平のものとの二種がある。前者の数量が圧倒的に多く、刃部に残る使用痕の比較はできないが、機能の違いにより後者がより縄文時代の石斧に近いといえるかもしれない。この二種は既に原石、荒割段階にもみられ、石材が選択されていたと思われる。

出土層は、弥生時代前期・中期が多いが、後期層からの出土のものも若干みられた。これは他の遺物と同様に、前・中期のものが後期層に混入していると考えられる。

石包丁

第124図～第126図には石包丁類を掲げた。石包丁は大別すると、小孔を穿った小形のものと大形のものがある。石材は圧倒的にスレートが多く、安山岩がこれに続いている。板状に剝離し硬い石が採用されているようだ（表20、21）。

第126図22、25、26は小形の石包丁で、刃部は直線的である 25、26は完成品で、前者は、1孔、後者は2孔穿たれている。22は未成品である。荒割成形後、片面を磨き、2孔を穿ちかけている。小形の石包丁はこの3点のみで、他はいずれも大形の石包丁、及びその破片と考えられる。

大形石包丁は特に定形化したものはない。刃部も、第125図11がやや曲刃的に加工されているのみで、他は皆直刃である。あえて分類すれば、有孔のものと無孔のそれがあるが、どちらかといえば前者は大形石包丁の中でもやや小形のものにみられる。

大形で無孔の第124図1は最も大きく、大人の片手でも握りにくい。2も同様である。いずれも、刃部には使用されていたことを示す光択がみられる。このような大形石包丁は手で持つより、例えば作業台のようなものに固定して使用された可能性を考えるべきであろう。第126図21は、この種の石包丁の未成品と考えられる。刃部、あるいは背にあたる部分に剝離加工がみられる。

無孔大形石包丁よりやや小形の有孔のもの（第126図23、24、27～40）は片手に持って作業をする場合、充分可能なものである。破損品も多い。

以上の石包丁の中には、後述する管玉が緑色凝灰岩を石材としていることを考えあわせれば、硬度との関係から石鋸に用いられたものが含まれていると思われる。

石匙

第127図は石匙である。長さ6.4㎝、重さ15.0ｇを測る打製の横型である。島根県下ではあまり出土例はないが、同様のものは松江市的場遺跡から縄文時代後・晩期の土器とともに相当量出土している。[註1] 本資料も的場遺跡出土資料と同時期と考えられる。

男根状石製品

第128図1は自然石を利用した男根状石製品である。長さ10.9㎝、重さ203ｇを測る。亀頭は鈴口状の沈線、裏面は「キ」の字状の浅い線刻を施している。類似の資料は、佐賀県菜畑遺跡[註2]や山口県綾羅木郷遺跡[註3]にある。縄文時代後・晩期～弥生時代前期のものと考えられる。

扁平磨製石斧

第128図2、3は通常みられる扁平磨製石斧とはやや異なったものを掲げた。いずれも両刃で側面に擦り切りによる加工痕が観察される。2は長さ6.3㎝、最大幅3.3㎝、重さ55.0ｇ、3は長さ7.1㎝、最大幅3.1㎝、重さ20.0ｇを測る。3は管玉と同様に緑色凝灰岩を石材としていると考えられる。

環状石斧

第129図1～5は環状石斧である。このうち、1と2は加工途中の未成品である。1の径は13.3㎝、厚さ1.8㎝、2は径13.5㎝、厚さ3.6㎝を測る。完成品の3～5はいずれも使用中に破損したものと考えられる。3は径11.6㎝で中央で折れた後、片面が全面剝離している。5は径9.1㎝、厚さ2.7㎝、重さ183ｇ。刃の一部を欠く。1、2の例からすると、

全体の形を円形に、かつ刃部を両面から剝離加工し、中央の孔は敲打によって両面から穿つ手法であることが判る。この後にさらに全体を敲打で調整し、研磨が行われたようで、4は中央の孔に敲打痕が一部残っている。

砥石

第130図、第131図16、17は砥石と考えられるものである。第131図16は最大のもので縄文時代にみられる石皿のように多孔質ではなく、やわらかい。33.0×34.5㎝、重さ13,500㌘を測る。両面とも敲打、擦痕が顕著にみられる。第130図10は16より小形であるが、敲打や研磨がみられる。18.5×18.7㎝、厚さ6.6㎝。第130図9は両面とも全面的によく使用されており、薄い。21.2×13.0㎝、厚さ3.2㎝であるが、中央から折れていると考えられる。11は仕上げ砥石にも充分使用される石材が用いられている。両面・側面とも全面に使用され、タテ方向に浅く細かい擦痕がみられる。16.0×11.3㎝、厚さは7.2㎝と厚い。

第130図12～15は粗い砂岩を用いている。全体に使用されているが、タテ方向に数条の溝があるのが特徴である。小形のものが多い。

第131図17も砥石と考えられる。長さ9.2㎝、幅5.2㎝を測る。

石錘

第129図6、8、第132図は石錘と考えられる資料である。6は長さ7.8㎝、径4.9㎝、重さ285㌘を測る。両端の敲打は使用痕とも観察され、石錘以外の用途も考えられる。8は13.4×10.6㎝、厚さ4.0㎝、重さ750㌘、中央に径2.1㎝の孔を穿った滑石製の石錘である。中央の孔から四方に向けて溝状となっている。石材の分析結果は中国山地と推定された[註4]。第132図19、20、21は楕円形の短軸方向の両端を打ち抉いた大形の石錘である。その形態や重量から、例えば長崎県西彼杵半島沖で使用されるホタリ漁の碇のような[註5]機能が考えられる。22は20.0×14.9㎝、重量6.4㎏の自然石に十文字に幅3.4㎝の溝をつけた錘である。船の碇と考えられる。第129図7は長さ9.1㎝、径5.2㎝、重さ190㌘、両端が尖り、タテ方向に4条、中央に1条の溝を施す。

叩石

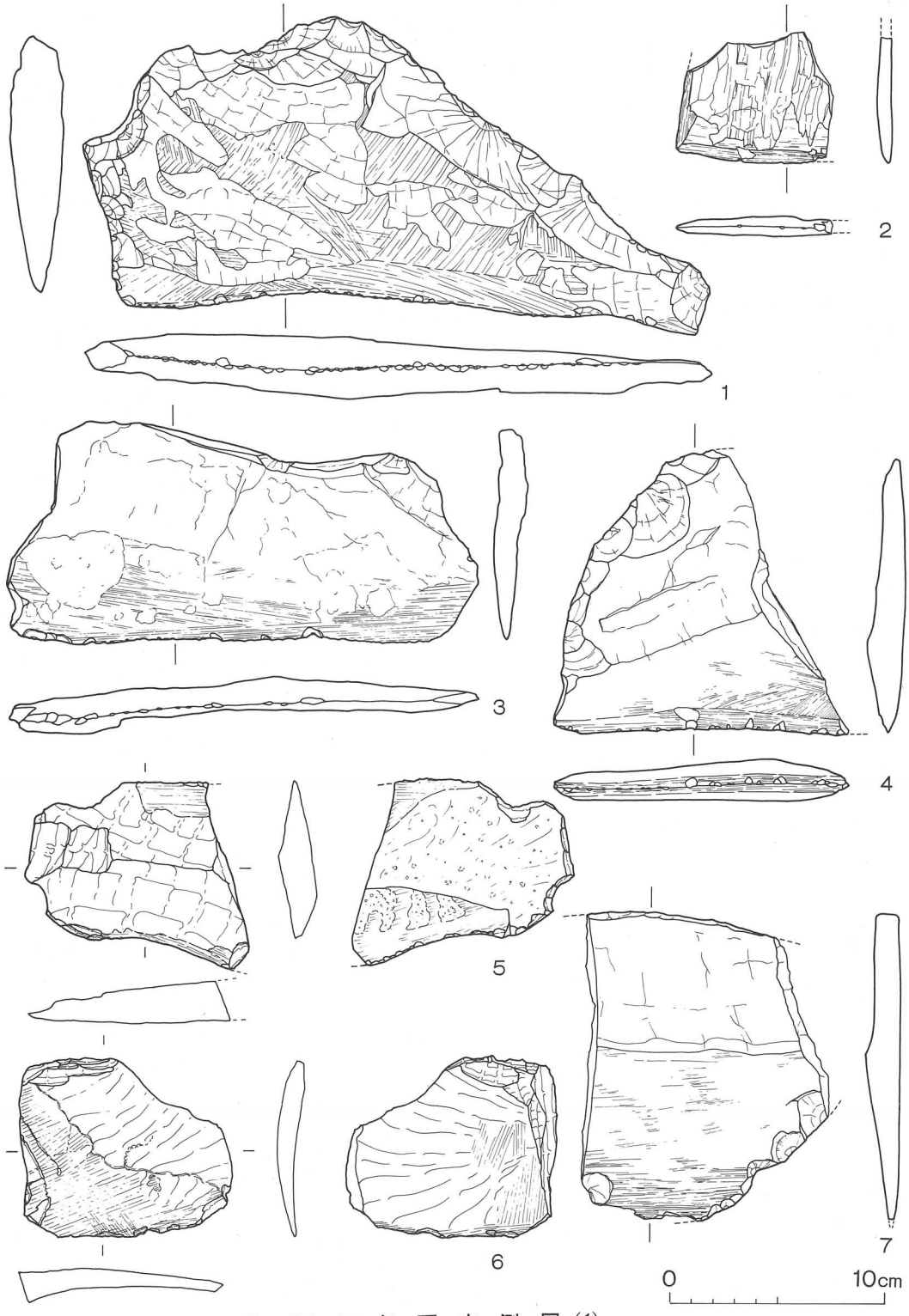
第131図18は叩石と考えられる。長さ13.9㎝、最大径4.6㎝、重さ352㌘の棒状の自然石を利用している。両端に使用痕がみられる。

註

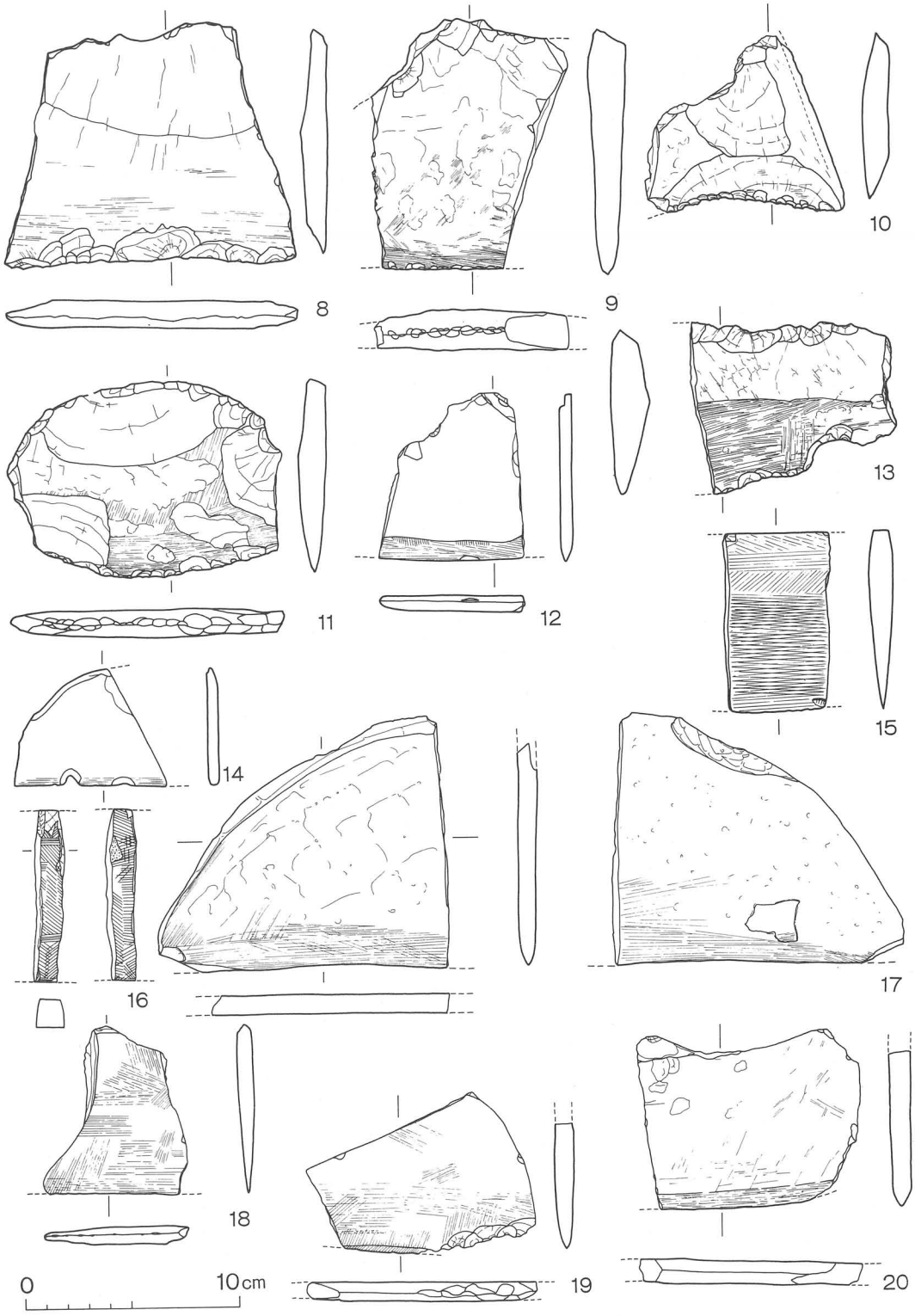
1　島根大学考古学研究室蔵

2　『菜畑佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査』唐津市教育委員会　昭和57年

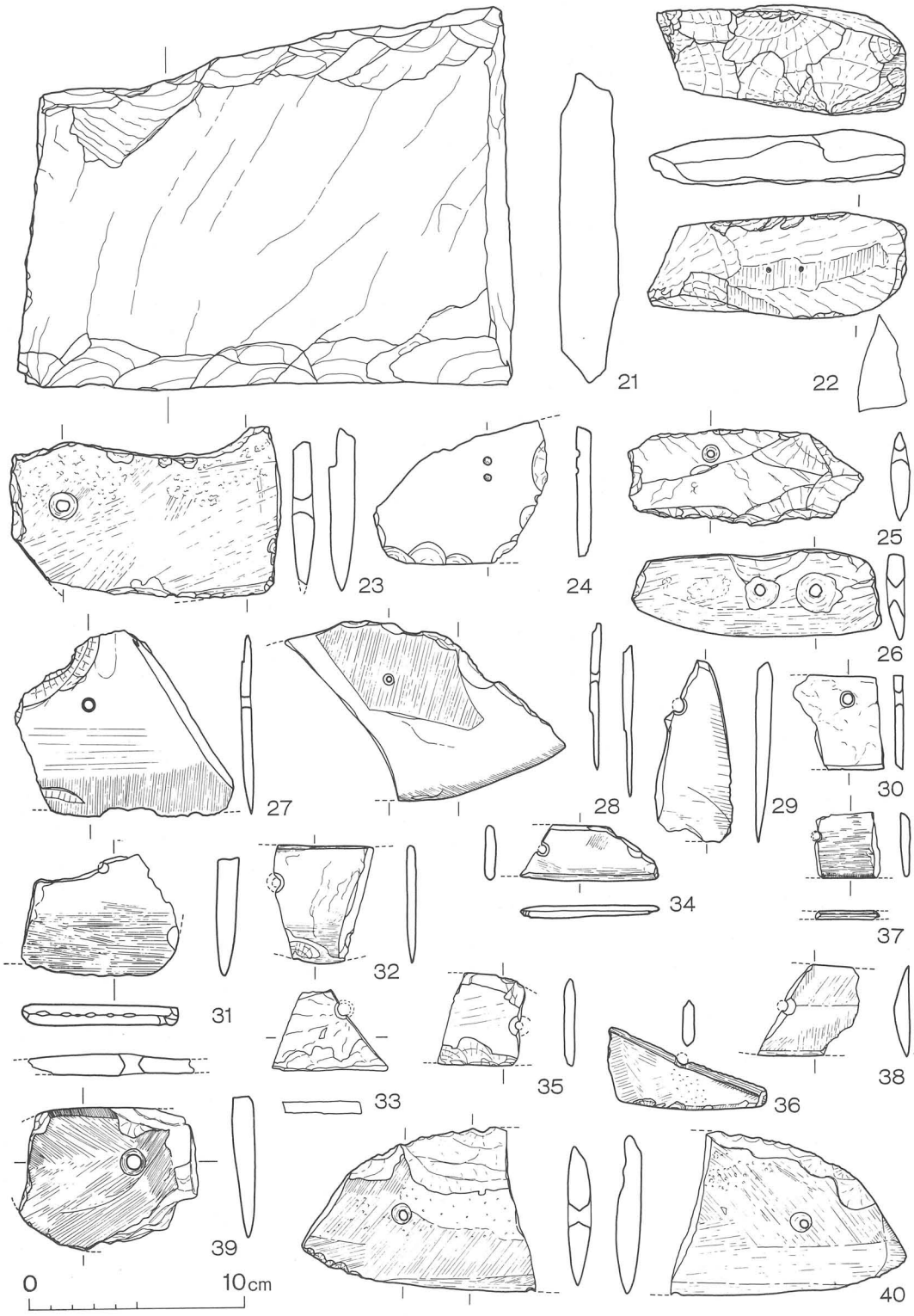
3　伊藤昭雄・金関恕他『綾羅木郷遺跡発掘調査報告第Ⅰ集』下関市教育委員会　昭和56年3月



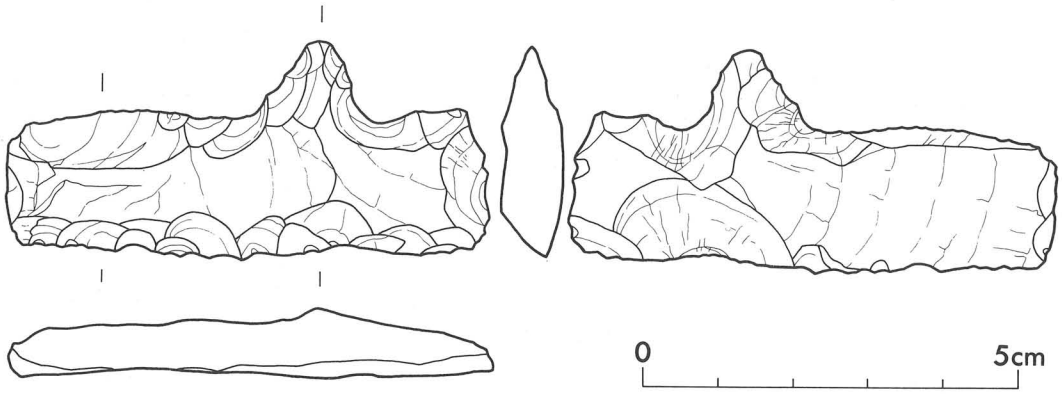
第124図　石　包　丁　実　測　図（1）



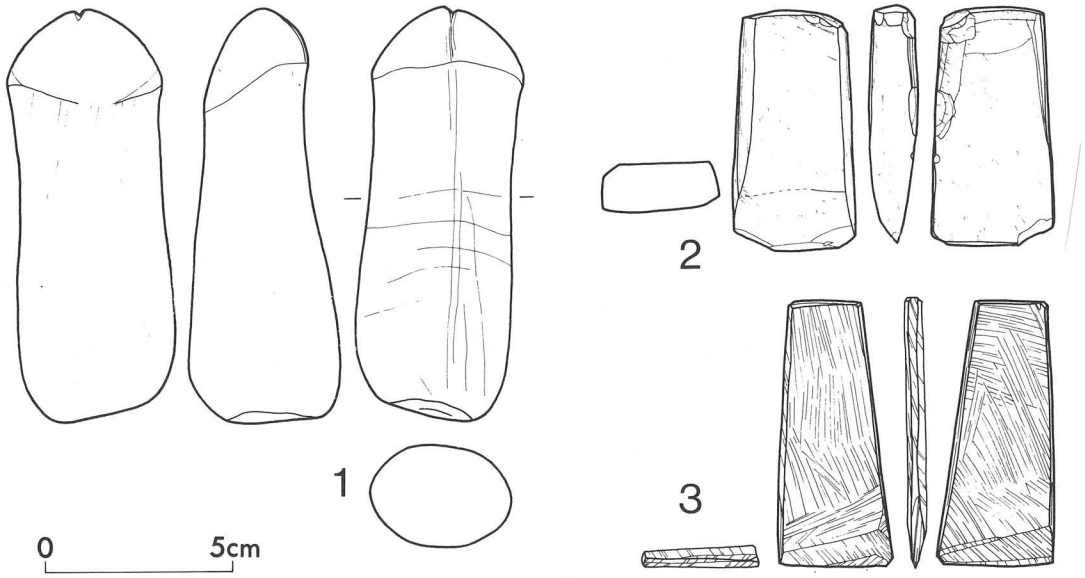
第125図　石　包　丁　実　測　図（2）



第126図　石　包　丁　実　測　図（3）



第127図　石　器　実　測　図



第128図　石　器　実　測　図

4　三浦清・内田律雄「松江市西川津遺跡から出土した分銅形土製品に含まれるクローム 鉄鉱とその考古学的意義」『島根大学教育学部紀要第22巻第１号（人文・社会科学編）』　昭和63年10月

5　立平進「角力灘のホタリ漁」『技術と民俗（上）』日本民俗文化大系13　昭和60年５月